沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第26集

ナカンダカリヤマの古墓群

－急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告書－

２００５年(平成17)３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

調査区遠景

９～14号墓（南から）

巻首図版１

調査区東側（西から）

調査区西側（東から）

巻首図版 2

巻首図版 3

中国産陶磁器

華南三彩　水滴

喜名焼　水滴

本土産色絵　大香炉

硯

玉類

銭貨

巻首図版 4

序

本報告書は2002年（平成14）10月から翌2003年（平成15）３月の６ヶ月間において発掘調査を実施し、2003年度（平成15）から2004年度（平成16）にかけて資料整理を行った那覇市首里金城町の「ナカンダカリヤマの古墓群」の発掘調査成果をまとめたものです。

ナカンダカリヤマの古墓群は2001年（平成13）に急傾斜地崩壊防止のための擁壁設置工事に伴う事前踏査の際に確認された中世相当期から近世にかけての古墓群です。

遺跡は、沖縄県立芸術大学附属研究所南側の石灰岩崖面に形成されていますが、一帯は沖縄県土木建築部によって急傾斜地崩壊危険区域として設定され、1998年（平成10）より急傾斜地崩壊防止のための擁壁工事が年次的に進められており、今回の調査は当該工事に伴う事前工事として実施したものです。

調査の結果、15基の古墓が広範囲にわたって造られていることが確認され、中世相当期から近世にかけて築造された掘込墓であることが判りました。また、当該時期の墓制や葬制を知る上で重要な人骨、獣骨、貝製品、金属製品、蔵骨器や墓の供献具と思われる陶磁器類が数多く出土しました。これらの発見以外にも戦時中に陣地壕として古墓を再利用していたことが出土遺物、聞き取りから判明し、首里地域における沖縄戦の一端を窺い知ることができました。

以上の成果をまとめた本報告書が、沖縄における王国時代の歴史や沖縄戦の様相を知る上で貴重な資料として活用されるとともに、文化財保護への理解を深めることにつながれば幸いです。

2005年（平成17）３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　安　里　嗣　淳

例　　言

１．本書は平成14年度に実施した、ナカンダカリヤマの古墓群に係る発掘調査の成果をまとめたものである。
２．調査は文化庁の補助事業として平成14年度から16年度にかけて沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
３．資料整理作業は、平成15年度から16年度まで沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
４．本書に使用した１ /25,000地形図は国土地理院発行の資料によった。
５．本書に表した高度値は海抜高である。
６．図面に記載されている国土座標は平成14年３月以前のものである。
７．資料整理にあたり、下記の方々には各遺物の鑑定、または同定をお願いした。記して謝意を表したい。
（五十音順、敬称略）

陶磁器	大　橋　康　二	（佐賀県立九州陶磁文化館）
陶磁器	金　沢　　陽	（出光美術館）
本土産陶器（薩摩焼）	渡　辺　芳　郎	（鹿児島大学法文学部人文学科）
沖縄産陶器（喜名焼）	仲宗根　　求	（読谷村立歴史民俗資料館）
石　器	神　谷　厚　昭	
人　骨	土　肥　直　美	（琉球大学医学部）
貝　類	名　和　　純	（潟の生態史研究会会員）

９．本書の編集は比嘉優子、岸本竹美の協力を得て山本正昭が行った。
10. 各章の執筆は下記のように分担した。
山本正昭　第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章１・３節、第Ⅳ章、第Ⅴ章
比嘉優子　第Ⅲ章３節、第Ⅳ章
岸本竹美　第Ⅲ章２・３節、第Ⅳ章
喜多亮輔　第Ⅲ章３節、第Ⅳ章
土肥直美　第Ⅵ章
知念隆博　附編
11. 本書に掲載された写真は山本正昭、岸本竹美が、出土遺物は光嶋香、田村浩子の撮影によるものである。
12. 調査当初、「フチサ古墓群」との表記を用いていたが、首里金城町在住の古老による聞き取り調査によって調査区域内は「ナカンダカリヤマ」という地名であることが判明した。そのため当該遺跡を「ナカンダカリヤマの古墓群」という表記に統一する。
13. 本書に掲載したナカンダカリヤマの古墓群発掘調査に関する写真、実測図などの記録は全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管してある。
14. 発掘調査・資料整理などの調査体制については第Ⅰ章の第２節に記した。

報　告　書　抄　録

ふりがな	なかんだかりやまのこぼぐん
書名	ナカンダカリヤマの古墓群
副書名	急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	山本正昭・岸本竹美・比嘉優子・喜多亮輔・土肥直美・知念隆博
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7　　Tel 098-835-8751
発行年月日	西暦2005年（平成17）３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
なかんだかりやま ナカンダカリヤマの古墓群 こぼぐん	おきなわけん 沖縄県 なはししゅり 那覇市首里 きんじょうちょう 金城町	那覇市 472018	－	127°43′	26° 12′	2002.10 ～ 2003.3	500 ㎡	急傾斜地崩壊防止のための擁壁工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ナカンダカリヤマの古墓群	古墓	グスク時代 ～ 現代	石積み 石列 掘込墓	土器 外国産陶磁器 本土産陶磁器 沖縄産陶器 石製品 貝製品 骨製品 玉類 銭貨 木材 金属製品	小規模の古墓群で墓室から蔵骨器並びに人骨が大量に出土。

目　　次

巻首図版
序
例言
報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経緯
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査体制……1

第Ⅱ章　位置と環境
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5

第Ⅲ章　調査の概要
　第１節　調査経過……8
　第２節　遺構と層序……8
　第３節　出土遺物……9

第Ⅳ章　遺構と出土遺物
　第１節　第０号墓……16
　第２節　第１号墓……20
　第３節　第２号墓……26
　第４節　第３号墓……30
　第５節　第４・５号墓……44
　第６節　第６号墓……47
　第７節　第７号墓……55
　第８節　第８号墓……66
　第９節　第９号墓……73
　第10節　第10・11号墓……75
　第11節　第12号墓……79
　第12節　第13号墓……81
　第13節　第14号墓……84
　第14節　脊椎動物遺存体……88

第Ⅴ章　結　語……91
第Ⅵ章　人　骨……159
附　編……165

第49表　ウマ出土状況一覧…… 90
第50表　ウマ歯出土状況一覧…… 90
第51表　ブタ出土状況一覧…… 90
第52表　ブタ歯出土状況一覧…… 90
第53表　ウシ出土状況一覧…… 90
第54表　ウシ・ウマ出土状況一覧…… 90
第55表　ヤギ出土状況一覧…… 90
第56表　ヤギ歯出土状況一覧…… 90
第57表　最小個体数の推定…… 162

図版目次

図版１　調査状況（１）…… 95
図版２　調査状況（２）…… 96
図版３　調査状況（３）…… 97
図版４　調査状況（４）…… 98
図版５　調査状況（５）…… 99
図版６　調査状況（６）…… 100
図版７　調査状況（７）…… 101
図版８　調査状況（８）…… 102
図版９　調査状況（９）…… 103
図版10　調査状況（10）…… 104
図版11　第０号墓出土遺物（１）…… 105
図版12　第０号墓出土遺物（２）…… 106
図版13　第０号墓出土遺物（３）…… 107
図版14　第０号墓出土遺物（４）…… 108
図版15　第０号墓出土遺物（５）…… 109
図版16　第０号墓出土遺物（６）…… 110
図版17　第０号墓出土遺物（７）…… 111
図版18　第１号墓出土遺物（１）…… 112
図版19　第１号墓出土遺物（２）…… 113
図版20　第１号墓出土遺物（３）…… 114
図版21　第１号墓出土遺物（４）…… 115
図版22　第１号墓出土遺物（５）…… 116
図版23　第１号墓出土遺物（６）…… 117
図版24　第１号墓出土遺物（７）…… 118
図版25　第１号墓出土遺物（８）…… 119
図版26　第１号墓出土遺物（９）…… 120
図版27　第２号墓出土遺物（１）…… 121
図版28　第２号墓出土遺物（２）…… 122
図版29　第２号墓出土遺物（３）…… 123
図版30　第２号墓出土遺物（４）…… 124
図版31　第３号墓出土遺物（１）…… 125
図版32　第３号墓出土遺物（２）…… 126
図版33　第３号墓出土遺物（３）…… 127
図版34　第３号墓出土遺物（４）…… 128
図版35　第３号墓出土遺物（５）…… 129
図版36　第３号墓出土遺物（６）…… 130
図版37　第３号墓出土遺物（７）…… 131
図版38　第３号墓出土遺物（８）…… 132
図版39　第３号墓出土遺物（９）…… 133
図版40　第３号（10）・５号墓出土遺物…… 134
図版41　第６号墓出土遺物（１）…… 135
図版42　第６号墓出土遺物（２）…… 136
図版43　第６号墓出土遺物（３）…… 137
図版44　第７号墓出土遺物（１）…… 138
図版45　第７号墓出土遺物（２）…… 139
図版46　第７号墓出土遺物（３）…… 140
図版47　第７号墓出土遺物（４）…… 141
図版48　第８号墓出土遺物（１）…… 142
図版49　第８号墓出土遺物（２）…… 143
図版50　第８号墓出土遺物（３）…… 144
図版51　第８号墓出土遺物（４）…… 145
図版52　第８号墓出土遺物（５）…… 146
図版53　第８号墓出土遺物（６）…… 147
図版54　第８号墓出土遺物（７）…… 148
図版55　第８号墓出土遺物（８）…… 149
図版56　第８号（９）・９号墓出土遺物…… 150
図版57　第10号・11号墓出土遺物…… 151
図版58　第12号・13号墓出土遺物…… 152
図版59　第14号墓出土遺物（１）…… 153
図版60　第14号墓出土遺物（２）…… 154
図版61　第14号墓出土遺物（３）…… 155
図版62　骨（１）…… 156
図版63　骨（２）…… 157
図版64　骨（３）…… 158
図版65　人骨（１）（２）（３）…… 164

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

沖縄県の県庁所在地にある那覇市には、鎌倉時代から明治時代までの約550年間にわたって琉球王国の政治・経済・文化の中心として歴代国王の居城である首里城があった。首里城は首里台地の中心部にありその南側には首里台地を画する石灰岩崖が東西方向に走っている。ナカンダカリヤマの古墓群は首里台地端部に形成された石灰岩崖面に掘り込まれた掘り込み墓群である。

平成13年度に沖縄県立芸術大学南側崖、すなわちナカンダカリヤマの古墓群の分布する一帯が急傾斜地崩壊危険区域であることから沖縄県土木建築部河川課により擁壁工事計画が立ち上げられ、那覇市教育委員会文化振興課文化財係に当該地域における文化財有無による事前立ち会い調査の要請が８月にあった。９月11日、那覇市教育委員会による立ち会い調査が実施され、多数の古墓群が擁壁工事区域内に残存していることが確認された。それを踏まえて当該地域は沖縄県立芸術大学敷地であることから調査主体は那覇市教育委員会ではなく沖縄県教育委員会であるとし、改めて10月１日に沖縄県土木建築部河川課から沖縄県教育委員会文化課へ急傾斜地崩壊防止のための擁壁設置に伴う発掘調査の要請があった。要請を受ける形となった文化課は沖縄県立埋蔵文化財センターへ調査を依頼し、11月に現地視察を実施、古墓の現状を把握すると共に調査計画の策定を行った。また同時に沖縄県土木建築部河川課、沖縄県立芸術大学管財課との協議等を経て、平成14年度に沖縄県立埋蔵文化財センターによる発掘調査実施が決定された。

調査区周辺は私有地で囲まれていることからナカンダカリヤマの古墓群に隣接する首里金城町在住、仲村渠完蔵氏の所有地周辺における下草伐開許可の後、平成14年10月１日より作業を実施するに至った。

第２節　調査体制

この発掘調査は以下の体制で実施した。

事業責任者	津嘉山朝祥	（沖縄県教育委員会教育長　2002年度）
	山内　彰	（沖縄県教育委員会教育長、2003～04年度）
事業総括	日越国昭	（沖縄県教育委員会文化課課長、2002～03年度）
	名嘉政修	（沖縄県教育委員会文化課課長、2004年度）
	長堂嘉一郎	（沖縄県教育委員会文化課課長補佐、2002年度）
	大城　慧	（沖縄県教育委員会文化課課長補佐、2002年度）
	上地泰順	（沖縄県教育委員会文化課課長補佐、2003年度）
	安里嗣淳	（沖縄県立埋蔵文化財センター所長、2002～04年度）
	島袋　洋	（沖縄県教育委員会文化課記念物係長、2002～04年度）
	盛本　勲	（沖縄県立埋蔵文化財センター調査課課長、2002～04年度）
事務業務	岸本義彦	（沖縄県教育委員会文化課専門員2002年度）
	中山　晋	（沖縄県教育委員会文化課専門員2003～2004年度）
	安富祖英紀	（沖縄県立埋蔵文化財センター副所長兼庶務課長、2002～03年度）
	西江幸枝	（沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2002年度）
	比嘉美佐子	（沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2003年度）
	城間奈津子	（沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2003年度）
調査及び資	内間　靖	（那覇市立壺屋焼物博物館・調査指導）
資料整理指導	大橋康二	（佐賀県立九州陶磁文化館・陶磁器）
	尾野善裕	（京都国立博物館・本土産陶磁器）
	神谷厚昭	（石材）
	金沢　陽	（出光美術館・中国産陶磁器）
	渡辺芳郎	（鹿児島大学法文学部人文学科・本土産陶器）
	仲宗根求	（読谷村立歴史民俗資料館・沖縄産陶器）
	名和　純	（潟の生態史研究会・貝類）

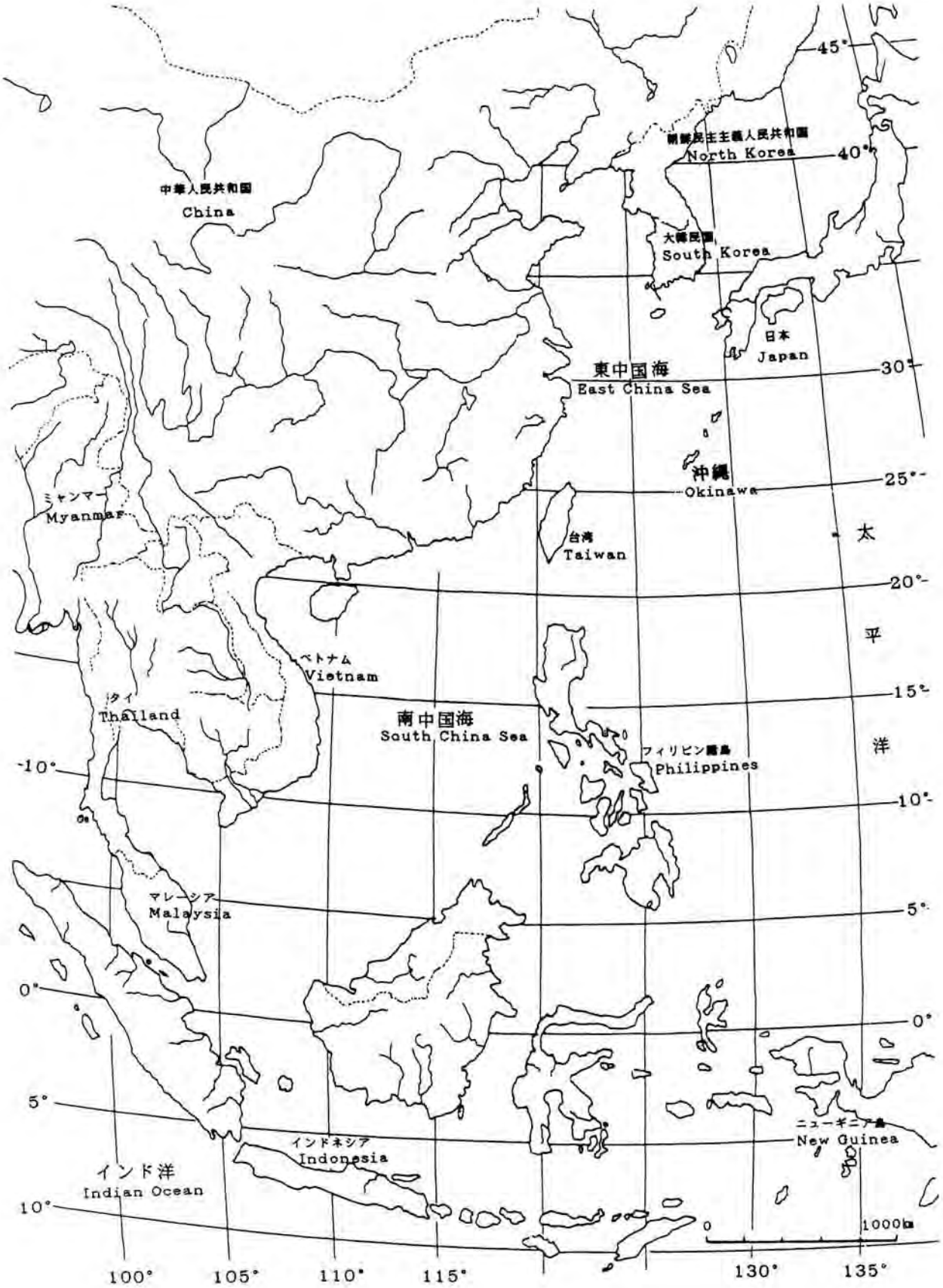
砂辺和正　（平良市教育委員会・土器）
西平　剛　（玉城村教育委員会・調査指導）
西銘　章　（沖縄県立嘉手納高等学校・調査指導）
土肥直美　（琉球大学医学部第一解剖学講座・人骨）
矢島律子　（町田市立博物館・中国産陶磁器）

発掘担当者　山本正昭　（沖縄県立埋蔵文化財センター専門員2002年度）
発掘調査員　岸本竹美　（沖縄県立埋蔵文化財センター嘱託職員2002年度）
資料整理　山本正昭　（沖縄県立埋蔵文化財センター専門員2003～04年度）
比嘉優子　（沖縄県立埋蔵文化財センター嘱託職員2003～04年度）
岸本竹美　（沖縄県立埋蔵文化財センター嘱託職員2004年度）

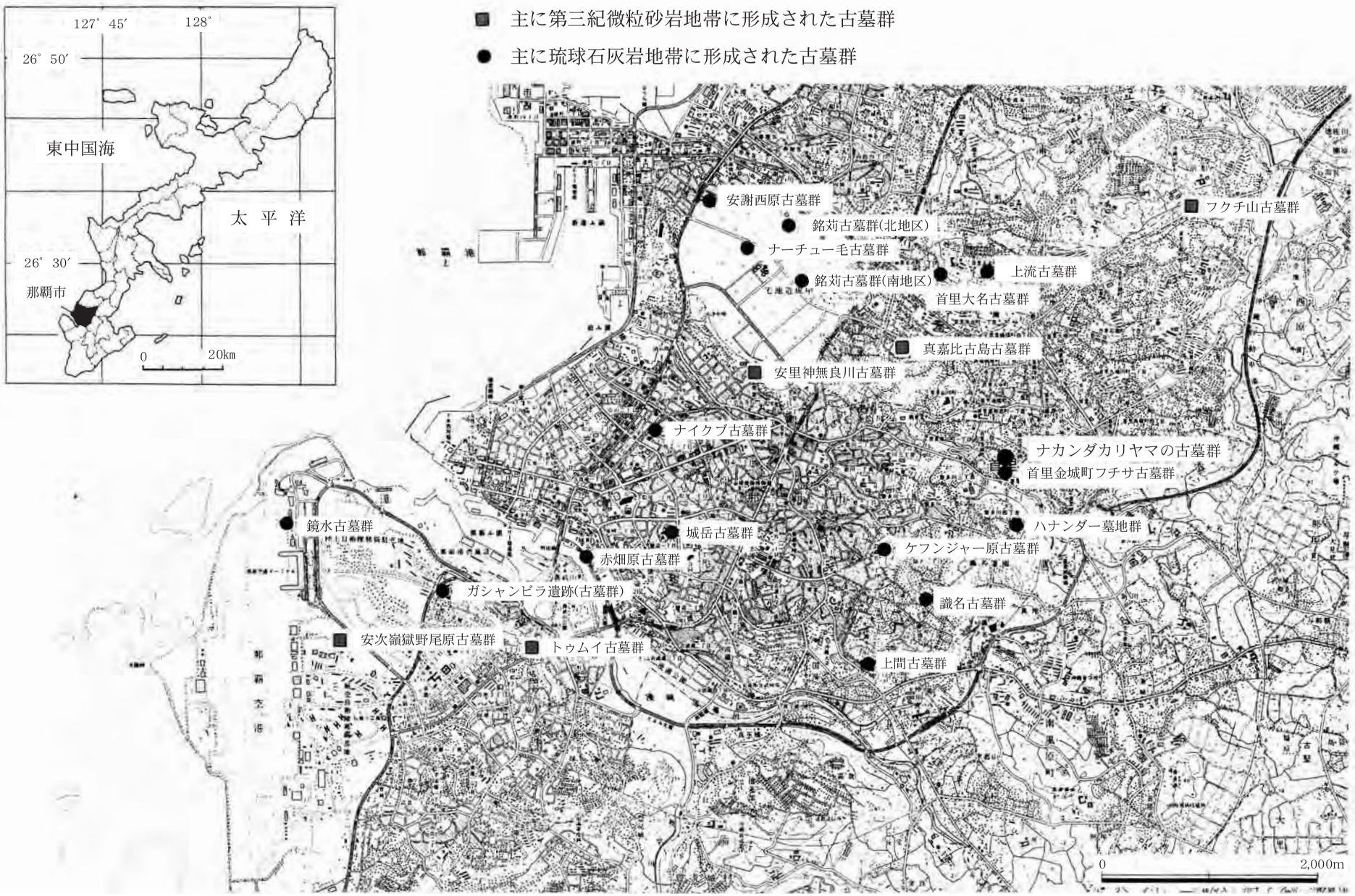
発掘調査作業員（五十音順）
浦崎京子、浦崎直和、川上益子、佐渡山正子、島仲恵子、比嘉洋子、宮城サダ子、吉田篤史。

資料整理作業員（五十音順）
阿部直子、上原園子、宇地原正俊、小濱かおり、岡村綾子、我那覇悠子、金城敬子、城間千鶴子、新垣ますみ、仲宗根三枝子、照屋利子、友利映子、譜久里昌代、仲田陽子、外間瞳、宮城利恵子、山城麻美子、饒平名淳子。

調査協力者（五十音順）
青山奈緒、秋本真孝、安座間充、安和吉則、伊波直樹、内間伸、喜屋武朋子、金城克子、島　弘、玉城安明、仲座久宜、野村知子、比嘉洋子、藤田奈穂美、宮城智浩、宮城奈緒、屋宜宣正、吉嶺全一。



第１図　沖縄本島の位置図



第２図　ナカンダカリヤマの古墓群および那覇市内の主な古墓群

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

ナカンダカリヤマの古墓群が所在する那覇市は沖縄県における県庁所在地であるとともに人口30万人を超える県内第一の都市である。市の面積は38.63㎢で人口密度は7,722人／㎢と県内で最も人口が密集した地域となっている（那覇市役所2001）。

ナカンダカリヤマの古墓群は那覇市街北東部の琉球石灰岩から形成される台地の崖下に位置している。その台地は「首里台地」と呼称され、北側の城西小学校から円覚寺跡にかけては島尻層群（砂岩）そして、首里城南側は島尻層群（泥岩）に、一部挟まれて東西に広がる琉球石灰岩台地である。首里台地は北方に標高100～200mの末吉山から虎頭山、弁ヶ嶽に至る丘陵を頂き、南方に金城川が流れる凹地、さらには識名丘陵、東方は南風原町との境界を流れるナゲーラ川、西方は真嘉比川に囲まれ、他地域とは隔絶されている。このような自然の障壁に囲まれた首里台地の最高部には首里城が築かれ、ナカンダカリヤマの古墓群はその南側の台地縁、島尻層群と石灰岩との境を形成する石灰岩崖の麓に位置している。この首里台地南側一帯の崖面には古墓が現在も数多く残存しており、過去にフチサ古墓群（沖縄考古学会）、首里崎山古墓群（那覇市教育委員会2001）が那覇市教育委員会によって調査されている。南側に広く眺望が開け、繁多川公園や識名丘陵、那覇市街地さらにその沖に点在する慶良間諸島まで遠望することができる。周辺は各河川の源流が集中していることや、金城大樋川、仲之川、東門の上の川、新垣川といった良質の水を湛えた井泉が多く見られる、沖縄県内でも有数の湧水地帯である。因みに金城大桶川の水を利用して1694年に沖縄で初めて紙漉が行われている。また石畳道の残る町並みとして著名な金城町の集落が南西側に、内金城御嶽とその御嶽内に国指定天然記念物大アカギといった史跡が点在していることから戦後は古墓周辺は観光地としての賑わいを見せている。

第２節　歴史的環境

首里城城下の起源は定かではない。しかし首里城の過去における発掘調査から14世紀には正殿が存在し（當眞、上原1987）、首里城の東側（現首里杜館）には14世紀後半頃の集落が見られる（那覇市教育委員会1999, 2000）ことから、14世紀段階には首里城とそれに伴う城下集落が出現していたことが想定される。

ナカンダカリヤマの古墓群がある首里城南隣一帯にいつ頃、人が住み始めたのかは明らかにされていない。那覇市教育委員会による金城町内で実施された発掘調査の成果によると16世紀代の遺物も散見されることから（那覇市教育委員会2001）、グスク時代の終わり頃から近世初めにかけて集落が形成され始めたものと想定される。文献資料からでは1511年に花城親方守知が家門を興し、首里王府から金城村に家宅が与えられたのが『球陽』に見られる。金城町に関する初見で更に1660年に内金城村の住民が王府に訴えて内金城御嶽の拝殿を建立したことが『琉球国由来記』に見られる（久手堅2000）。また現在の沖縄県立芸術大学にはかつて大日寺と呼ばれる真言宗寺院があり、その創建は『琉球国由来記』によると1691年とされている。これらのことから16, 7世紀頃には首里城南側一帯において人が居住し、集落としての基盤整備が行われたものと考えられる。

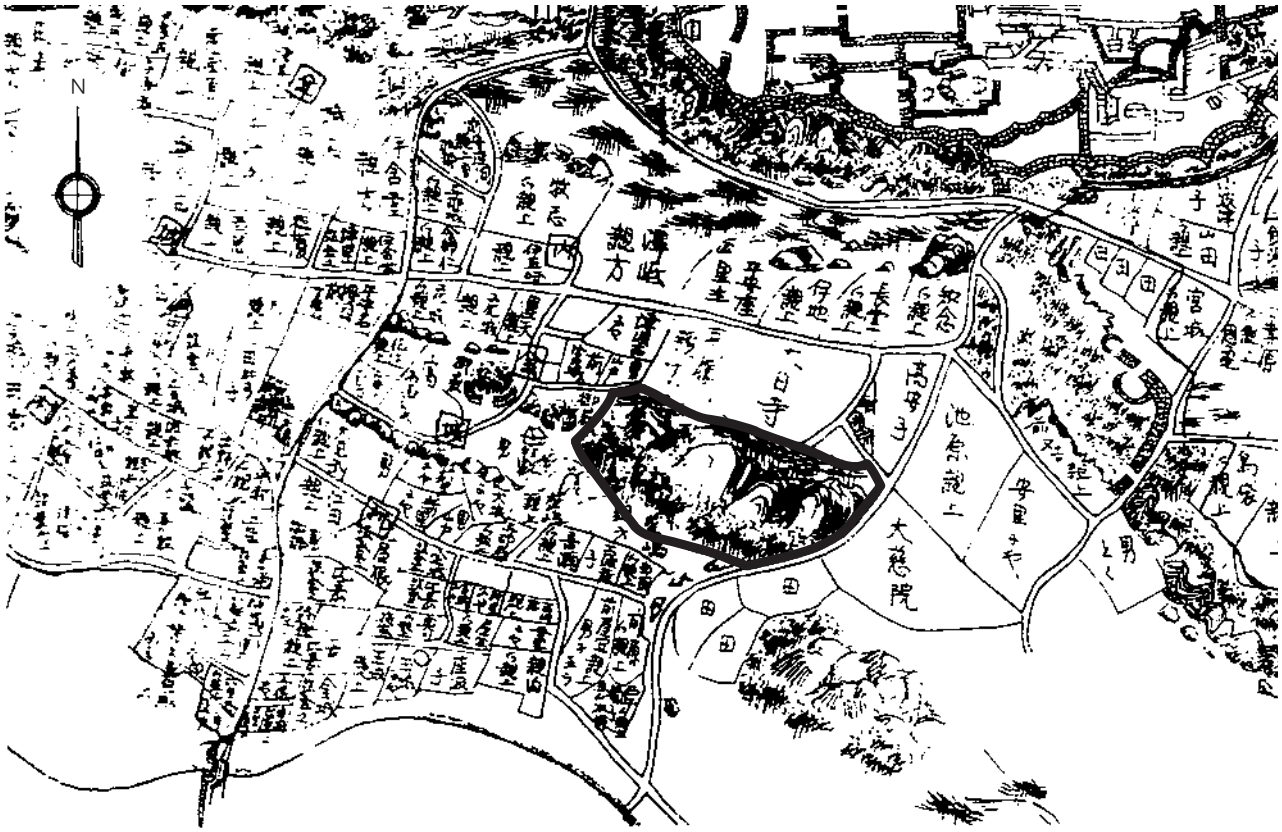
近世期には首里古地図に見られるように斜面に整然と脇地頭クラスの屋敷が段々に配置されている。屋敷地割は南北を貫く真珠道を軸とした方形・方格となっているのが見られる（第３図）。

その東側に位置するナカンダカリヤマ一帯は内金城御嶽から続く雑木林および崖として表記されている。1728年に首里城南側一帯に分布している、古墓に納められていた骨を一ヶ所に収骨したという記載が『球陽』に見ることができる。既にこの当時においてナカンダカリヤマ周辺に墓が多数、存在していたことがこれらの記載から窺い知ることができる。18世紀には国王の別邸として識名園が識名に造営されたことによって、金城町内を南北に貫く真珠道が整備されている。

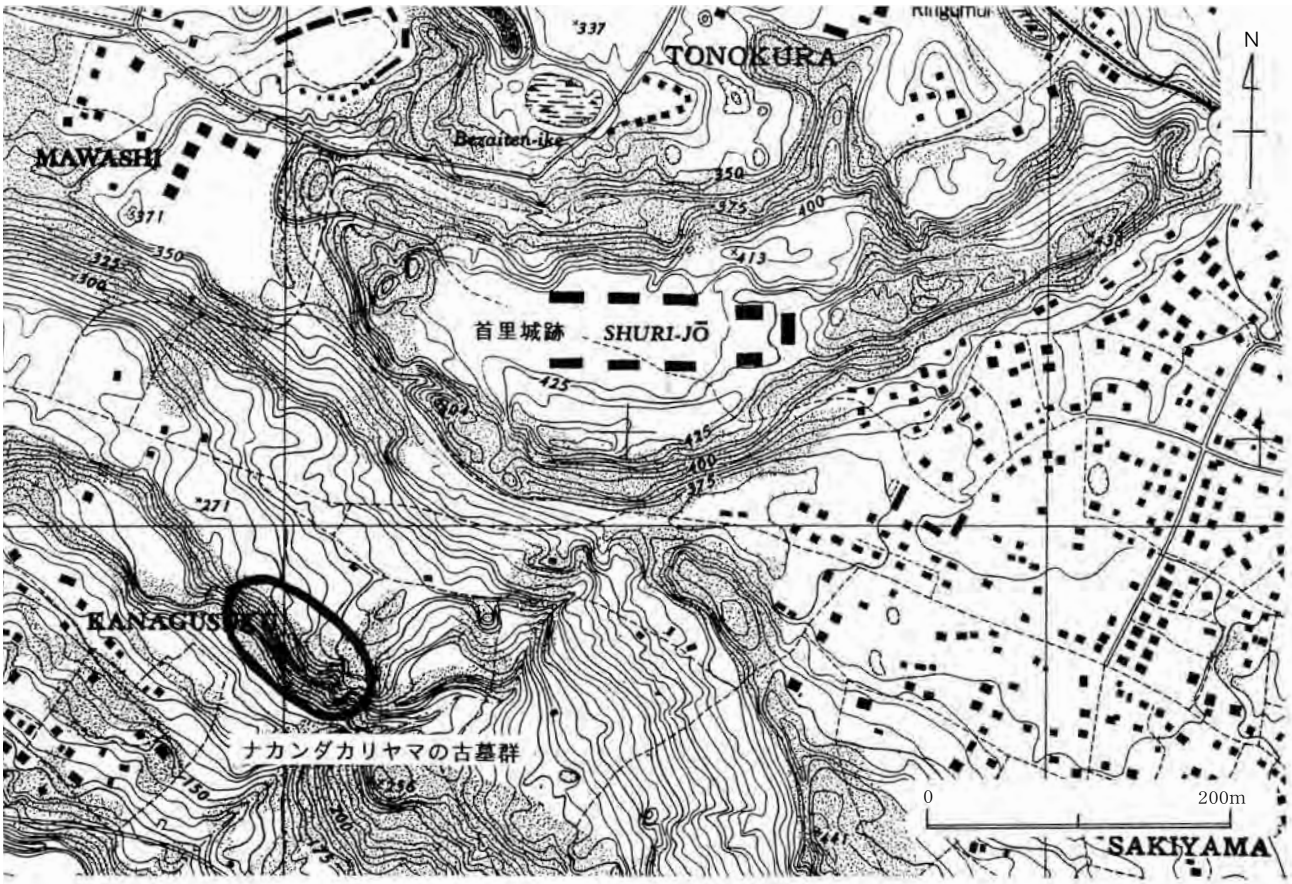
近代に入ると大日寺は廃寺となり、その跡地は金城町住民の畑地となった以外は近世期の景観はほとんど変わることなく沖縄戦を迎えることとなる。戦前には、首里城南側下からナカンダカリヤマにかけての崖下一帯は帽子編み作業をするための作業場として利用されていた（註１）。1945年（昭和20）にはナカンダカリヤマは第三十二軍指揮下の師範鉄血勤皇隊の陣地壕として、後述する13号墓が利用され、その下方の岩陰を石で囲って野戦築城隊第１中隊の壕が構築された（龍潭同窓会1998）。またその西側に隣接して金城町の住民避難壕および家族壕が構築されており、避難の際に直撃弾を崖上に受けて岩肌が崩落したことによる犠牲者が出ている。金城町の屋敷も空襲により屋敷囲いの石積み、石畳を残して大部分が焼失している（註２）。

戦後は1959年（昭和34）に大日寺跡に琉球大学女子寮が設置され、その北側を通る赤マルソウ通りは道幅員拡張されるなど、周辺の景観は一変した。他方で1964年（昭和39）には琉球政府によって金城町石畳道が史跡に指定され、景観保持がなされている。

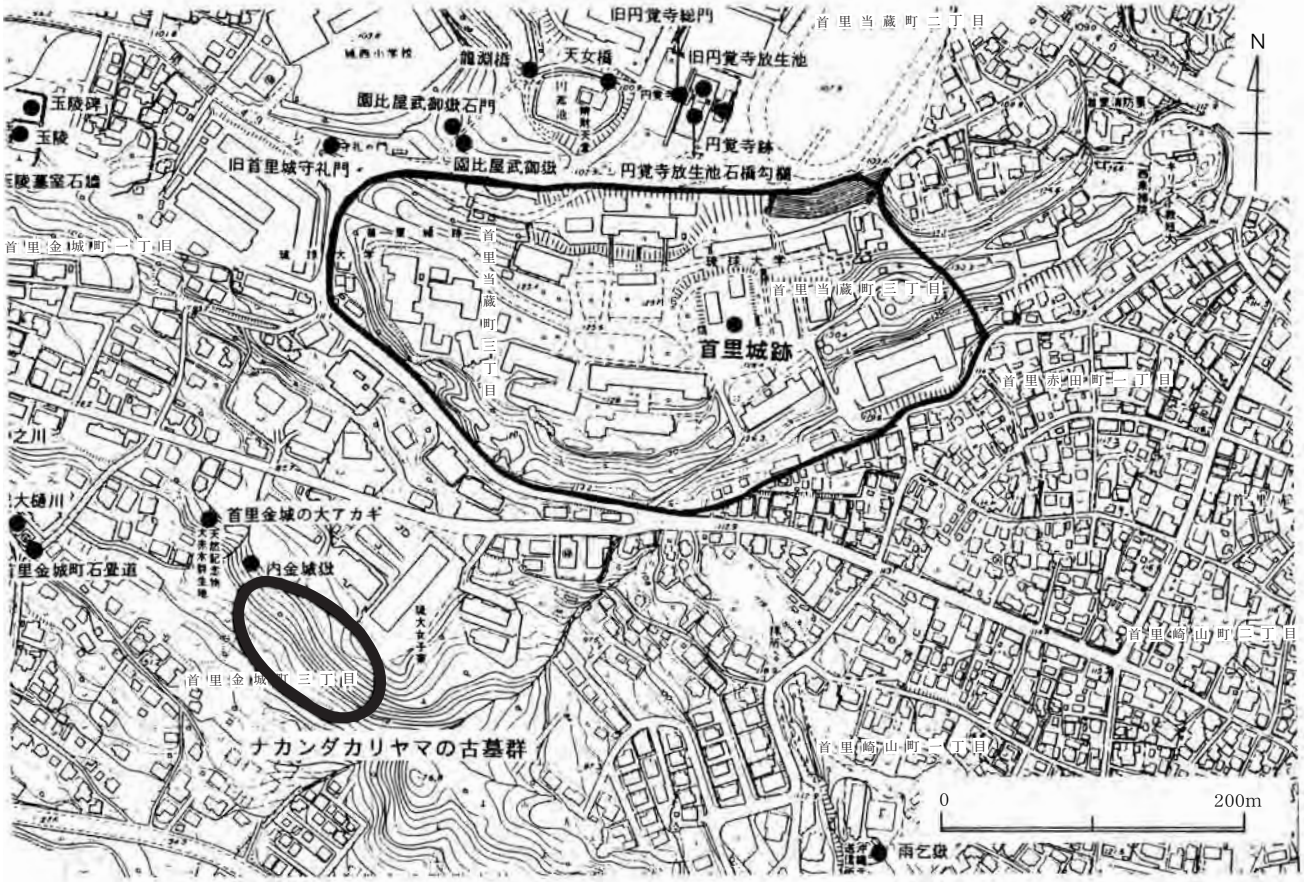
（註１）屋宜宣正氏からの聞き取りによる。
（註２）吉嶺全一氏からの聞き取りによる。



第３図　首里古地図（ナカンダカリヤマの古墓群）



第４図　調査区周辺地形図（1945年）



第５図　調査区周辺地形図（1983年）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査経過

ナカンダカリヤマの古墓群の調査を、2002年（平成14）の10月１日から開始した。まず、発掘前に墓及びその周辺の磁気探査を行い、その後に調査区内の壁面約150mの伐開作業を行った。次に調査区西側から５m単位でグリッド設定を行った。当初把握された墓数は13基で断崖下段西側より１～８号墓、中段東側より９～12号墓、上段13号墓と仮番号を振っていたが、伐開作業後下段西側に１基、中段東側に１基が確認できたため、計15基となった。なお、墓番号は前者を０号、後者を14号とした。

検出作業はすべて手掘りで行った。まず作業手順として下段に位置する１～８号、14号から行った。墓入口に推積した土砂の除去、墓周辺の清掃を行ったのちに外面を写真撮影し、墓室を清掃、そして墓庭の確認及び墓室の発掘を行い、完掘後に写真撮影と実測作業を行った。

また７号墓からは大量の骨がまとまって検出されたため、2002年（平成14）12月４日～2003年（平成15）３月19日まで長期にわたって作業を実施、取り上げ作業を５回、実測作業を６回に分けて行った。０号墓に関しては、墓入口が崩落しており大変危険な状態であったために検出作業を断念し、現状の写真撮影のみに止めた。墓庭に関しては、１～５号墓は１m程掘り下げた時点で調査終了、14号墓は岩盤まで掘り下げたが明確な墓庭は確認できなかった。

９号～13号は断崖中途にあるため2003年（平成15）２月３日に業者に委託して足場を設置し、検出作業及び実測作業を行った。また、これらの発掘作業と併行して、首里金城町在住の古老から聞き取り調査も実施した。その際に、従来までの当遺跡名を「フチサ古墓群」としていたが、金城御嶽から調査区にかけての東側一帯の正式名称は「ナカンダカリヤマ」であることが判ったため、当遺跡の名称を「ナカンダカリヤマの古墓群」に改めた。

また、本遺跡の調査における成果を一般に公開するため、2003年（平成15）３月８日に現場説明会を行い、150名近くの見学者が集まった。

検出作業、実測作業の終了後、現場の最終状況の写真撮影及びスカイマスターによる空撮を行い、平成15年３月19日をもって全ての現地作業を終了した。

発掘調査で出土した遺物、図面等は当センターに持ち帰り、2004年（平成16）から資料整理を実施した。遺物の洗浄、ナンバーリング、分類、集計、実測、撮影、トレース、版組等を行い、報告書を刊行して全事業に係わる調査を終了した。

第２節　遺構と層序

当該調査区は周辺が耕作地で、また北から南に下る斜面地であることから重機搬入が困難であった。そのため、手掘り作業で発掘を行い、古墓ないしそれに伴う遺構並びに遺物包含層の確認を行った。崖面には15ヶ所の掘込墓が確認され、その内部の発掘調査を行った。その結果を踏まえて北西側から墓番号を０号墓から14号墓まで付し、掘り込みの見られる崖面下約200mが墓庭の範囲であるとの想定を行った。各墓室は単一層で後世に撹乱を受けた状況が見られたが、７号墓に関しては人骨や遺物が大量に出土し、当時の葬法をある程度、確認することができた。とくに人骨については幾重にも積み重ねられており、また頭蓋骨も壁際に集中しているといった状況が見られた。また、13，14号墓以外はわずかに壁や天井、棚を削り出した岩陰墓で、2，3，6，7号墓には墓口に野面の石積みが配置され、崖面中位に掘り込まれている９～14号墓に関しては墓口周辺が崖面上部からの流土が堆積しているのが確認された。

墓前については発掘調査前に沖縄県土木建築部河川課によってボーリング調査が崖面直下で行われており、地下５mまで崖面崩落による流石、流土であることが確認されていた。崖面直下は墓庭、墓道を確認するために約２m程、全面的に掘り下げた結果、近代以降の撹乱層であった。中でも金属片やガラス、陶器片といった沖縄戦以降の遺物が多く含まれていた。古墓に伴う遺構はほとんど確認されず、僅かに１号墓前から沖縄戦時に使用されたと思われる素掘りの地下壕と2，3号墓前から時期不明の石列、石敷きが確認された。聞き取り調査によると昭和20年の空襲時に崖直上に直撃弾がありその際に崖面が大きく崩れたとのことで、戦後も小規模な崩落が数回あったようである。そのためか墓前一帯には転石が多く見られ、０号墓周辺はとりわけ多く見られた。加えて崖下からは青磁酒会壺片や大量の本土産陶磁器、碁石等が出土していることから当該調査区の崖上、つまり現在の沖縄県立芸術大学附属研究所に近世まであった大日寺の存在を示唆させる。

このように墓室は単一層、墓前は近代以降の撹乱層であるため明確な層序を把握することは叶わなかったが、出土遺物から古墓以外に当該調査区が沖縄戦時に陣地壕、避難壕として利用されていたことや、近くに大日寺があったことが窺えることから、複合遺跡としての様相を有することが判明した。

第３節　出土遺物

主たる遺物に中国産、タイ産を始めとする輸入陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産の陶器や土器、陶質土器、瓦質土器等の生活雑器など、また銭貨、煙管、玉、碁石、人形、石器、石製品、貝製品等供献を思わせる遺物や金属製品、円盤状製品、骨製品、その他人工遺物、人骨、貝類遺存体、獣類遺存体などが出土している。また沖縄戦争時に避難壕や陣地壕として利用されたこともあり、戦争遺物が多数出土した。

中国産青磁は器種別には碗、皿、壺、瓶、燭台が得られ、生産年代は概ね15～16世紀に位置付けられる。

中国産白磁は碗、皿、杯、壺、瓶、蓋物の６器種がある。完形か図上復元が可能なものを数点含み、生産年代は概ね15世紀後半～19世紀に位置付けられる。また、扶り高台の小皿の完形品が７号墓より出土した。

中国産染付は完形の小杯や比較的残りの良いものも僅かに出土したが殆どは小破片資料である。器種別には碗、小碗、皿、杯、大鉢、壺、瓶、蓋があり、中国の景徳鎮窯をはじめ福建・広東系の染付を多く含くむ。生産年代は16～19世紀に位置付けられる。

中国産褐釉陶器は82点が出土し殆ど大型壺である。内数点は肩部や底面とその周辺などに穿孔するものがあり、人骨が納骨された状況はみられないものの、遺跡の性格や類似の遺跡での報告例もあることから蔵骨器への転用が考えられる。生産年代は16～17世紀に位置付けられる。

タイ産褐釉陶器は54点が出土した。タイ産褐釉陶器壺にも中国産褐釉陶器と同様な状況があり、蔵骨器へ転用し使用した可能性が考えられる。生産年代は15～16世紀に位置付けられる。

またその他の輸入陶磁器として中国産色絵、瑠璃釉、緑釉、三彩、無釉陶器、タイ産半練土器などが出土した。何点かは完形品若しくは図上復元が可能なものも出土している。特筆すべきものとして３号墓から華南三彩の箱形水滴が完形で出土し、更に喜名焼の大形壺と共伴関係にあることから喜名焼の生産期を推察するうえでのメルクマークになると考えられる。

本土産陶磁器には肥前系の青磁染付、白磁、染付、色絵、陶器を始めに薩摩産陶器の壺、甕や深鉢、染付、京・関西系陶器や瀬戸・美濃産の近現代陶磁器など多岐にわたる。しかし出土量において圧倒的であったのはやはり一般的に印判手（型紙摺、銅版転写、ゴム判）と称される一群であった。印判手以外の本土産陶磁器の生産年代は概ね17世紀～18世紀に位置付けられるが19世紀のものも出土している。

土器は768点が出土した。完形もしくは全形が窺える資料に乏しく全体的に判然としないが、いずれも短頸で肩の張った大型容器になることが考えられる。

沖縄産施釉陶器は総数764点が出土した。器種別にみると、碗、小碗、皿、鉢、急須、壺、花生、瓶、灯明具、火炉、火取などが出土している。主な遺物は碗、皿、鉢、壺で、０号墓、１号墓、３号墓、８号墓からの出土が目立つ。特筆すべきものとして、胴部の穿孔された、いわゆるアンダガーミと呼ばれる広口の四耳壺が出土していることから、転用蔵骨器として用いられた可能性が考えられる。

沖縄産無釉陶器は総数2,445点が出土した。器種別にみると、碗、筒碗、灯明皿、甕、壺、瓶、擂鉢、火炉、火取、炉、急須、水滴、羽釜などが出土している。主な遺物は甕、壺、鉢、擂鉢などで、０号墓、１号墓、３号墓、８号墓からの出土が目立つ。壺、甕の中には、中国産褐釉陶器、タイ産褐釉陶器と同様に転用蔵骨器として用いられた可能性を持つものがみられた。年代は17世紀後半～18世紀後半が主で、半数以上が喜名焼であった。３号墓、６号墓、７号墓、14号墓から出土しており、特に３号墓奥壁溝からの出土が目立つ。また、特筆すべきものとして、６号墓土坑内より焼骨の入った喜名焼壺が出土しており、当遺跡において完形で出土した転用蔵骨器の唯一の資料である。

陶質土器は458点が出土し、器種別の内訳は皿、鉢、擂鉢、植木鉢、鍋、フライパン状鍋、急須、蓋類、火炉など、日常雑器が主たる出土遺物である。

瓦質土器は総数24点が出土し、沖縄産と本土産が混在している。火炉、炉がほとんどであるが器形が明確に確認できるものは僅かであった。また彩色されたものや大型容器の幾つかは蔵骨器に転用し使用した可能性があるが判然としない。

銭貨は有文銭、模鋳銭、無文銭、輪銭の総数60点が出土している。主な銭種としては、聖宋通寶、永楽通寶、嘉祐通寶、擁正通寶、崇寧重寶、元豊通寶、宣和通寶、寛永通寶などがある。初鋳年代は、北宋、清、江戸などである。出土数は６号墓が最も多く、ついで３号墓、13号墓、７号墓からの出土が目立つ。

図目次

第１図　沖縄本島の位置図……3
第２図　ナカンダカリヤマの古墓群
　　および那覇市内の主な古墓群……4
第３図　首里古地図（ナカンダカリヤマの古墓群）…6
第４図　調査区周辺地形図（1945年）……7
第５図　調査区周辺地形図（1983年）……7
第６図　古墓位置図……15
第７図　第０号墓出土遺物……19
第８図　第１号墓実測図……20
第９図　第１号墓出土遺物……25
第10図　第２号墓実測図……26
第11図　第２号墓出土遺物……29
第12図　第３号墓実測図……30
第13図　第３号墓出土遺物（１）……37
第14図　第３号墓出土遺物（２）……38
第15図　第３号墓出土遺物（３）……39
第16図　第３号墓出土遺物（４）……40
第17図　第３号墓出土遺物（５）……41
第18図　第３号墓出土遺物（６）……42
第19図　第３号墓出土遺物（７）……43
第20図　第４・５号墓実測図……44
第21図　第５号墓出土遺物……46
第22図　第６号墓実測図……47
第23図　第６号墓出土遺物（１）……52
第24図　第６号墓出土遺物（２）……53
第25図　第６号墓出土遺物（３）……54
第26図　第７号墓実測図……55
第27図　第７号墓表土層除去後の検出状況……56
第28図　第７号墓 EL=66.780～66.740mの検出状況……56
第29図　第７号墓 EL=66.740～66.700mの検出状況……57
第30図　第７号墓 EL=66.700～66.600mの検出状況……57
第31図　第７号墓 EL=66.600～66.480mの検出状況……58
第32図　第７号墓出土遺物（１）……63
第33図　第７号墓出土遺物（２）……64
第34図　第７号墓出土遺物（３）……65
第35図　第８号墓実測図……66
第36図　第８号墓出土遺物……72
第37図　第９号墓実測図……73
第38図　第10・11号墓実測図……75
第39図　第11号墓出土遺物……78
第40図　第12号墓実測図……79
第41図　第12号墓出土遺物……80
第42図　第13号墓実測図……81
第43図　第13号墓出土遺物……83
第44図　第14号墓実測図……84
第45図　第14号墓出土遺物……87
第46図　第７号墓人骨の出土状況（１）……161
第47図　第７号墓人骨の出土状況（２）……161

表目次

第１表　印判手法量一覧……10
第２表　沖縄産施釉陶器法量一覧……11
第３表　沖縄産無釉陶器法量一覧……11
第４表　印判手の文様型分類表……12
第５表　第０号墓遺構表……16
第６表　第０号墓円盤状製品観察表……19
第７表　第１号墓遺構表……21
第８表　第１号墓出土状況一覧……21
第９表　第１号墓円盤状製品観察表……25
第10表　第２号墓遺構表……27
第11表　第２号墓出土状況一覧……27
第12表　第２号墓円盤状製品観察表……29
第13表　第３号墓遺構表……31
第14表　第３号墓出土状況一覧……31
第15表　第３号墓円盤状製品観察表……36
第16表　第４号墓遺構表……45
第17表　第５号墓遺構表……45
第18表　第５号墓出土状況一覧……45
第19表　第６号墓遺構表……48
第20表　第６号墓出土状況一覧……48
第21表　第６号墓円盤状製品観察表……51
第22表　第７号墓遺構表……58
第23表　第７号墓出土状況一覧……59
第24表　第７号墓円盤状製品観察表……62
第25表　第８号墓遺構表……67
第26表　第８号墓出土状況一覧……67
第27表　第８号墓円盤状製品観察表……71
第28表　第９号墓遺構表……74
第29表　第10号墓遺構表……76
第30表　第11号墓遺構表……76
第31表　第10号墓出土状況一覧……76
第32表　第11号墓出土状況一覧……76
第33表　第12号墓遺構表……80
第34表　第13号墓遺構表……82
第35表　第13号墓出土状況一覧……82
第36表　第14号墓遺構表……85
第37表　第14号墓出土状況一覧……85
第38表　第14号墓円盤状製品観察表……87
第39表　魚類出土状況一覧……89
第40表　ハブ出土状況一覧……89
第41表　ニワトリ出土状況一覧……89
第42表　トリ出土状況一覧……89
第43表　モグラ類出土状況一覧……89
第44表　ネズミ出土状況一覧……89
第45表　イヌ出土状況一覧……89
第46表　イヌ歯出土状況一覧……89
第47表　ネコ出土状況一覧……90
第48表　ネコ歯出土状況一覧……90

金属製品は簪、環座、鋲、釘、板状製品、鉾、手斧、剃刀、はさみ、おろし金などが出土し近代から沖縄戦時中の遺物まで出土している。

煙管は沖縄産施釉陶器製のものが主で、その他に沖縄産無釉陶器、瓦質、青銅製のものが出土している。３号墓、７号墓、８号墓から各２点、14号墓から１点の出土。

玉は総数４点が出土した。丸玉、小玉、算盤状玉が出土した。13号墓からの出土が主である。碁石が総数40点出土している。

骨製品はハブラシ、箆状製品、半円状製品が出土している。形象物として陶質土器の人形が２点得られた。いずれも７号墓からの出土であった。

石器はサンゴ製石球が０号墓より１点出土している。石製品は硯、臼、砥石、方柱状製品などが出土しているが第19図89に示した硯は華南三彩の水滴と供伴で出土したものである。

円盤状製品は碗、皿、甕、壺などの日用品や瓦を円形に剥離し加工した物で、首里城跡、中城城跡などのグスクや近世の集落跡をはじめ、御細工所跡、古窯跡といった工房でも出土例がある。本遺跡では62点確認され、その内29点を図版に示した。素材としては沖縄産無釉陶器、瓦、染付、印判、土器、褐釉陶器が挙げられ、沖縄産無釉陶器と瓦の占める割合が大きく、ほとんどが２㎝～５㎝の大きさに加工されている。大きさでは４㎝～５㎝の製品の割合が最も多く、２㎝～３㎝の製品がその次に多い。全体的に剥離が粗い物が多く、打割調整が見られる物は少ない。今回の調査で五角形に近い形に加工した資料を得る事ができたが、これに近い形の製品は中城城跡の発掘調査で出土例がある。ただ、円形に加工する過程であったとも考えられるので、器形については五角形と断定できない。本製品の用途としては遊具であったという説がよく聞かれるが、実際に戦後、ガラス製品が登場するまでは小型の製品をおはじきとして用いていたという例もある。また、大型の製品は「かわら運び」や「石蹴り」といった遊びに使用されていたという指摘もある。

貝製品は、すべてヤコウガイ製匙状製品の欠損品、もしくは粗製品である。総数９点が出土した。０号墓、１号墓からの出土が多い。

その他の製品として７号墓から漆喰製品かと考えられる製品が２点出土している。他の類例遺跡から報告例を確認できないこともあり判然としないが、碗状を成すものと箱形に脚状の突起を有するものがある。また８号墓より２㎝大の瓦片の周囲を研磨し平面形態が将棋の駒状の製品が出土している。用途は不明。

獣類遺存体はサメ、ハリセンボン、ハブ、トリ、ニワトリ、ネズミ、イヌ、ネコ、ウマ、ブタ、ウシ、ヤギが出土し、貝類遺存体は腹足網が14科22種、斧足網が３科５種の計17科27種が出土している。

第１表　印判手法量一覧

単位：cm

図版番号	種類	種類	生産地	器種	法量 口径・甲径	法量 器高	法量 底径・摘み径	出土地区
12 － 26	染付	型紙摺り	肥前	碗	13.5	6.3	5.1	０号 撹乱層
12 － 27				碗	13.4	5.8	4.95	０号 撹乱層
12 － 28				碗	13.4	5.8	4.9	０号 撹乱層
12 － 29				碗	12.7	5.6	4.9	０号 撹乱層
12 － 30				碗	10.6	－	－	０号 撹乱層
20 － 114				碗	14.4	－	－	１号 撹乱層
20 － 113				碗	13.2	6.2	5.1	１号 撹乱層
27 － 175				碗	13.1	5.9	5.5	２号 撹乱層
27 － 176				碗	11.6	4.4	4.2	２号 撹乱層
35 － 250				碗	13.7	－	－	３号 撹乱層
35 － 251				碗	12.4	－	－	３号 撹乱層
35 － 252				碗	14.25	－	－	３号 撹乱層
35 － 253				碗	13.1	－	－	３号 撹乱層
42 － 339				碗	13.3	－	－	６号 撹乱層
42 － 341				碗	13.3	－	－	６号 庭撹乱
42 － 342				碗	－	－	5.2	６号 撹乱層
50 － 463				碗	13.4	－	－	８号 墓　口
50 － 464				碗	11.2	－	－	８号 墓　口
13 － 31				皿	12.7	3.3	7.6	０号 撹乱層
13 － 32				皿	12.35	3	8.2	０号 撹乱層
20 － 115				皿	－	－	7.5	１号 前庭灰褐色土
42 － 343				皿	－	－	－	６号 墓　前
20 － 116				香　炉	10.5	8.4	9.8	１号 撹乱層
35 － 254				香　炉	10.2	－	－	３号 撹乱層
13 － 33				蓋	9.3	2.55	3.3	０号 撹乱層
42 － 344			瀬戸・美濃	皿	9.9	－	－	６号 墓　前
35 － 255		銅版転写	肥前	碗	11.8	5.15	4.25	３号 撹乱層
51 － 475				大　皿	31.4	4.5	19.1	８号 墓　口
13 － 34			瀬戸・美濃	小　碗	6.7	－	－	０号 撹乱層
20 － 117				小　碗	－	－	3.6	１号 撹乱層
27 － 177				小　碗	6.9	4.4	2.5	２号 撹乱層
45 － 387			瀬戸・美濃	碗	11.25	4.8	3.7	７号 墓室清掃
50 － 465				小　碗		－	－	８号 墓　口
50 － 466				小　碗	7.15	－	－	８号 撹乱層
14 － 43				小　杯	5.1	2.8	1.65	０号 撹乱層
13 － 35				皿	13.1	2.5	6.9	０号 撹乱層
13 － 36				皿	13.23	2.75	6.5	０号 撹乱層
13 － 37				皿	13.1	2.1	7	０号 撹乱層

単位：cm

図版番号	種類	種類	生産地	器種	法量 口径・甲径	法量 器高	法量 底径・摘み径	出土地区
13 － 38	染付	銅版転写	瀬戸・美濃	皿	11.35	2.3	6.1	０号 撹乱層
13 － 39				皿	11.1	2.35	6.3	０号 撹乱層
14 － 40				皿	10.8	2.3	6	０号 撹乱層
14 － 41				皿	11.7	2.2	6.7	０号 撹乱層
14 － 42				皿	11.15	2.3	6.85	０号 撹乱層
20 － 118				皿	12.6	2.5	7.15	１号 前　庭
21 － 119				皿	15.85	3.1	8.9	１号 前　庭
21 － 121				皿	－	－	7.4	１号 前　庭
21 － 120				皿	12.5	2.6	7.4	１号 前　庭
36 － 256				皿	11.3	2.2	6	３号 墓　室
36 － 257				皿	11.25	2.4	6	３号 撹乱層
40 － 315				皿	11.8	2.3	6.9	５号 墓　室
50 － 469			瀬戸・美濃	皿	－	－	4.5	８号 石積内
50 － 468				皿	10.9	2.1	4.95	８号 墓　口
50 － 467				皿	14	3	7.85	８号 撹乱層
14 － 44		ゴム判	瀬戸・美濃	碗	11.1	6.1	4.25	０号 撹乱層
14 － 45				碗	10.9	－	－	０号 撹乱層
36 － 258				碗	11.1	－	－	３号 撹乱層
42 － 345				碗	10.5	－	－	６号 墓　前
50 － 470				碗	11.4	－	－	８号 撹乱層
14 － 46				小　碗	8.4	4.5	3	０号 撹乱層
14 － 47				小　碗	8.5	4.8	3	０号 撹乱層
14 － 48				小　碗	9.5	5.2	2.6	０号 撹乱層
21 － 122				小　碗	8.1	－	－	１号 墓　室
36 － 259				小　碗	7	－	－	３号 撹乱層
42 － 346				小　碗	8.1	－	－	６号 不　明
45 － 388				小　碗	8.5	4.8	3	７号 墓　室
50 － 471				小　碗	7.7	－	－	８号 墓　口
50 － 472				皿	10.7	1.9	5.3	８号 墓　口
14 － 49				小　杯	5	2.7	2.1	０号 撹乱層
21 － 123				大　鉢	25.2	9.6	11	１号 撹乱層
50 － 473				大　鉢	21.3	7.2	10.2	８号 墓　口
21 － 124	色絵	ゴム判	瀬戸・美濃	碗	11.9	－	－	１号 前　庭
27 － 178				碗	11.4	6.1	3.5	２号 撹乱層
42 － 347				小　杯	4.9	－	－	６号 西側表土
22 － 125				大　鉢	17.2	5.8	8.6	１号 前　庭

第２表　沖縄産施釉陶器法量一覧

単位：cm

遺物番号		器種	法量			出土地区
図	図版		口径・甲径	器高	底径・摘み径	
－	50	碗	－	－	7.0	０号 撹乱層
－	51	皿	－	－	－	０号 撹乱層
－	52	鉢	22.0	－	－	０号 撹乱層
－	56	花生	8.75	－	－	０号 墓　室
－	55	壺	8.8	10.15	6.6	０号 墓　室
－	53	急須	8.0	12.0	10.0	０号 墓　室
－	57	灯明具	7.6	6.6	4.8	０号 墓　室
－	54	蓋	9.8	7.3	6.1	０号 墓　室
10	126	碗	6.5	5.8	6.4	１号 前　庭
－	128	鉢	－	－	10.8	１号 前　庭
－	127	鉢	－	－	9.1	１号 前　庭
－	131	瓶	－	－	6.0	１号 前　庭
－	130	壺	10.3	－	－	１号 前　庭
－	129	鍋	21.8	－	－	１号 前　庭
－	133	火炉	11.8	－	－	１号 前　庭
－	134	火取	10.0	7.2	7.4	１号 前　庭
－	132	急須	6.35	－	－	１号 前　庭
－	179	鉢	－	－	9.8	２号 撹乱層
－	180	壺	10.0	7.2	－	２号 床　直
－	181	壺	－	－	6.6	２号 前　庭
－	182	鍋	15.2	－	－	２号 前庭表土
－	183	急須	10.8	－	－	２号 前庭表土
59	261	碗	13.1	5.7	6.0	３号 奥壁溝内
57	260	碗	－	－	－	３号 石積周辺
58	262	碗	－	－	7.3	３号 前庭東側
63	263	鉢	21.8	9.35	8.1	３号 撹乱層
64	264	鉢	25.4	－	－	３号 石積周辺
60	266	瓶	－	－	－	３号 奥　壁
－	265	壺	－	－	－	３号 石積周辺

単位：cm

遺物番号		器種	法量			出土地区
図	図版		口径・甲径	器高	底径・摘み径	
62	268	火炉	－	－	－	３号 前庭表土
61	267	急須の蓋	6.4	－	1.8	３号 前庭東側
－	316	碗	13.7	6.8	6.5	５号 墓　室
－	317	鉢	23.8	－	－	５号 床　直
－	318	急須	－	－	－	５号 床　直
111	348	碗	－	－	－	６号 墓　前
112	349	碗	－	－	5.8	６号 墓　前
97	327	壺	13.9	19.5	12.0	６号 墓　前
98	325	壺	11.6	－	－	６号 墓　室
114	351	火取	－	－	9.8	６号 墓　前
113	350	急須	－	－	－	６号 墓　口
140	389	碗	－	－	6.4	７号 墓　室
141	390	皿	－	－	4.6	７号 墓　室
－	392	鉢	－	－	－	７号 撹乱層
142	391	壺	8.6	－	－	７号 墓　室
－	474	碗	13.55	6.6	6.65	８号 石　積
－	476	碗	－	－	6.3	８号 墓　口
－	477	小碗	8.2	3.8	3.6	８号 石積内
－	479	鉢	－	－	12.7	８号 撹乱層
－	480	鍋	14.5	8.0	5.55	８号 墓　口
－	481	急須	5.1	－	7.3	８号 墓　口
－	478	皿	13.4	4.2	6.0	８号 石積内
－	523	鉢	－	－	－	10号 表　土
－	533	碗	－	－	7.2	11号 床　直
－	558	碗	－	－	7.1	14号 東隣表土
－	560	鍋	13.4	－	－	14号 撹乱層
－	559	蓋	－	－	7.0	14号 床　直
－	561	急須の蓋	11	3.5	－	14号 東隣表土

第３表　沖縄産無釉陶器法量一覧

単位：cm

遺物番号		器種	法量			出土地区
図	図版		口径・甲径	器高	底径・摘み径	
－	62	擂鉢	26.4	－	－	０号 撹乱層
－	61	鉢	32.0	－	－	０号 撹乱層
－	59	甕	－	－	－	０号 撹乱層
－	58	甕	－	－	－	０号 撹乱層
－	60	甕	－	－	34.6	０号 撹乱層
－	63	火炉	－	－	－	０号 撹乱層
－	64	急須の口	－	－	－	０号 撹乱層
－	138	鉢	28.2	－	－	１号 撹乱層
－	137	鉢	29.5	14.75	12.0	１号 撹乱層
－	135	灯明皿	10.6	3.0	5.5	１号 前　庭
－	141	壺	－	－	－	１号 撹乱層
－	139	壺	8.4	－	－	１号 前　庭
－	147	壺	22.0	17.0	－	１号 撹乱層
－	144	甕	－	－	16.6	１号 撹乱層
－	143	甕	－	－	－	１号 前　庭
－	145	火取	16.8	－	－	１号 前　庭
－	146	羽釜	9.0	－	－	１号 前　庭
－	136	蓋	－	－	2.1	１号 前　庭
－	187	鉢	－	－	－	２号 前庭表土
－	185	壺	23.8	－	－	２号 撹乱層
－	186	小壺	－	－	－	２号 前庭表土
－	184	灯明皿	10.5	2.7	－	２号 撹乱層
67	279	擂鉢	23.0	13.1	11.8	３号 撹乱層
68	280	擂鉢	28.4	－	－	３号 石積周辺
69	278	甕	－	－	15.4	３号 撹乱層
70	277	甕	25.0	－	－	３号 撹乱層
－	276	甕	－	－	－	３号 奥　壁
65	270	灯明皿	10.1	2.7	5.35	３号 撹乱層
66	269	灯明皿	9.1	2.5	5.0	３号 撹乱層

単位：cm

遺物番号		器種	法量			出土地区
図	図版		口径・甲径	器高	底径・摘み径	
－	271	灯明皿	－	－	－	３号 前庭表土
－	319	壺	－	－	8.0	５号 床　直
117	354	鉢	－	－	－	６号 墓　前
118	353	鉢	18.7	－	－	６号 墓　前
116	355	鉢	45.2	－	－	６号 墓　前
115	352	壺	12.2	－	－	６号 墓　前
120	357	甕	－	－	16.2	６号 墓　前
119	356	甕	－	－	22.7	６号 墓　前
144	394	擂鉢	34.0	－	－	７号 撹乱層
143	393	水滴	1.7	3.6	5.0	７号 撹乱層
145	396	壺	－	－	12.4	７号 墓　室
146	397	壺	－	－	14.0	７号 墓　室
－	395	甕	－	－	－	７号 撹乱層
－	489	擂鉢	－	－	－	８号 撹乱層
－	490	擂鉢	39.2	－	－	８号 撹乱層
－	491	擂鉢	－	－	11.0	８号 石積内
－	486	大鉢	－	－	－	８号 撹乱層
－	482	壺	12.5	38.7	17.5	８号 撹乱層
－	485	壺	－	－	11.0	８号 撹乱層
－	484	壺	－	－	－	８号 石積内
－	483	壺	27.0	－	－	８号 石積内
－	487	甕	－	－	－	８号 墓　口
－	488	甕	38.6	－	－	８号 撹乱層
－	492	甕	－	－	－	８号 石積内
－	493	炉	－	－	28.0	８号 撹乱層
－	524	甕	34.2	－	－	10号 表　土
－	563	鉢	21.0	－	－	14号 撹乱層
－	562	鉢	49.2	－	－	14号 東隣表土
－	564	鉢	－	－	－	14号 墓　室

第４表　印判手の文様型分類表

肥前系の型紙摺　碗
　外反タイプ
　外体面の文様
Ⅰ類、三角を鋸歯状に繋ぎ向かい合わせに配置、菱形に開いた空間に三角を円形に置き中に菊花文を描く破線下に三角繋文を廻らす。
Ⅱ類、丸窓に鶴文、枠外に笹、松を描く。破線の圏線下に三角繋文を廻らしている。
Ⅲ類、梅花形の窓絵、枠外に笹、松を描く。破線の圏線下に三角繋文を廻らしている。
Ⅳ類、丸窓内に寿・草花文を描く。破線の圏線下に三角繋文を廻らしている。
Ⅴ類、笹文を描く。
Ⅵ類、花唐草
Ⅶ類、山水画
Ⅷ類、漢詩

ａ、外体面の文様が一つつづきの文様で終始する。
ｂ、外体面の文様は一旦腰部で圏線を引き区画され蓮弁文、三角繋文、一点破線（旭文）などの文様と組み合わす。

　口縁内面の文様
　１、輪宝繋文
　２、三角文
　３、松竹梅
　４、丸形の窓絵（寿・福）
　５、丸形の窓絵（寿・草花文）
　６、菊花文
　７、笹文
　８、花唐草
　９、草花文
　10、無文

　内底面の文様
Ａ、松竹梅円形文
Ｂ、草花文

　　直口タイプ
　外体面の文様
Ⅰ類、縦の文様構成　瓢箪縞の文様区画
　枠内に福・寿字や青海波、毘沙門亀甲文を交互に充填する。
Ⅱ類、縦の文様構成　瓢箪縞の文様区画
　枠内に福・寿字や網代文、氷裂文を交互に充填する。
Ⅲ類、横の文様構成
　窓絵（雲、波、楓形の窓内に青海波、毘沙門亀甲文、楓を充填し地文は青海波に菊花文を散らしている。）
Ⅳ類、横の文様構成
　絵模様（草花の中に昆虫が飛ぶ風景）

　口縁内面の文様
　１、輪宝繋文
　２、石畳文
　３、窓絵
　４、圏線のみ
　５、無文

内底面の文様
　Ａ、松竹梅円形文
　Ｂ、草花文

肥前系の型紙摺　皿
　　輪花皿
　外体面の文様
　１、花唐草
　２、塔

内体面の文様
Ⅰ類、菊花文
Ⅱ類、窓絵（稜花形の窓に亀を描く。）

ａ、内面の文様が一つつづきの文様で終始する。
ｂ、内面の文様は大まかに体面と底面に分かれ幾つかの文様と組み合わす。

内底面の文様
　Ａ、芝垣の環状文と松竹梅円形文
　Ｂ、その他

地文
イ、青海波
ロ、斑点
ハ、短線（斜線）
ニ、石畳文
ホ、微塵唐草
ヘ、はなずくし
ト、無し

　　瀬戸・美濃産の銅版転写 小碗
　　直口タイプ
　外体面の文様
Ⅰ類、扇子
Ⅱ類、松と帆掛け舟
Ⅲ類、古銭、銘款、四角文
Ⅳ類、氷裂梅花
Ⅴ類、牡丹文
Ⅵ類、菊花文
Ⅶ類、雪の結晶
Ⅷ類、百人一首
Ⅸ類、松梅文
Ⅹ類、梅花

　口縁内面の文様
Ａ、四方襷文
Ｂ、無文

　　外反タイプ（内面は無文）
　外体面の文様
Ⅰ類、菊花と竹垣
Ⅱ類、童謡絵柄（童、鞠、蝶、松）

　　瀬戸・美濃産の銅版転写 皿
直口、外面は無文
Ⅰ類、波に桜と千鳥
Ⅱ類、逆台形の窓絵枠内に梅花と鹿子を充填している。
Ⅲ類、逆台形の窓絵枠内に芭蕉文と日足を充填している。
Ⅳ類、逆台形の窓絵枠内に七宝繋文と麻葉を充填している。
Ⅴ類、逆台形の窓絵枠内に梅文と竹に松を充填している。
Ⅵ類、逆台形の窓絵枠内に楼閣と七宝を充填している。
Ⅶ類、亀甲の地文に花弁形の窓を配し窓内に孔雀と牡丹を充填。
Ⅷ類、捻子形の枠に梅花、格子文を充填する。
Ⅸ類、三角、菱形の窓を幾何学模様に配し窓内に梅花と梅蕾を充填。
Ⅹ類、丸形の窓内に渦巻き地文は石畳文
Ⅺ類、窓絵地文四方襷
Ⅻ類、菊花市松文
XⅢ類、地文は石畳文に将棋の駒を配する。
XⅣ類、斑点の地文に花文
XⅤ類、花菱
XⅥ類、桜花
XⅦ類、竹

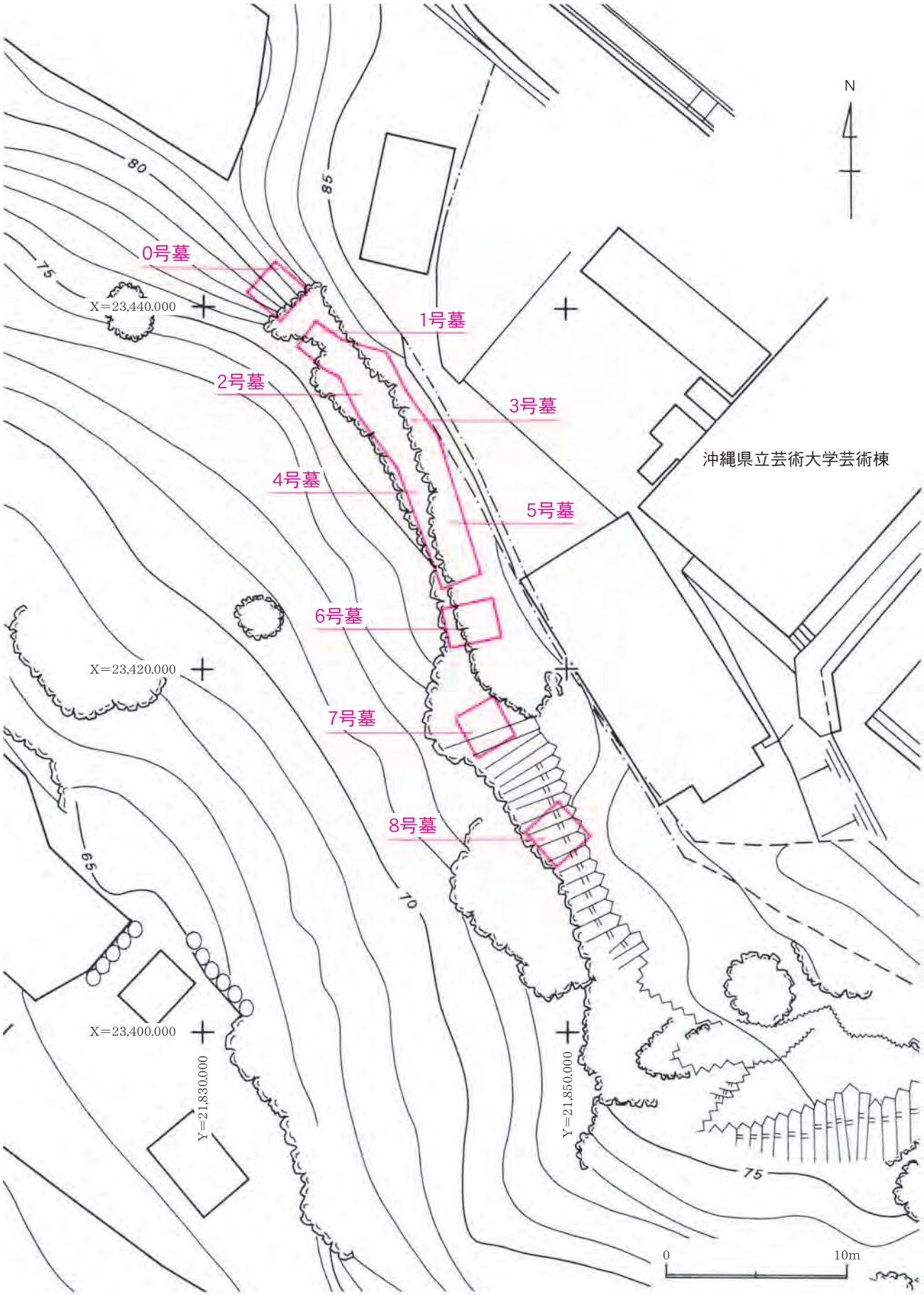
　内底面の文様
Ａ、梅花文
Ｂ、七宝文
Ｃ、菊花文
Ｄ、雷文
Ｅ、水草と金魚
Ｆ、木の葉

　　瀬戸・濃産のゴム判 碗
　　直口タイプ
　外体面の文様
Ⅰ類、菊花散らし
Ⅱ類、籠目に寿字文
Ⅲ類、七宝文
Ⅳ類、丸文（松）
１、筒形碗
２、逆八に字に外に向かい開き立つ碗
外反タイプ
Ⅴ類、菊花と枝ものと菱格子

　　瀬戸・美濃産のゴム判 小碗
　外体面の文様
Ⅰ類、鶴丸文＋蓮弁文
Ⅱ類、窓絵、丸窓に梅、捻子を入れる＋蓮弁文
Ⅲ類、長方形と扇子形の窓に柳や菊花と七宝文を描く。
Ⅳ類、ぜんまいを帯状に廻らす。
Ⅴ類、花唐草を帯状廻らす。
Ⅵ類、口縁に鋸歯状と花唐草を帯状に廻らす。
Ⅶ類、縦に伸びる茎とぜんまいを描く。
Ⅷ類、水玉と千鳥
Ⅸ類、四方襷＋蓮弁
Ⅹ類、花市松文

ａ、外体面の文様が一つづきの文様で終始する。
ｂ、外体面の文様は圏線で区画され複数の文様を組み合わす。

内底面の文様
Ａ、寿字　　Ｂ、無文


N
0号墓
1号墓
2号墓
3号墓
4号墓
5号墓
6号墓
7号墓
8号墓
沖縄県立芸術大学芸術棟
X=23,440.000
X=23,420.000
X=23,400.000
Y=21,830.000
Y=21,850.000
80
85
75
65
70
75
0
10m

第６図　古墓位置図

第Ⅳ章　遺構と出土遺物

第１節　第０号墓

第５表　第０号墓遺構表

挿図番号		－
図版番号		図版２
位　　置		X=23,441.000　Y=21,833.000
構造	形 状	掘込墓
	規 模	内部は約２ｍ×２ｍで、墓口は南に向く。
	工 法	石灰岩を粗く掘り込んでいる。墓口は大部分が崩壊しており旧状を窺い知ることはできない。墓庭は確認されず。
	内部の状況など	戦後は産業廃棄物の捨て場となっており、とくに墓に伴う遺物を確認することはできなかった。また床面は平坦に土を入れて造成している。墓室から沖縄産施釉陶器を１点表採する。
	時 期	－
備　　考		事前調査では確認されていない古墓。調査区の最西端であることから、確認のために試掘を行った結果、墓口を検出する。周辺は戦後崩落した石灰岩塊が散乱しており、安全面の配慮から詳細な内部調査を行うに至らなかった。そのため内部に溜め置かれている産業廃棄物の撤去と撮影記録のみに止めた。また、天井や壁に亀裂を確認することができ、更なる崩壊の危険性が指摘される。

第０号墓出土遺物

蔵骨器（第７図１･図版11－１）

土器。頸部のくびれは弱く、口縁部が直口する壺。口唇部は尖る。口縁部周辺における器壁の剥落は著しい。器面調整は内外面共に丁寧なナデ、あるいはヘラナデによって仕上げられている。色調は内外面共に橙色を呈する。大粒の赤色粒と貝片を多量に混和させる。口径20.2㎝。撹乱層出土。

青磁（第７図２～４･図版11－２～４）

８点が出土し碗、皿、瓶の３器種が得られた。第７図２･図版11－２は胴部に丸みを持ち口縁に向かい開き立ち上がる直口の碗である。口唇は舌状を呈する。外体面に幅広の蓮弁文を片切彫りにより施す。口径16㎝。第７図３･図版11－３は碗の底部である。内底面がフラット状を成し見込みに印花文を施文、釉色は灰緑色を呈する。外底面は露胎させているが高台を打ち欠かれ釉の広がりは不明である。円形状に打割成形し円盤状製品へ転用している。皿の口縁が１点出土した。第７図４･図版11－４は朝顔状に外へ向かって開き口唇に抉りを施す稜花皿である。内外体面共に片切彫りの草花文を施こし釉色は灰緑色を呈する。２～４はいずれも撹乱層出土。生産年代は16世紀代に位置付けられる。

白磁（図版11－5，6）

総数12点、碗、杯といった器種がある。碗は４点出土した。図版11－５は胴部からやや内彎気味に立ち上がる直口の碗で口唇は丸くおさめる。胎土は灰白色を呈し釉色は淡灰色を呈する。口径10.9㎝。撹乱層出土。小碗及び杯が４点出土している。図版11－６は口縁部がやや内彎する直口杯である。口唇は丸くおさめ、外体面に轆轤痕を留める。胎土釉色共に白色を呈する。口径6.2㎝。撹乱層出土。

染付（図版11－７～11）

総数60点で碗、皿、小杯、大鉢、などの器種がみられる。碗は口縁が16点、胴部15点、底部５点の計36点が出土した。図版11－７は福建・広東系の外反口縁碗で外体面に横位の文様を施している。図版11－８は福建・広東系の碗の底部である。高台は高台内から斜めに削り出し先端が角張った三角を成す。釉の広がりは内底と外底を除き全面に及ぶ。７、８共に撹乱層出土。皿は総数18点が出土し、口縁が６点、胴部７点、底部５点が出土。口縁は端反、直口、鍔縁などの形態がみられる。小杯は４点が出土、直口口縁の杯と逆八の字状に開く杯がある。図版11－９は完形の杯で胴部は腰部から僅かに開き、ほぼ真っ直ぐ立ち上がり口縁に至る。口縁は直口、口唇が

やや尖る。外体面に唐草文を廻らしている。生産年代は17～18世紀に位置付けられる。口径4.3㎝。器高2.8㎝。底径2.0㎝。撹乱層出土。図版11－10は底面が饅頭心を呈し、見込みに二条の圏線と荒磯文を施している。外体面高台脇に二条の圏線を廻らし、外底面に「大明成化年製」の楷書二行銘が認められる。底径2.7㎝。撹乱層出土。図版11－11は底部から逆八の字状に開く胴長の杯である。底径2.0㎝。撹乱層出土。大鉢は胴部破片が１点出土している。文様構成は外体面に丸文に草花文を描くもので、福建・広東系である。瓶は胴部１点が出土した 。外体面に樹木文が施されている 。

褐釉陶器（第７図５･図版11－12）

中国産褐釉陶器。底部近くでくびれ、底面は上げ底状となる。内面には轆轤痕が確認できる。内外面共に暗オリーブ色の釉が薄く施される。胎土は密で白・黒色素粒子が多くみられる。また大きい気泡も見られる。底径10.8㎝。撹乱層出土。

その他の輸入陶磁器

無釉陶器１点が出土している。器種は不明である。

本土産陶磁器（図版11－13～20，図版12，図版13，図版14－40～49）

染付が11点出土し、肥前系は10点、瀬戸・美濃産は１点である。器種別には碗、皿、瓶がみられた。図版11－13は筒形の碗の口縁資料である。外体面に横位の圏線を廻らし縦縞とよろけ縞を交互に描いている。生産年代は1820年～1860年代に位置付けられる。口径7.1㎝。撹乱層出土。図版11－14は胴下部に丸みを持つ碗で外体面に荒磯文と高台際に二条の圏線を描き外底に渦福字の銘款を配する。畳付けは細く作り断面形が三角状を成す。底部は比較的厚い。生産年代は18世紀中葉～18世紀末に位置付けられる。底径4.1㎝。撹乱層出土。図版11－15は型打ちの稜花皿である。外体面に唐草を描き、見込みに圏線と微塵唐草を描く。生産年代は1840年～1870年代に位置付けられる。撹乱層出土。図版11－16は口縁が鶴首状を成し、外側に一気に開く瓶で口唇は上向きに引き上げ側面を平担に整える。肩部外面に二条の圏線を配し網目文を描く。生産年代は17世紀後半に位置付けられる。撹乱層出土。図版11－17は肩部外面に荒磯文を描く瓶胴部片である。生産年代は1650年～1670年代に位置付けられる。撹乱層出土。瀬戸・美濃産は大型角皿の口縁破片が１点出土し生産年代は明治時代に位置付けられる。

図版11－18は肥前系の色絵の蓋物である。胴部は筒状を成し外体面に横位の圏線と幅広の帯文を二条廻らし上絵の枠描きを加えるものである。生産年代は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。撹乱層出土。

陶器は総数19点が出土し肥前系、薩摩産、関西系などが出土している。図版11－19は口縁が内彎気味の直口碗で、口唇は尖る。関西系で18世紀に位置付けられる。撹乱層出土。図版11－20は京焼風の肥前系碗である。高台の断面形は三角に削り出され外底面に清水の銘款が印刻される。釉は高台脇まで施される。底径4.8㎝。撹乱層出土。図版12－21は、内野山窯の銅緑釉の皿である。胴部の立ちあがりは緩やかで外に開く高台形は断面四角で中刳りは僅かに中心を外して削られ雑な仕上がり。内底面の釉を蛇の目釉剥ぎし外体面は胴部まで施釉。高台は露胎させる。生産年代は17世紀末～18世紀前半に位置付けられる。底径3.7㎝。撹乱層出土。図版12－22は関西系の鍋蓋で環状の摘みを持ち甲部に環状の線刻が三条櫛描きされる。釉は全面に施された後、摘みの上面と内側中央はふき取っている。19世紀に位置付けられる。甲縁径12.7㎝、器高4.0㎝、摘み径3.6㎝。図版12－23は関西系の筒形碗で外体面に字文を描く。生産年代は明治以降が考えられる。口径6.2㎝。撹乱層出土。図版12－24は薩摩産褐釉陶器壺の口縁片である。口縁は外に折り返し帯状に突出させる。口縁上端は扁平状を成し貝目痕が認められる。撹乱層出土。図版12－25は薩摩産褐釉陶器の底部片である。外底面に貝目痕を明瞭に残している。撹乱層出土。

印判手は型紙摺、銅版転写、ゴム判が出土。型紙摺は79点が出土し総て肥前系であった。図版12－26～29は碗である。いずれも胴下部に丸みを持ち、外に向かい開きながら立ち上る。口縁は外反、口唇は舌状を成す。26の文様はⅠ類ｂ２Ａロ。27の文様はⅥ類ｂ８Ｂト。28の文様はⅡ類ｂ３Ａロ。29の文様はⅣ類ｂ５Ｂ。図版12－30は直口口縁碗で文様はⅠ類１。図版13－31、32は型打ち輪花皿である。いずれも底部は蛇の目凹型高台を成す。31の文様はⅠ類１ａ。32の文様はⅡ類２ｂＡ。図版13－33は小型な碗の蓋である。甲縁部外面に青海波、花散らし文地に形の異なった花弁状の窓絵を配置。窓内にそれぞれ青海波、楓、毘沙門亀甲文を充填。内面の縁部に輪宝繋文を廻らし中央に松竹梅の環状文を配している。図版13－34～39，図版14－40～43は瀬戸・美濃産の銅版転写である。総数35点が出土し、器種別には碗、小碗、皿、小杯が出土している。34は直口小碗で文様はⅠ類。図版13－35～39，図版14－40～42はいずれも直口の小皿で外面は無文である。35はⅦ類Ｇ。36はＸⅧ類Ｃ。37

はⅧ類。38はⅠ類。39はⅡ類。40はⅩⅨ類。41はⅣ類。42はⅨ類Ａ。図版14－43は外反の小杯。外体面に松葉と福・寿字文を表す。図版14－44～49は瀬戸・美濃産のゴム判である。総数17点出土。44、45は胴部から逆八の字状に開く直口の碗で44は菊花文、45は籠目に寿字文を外体面にそれぞれ描いている。46～48は直口小碗で文様は46がⅢ類、47はⅤ類、48はⅧ類。図版14－49は口縁が外反した小杯である。外体面に菊花文を表す。

沖縄産施釉陶器（図版14－50～53，図版15－54～57）

総数213点が出土している。器種別にみると碗、小碗、皿、鉢、急須、蓋、壺、花生、灯明具などが出土した。図版14－50は碗の底部である。灰釉単掛けのフィガキーで、底部から直線的に立ち上がる器形。撹乱層より出土。図版14－51は皿の口縁部である。外面が鉄釉、内面は灰釉の掛け分けである。外反口縁で口唇は玉縁状を呈する。撹乱層より出土。図版14－52は鉢の口縁部である。外面は飴釉、内面は白釉の掛け分けで口縁部は逆「L」字状を呈する。撹乱層よりの出土。図版14－53は急須の口縁部～底部である。白釉単掛けで、器形は丸型である。口唇は釉を掻き取り、内面及び外底は露胎。外面には線彫りで格子文を施したあと、その上に呉須と鉄釉を塗る。撹乱層よりの出土。図版15－54は蓋である。完形品で、鍔、脚がともに舌状を呈す。撮みは円柱形で中央をくぼませる。また、上面中央に化粧土をめぐらせ、黒釉を施したあと蛇の目釉はぎをしているため、化粧土が露胎している。墓室内より出土。図版15－55は壺である。白化粧の上に黄灰釉を施している。外反口縁で口径は大きい。最大径が肩部にくる器形で、頸部に鉄釉で圏線が一条めぐらされる。底部は蛇の目高台である。墓室より出土。図版15－56は花生の口縁部～胴部である。灰釉単掛けで器形はひょうたん型。外反口縁で口唇部が垂直に立ち上がり、断面は三角形を呈する。頸部には獅子頭が２箇所貼り付けられ、外面には線彫りが施される。全体に白釉を施釉し、口唇外面、獅子頭、頸部に呉須が掛けられる。撹乱層より出土。図版15－57は灯明具の口縁部～底部である。直口口縁で底部は糸切りタイプである。脚台半ばまで鉄釉が施釉されている。墓室より出土。

沖縄産無釉陶器（図版16－58～64）

総数237点が出土している。器種別にみると甕、鉢、擂鉢、火炉、急須などが出土した。すべて撹乱層よりの出土。図版16－58、59は甕の口縁部、図版16－60は底部である。58、59は口唇両端が張り出す形で、58は口縁部断面が逆三角形、59は逆「L」字状を呈する。58は口縁部に圏線を４本、胴部に波状文と圏線を施す。59は口縁部が段状に成形され、胴部には丸文と圏線をめぐらせる。 60は底部から胴部へ直線状に立ち上がる器形で、内面胴部には布目痕が僅かにみられる。また内底の一部には砂目痕が付着、ケズリ痕も明瞭にみられる。図版16－61は鉢の口縁部である。いわゆる「ミジクブサー」ともよばれるもので、口縁部は内彎し、口唇が舌状を呈する。胴部に圏線を２本めぐらせ、その下に波状文を施す。図版16－62は擂鉢の口縁部である。口縁部が逆「L」字状を呈し、口唇部の幅が広い。口唇上部に丸彫りの圏線を一条施す。内面全体に櫛目を密に施し、上部のみナデ消されている。外面にロクロ痕がみられる。図版16－63は火炉の口縁部である。口縁部が「く」の字に折れ、口縁上部に凹線が１条施される。胴部には横耳が付く。内面にはロクロ痕がみられる。図版16－64は急須の口である。

陶質土器（図版17－65～68）

総数41点出土した。器種別には鍋、急須、蓋、火炉などがみられる。図版17－65は土瓶の外耳である。方形状を成し外側から内側へ穿孔し、取っ手を取り付ける孔を有する。図版17－66は胴部が筒形になる火炉口縁部である。図版17－67、68は口縁が内彎し底部は高台を持つ火炉である。いずれも撹乱層出土。

瓦質土器

底部の破片と考えられる資料が１点出土している。

銭貨（第７図６･図版17－69）

有文銭が出土している。は２分の１が破損しているが、残存する文字から聖宋元寶になると思われる。字体は篆書。時代は北宋。初鋳年代は1101年である。銭厚1.3㎜、重量(1.4)ｇ。撹乱層より出土。

金属製品（第７図７、８･図版17－70、71）

第７図７･図版17－70は鉄製の板状製品である。曲線状の縁部を成し、側面に縦の刻み目を有する。飾り金具なのか保存状態が劣悪と言うこともあり不明である。縦長(2.8)㎝、横長(3.0)㎝、厚さ0.2㎝、重量(6.7)ｇ。第７図８･図版17－71は平面観が木の葉状をなす鉄製の鉾である。刃先が僅かに破損しているが基部まで残す。刃部は表面の中央から縁部に向かい緩やかな鎬を作り、縁部に付刃する。刃部横断面形状は略アーモンド形。基部はや

や末広がりの円筒状を成す。一旦、板状に伸ばし筒形に巻き作ったことが窺える。縦長(25.4)㎝、刃部幅3.9㎝、厚さ0.2㎝、刃部厚0.9㎝、基部径3.9㎝、重量(370)g。撹乱層出土。

石器（図版17－72）

サンゴ製石球で断面形は楕円形になる。縦径2.8㎝、横径3.0㎝、重量17.1ｇ。撹乱層出土。

円盤状製品

０号墓から出土した円盤状製品は５点で詳細は下表通りである。

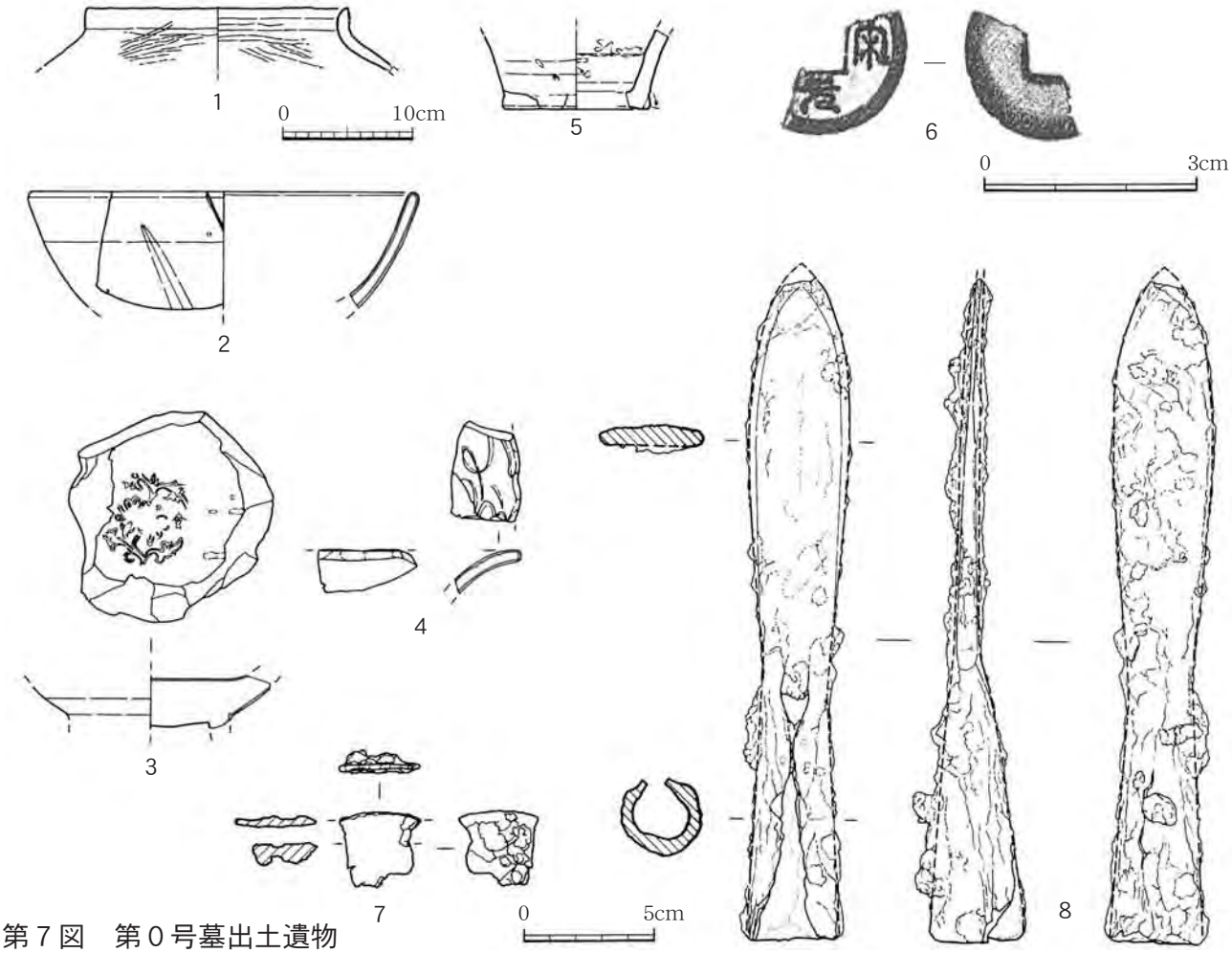
第６表　第０号墓円盤状製品観察表

単位：mm、g

図版番号		状態	長径	短径	厚さ	重量	素材	使用部位	観　察　事　項	出土地
図版17	73	完形	17.1	16.2	5.7	2.0	染付	胴部	楕円形、剥離は粗く、表面に紋様の一部が見られる。一部磨耗している。	撹乱
	74	完形	32.9	32.1	14.8	19.7	染付	底部	楕円形であるが剥離が粗く角が残っている。裏面のみに紋様がみられる事から皿の底部を転用した物と思われる。	撹乱
	75	完形	40.1	39.5	14.5	24.2	瓦	－	円形に近い楕円形で剥離は丁寧。裏面に縄目の跡が僅かに見られる。赤瓦を転用。	撹乱

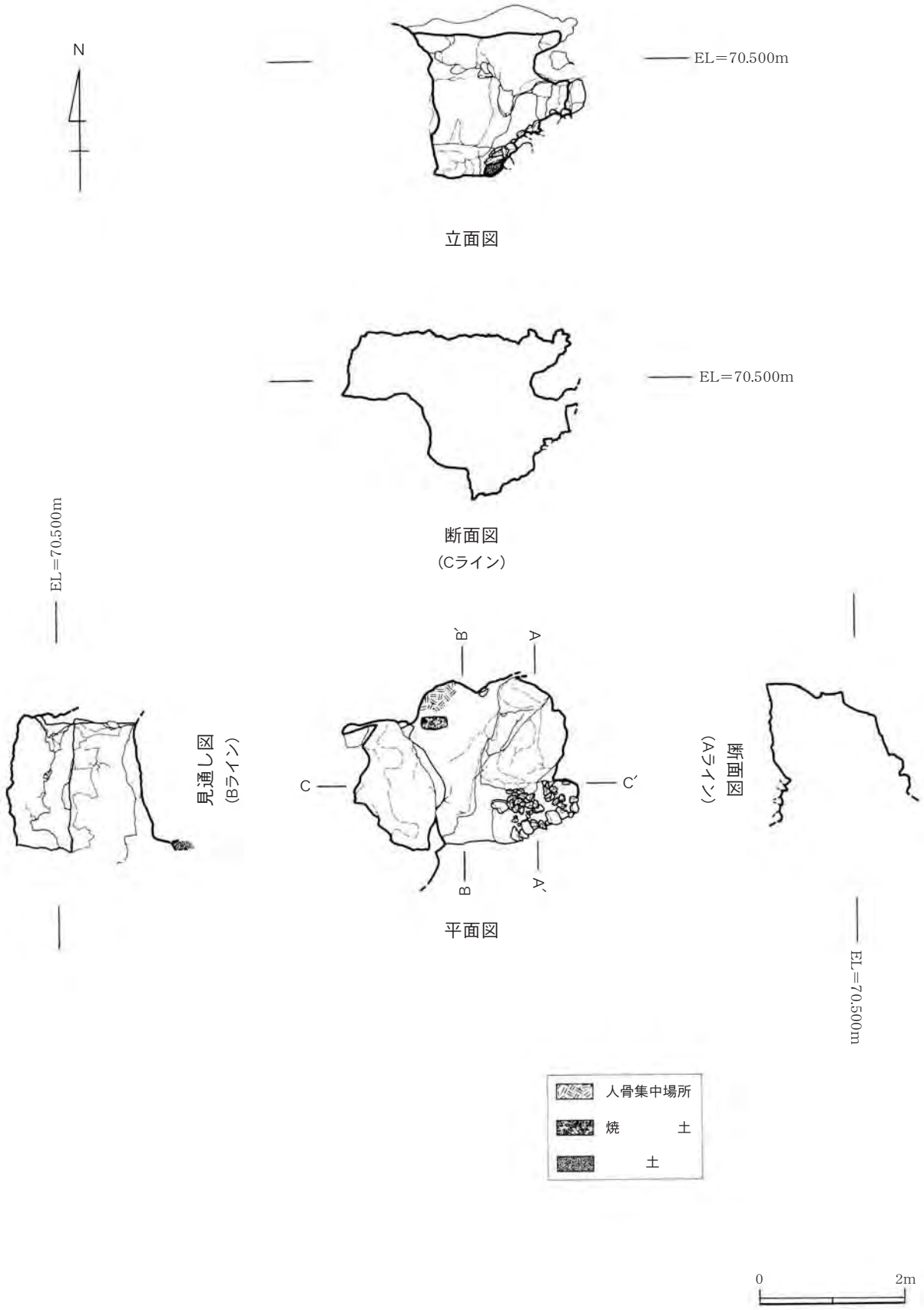
貝製品（図版17－76～78）

ヤコウガイ製匙状製品が３点出土している。すべて撹乱層からの出土。図版17－76は身の部分のみの欠損品である。両面とも真珠層が露胎し、研磨痕が顕著である。最大長(4.9)㎝、最大幅(3.6)㎝、重量(7.4)ｇ。図版17－77、78は未製品だと思われる。77は螺肋の一部に敲打痕がみられ、表面は丁寧に研磨されている。最大長(5.8)㎝、最大幅(2.9)㎝、重量(17.9)ｇ。78は表面が丁寧に研磨されているが、外面の螺肋に加工はされていない。縁部は打ち欠いたあとに研磨したものと思われる。最大長(6.8)㎝、最大幅(4.5)㎝、重量(29.6)ｇ。



第７図　第０号墓出土遺物

第２節　第１号墓



第８図　第１号墓実測図

第７表　第１号墓遺構表

挿図番号		第８図
図版番号		図版２
位　　置		X=23,438.000　Y=21,836.000　EL=70.000m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	墓室は東西1.9m、南北2.1m。西側に奥行0.5mの側棚が見られる。墓口には土留めの石積みが見られる。石積みは拳大の石灰岩を積み上げており、とくに石材の加工痕は見られない。時期は不明。
	工 法	側棚は墓室床面から高さ85～90㎝の西側壁面を掘り込んで造る。棚上はほぼ平坦に削り込んでいる。
	内部の状況など	墓室天井はほぼ平坦に加工されており、西側のみ粗加工となる。墓室床面は約 10 ㎝の厚さで表土が堆積し、奥壁側からは焼土と人骨が僅かながら集中して出土した。炭も少量出土。床面直上から中国産染付碗の口縁部が１点出土。
	時 期	出土遺物から18世紀か。
備　　考		墓前には戦後の撹乱層がかなり堆積していた。地表面から約2.5m程掘り下げたが、全て近代以降の撹乱層であった。墓口下部、EL=67.000m～66.500mに沖縄戦時に使用されたと考えられる地下壕を確認した。天井はアーチ状となり高さ約1.7m、土を掘り込んでおり一部は岩盤を削っている。下方へ掘り込んでおり、崩壊の危険性が高かったため壕口の確認のみに止めた。また墓口南側 EL=68.500mに全長約１mの石列を確認する。個々の石材は丁寧に面取りがなされている。

第８表　第１号墓出土状況一覧

遺物／出土地	青磁	白磁	染付	褐釉			その他の輸入陶磁器				本土産陶磁器			沖縄産陶器		陶質土器	瓦質土器	土器	金属製品	円盤状製品	貝製品	合計
				中国産	タイ産	タイ産・中国産	無釉陶器	黒釉陶器	鉄釉染付	色絵	磁器	陶器	印判手	施釉	無釉							
前　庭		16	34	3	1	1	1	1	1	2	17	18	15	80	115	35	1	2		10	3	356
墓　室	1	1	2	1			1					2	1	7	6	3		3	6	3		37
床　直			1											3								4
墓室溝内															1							1
炭　層														3								3
棚　上															1							1
合　計	1	17	37	4	1	1	2	1	1	2	17	20	16	93	123	38	1	5	6	13	3	402

第１号墓出土遺物

青磁（第９図 9･図版18－79）

総数４点が出土したが、碗底部資料を除き残りは小破片であり器種を特定することは不可能であった。第９図 9･図版18－79は内底面がフラット状をなし畳付の内側面を僅かに削り出す 。釉色はオリーブ色、全面施釉後、外底面の釉を輪状に掻き取っている。底径7.4㎝。墓室出土。

白磁（図版18－80～83）

総数20点が出土した。器種別の内分けは碗、小碗、皿、杯、壺、蓋物がある。

碗は口縁部と胴部の計２点が出土した。小碗は口縁部２点、底部４点、胴部１点、計７点出土している。図版18－80は丸みのある胴部から伸びるように立ち上がる碗であり端反り口縁を呈し口唇は尖がる。胎土は白色、釉色は灰白色を呈する。口径8.5㎝。撹乱層出土。図版18－81は型押し成形の小碗底部である。胎土は白色を呈し釉色は灰白色を呈する。底径3.5㎝。前庭茶褐色土出土。皿は口縁部１点、底部２点、計３点が出土した。図版18

－82は内底面が比較的フラット状を成し腰の張った皿の底部である。高台は小さめで断面形態は四角状を成す。施釉後、畳付けと内底面の釉を輪状に掻き取るものである。胎土は黄白色を呈し釉色は灰白色を呈する。底径4.6㎝。前庭出土。図版18－83は蓋物である。甲部は僅かに膨らみを持ち径２㎜の孔を穿つ。甲縁部下面は扁平状をなし施釉後、釉はふき取っている。型押し成形による作りで胎土、釉色は灰白色を呈する。甲縁径7.4㎝。墓室出土。

染付（図版18－84～94，図版19－95～97）

52点出土し完形は無く総て破片であった。器種は碗を主体に小碗、皿、杯、鉢、瓶、蓋があり生産地が中国の南部に位置するものが多い。年代は概ね17～18世紀に位置付けられる。碗は60点出土。図版18－84は胴下部に丸みを持ち、僅かに外に開き立ち上がる。口縁は直口、口唇が尖る。外体面に宝文を描く。口径12.3㎝、前庭出土。図版18－85は腰部から外側に直線状に開き立ち上がる。口縁は直口を成す。外体面に横線文を施している。口径11.3㎝。前庭出土。図版18－86は胴部に丸みを持ち、直に立ち上がる。口縁は直口を成す。文様は外体面上下段に二条の界線を配しさらに間に縦位の文様区画を設け中に半梅花と福寿文宝文を交互に繰り返し充填している。口径12.7㎝。前庭出土。図版18－87は内底面がややに盛り上がり高台は両側から僅かに削り出す。外体面には草花文と圏線を挟み簡略した蓮弁文を配している。見込みに二条の圏線と草文を外底面は草花文を施文している。底径6.6㎝。前庭出土。図版18－88は内底面がフラット状、蛇の目釉剥ぎしている。外体面は丸文を描き見込みに三つ点文を施文している。畳付けは露胎する。底径６㎝。前庭出土。図版18－89は胴部が底部から直線的に立ち上がる碗である。高台は大きめで、内底面中央が窪み、畳付けの両側から削り出し断面形が三角状を呈する。外体面から高台際までと内体面と内底中央に施釉、畳付の釉を掻き取っている。外体面の文様は破損ため不明。福建・広東系の碗である。底径6.8㎝。前庭出土。小碗が１点出土した。図版18－90は直口の小碗である。形態は丸碗状を示し外体面に丸文を施文。口唇は二次的に研磨される。口径７㎝。前庭出土。皿は口縁６点、胴部１点、底部４点で総数11点であった。図版18－91、92は腰部に丸みを持つ、端反り口縁の皿である。91は口縁内面上部に圏線を一条廻らしている。口径10.4㎝。撹乱層出土。92は口縁の外体面と内体面に一条の圏線と文様を配するが破損のため詳細は不明。口径14.9㎝。撹乱層出土。図版18－93は底面がフラット状になる腰折れの皿である。見込みに二条の圏線と菊花文を配する。高台の両側から削り出し畳付の先端は三角に尖る。釉は高台脇まで及ぶ。底径8.9㎝。前庭出土。図版18－94は底面がフラットな面を成し高台の外側から斜めに削り出している。釉の広がりは高台脇まで及び見込みに幅広な環状文と圏線中に蛸唐草を描く。底径7.5㎝。前庭出土。大鉢は底部１点、胴部１点、計２点出土している。図版19－95は腰部に丸みを持ち外側にやや開きながら直に立ち上がる。丸窓に草花文を充填する。高台は角張った作りで、主に高台の内側から削り出し面取りしている。釉は全面に施釉後、高台の尖端と内底面を蛇の目状に掻き取るものである。福建・広東系に属する。前庭出土。瓶は図版19－96に示す１点が出土した。外体面に山水文を表す。撹乱層出土。蓋物は１点出土した。図版19－97は甲部がドーム状になり甲縁部は鍔状に外に張り出す。釉の広がりは甲縁部の内脇までと甲部内面に施され突起は露胎している。甲縁部に一条の圏線を施している。甲縁径10.5㎝。撹乱層出土。

その他の輸入陶磁器（図版19－98～100）

中国産の色絵２点、鉄釉染付２点、瑠璃釉２点、無釉陶器２点が出土している。色絵は小碗と皿がみられ、瑠璃釉は碗が出土している。鉄釉染付は小杯の口縁片と底部が出土。図版19－98は胴部がやや開き、立ちあがる。内底はフラット状を成す。見込みに二条の圏線と草花文を施文している。底径3.2㎝。前庭出土。図版19－99は口縁内面に四方襷文を描いている。前庭出土。無釉陶器は茶器と器種不明が出土している。図版19－100は無釉陶器の茶器である。丸みのある胴から内彎する口縁に至る。口縁は蓋を納める帯状の突起を有する。器色、胎土共に褐色を呈する。宜興窯のものと考えられる。口径7.3㎝。前庭出土。

本土産陶磁器（図版19－101～109，図版20，図版21，図版22－125）

肥前系の染付、薩摩産染付、印判手、陶器は肥前・内野山窯産や薩摩産、京・関西系からなる。染付は総数30点が出土し、肥前系染付は29点、薩摩産染付は１点出土した。器種別には碗、皿、蓋物、瓶、袋物が得られた。図版19－103は丸みのある胴部から直に立ち上がる、所謂くらわんか碗と称されるものである。外体面に草花文を描き、高台と高台際に圏線を配する。内底面は蛇の目釉剥ぎし畳付けの釉も掻き取っている。生産年代は17世紀後半～18世紀初頭に位置付けられる。口径10.9㎝、器高4.9㎝、底径4.9㎝。前庭出土。図版19－101は外体面に網目文を描く。撹乱層出土。生産年代は17世紀後半に位置付けられる。図版19－102は口縁内側を釉剥ぎした蓋ものである。外体面に圏線と唐草を描く。生産年代は17世紀後半～18世紀初頭に位置付けられる。撹乱層出土。

図版19－104は直口の小皿である。外体面と内面に山水文を描く。生産地は有田、年代は1820～1860年代に位置付けられる。口径９㎝、器高2.3㎝、底径5.1㎝。前庭出土。図版19－105は甲部に丸味を持つ小型な蓋である。甲部に花文を表し内面の縁部に四方襷を帯状に廻らす。生産地は有田、年代は18世紀後半に位置付けられる。甲縁径８㎝。撹乱層出土。図版19－106は瓶の底部資料で高台際と胴部に圏線を配し柳と考えられる文様を描いている。生産年代は17世紀後半に位置付けられる。底径５㎝。撹乱層出土。図版19－107は胴部が直に立ちあがり口縁は直口を成す、口縁内側を釉剥ぎした蓋ものである。外体面に圏線と花唐草文を配するが呉須の発色はぼんやりとしている。薩摩産の染付で生産年代は1820～1860年代に位置付けられる。口径10㎝。前庭出土。本土産陶器は12点出土し器種は碗、皿、瓶、壺、甕類がある。生産地は内野山窯、関西系、薩摩産があり図版19－108は薩摩産の白釉筒形碗である。口縁に赤絵の半花菱を上絵付している。胴下部に四角の銘款を記している。生産年代は明治以降に位置付けられる。口径７㎝。前庭出土。図版19－109は薩摩産の白釉の瓶である。口縁は朝顔状に外に開く。器厚はかなり厚めである。生産年代は17世紀頃。口径8.9㎝。前庭出土。図版20－110は京焼の皿である。内底面に草花文の呉須さび絵を描いている。高台の内刳りは外側に向かい開くように削られる。釉の範囲は腰部まで施され、高台を露胎させている。生産年代は17世紀頃。底径6.4㎝。前庭出土。図版20－111は肥前系の二彩手の皿である。内底面に白土の刷毛目とさび釉掛けを施し、高台はやや大きめで内刳りは深く、外側に向かい開くように削られる。釉の範囲は胴部まで施され高台を露胎させている。生産年代は17世紀後半に位置付けられる。底径9.5㎝。前庭出土。図版20－112は薩摩産褐釉甕である。口縁は鍔状に外に折り、鍔の下部に波状のひだを有する。口径27.8㎝。前庭出土。印判手は肥前系の型紙刷と銅版転写、瀬戸・美濃産の銅版転写、ゴム判などが出土している。型紙刷は総数20点出土。図版20－113は肥前系の型紙刷碗である。口縁は外反し文様構成はⅠ類ｂ２Ｂロ、内底面に目痕が四つ認められる。図版20－114は口縁が直口する碗で文様はⅣ類１に該当する。図版20－115は皿底部資料である。高台際と外体面の腰部に圏線を廻らし他の文様と組み合せる可能性がある。文様構成はⅡ類ｂＡ。底部は蛇の目凹形高台を呈する。図版20－116は筒形の香炉である。外体面の文様構成は上位（口縁）中位（胴部）下位（胴下部）の三層に分かれる。上位と中位の間は破線により波状に描かれ区画される。上位文様は牡丹の花文や花弁を詰める。中位は竹、梅を描き下位は破線の圏線を挟み方形の蓮弁文を廻らせている。銅版転写は15点出土し小碗や皿がある。図版20－117は直口の小碗で緑色と茶の上薬により文様はⅤ類。図版20－118，図版21－119、120は口縁が直口する皿である。118は緑色の上薬によりⅩⅢ類を施す。120の文様構成はⅢ類。119はコバルトと緑色の上薬により施釉。文様はⅩ類。図版21－121の文様構成はⅪ類。118～120はいずれも鉄釉の覆輪を施している。ゴム判は小碗が４点、色絵の碗が１点、大鉢が１点出土。図版21－122は口縁が直口する小碗である。外体面にⅠ類ａの文様を施す。図版21－123は腰部が張り口縁まで僅かに開きながら直に立ち上がる直口の大鉢である。外体面に五弁花と唐草を施文、口縁内面に幅広横線と墨弾きによる三条の鋸歯線を配し、見込みに山水画を描くものである。文様の枠はゴム判で施し、だみは筆描きによる。図版21－124は口縁が直口するゴム判の色絵碗である。外体面に呉須描きの枝梅花文を表し、梅花は緑と薄桃色の上絵を施す。図版22－125はゴム判の色絵鉢である。口縁は輪花、外体面に蓮弁状の凹凸を有し、底部は蛇の目凹形高台を成す。鋳込み成形によるものである。文様は外高台脇に横線を二条廻らし、内体面に波線の圏線と逆台形状の窓絵を構成させ、窓内に七宝文、枝梅、梅花を上絵付けしている。

沖縄産施釉陶器（第９図10･図版22－126，図版22－127～132，図版23－133、134）

総数116点が出土している。器種別にみると碗、皿、鉢、鍋、壺、急須、火炉、火取などが出土した。第９図10･図版22－126は碗の口縁部～底部である。外反口縁で、胴部が丸味を持つ。全体に灰釉を施し、両面に細かな貫入が入る。畳付けに白土を塗布し、内底は蛇の目釉剥ぎする。前庭より出土。図版22－127、128は鉢の底部である。127は鉄釉単掛け、外底は碁笥底で無釉、内底は蛇の目釉剥ぎする。128は外面に黒釉、内面に鉄釉が施され、外面には細かな貫入が入る。畳付、内底には砂目が熔着。127、128はともに前庭より出土。図版22－129は鍋の口縁部である。口縁部を外側に折り曲げ、取っ手を貼付する。灰釉単掛けで外側のみ施釉。図版22－130は壺の口縁部である。黒釉単掛けで、口縁部のみ釉剥ぎする。口縁部断面は逆三角形を呈する。口径は大きく、胴部は張りが弱い。縦耳を貼付する。前庭より出土。図版22－131は瓶の底部である。平底で外面は露胎、内面は一部に灰釉が掛かっている。おそらく口縁部から釉が流れてきたものと思われる。前庭より出土。図版22－132は急須の口縁部～胴部である。外面は鉄釉、内面は露胎。丸型で注口は１孔。前庭より出土。図版23－133は火炉の口縁部である。飴釉単掛けで口縁部は逆「L」字形を呈し、内面口縁部に三角形の器物受けを貼付する。前庭より出土。図版23－134は火取の口縁部～底部である。口縁断面は三角形を呈し、全体に鉄釉が施釉されている。前庭より出土。

沖縄産無釉陶器（第９図11、12･図版24－142，図版23－140，図版23－135～139，図版24－141，143～147）
　総数27点が出土している。器種別にみると碗、筒碗、灯明皿、蓋、鉢、擂鉢、壺、瓶、甕、火取、羽釜などが出土した。図版23－135は灯明皿の口縁部～底部である。ベタ底で直口型。口縁部には煤が附着しており、器面にはロクロ痕が明瞭に残っている。前庭より出土。図版23－136は蓋の撮み～胴部である。急須の蓋だと思われ、撮みは宝珠状を呈する。前庭より出土。図版23－137、138は鉢である。137は口縁部～底部、138は口縁部である。137はいわゆる「ミジクブサー」とよばれるもので、口縁は内彎し、口唇が舌状を呈する。胴部に圏線を１本めぐらせ、その下に波状文を施す。撹乱層より出土。138は口縁部が逆「L」字状を呈し、口唇は方形をなす。外面にはロクロ痕がみられる。撹乱層より出土。図版23－139は壺の口縁部～胴部である。口縁部がハブラシ状に肥厚し、肩部が強く張る器形である。頚部に１条圏線をめぐらせ「〇〇」の刻み文様が入る。器面にはロクロ痕が明瞭に残る。前庭より出土。第９図11･図版24－142は瓶の完形品、第９図12･図版23－140は頚部～底部、図版24－141は底部～胴部である。９図11は左右の形が非対象で、胴上部に螺旋状の圏線を３条めぐらせる。口縁4.9㎝、器高14.3㎝、底径8.2㎝。前庭より出土。９図12は最大径が胴上部にくる器形で、肩部に４条、胴部に１条沈線をめぐらす。底径6.6㎝。前庭より出土。図版24－141は胴部の張りの弱い器形で肩部に圏線を５条めぐらす。撹乱層より出土。図版24－143は甕の口縁部、図版24－144は甕の底部である。143は口唇両端が張り出し、口縁断面が逆三角形を呈する。前庭より出土。144は底部から胴部へゆるやかにたちあがる器形である。内面にはロクロ痕が明瞭にみられる。撹乱層より出土。図版24－145は火取の口縁部～胴部である。直口口縁で、胴部に縦耳をつける。内面にはロクロ痕がみられる。前庭より出土。図版24－146は羽釜の口縁部～胴部である。口縁部は直口で、胴部は丸く張る器形である。鍔は断面が三角形を呈し、口縁直下に圏線が１条施されている。内面にはロクロ痕が明瞭にみられる。前庭より出土。図版24－147は壺の口縁部～底部である。口縁部は逆「L」字状を呈し、肩部が強く張る器形である。肩部に波状文を施し、その上下に圏線を２条ずつめぐらせる。両面にロクロ痕が明瞭に残る。撹乱層より出土。

陶質土器（図版24－148～151，図版25－152～155）
　117点出土し碗、皿、鉢、鍋の蓋、火炉が出土している。図版24－148は筒状の碗で口縁の先端のみ外反させている。口径7.6㎝。撹乱層出土。図版24－149は腰部に丸みを持つ碗底部である。底径4.5㎝。撹乱層出土。図版24－150は平底の皿で底部から逆八の字状に外に開き、立つ。器高2.9㎝、底径4.5㎝。図版24－151は胴部が外に開き口縁は外に折り鍔縁状を成す鉢である。鍔上面に凹線を一条廻らす。前庭出土。図版25－152は内彎の浅鉢で類例資料から柄の付くフライパン状鍋が考えられる。器高3.4㎝、底径16.5㎝。前庭出土。図版25－153は蓋、甲部は笠状を成す。甲縁径22.8㎝。前庭出土。図版25－154は外面に唐草状の陽刻を施す。器種不明である。内面が平坦であることから箱形容器と推察できる。縁部の断面形は四角形。撹乱層出土。図版25－155は六画形のサイズ違いの粘土板を重ね、裏面に直方体の突起が三つ付く、全形は不明である。横長11.5㎝、厚さ2.4㎝。撹乱層出土。

瓦質土器（図版25－156）
　１点が出土し図示するものは、内彎の鉢形の容器である。胴部は球状を成す。火炉が考えられる。撹乱層出土。

銭貨
　現代銭が１点出土した。銭種不明、撹乱層より出土。

金属製品（図版25－157，158）
　鉄製の角釘が７点出土。図版25－157は縦長3.8㎝、横長0.5㎝、厚さ0.4㎝、重量1.7ｇ。墓室より出土。図版25－158は頭部形が逆Ｌ字状になる。縦長3.2㎝、横長0.5㎝、厚さ0.5㎝、重量2.3g。墓室より出土。

碁石（図版25－159）
　蛤製白の碁石が２点出土。

石製品（図版25－160）
　石臼片が出土、環状を成すもので上面縁部に幅３㎝の段状の突起を有する。縦長7.7㎝、横長2.2㎝、重量1927ｇ。撹乱層出土。

円盤状製品（図版26－161～165）

１号から出土した円盤状製品は20点で、詳細は下表の通りである。

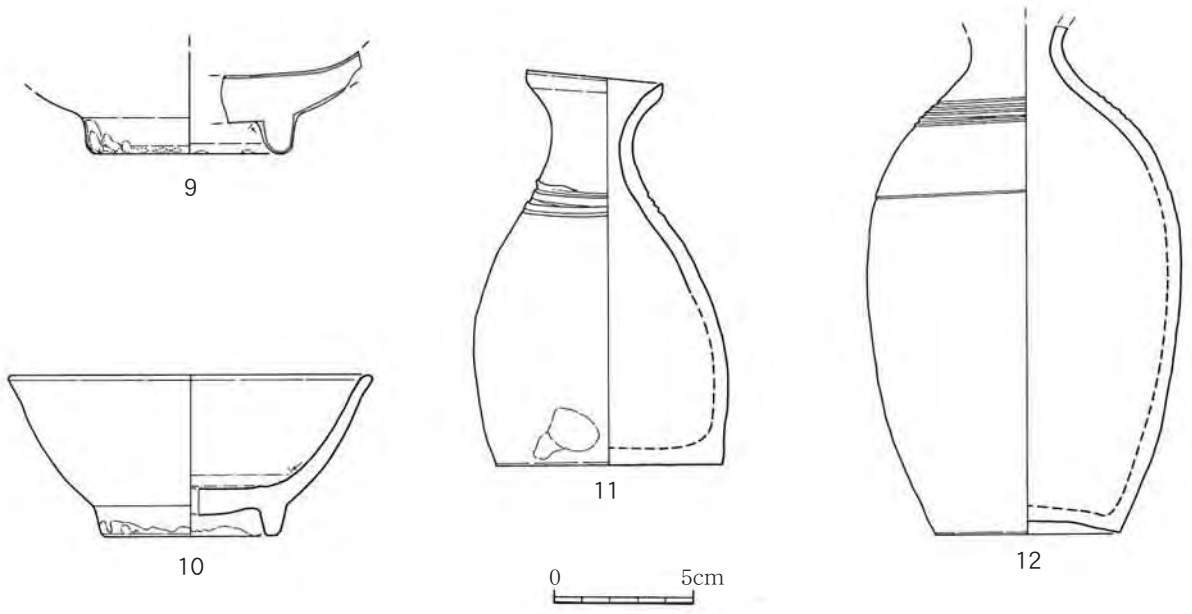
第９表　第１号墓円盤状製品観察表

単位：mm、g

図版番号		状態	長径	短径	厚さ	重量	素材	使用部位	観　察　事　項	出土地
図版26	161	完形	21.2	19.7	4.27	3.0	印判	胴部	円形、一部を除いて剥離は丁寧。表裏両面に紋様が見られる事や断面、器厚から皿又は碗を転用した物と思われる。	前庭
	162	完形	40.9	39.8	12.3	27.3	沖縄産無釉陶器	胴部	円形で裏面からの打割調整が多く、轆轤調整の跡が見られる。この事と器厚から壺又は甕を転用した物と思われる。	前庭
	163	完形	48.4	42.7	12.3	34.0	沖縄産無釉陶器	胴部	ほぼ円形で剥離は粗い。表面に１条の沈線が見られる。裏面の轆轤調整の跡が目立たない事と器厚から鉢を転用した物と思われる。	墓室
	164	完形	54.1	51.3	7.1	50.9	瓦	－	円形で剥離が粗い。裏面に縄目が僅かに見られる。赤瓦を転用。	撹乱
	165	完形	66.9	63.2	14.0	76.9	瓦	－	楕円形。一部で剥離が粗い。裏面に縄目の跡が僅かに見られる。灰瓦を転用。	前庭

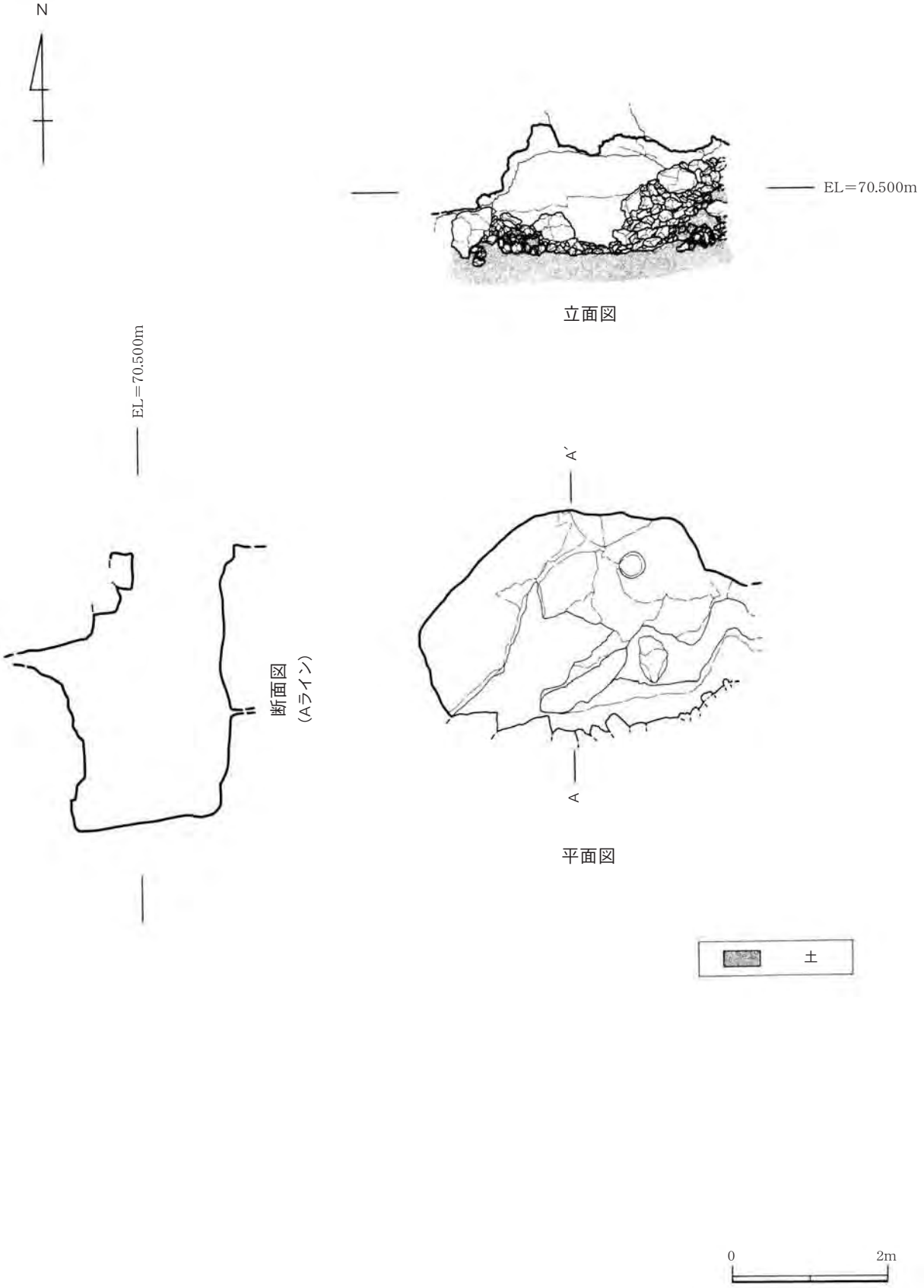
貝製品（図版26－166～168）

ヤコウガイ製匙状製品が３点出土している。すべて前庭より出土。図版26－166は柄部のみの欠損品。細長い長方形を呈する。縁部に敲打痕がみられるため、打ち欠いたあとに研磨して形を整えたと思われる。また、螺肋に加工がみられないため、未製品だと思われる。最大長(7.9)㎝、最大幅(3.3)㎝、重量(37.4)ｇ。図版26－167は残存部位がわずかなため断定はできないが、おそらく柄部の部分にあたる部位である。螺肋に加工がみられないため、未製品だと思われる。最大長(4.8)㎝、最大幅(2.7)㎝、重量(11.1)ｇ。図版26－168は縁部に敲打痕が明瞭に残り、表面は丁寧に研磨されているが、螺肋の一部が削られていることから未製品、もしくは粗製品の可能性が考えられる。最大長(14.8)㎝、最大幅(7.4)㎝、重量(152.4)ｇ。



第９図　第１号墓出土遺物

第３節　第２号墓



第10図　第２号墓実測図

第10表　第２号墓遺構表

挿図番号		第10図
図版番号		図版３
位　　置		X=23,436.000　Y=21,839.000　EL=70.100m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	墓室の平面形は楕円形状となり、東西軸3.9m、南北軸2.9m、墓口の間口は60㎝を測る。墓口東側には高さ約１ｍの野面積みの石積みが見られ、隣の３号墓まで続く。墓口西側にも石積みが見られるが、崩壊が著しく残存高は約20㎝となる。
	工 法	天井、壁は丁寧に加工される。床面奥壁近くは土を入れて平坦に仕上げる。墓口は前述したように石積みで固められているが、明確な輪郭をつくるものではない。
	内部の状況など	墓室床面の表土の厚さは約10㎝で、表土除去後はフィッシャーが幾筋も走る岩盤が露頭した。また地下水が天井から浸み出ており、雨天時には墓室に水が溜まる。また床面には崩落した天井の一部が散乱しているのが確認された。
	時 期	－
備　　考		発掘前の墓室に戦後のものと考えられる酒瓶が散乱していた。

第11表　第２号墓出土状況一覧

遺物／出土地	染付	沖縄産陶器		金属製品	合計
		施釉	無釉		
前　　庭		1			1
入　　口	2	1			3
墓　　室				2	2
床　　直		1			1
前　壕　内			1		1
合　計	2	3	1	2	8

第２号墓出土遺物

蔵骨器（第11図13･図版27－169）

土器。頸部のくびれは弱く、口縁部が内傾する壺。内面の頸部の稜は明確で口唇部は丁寧なナデで平坦に仕上げられている。器壁は外面がアバタ状となるが、内面は丁寧なナデによって仕上げられている。色調は外面が橙色、内面は褐色を呈する。混和材は白色粗砂粒と細砂粒が多量に用いられている。また胎土内には雲母が見られる。撹乱層出土。

白磁（図版27－170）

白磁は１点出土した。型押しの小杯口縁である。胴部は直に立ち口縁で端反り先端が尖る。口唇を露胎させ、釉色は青白色、胎土は白色を呈する。口径4.7㎝。前庭表土出土。

染付（図版27－171, 172）

25点出土し、器種は碗、皿であり、碗は19点、皿は１点出土している。図版27－171は碗底部である。高台の内側から斜めに削り出し先端が角張った形を成す。施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎし畳付の釉も掻き取る。底径7.4㎝。前庭表土出土。小碗は５点出土し、図版27－172は小碗の底部である。高台はやや高め、外側と内刳りの斜めの削りで畳付は三角状を成す。外底と内底を露胎させている。底径5.2㎝。前庭表土出土。171･172共に福建・広東系、生産年代は18世紀前半～中葉に位置付けられる。

本土産陶磁器（図版27－173～178）

肥前系の染付、内野山窯の陶器、薩摩産褐釉陶器や瀬戸・美濃系の色絵が１点と印判手などが出土している。肥前系染付は碗１点が出土した。図版27－173は端反り口縁碗である。外体面に草花文を描き、生産年代は17世紀後半に位置付けられる。口径8.2㎝。撹乱層出土。陶器は７点出土。図版27－174は銅緑釉の内彎する碗である。内野山窯産で、年代は17世紀後半に位置付けられる。前庭表土出土。印判手は４点出土し、図版27－175、176は肥前系型紙刷りの外反碗である。文様構成は175がⅠ類ｂ２Ｂロ、176はⅥ類ｂ８Ｂトに該当する。図版27－177は瀬戸・美濃産銅版転写の小碗で文様はⅠ類である。図版27－178は瀬戸・美濃産、ゴム判の色絵碗である。胴部から口縁に向かい逆八の字状に開く。花の部分を欠くが類例品から梅花の上絵を描くと考えられる。

沖縄産施釉陶器（図版27－179、180，図版28－181～183）

総数98点が出土している。器種別にみると碗、小碗、鉢、壺、鍋、急須などが出土した。図版27－179は鉢の底部である。外面が鉄釉、内面が白釉の掛け分けで、胴部に丸味を持つ器形である。畳付は釉剥ぎ、内底は蛇の目釉剥ぎする。撹乱層より出土。図版27－180，図版28－181は壺で、180は口縁部～胴部である。黒釉単掛けで口唇部のみ釉剥ぎし、口径は広く胴部は張りが弱い。また縦耳を貼付する。撹乱層より出土。181は頚部～底部である。黒釉単掛けで外面腰部まで施釉され、底部は露胎。肩部～胴部が丸く張り出す器形で、成形は雑である。外面に砂が付着し、アバタ状を呈する。前庭より出土。図版28－182は鍋の口縁部～胴部である。内面口縁部から外面腰部まで鉄釉、内面口縁部以下は白釉の掛け分けである。器形は丸型で口縁部を外側に折り曲げ、口縁端部に紐状の取っ手を貼付する。前庭表土より出土。図版28－183は急須の口縁部～胴部である。黒釉単掛けで口縁部のみ釉を掻き取る。口縁部は外反し、器形は楕円形になると思われる。前庭表土より出土。

沖縄産無釉陶器（図版28－184～187）

総数134点が出土している。器種別にみると灯明皿、壺、小壺、鉢、火炉などが出土した。図版28－184は灯明皿の口縁部～底部である。ベタ底で直口口縁。口縁部に煤が付着している。撹乱層より出土。図版28－185は壺の口縁部である。外反口縁で、口唇断面が三角形を呈する。頚は短く、肩部の張りが強い器形である。撹乱層より出土。図版28－186は小壺の口縁部～胴部である。口縁部はゆるやかな「く」の字状を呈し、胴部の張りは弱い。前庭表土より出土。図版28－187は鉢の胴部である。草木文の葉及び蔓の貼り付け文様である。前庭表土より出土。

陶質（図版28－188～190）

総数13点出土した。器種は水鉢、擂鉢、火炉、竈が出土した。図版28－188は口縁が逆八の字状に開き鍔縁状の擂鉢である。口径28.4㎝。前庭表土出土。図版28－189は筒形火炉の底部である。底径10.8㎝。撹乱層出土。図版28－190は側面が舟形状になる。他遺跡の類例資料から火炉と考えられる。撹乱層出土。

瓦質（図版29－191～193）

竈が１点と用途不明が２点、鉢状の容器が２点、不明が６点の計11点が出土している。図版29－191は鉢の底部で平底を呈し目の粗い布目痕を留める。撹乱層出土。図版29－192は箱形の竈で上面から穴が中心に向かい円筒状にのびる。側面の一つに方形状の風を通す窓が設けられ横にスライド式で開け閉めが可能であったと考えられる。上げ底で底部の四つ角に脚を抉り出す。撹乱層出土。図版29－193は器種不明の胴部片である。器面調整は雑で擦痕と思われる条痕が明瞭に残る。外体面に刻線により円に三角を放射状に描く。撹乱層出土。

銭貨

すべて現代銭で、１円が１点、一銭が２点ともに撹乱層より出土した。

金属製品（第11図14・図版29－194，図版29－195～199）

第11図14・図版29－194は銅製笠状の座である。上面観は縁部三カ所に抉りをいれた三つ葉状、中央に円孔を有する。縦長2.5㎝、横長2.4㎝、重量3.0g。前庭表土出土。図版29－195～198鉄製の角釘である。195は縦長(7.1)㎝、横長1.2㎝、厚さ(1.2)㎝、重量27.8g。196は縦長(5.3)㎝、横長1.2㎝、重量16.5g。197は頭部形が逆Ｌ字状になる。縦長3.6㎝、横長(0.3)㎝、厚さ0.7㎝、重量1.3g。撹乱層出土。198は頭部が逆Ｌ字状になり先端近くにくびれを有し他の部品と組み合すものと推察される。縦長3.6㎝、横長(0.3)㎝、厚さ0.4㎝、重量1.3g。前庭表土出土。図版29－199は板状の製品であるが用途など不明である。縦長3.8㎝、横長1.5㎝、厚さ0.2㎝、重量2.2g、孔径0.5㎝。

前庭表土出土。

玉（第11図15・図版30－200）

１点出土した。形状は縦長のそろばん玉形で、色調は黄褐色を呈する。材質は不明。高さ13㎜、孔径2.0㎜、外径8.0㎜、重量0.8ｇ。撹乱層出土。

碁石（図版30－201）

黒の碁石が１個出土、石製である。現代遺物と考えられる。

石製品（図版30－202、203）

方柱状製品が３点出土している。図版30－202は軽石質凝灰岩製、縦長11.4㎝、横長5.6㎝、重量380ｇ。前庭表土層出土。図版30－203は凝灰岩製の方柱状製品である。用途は不明。縦長8.1㎝、横長6.1㎝、重量253.8ｇ。撹乱層出土。

円盤状製品（図版30－204～207）

２号墓から出土した円盤状製品は７点で詳細は下表の通りである。

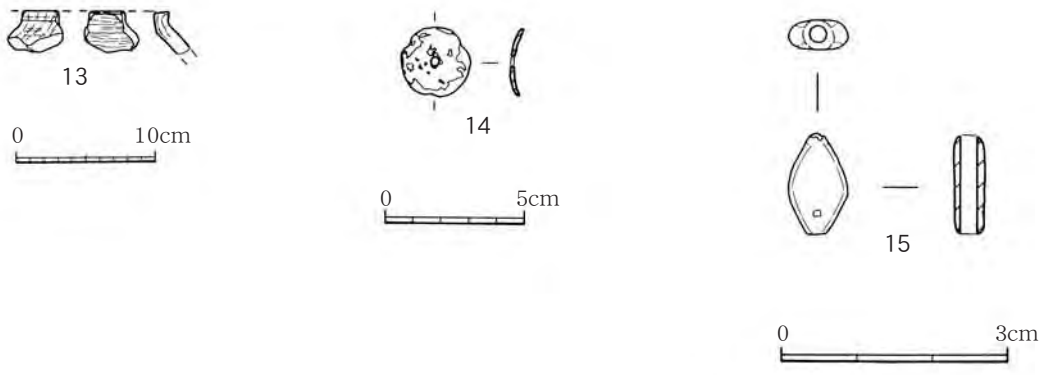
第12表　第２号墓円盤状製品観察表

単位：mm、g

図版番号		状態	長径	短径	厚さ	重量	素材	使用部位	観　察　事　項	出土地
図版30	204	完形	19.9	19.3	3.5	2.2	染付	胴部	円形であるが剥離が粗い為、一部で角が残る。表面に紋様が見られる。	前庭表土
	205	完形	50.6	42.7	12.6	37.3	沖縄産無釉陶器	胴部	楕円形で剥離が粗い。表面に２条の沈線が確認できる事と、器厚が均一ではなく断面も湾曲している事から壺又は甕の頸部付近を加工した物と思われる。	撹乱
	206	完形	44.8	41.8	8.1	17.8	土器	胴部	方形。焼成が良好でしまりが強い。グスク系の土器と思われる。	撹乱
	207	完形	45.0	42.3	16.7	35.9	瓦	－	円形。剥離が粗い為、一部で角が残る。断面が湾曲している事から丸瓦を転用した物と思われる。裏面に縄目の跡有り。一部磨耗。	撹乱

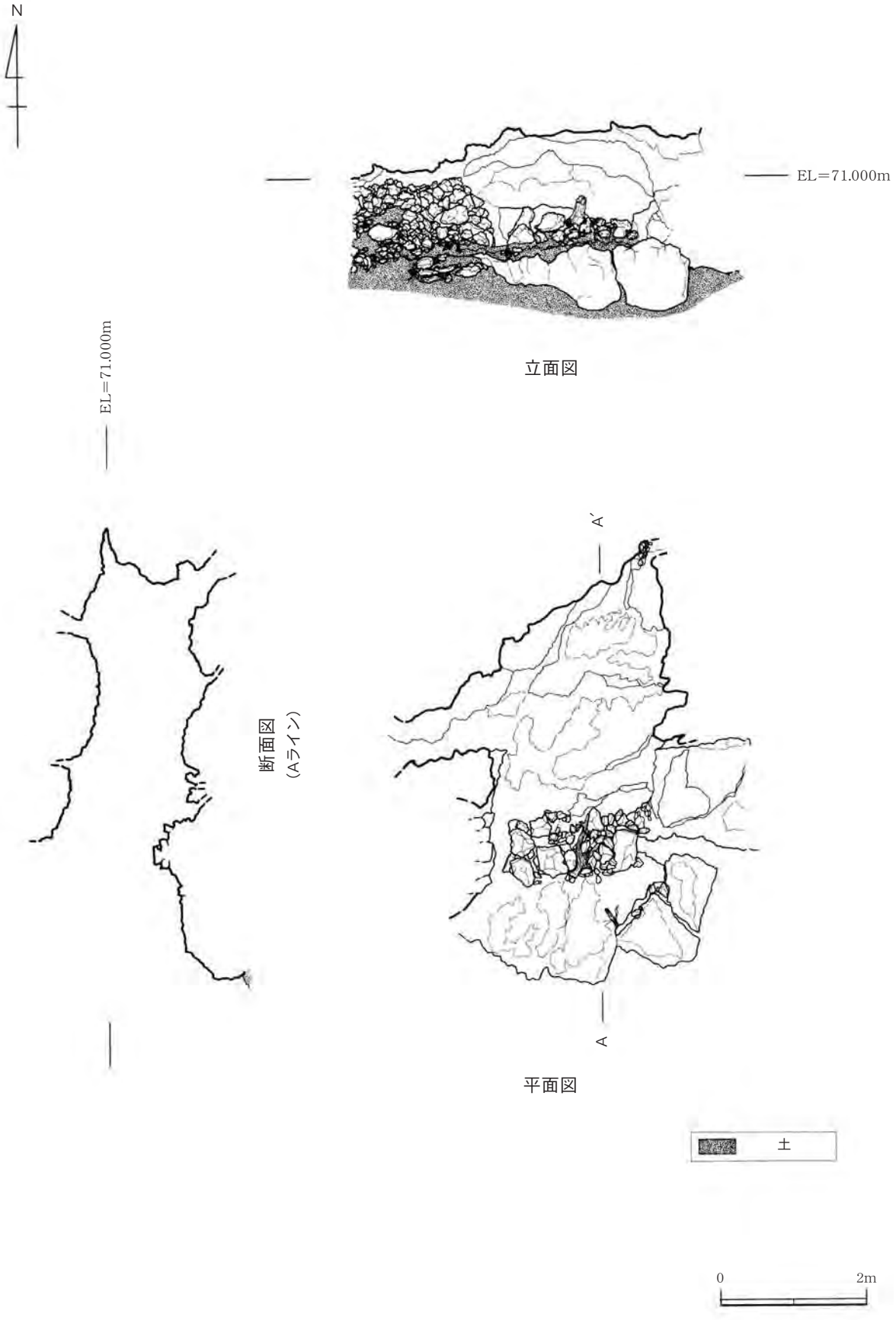
骨製品（図版30－208）

ハブラシが１点出土している。ハブラシ部から頸部までの破片資料である。



第11図　第２号墓出土遺物

第４節　第３号墓



第12図　第３号墓実測図

第13表　第３号墓遺構表

挿図番号		第12図
図版番号		図版３
位　　置		X=23,433.000　Y=21,841.000　EL=70.800m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	墓室は墓口側（南側）の幅は広く、奥壁側（北側）は漸次幅が狭くなる。墓口側の幅は２m、床面から天井までは高さ1.2m となる。墓口には石積みが見られ、幅90㎝、残存高20㎝の石積みが正面に配され、西側には２号墓から続く石積みが２号墓西側壁とに接続する。石積みが切れた部分は墓口となり、間口は20～30㎝となる。
	工 法	壁、天井は粗加工となる。床面は土を約10～15㎝入れて平坦に仕上げる。奥壁と床との接地部分にはフィッシャーが走り、土器、沖縄産陶器が大量に出土する。墓口の石積みは大小の石材が使用されており一部、立石が見られる。
	内部の状況など	奥壁近くのフィッシャー内からは土器壺、沖縄産陶器（喜名焼壺）、中国産、タイ産褐釉陶器、煙管、本土産陶器（薩摩焼壺）が一括して出土している。
	時 期	出土遺物から17世紀か。
備　　考		墓前は石灰岩が露頭し、その上面を平坦に削平されている。石を敷いている部分も確認され、墓道か墓庭がかつて配置されていたことが想定される。土器、沖縄産陶器出土。墓道の可能性を指摘できるが崩落が著しく、詳細は不明。 奥壁近くのフィッシャー内からは遺物が一括で出土したが、フィッシャーは深く、更に奥にも遺物が散乱しているのを確認することができた。

第14表　第３号墓出土状況一覧

遺物／出土地	青磁	白磁	染付	褐釉		その他の輸入陶磁器		本土産陶磁器			沖縄産陶器		陶質土器	土器	銭貨	金属製品	煙管	碁石	石製品	円盤状製品	貝製品	戦争遺物	貝製品	合計
				中国産	タイ産	無釉陶器	水南三彩華滴	磁器	陶器	印判手	施釉	無釉												
前庭レキ敷直上		1	2						1	1	10	6	1											22
墓　　室		4	3	6					33	1	26	54	17	84	1	31	1	1						262
奥　　壁				6					1		4	26	1	26	1									65
奥壁溝内	1	1		5	1		1	1	31		6	46	4	105	1	13	1		1			1	1	220
黄色砂質土																1								1
赤褐色									2			2		5										9
石積周辺		6	8	5	1	1		2	9	7	71	39	22	2	3	1				2	1			180
合　計	1	12	13	22	2	1	1	3	77	9	117	173	45	222	6	46	2	1	1	2	1	1	1	759

第３号墓出土の遺物

蔵骨器（第13図16～23，14図24、25・図版31－209～214，図版32－215～218）

第13図17・図版31－209土器。頸部のくびれは弱く、口縁部が直口する壺口縁資料。口唇部は尖る。器面調整は、概ね内外面共に丁寧なナデ、あるいはヘラナデによって仕上げられている。しかし、外面には一部指圧痕、内面には擦痕が見られる。色調は内外面共に橙色を呈する。混和材は大粒の赤色粒と白色砂粒、貝片が見られる。口径18.8㎝。奥壁出土。

第13図16・図版31－210土器。 頸部のくびれは弱く、口縁部が外反するいかり肩の壺口縁資料。口縁部は僅かに玉縁状となり、口唇部は丸くおさめる。器面調整は外面が丁寧な横ナデが全体的に施され、内面は口縁部近くが斜位のやや粗いナデが、肩部から胴部にかけては粗い横ナデと指圧痕が見られる。色調は内外面共に橙色。混和材は貝細片が多く見られ、白色砂粒、大粒の赤色粒も見られる。また、器壁には気泡の孔が見られる。口径22

cm。奥壁出土。

第13図18・図版31－211土器。立ち上がりは外側に大きく開き、若干丸底状となる壺底部資料。底面中央には内面から欠き穿たれた孔が見られる。器面調整は外面が丁寧なナデで調整痕はほとんど窺うことはできないが、内面は指圧痕、粗い横ナデが明瞭に見て取ることができる。色調は内外面共に赤褐色。混和材は貝細片、大粒の赤色粒、白色粒が見られる。底径14.4cm。奥壁出土。

第13図19・図版31－212土器。立ち上がりは外側に大きく開く平底の底部資料。 底面中央には内面から欠き穿たれた孔が見られる。器面調整は内底面に指圧痕が見られるが雑で凹凸が激しい。外底面の器表はアバタ状となる。色調は内面は橙色、外面は赤橙色となる。混和材は貝細片、大粒の赤色粒が見られる。底径14.2cm。奥壁出土。

第13図20・図版31－213土器。胴部への立ち上がりがやや急な底部資料。器面調整は内外面共に指圧痕が見られ、凹凸が激しい。器壁は内底面がアバタ状となる。色調は内面が橙色、外面が暗赤褐色となる。混和材は白色細砂が多量に見られ、大粒の赤色粒も見られる。底径10.1cm。黄色土層出土。

第13図21・図版31－214中国産褐釉陶器。口縁部は外面が外側に張り出し、内面も内側に大きく張り出す。いかり肩となり胴上部には横位の把手が附されていた痕跡が見られる。内面には横ナデ成形痕が明瞭に残る。外面はにぶい赤褐色の釉が全体に厚く施され、一部紫釉となる。内面は赤褐色の釉が薄く施され、一部は露胎となる。胎土は密で一部に大きい気泡が見られる。口径18.4cm。奥壁出土。

第13図22・図版32－215中国産褐釉陶器。底部は急に立ち上がり、底面は上げ底状となる。内面は轆轤痕が全体に見られ、外面底部近くに溶着物が確認できる。底部は丁寧なナデ調整が見られる。外面には黒褐色の釉が、内面には明黄褐色の釉が施される。内面の釉の剥落は著しい。胎土は密で白・黒色粒子が見られる。底径14.5cm。奥壁出土。

第13図23・図版32－216タイ産褐釉陶器。肩の張る四耳壺。内面は焼き膨れによる凹凸が見られ、横位の篦削り痕が明瞭に残る。また輪積み痕が僅かに確認することができる。釉はにぶい赤褐色で外面のみ施される。胎土は密で大粒の赤、白色粒が見られる。３号奥壁出土。

第14図24、25・図版32－217、218沖縄産無釉陶器。喜名焼の四耳壺で、いずれも奥壁からの出土である。図24図版32－217は器面に泥釉が施釉され、暗茶褐色を呈する。口縁部を折り曲げて肥厚させており、胴部の張りは弱く、肩部に圏線が２条施される。また肩部や胴下部に白土が附着している。図25図版32－218は頚部～胴部である。外面には泥釉が掛けられ、茶褐色を呈する。肩部の張りが強く、圏線が３条めぐらされる。内面には叩き目がみられ、形はいびつで粗雑なつくりである。

青磁（第14図26・図版33－219）

青磁は碗と燭台の３点出土している。第14図26・図版33－219は燭台の脚部と考えられる。内底面は轆轤痕が顕著に残り凹状に窪んでいる。釉色は灰緑色を呈する。撹乱層出土。

白磁（第14図27～30・図版33－220～223）

21点が出土し、碗、小碗、皿、小杯がある。徳化窯系の型押しによるものが多く17世紀～18世紀に位置付けられる。碗は計11点出土した。小碗は口縁から底部まで残すもの１点が出土した。第14図27・図版33－220は小碗である。腰部に丸みを持ち胴は口縁まで直に立ちあがる。口縁は直口、口唇はやや尖る。胎土は白色、釉色は灰白色を呈する。口径7.4cm、器高3.3cm。石積溝周辺出土。第14図28・図版33－221は腰部に丸みを有し、胴部から伸びるように立ち上がる。口縁は外反、口唇は尖る。胎土は白色、釉色は灰白色を呈する。口径8.0cm。石積溝周辺出土。第14図29・図版33－222は小碗底部である。胎土は白色、釉色は薄青白色を呈する。畳付けの釉を掻き取っている。底径5.0cm。撹乱層出土。小杯は１点出土している。第14図30・図版33－223は小杯底部である。高台の畳付けに砂目が認められる。胎土は灰白色、釉色は青灰白色を呈する。底径2.0cm。墓室出土。

染付（第15図34～36・図版33－224～226）

53点出土し器種は碗、皿がある。年代は概ね18世紀代に位置付けられる。碗は35点出土。第15図35・図版33－224は胴部にやや丸みを持ち、開きながら立ち上がり口縁で端反る。口縁の外体面に一条の圏線を廻らし唐草に雨竜を配する。腰部に二条の圏線を挟み簡略した蓮弁文を施文している。口径15.4cm。墓室出土。第15図34・図版33－225は胴部から外側に直線状に開き口縁は直口。外体面に樹木文を施している。口径14.8cm。撹乱層出土。皿は８点出土。第15図36・図版33－226は胴部にやや丸みを持ちながら外に開く。内底はフラット状を成し、畳付けは高台の内と外から三角に削り出し尖る。内面に環状にめぐらす帯状文と「志在書中」を描く。釉は高台

脇まで施釉。口径13.4㎝、器高2.5㎝、底径6.8㎝。撹乱層出土。

褐釉陶器（第14図31～33・図版33－227～229）

第14図33・図版33－227中国産褐釉陶器。底部は急に立ち上がり、底面は上げ底状となる。内面胴部は焼き膨れによる凹凸が見られる。胴下部から底面近くまで雑な横ナデ成形痕が見られる。外面は暗褐色の釉が、内面には明黄褐色の釉が施される。内面の釉の剥落は著しい。胎土は密で、白・黒色粗粒子が多く見られる。大粒の赤色粒は僅かに見られる。底径12.1㎝。奥壁出土。

第14図31・図版33－228中国産褐釉陶器か。肩がややナデ肩となる四耳壺の口縁部。口縁部は大きく外反し、口縁端部は玉縁状となる。両面に轆轤痕が見られる。外面はほぼ無釉、内面は胴上部に明褐色の釉が薄く雑に施される。胎土は密で黒色砂粒が僅かに見られ、気泡は多く見られる。焼成は十分でなく、器表は全体的に明赤褐色となる。口径20.1㎝。奥壁出土。

第14図32・図版33－229中国産褐釉陶器か。やや開き気味に胴部へ移行する壺底部。施釉、胎土、焼成と図31に類似しており、胴最大径も近似値であることからと同一資料と考えられる。底径18.2㎝。奥壁出土。

その他の輸入陶磁器（第15図37～40・図版33－230～233）

中国産色絵２点、瑠璃釉２点、三彩１点、無釉陶器２点が出土している。色絵は小碗１点と皿１点が出土。瑠璃釉は小杯が２点出土している。第15図37、40・図版33－230、231は瑠璃釉の小杯である。図37は胴下部に僅かに丸みを持ち直に立ち上がる。口縁は端反りを成す。外体面に瑠璃釉、内体面に透明釉を掛け分けている。口径9.3㎝。撹乱層出土。図40は小杯底部である。蛇の目高台を呈し内刳りは円筒状に刳りぬいている。高台際まで施釉。底径2.0㎝。撹乱層出土。第15図38・図版33－232は型造りの三彩鳥形水滴である。胴部の上面は平坦、側面観が長方形と台形を重さねた様な箱形を成す。板状の台座に乗せ、前後の側面に鶏頭を象る注ぎ口と尾形の把手をそれぞれ取り付けている。側面の文様は台座と向かい合わせに「コ」の字状に陽刻の縁取りを施し、中に陽刻の波と海馬を描く。胴上部横側面隅に３㎜の円孔を穿つ。釉は緑釉を地色に海馬は黄釉、波と注ぎ口の鶏の鶏冠にそれぞれ紫釉を施釉している。生産年代は16世紀～17世紀に位置付けられる。縦長4.9㎝、横長7.7㎝、厚さ2.4㎝。奥壁溝内出土。無釉陶磁器は宜興窯の茶器類が２点出土している。第15図39・図版33－233は胴部の丸い肩がやや張った内彎の茶器と考えられる。口縁は先端が欠失し詳細は不明であるが、頸部を上に引き上げ立つと考えられる。頸部の付け根に段状の突帯を廻らしている。器色、胎土共に褐色を呈する。石積周辺出土。

本土産陶磁器（第15図41～51，16図52～56・図版33－234、235，図版34，図版35，図版36－256～259）

瀬戸・美濃産の白磁、肥前系の青磁染付、染付、色絵、内野山窯陶器、薩摩産陶器、肥前系、瀬戸・美濃産の印判手が出土している。第15図41・図版33－234は瀬戸・美濃産の白磁小杯である。型押し成形によるもので腰部から胴部にかけ蓮弁状の多角面を有し外に開きながら立ち上がる。口縁は直口を成し口唇を丸く収めている。胎土は白色、釉色は灰白色を呈する。生産年代は明治以降と考えられる。撹乱層出土。第15図42・図版33－235は肥前系の青磁染付小碗底部である。内底面に二条の圏線を配し中に文様を描くものと考えられる。生産年代は17世紀末～18世紀前半に位置付けられる。肥前系染付は、14点が出土し、器種別には碗、皿、蓋物、瓶類が出土している。生産年代は概ね18世紀～19世紀中頃に位置付けられるようである。第15図43・図版34－236は外体面に唐草文を配し口縁内体に四方襷文を廻らす直口口縁碗である。口唇は舌状を示し口禿になる。蓋付きの碗と考えられる。撹乱層出土。第15図44・図版34－237は皿口縁部資料である口縁内体に半梅文を帯状に配する。口径13.4㎝。石積周辺出土。第15図45・図版34－238は見込みに山水文を描く皿底部であり蛇の目凹形高台を持つ。底径９㎝。撹乱層出土。第15図46・図版34－239は有田を製産地とする六角鉢の口縁資料である。文様は面取りされた面ごとに構成され、外体面は口縁部に横位の墨弾きの氷裂文を帯状に配し下段に縦に唐草文、鹿子、格子の順に三列文様を組み合わせ、白線で文様を区画している。見込みは口縁内面に氷烈文に梅花を配した帯文と如意雲を廻らす。生産年代は1800年～1860年代に位置付けられる。石積周辺出土。第15図48・図版34－241は碗の蓋である。頂部はドーム形、環状の摘みを有する。文様は摘みの外面に２条の圏線、甲部表面摘み側から蓮弁文、横位の波文、唐草文を順に描いている。内面に２条の圏線を廻らし中に松竹梅環状文を描く。肥前系。生産年代は18世紀後半に位置付けられる。撹乱層出土。第15図47・図版34－240は蓋の頂部破片である。環状の摘みを有し摘みの外側に施文するが甲縁部を欠き文様は不明。肥前系。生産年代は18世紀後半に位置付けられる。摘み径5.3㎝。撹乱層出土。第15図49・図版34－242はリボン状の摘みを有する蓋物である。甲部の断面形は楕円形、文様は摘み側から２条の圏線、銀杏と草文を挟み１条の圏線を描いている。肥前系。生産年代は1770年～1820年代に位置付けられる。甲縁径9.2㎝、器高(3.0)㎝。撹乱層出土。第15図50・図版34－243は瓶頸部破片である。外

体面に松文を描く。肥前系。生産年代は1630年～1640年代に位置付けられる。奥壁溝内出土。色絵は３点出土した。第15図51・図版34－244は有田産の大香炉である。胴部破片で全体的に判然としないが他の地点で出土した同一破片から胴の丸い口縁が直に立ちあがる形態で底部には脚が付くと考えられる。外体面に呉須描きの雲文と竹梅を絵付けし雲文に黄色の上絵で枠描きする。内体面の底部付近は露胎させ蛇の目状の目痕を残す。生産年代は18世紀前半に位置付けられる。撹乱層出土。巻首図版４参照。本土産陶器は肥前系の碗、皿と薩摩産褐釉陶器の壺が主に出土した。第16図54・図版35－247は口縁が輪花状を成し口唇に鉄釉の覆輪を施す肥前系の皿である。生産年代は19世紀に位置付けられる。奥壁溝内出土。第16図55・図版35－248は内野山窯系の腰折れの皿である。高台は比較的低く削り出し、畳付け内の刳も浅い。内底面は蛇の目釉剥ぎされ外体は腰部付近まで施釉、高台を露胎させている。生産年代は18世紀前半に位置付けられる。底径4.3㎝。撹乱層出土。第16図56・図版35－249は薩摩産の壺底部である。器面が鮫肌状を示し底部は蛇の目高台を成す。胴部に向かいやや開く。生産年代は18世紀末～19世紀中葉に位置付けられる。底径2.6㎝。撹乱層出土。第16図52・図版35－245は薩摩産褐釉陶器の壺である。口縁部は「ク」の字状となり、ややナデ肩となる四耳壺。器壁は全体に４～６㎜と薄く、胴上部には陽圏線が一条見られる。胎土は密で白色の粗粒子が混入している。外面は暗褐色、内面には暗赤灰色の釉を施す。ヤッチノガマ・カンジン原古墓群では甕を天地逆にし蔵骨器として転用している事例がある。これも同様の転用事例の可能性があると考えられる。奥壁出土。第16図53・図版35－246薩摩産褐釉陶器壺。図52と同様器壁が比較的薄い壺で内面に叩きの痕を顕著に残す。生産年代は17世紀前半に位置付けられる。墓室出土。

印判手は肥前系の型紙摺、銅版転写と瀬戸・美濃産の銅版転写やゴム判が出土した。肥前系型紙摺りは総数27点が出土し碗を主体に香炉などが出土した。図版35－250～252、253は口縁が外反する碗である。250の文様はⅡ類３ロに属する。251の文様構成はⅦ類10に該当する。253、252の文様構成はⅥ類８トに該当する。図版35－254は筒形の香炉である。胴部が直に立ち上がり口縁は内側を丸く肥厚させ納める。外体面の文様は口縁部に牡丹の花弁を詰め、横位の波状破線を文様区画にし下段に松竹梅を描く。銅板転写は総数20点が出土し、１点は肥前系、残りは瀬戸・美濃産である。器種は皿、碗であった。図版35－255は肥前系の銅版転写の碗である。外体面に菊の切り花を描いている。内体面は無文である。図版36－256、257は口縁が直口する皿である。256の文様はⅤ類に該当する。257はⅩⅤ類に属する。いずれも錆釉の覆輪を施している。ゴム判は14点が出土した。図版36－258は口縁が直口する碗で文様はⅣ類１。図版36－259は小碗でⅣ類ａに該当する。

沖縄産施釉陶器（第16図57～62，17図63、64・図版36－260～268）

総数196点が出土している。器種別にみると碗、鉢、壺、小壺、瓶、蓋、火取などが出土した。第16図57～59・図版36－260～262は碗である。図57・図版36－260は口縁部、図59・図版36－261は口縁部～底部でいずれも白釉単掛け、外反口縁である。図57は外面に草文、内面に点と半円の文様を施す。石積周辺出土。図59は外面に呉須で草花文を施す。奥壁溝より出土。図58・図版36－262は底部である。内面に鉄釉と呉須で文様を施す。59、58はともに腰部が丸味を持つ器形で畳付には白土を塗布、内底は蛇の目釉剥ぎする。前庭表土より出土。第17図63、64・図版36－264、263は鉢である。図63・図版36－263は口縁部～底部、図64・図版36－264は口縁部～胴部である。ともに外面に鉄釉、内面に白釉の掛け分けである。63は口縁が逆「L」字状に外反し、畳付には白土が剥がれた痕が見られる。内底は蛇の目釉剥ぎする。撹乱層より出土。64は内彎口縁で断面は舌状を呈する。石積周辺より出土。図版36－265は壺の胴部である。鉄釉単掛けで一部は茶褐色を呈する。外面肩部に縦耳を貼付。石積周辺より出土。第16図60・図版36－266は一般に「ビンシー」と呼ばれる瓶の胴部である。外面は鉄釉、内面は無釉で、口は欠損している。胴部が下ぶくれしており、脚の付け根からみて脚部はハの字状に開くと思われる。奥壁より出土。第16図61・図版36－267は蓋の撮み～底部である。急須の蓋だと思われる。外面は白釉、脚及び内面は白化粧のみである。庇には圏線を１条めぐらせる。前庭表土より出土。第16図62・図版36－268は火炉の胴部である。黒釉単掛けで内面の一部にも釉が掛かっている。横耳を貼付。前庭表土より出土。

沖縄産無釉陶器（第17図65～70，18図71～74・図版37，図版38－279、280）

総数99点が出土している。器種別にみると灯明皿、壺、甕、鉢、擂鉢などが出土した。第17図65－66・図版37－269、270は灯明皿の口縁部～底部、図版37－271は底部である。図65、66はベタ底の直口口縁で、66は口縁に煤が附着し、胴部半ばに圏線が１条めぐらされる。65は口唇が薄くつくられている。いずれも前庭表土より出土。図版37－271は底部～胴部で高台を持ち、胴部に緩やかな丸味を持つ器形になると思われる。前庭表土出土。第17図71～74・図版37－272～275は喜名焼の壺である。第18図71・図版37－272は三耳壺で、器面には泥釉が掛けられ、外面は茶褐色、内面は黒色を呈する。内面胴部には叩き痕とナデ消しがみられるが、頸部には輪積み痕が明瞭に残る。口縁部は肥厚し胴部の張りは弱く、肩部に圏線を２条めぐらせる。臓骨器の可能性も考えられる。

奥壁より出土。第18図72・図版37－273は口縁部～胴部である。第14図24と同様に泥釉を施釉し、口縁部を折り曲げて肥厚させている。肩部の張りは強く、横耳を貼り付ける。奥壁より出土。第18図73・図版37－274は胴部である。器面に泥釉が施され、暗茶褐色を呈する。印が押されているが、文字が摩滅して判読不能。奥壁より出土。第18図74・図版37－275は底部である。外面には泥釉が掛けられ、赤褐色を呈す。器面がたわんでいるため内底が大きく内側に盛り上がり、胴部もいびつで粗雑なつくりである。また胴部の一部を人工的に打ち割っているため、蔵骨器の可能性がある。外底には釜道具の「馬の爪」（読谷村教育委員会　2003）と呼ばれる粘土塊が熔着しており、貝目痕もみられる。奥壁より出土。第17図70・図版37－277、276は甕の口縁部である。図70は口縁部が丸く肥厚する。撹乱層より出土。276は口唇部両端が強く張り出し、口縁断面は逆三角形を呈する。奥壁より出土。第17図69・図版37－278は底部で、底部から胴部にかけてゆるやかにたちあがる。器面全体にアバタがみられる。撹乱層より出土。第17図67、68・図版38－279、280は擂鉢の口縁部である。図67・図版38－279は口縁部～底部で、底部から胴部へゆるやかにたちあがる器形である。図68・図版38－280は口縁部～胴部で、ともに口縁部が逆「L」字状を呈し、口唇部の幅が広い。口縁部上面には圏線が１条めぐらされ、櫛目は密に施し、口縁部上端のみナデ消す。外面にロクロ痕がみられる。図68は石積周辺、67は撹乱層より出土。

陶質（図版38－281～283）

100点出土し鉢、鍋、火炉などが出土している。図版38－281は外に逆八の字状に開く鉢の底部で平底である。底径9.4㎝。撹乱層出土。図版38－282は胴部に丸味を持ち頸部まで内彎、口縁は断面形が「く」の字状に外側へ折り曲げる。口縁外面に紐状把手を二カ所に貼付。鍋口縁である。口径20㎝。石積周辺出土。図版38－283は胴部が丸い内彎の火炉である。高台は外開きになる。半円の把手が二カ所に貼付、把手の中央に円孔を穿つ。底径7.7㎝。前庭表土出土。

瓦質（図版38－284）

１点が出土。口縁を欠失した桶状の形態を示めすものである。外体面上部に陰刻の網代文、胴下部に横位の陰刻線を三条廻らし欄下に瘤状の突起を数箇所に貼付する。底部は蛇の目高台を成す。用途は火炉類かと考えられるが類例が見あたらず不明である。蔵骨器として使用した可能性も排除できない。

銭貨（第18図75～79・図版39－285～289）

有文銭が１点、無文銭が３点、輪銭が１点、現代銭が２点出土している。第18図75・図版39－285は３分の１が破損しているが、残存する文字から寛永通寶になると思われる。時代は江戸、初鋳年代は1636～1659（Ⅰ期）か1697～1747、1767～1781（Ⅲ期）になると思われる。字体は楷書。銭径24㎜、孔径５㎜、銭厚1.4㎜、重量2.4ｇ。石積周辺より出土。第18図76～78・図版39－286～288は無文銭である。図76、77は完形品である。図76・図版39－286は銭径17㎜、孔径８㎜、銭厚1.2㎜、重量0.6ｇ。奥壁溝内より出土。図77・図版39－287は銭径16㎜、孔径８㎜、銭厚0.8㎜、重量0.7ｇ。奥壁より出土。図78・図版39－288は２分の１が破損している。銭径19㎜、孔径12㎜、銭厚1.1㎜、重量（１）ｇ。撹乱層より出土。図79・図版39－289は輪銭である。銭径8.2㎜、孔径５㎜、銭厚0.4ｇ、重量0.06ｇ。赤褐色骨まじり土より出土。現代銭は銭種不明が１点、１ドルが１点石積周辺より出土。

金属製品（第18図80～84，19図85、86・図版39－290～302）

第18図83・図版39－290は鳩目の様な止め具でつなぐ製品であるが詳細は不明。鉄製、縦長（２）㎝、横長(1.2)㎝、重量(1.2)g。墓室出土。第18図84・図版39－291は先端が二つに分かれる鋲である。縦長1.83㎝、頭部径0.3㎝、重量0.4g。墓室出土。第18図80・図版39－292は銅製の竿部を欠損した６弁の花簪である。花の中央は円形に窪ませ中に魚々子を６個刻印、花は立体的な作りで厚みを持つ。首部は断面形が六角を成す。男性の本簪である。縦長(3.4)㎝、横長2.4㎝、重量15.2ｇ。前庭表土出土。第18図81・図版39－293は男性用の副簪である。縦長15㎝、厚さ0.25㎝、重量4.0g。石積周辺出土。第19図85・図版39－294は糸切りはさみである。縦10.7㎝、横0.4㎝、重量(11.1)g、厚さ0.56㎝。墓室出土。図版39－295～299は頭部形が逆Ｌ字状になる鉄製角釘である。295は縦長2.77㎝、横長0.34㎝、重量0.9ｇ。296は縦長（３）㎝、横長0.4㎝、重量1.0g。墓室出土。297は縦長4.7㎝、横長0.4㎝、重量2.4g。墓室出土。298は縦長8.0㎝、横長1.0㎝、厚さ0.7㎝、重量13.5g。前庭表土出土。299は縦長5.0㎝、横長(0.8)㎝、重量6.1g。前庭表土出土。第18図82・図版39－300は鉄製刀子である。縦長(8.1)㎝、刃長1.6㎝、柄部長0.5㎝、厚さ0.7㎝、重量(18.3)g。前庭表土層出土。第19図86・図版39－301は頭部形が三角の鋲である。縦長(8.2)㎝、横長0.4㎝、厚さ0.6㎝、重量27.8g。前庭表土出土。図版39－302は銅製の下ろし金。縦長20.7㎝、横長9.4㎝、重量141.6g。前庭表土出土。302は戦時中の遺物と考えられる。

煙管（第19図87、88・図版39－303、304）

２点出土している。第19図88・図版39－303は沖縄産施釉陶器の雁首である。八角形に成形される。火皿径1.2㎝、長さ4.2㎝、重量10.5ｇ。墓室内出土。第19図87・図版39－304は青銅製の吸口である。長さ5.8㎝、重量4.3ｇ。奥壁出土。

碁石（図版39－305）

黒の碁石が１個出土、石製である。現代遺物と考えられる。

石製品（第19図89・図版40－306）

硯が１点出土した。形態が直方体を成す硯である。上面に雲形の海部を設け陸部と周縁に線状の陰刻を廻らす、小型な硯である。縦長7.4㎝、横長4.9㎝、厚1.6㎝、重量141.0ｇ。奥壁溝内出土。

円盤状製品（図版40－307～310）

３号墓から出土した円盤状製品は11点で詳細は下表の通りである。

第15表　第３号墓円盤状製品観察表

単位：mm、g

図版番号		状態	長径	短径	厚さ	重量	素材	使用部位	観　察　事　項	出土地
図版40	307	完形	29.2	25.5	4.78	5.4	染付	胴部	円形で剥離が粗く、裏面からの打割調整が多い。裏面に雷文帯が見られる事と断面、器厚から皿を転用した物と思われる。	撹乱
	308	完形	27.2	24.6	6.07	5.0	染付	胴部	円形で剥離が粗く一部角が残る。表裏両面に紋様がある事と断面、器厚から皿又は碗を転用した物と思われる。	撹乱
	309	完形	55.2	50.6	13.6	54.9	褐釉	胴部	円形、剥離が粗く一部に角が残る。器厚から厚手の褐釉陶器を加工した物と思われる。	撹乱
	310	完形	41.8	37.1	13.2	21.7	瓦	－	円形で剥離は粗く、一部磨耗している。表裏両面からの打割調整が多く見られる。裏面に縄目の跡有り。	撹乱

貝製品（第19図90・図版40－311）

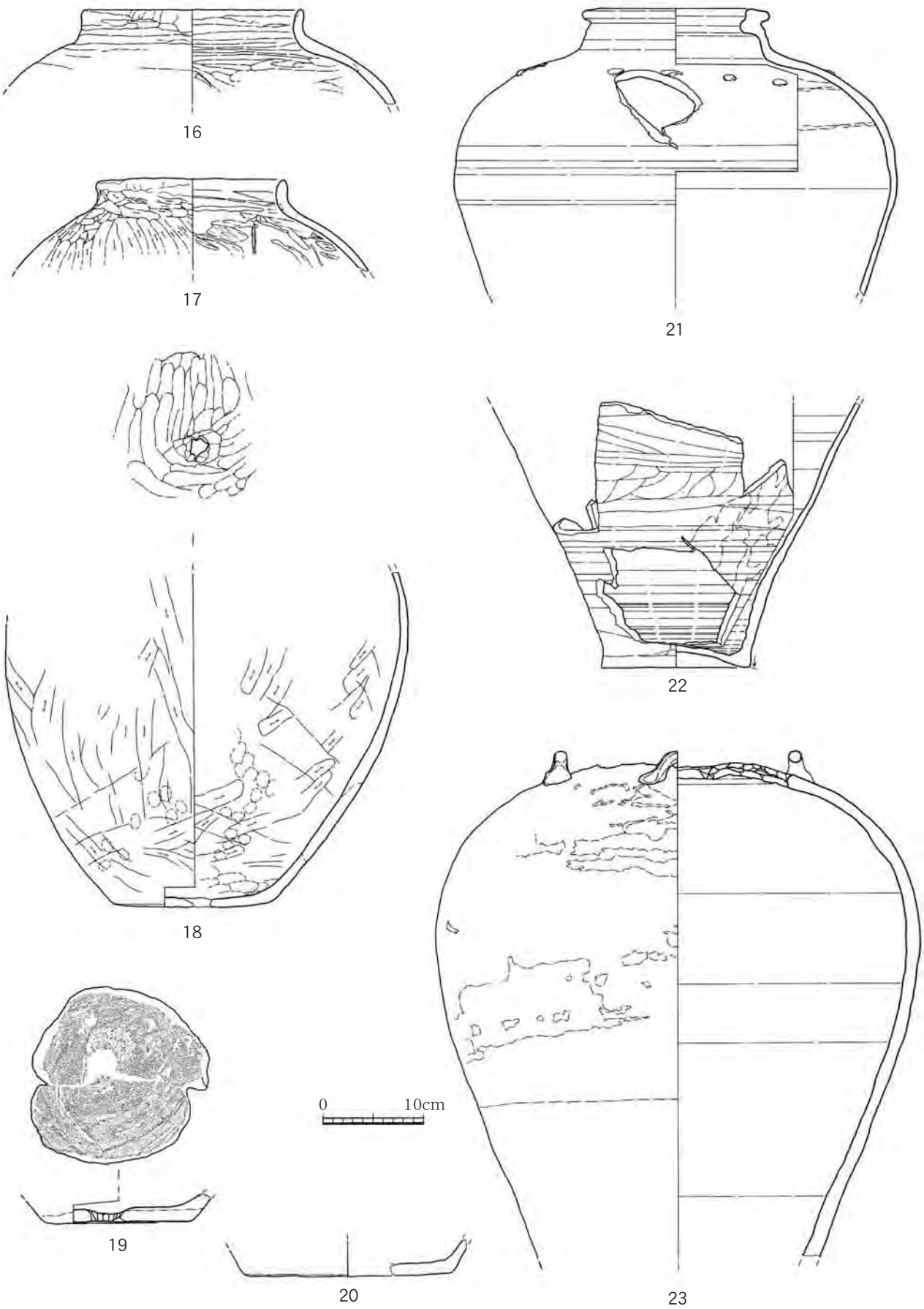
ヤコウガイ製匙状製品が１点出土している。外面の体層、内面の表皮の剥離がともに不十分であるため、未製品だと思われる。縁部の一部に敲打痕がみられる。最大長(6.2)㎝、最大幅(6.9)㎝、重量(30)ｇ。石積周辺出土。

骨製品（第19図91・図版40－312）

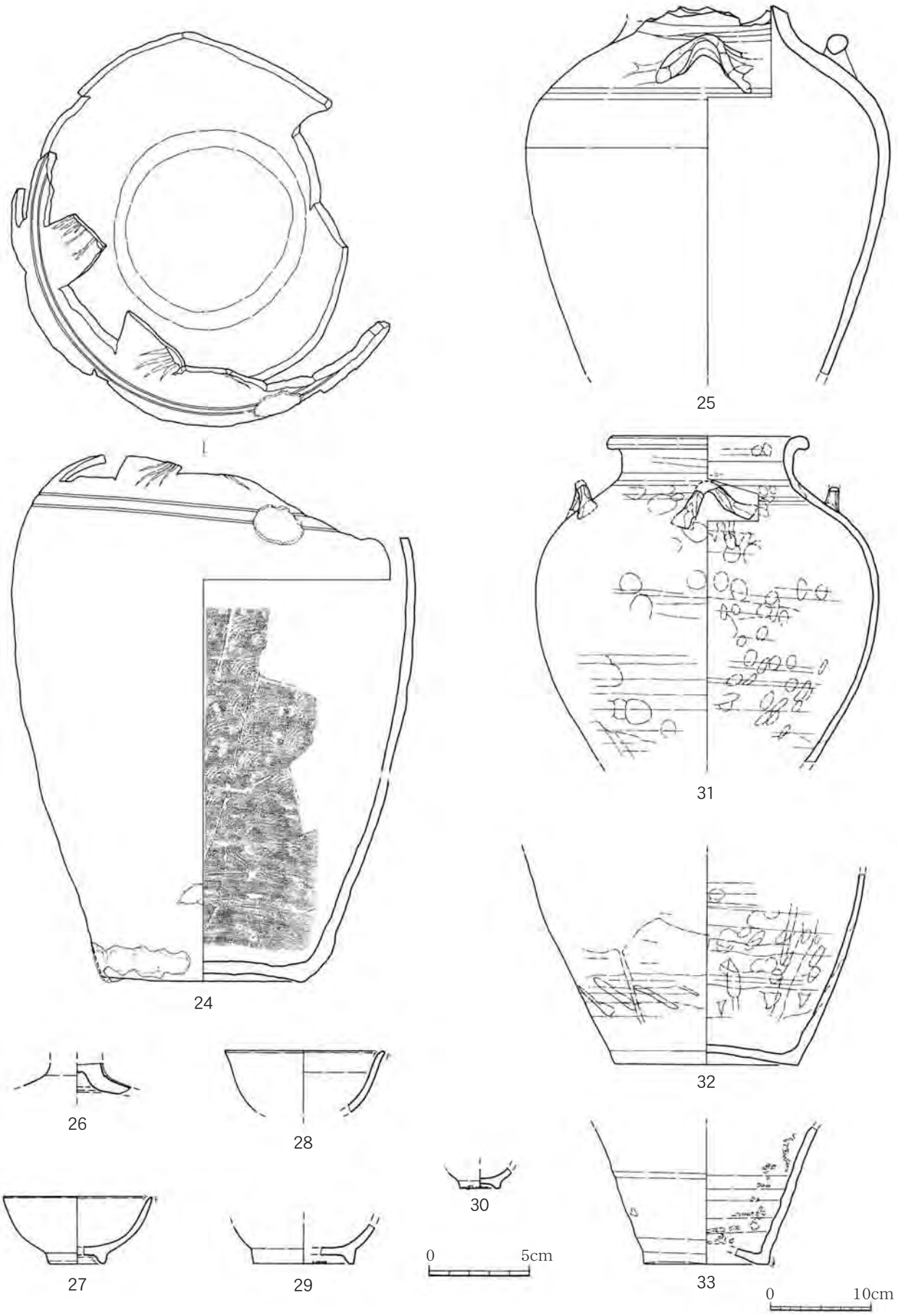
１点出土した。柄部のみ残すハブラシである。柄部の上面は扁平状をなし断面形がかまぼこ状を呈する。先端は尖がり柄尻に円孔を穿つ。縦長8.0㎝、横長1.1㎝、厚さ0.5㎝、重量5.3ｇ。奥壁溝出土。

戦争遺物（図版40－313）

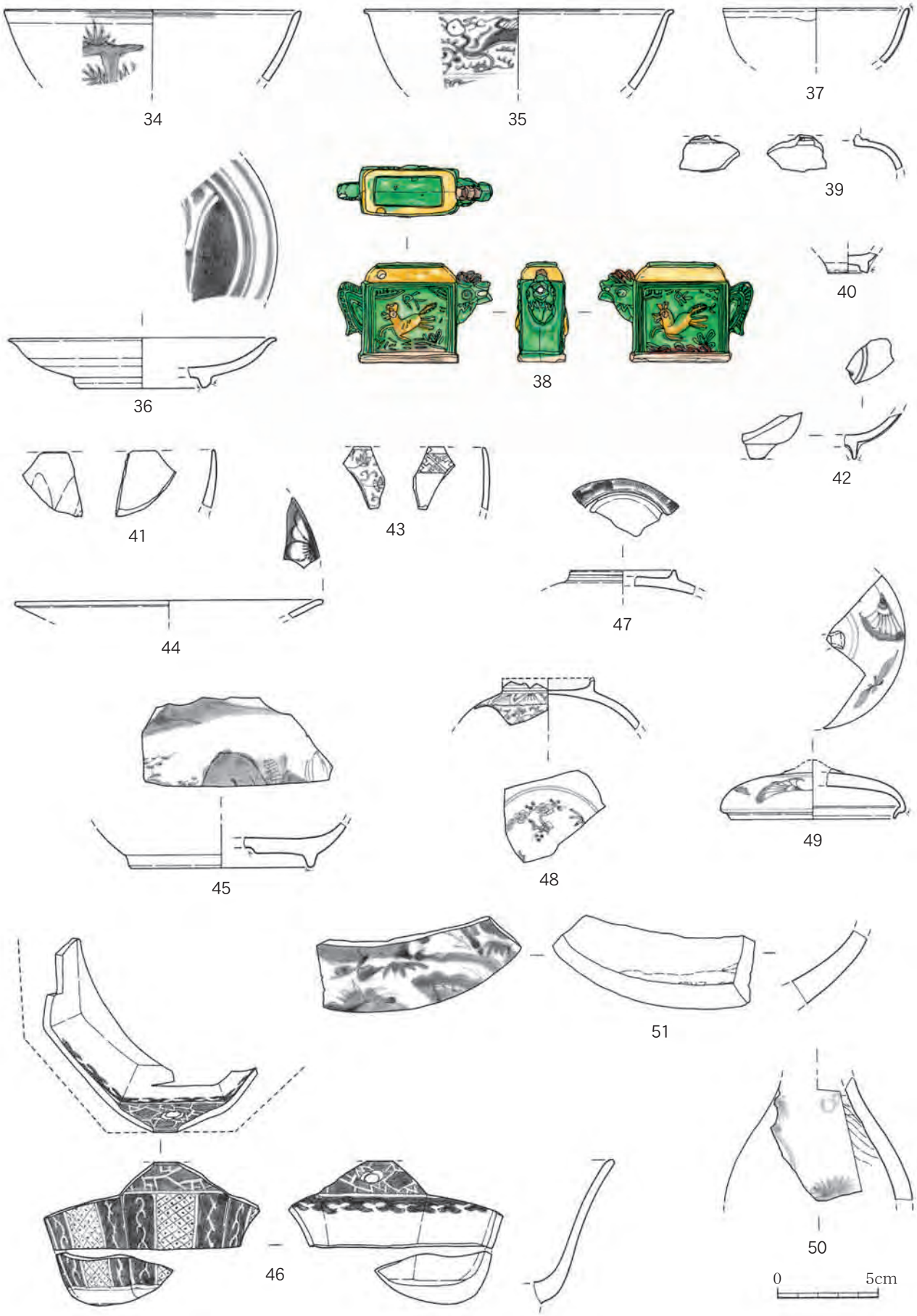
勲章が出土している。「五三の桐」と呼ばれる形状で桐の葉を模しており材質は銀、裏面に「勲功旌章」の文字が手彫りで彫られている。この事から「勲八等白色桐葉章」の勲章であると思われる。奥壁溝出土。



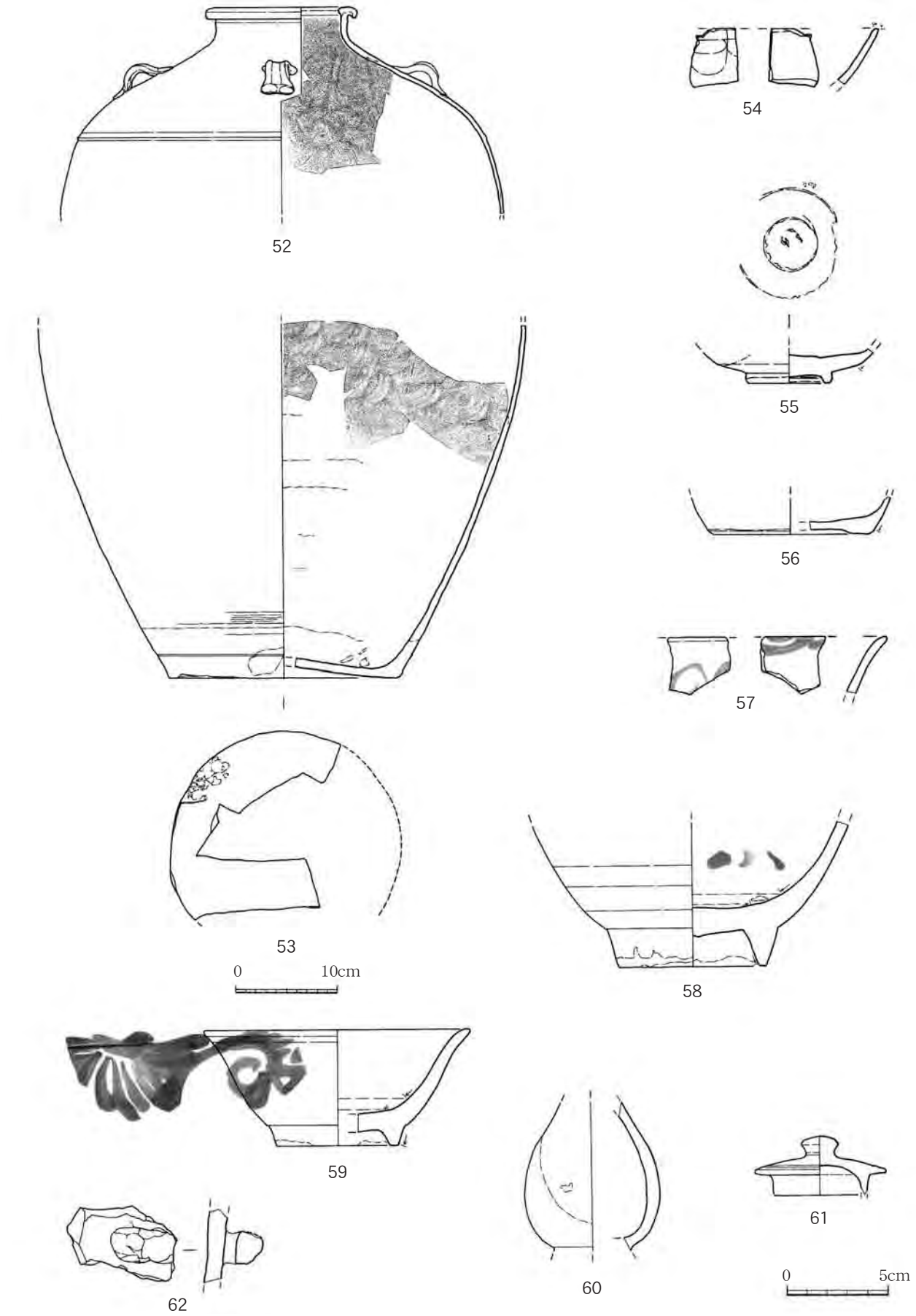
第13図　第３号墓出土遺物（１）



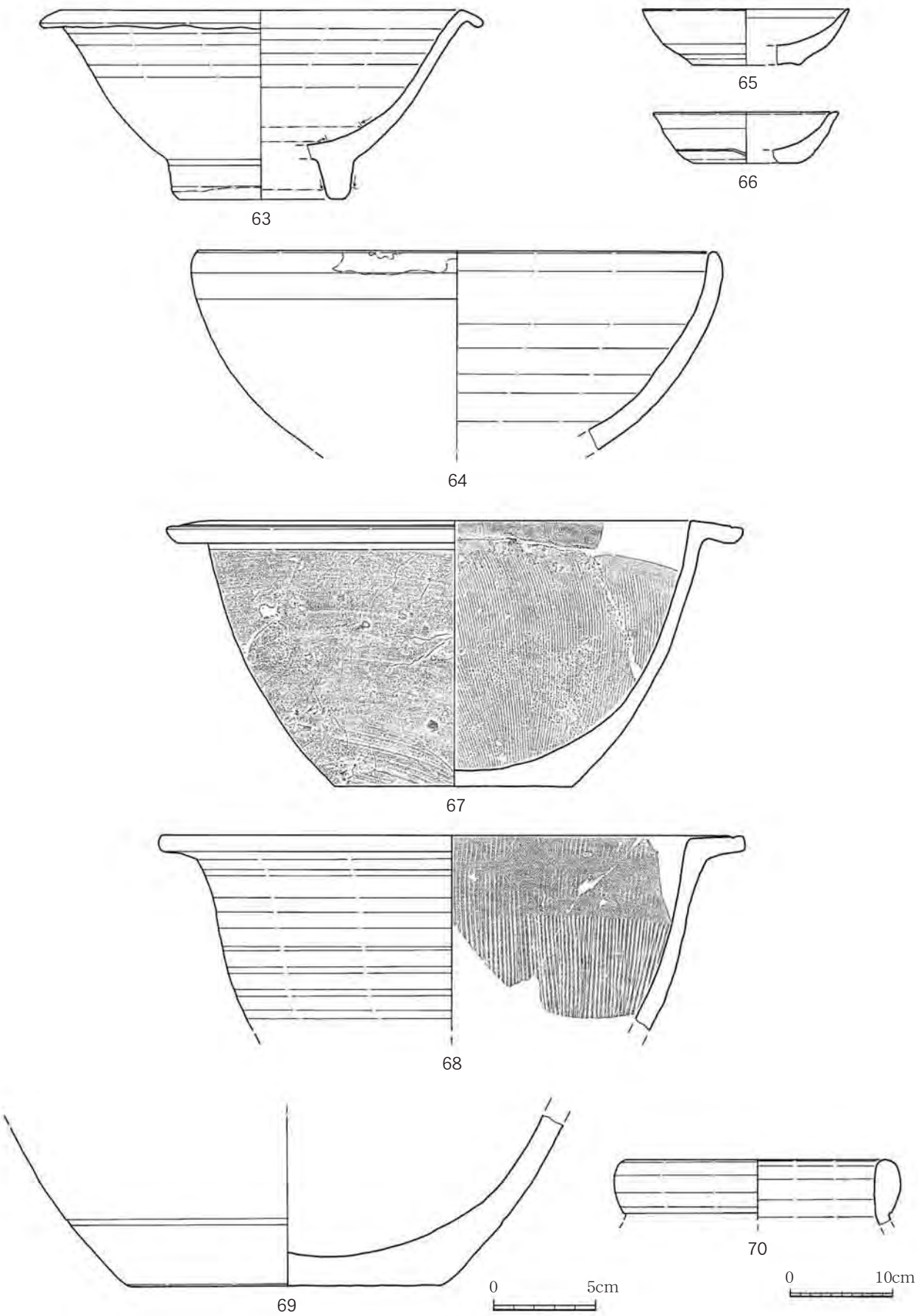
第14図　第３号墓出土遺物（２）



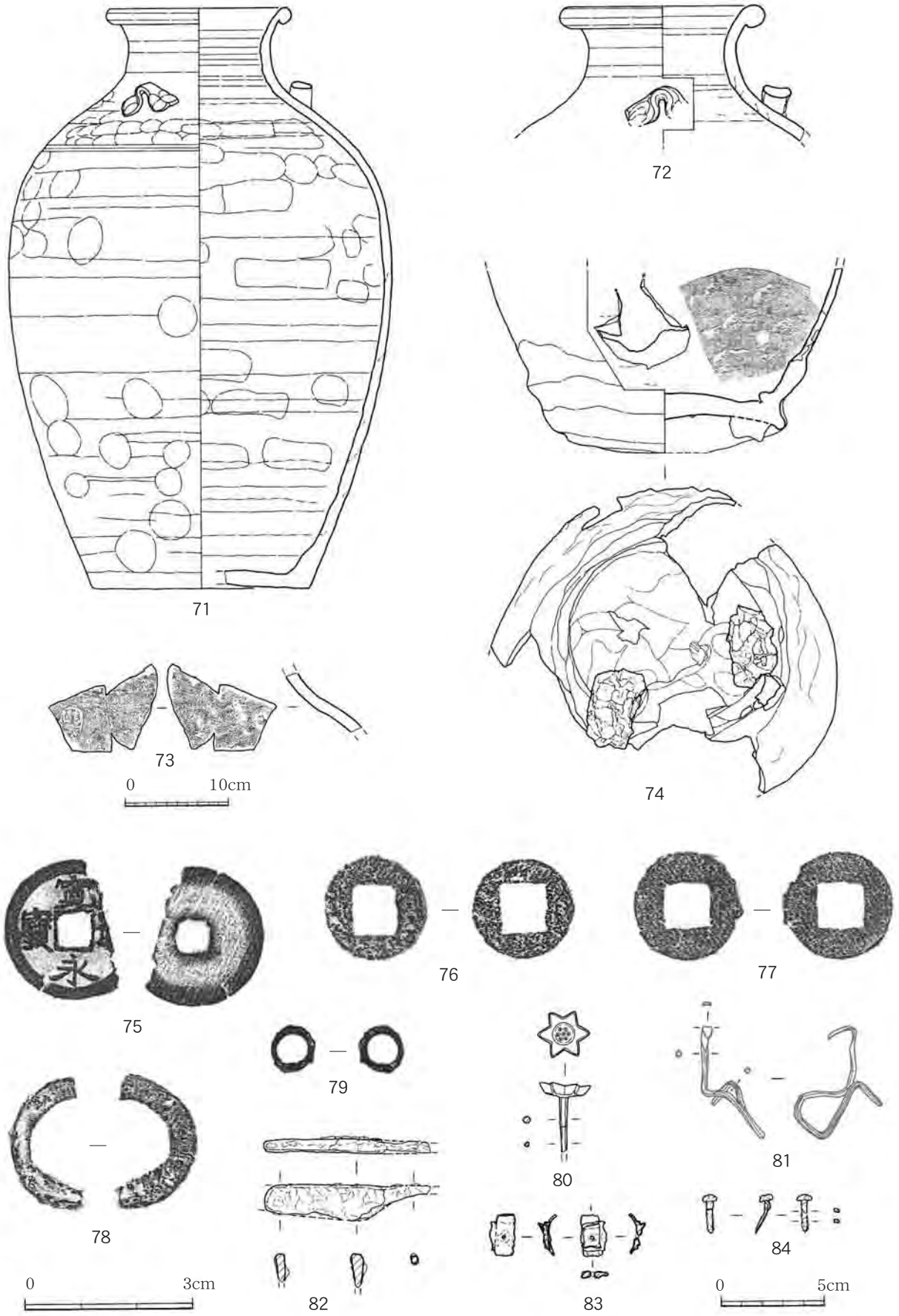
第15図　第３号墓出土遺物（３）



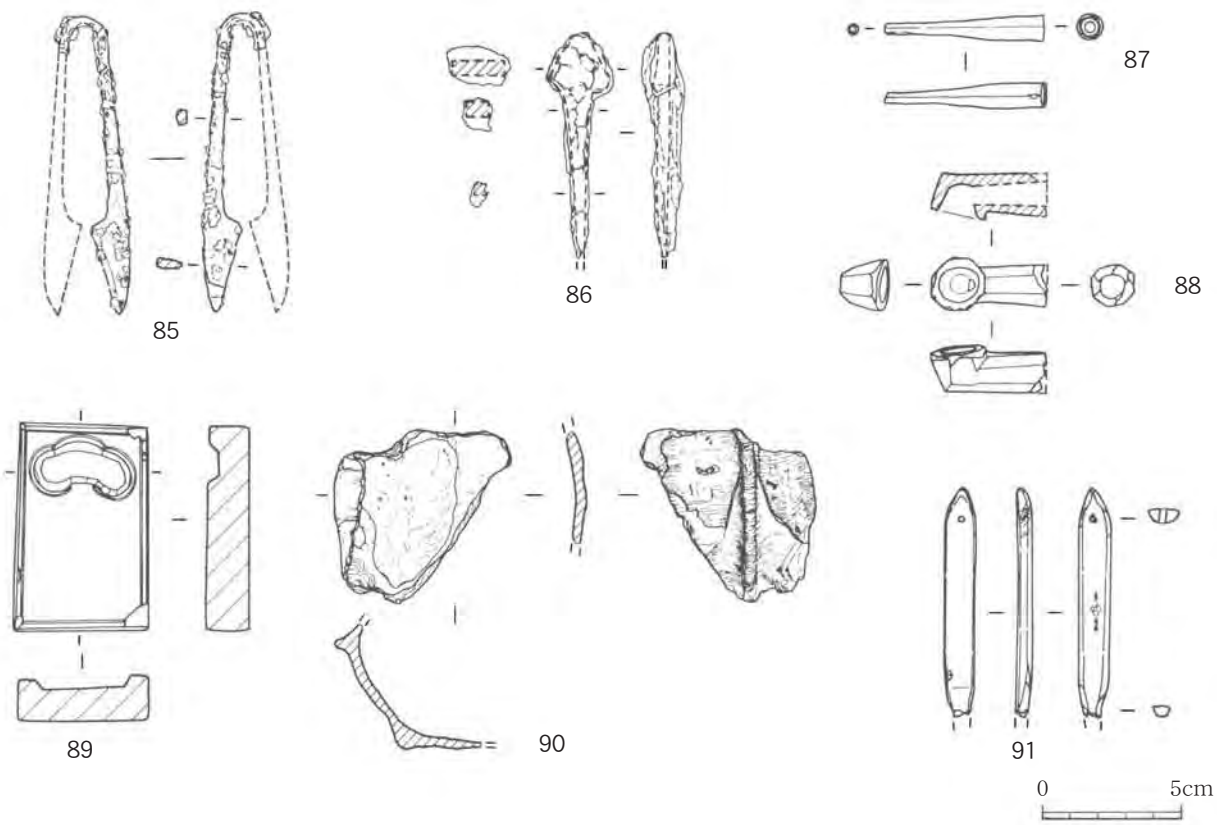
第16図　第３号墓出土遺物（４）



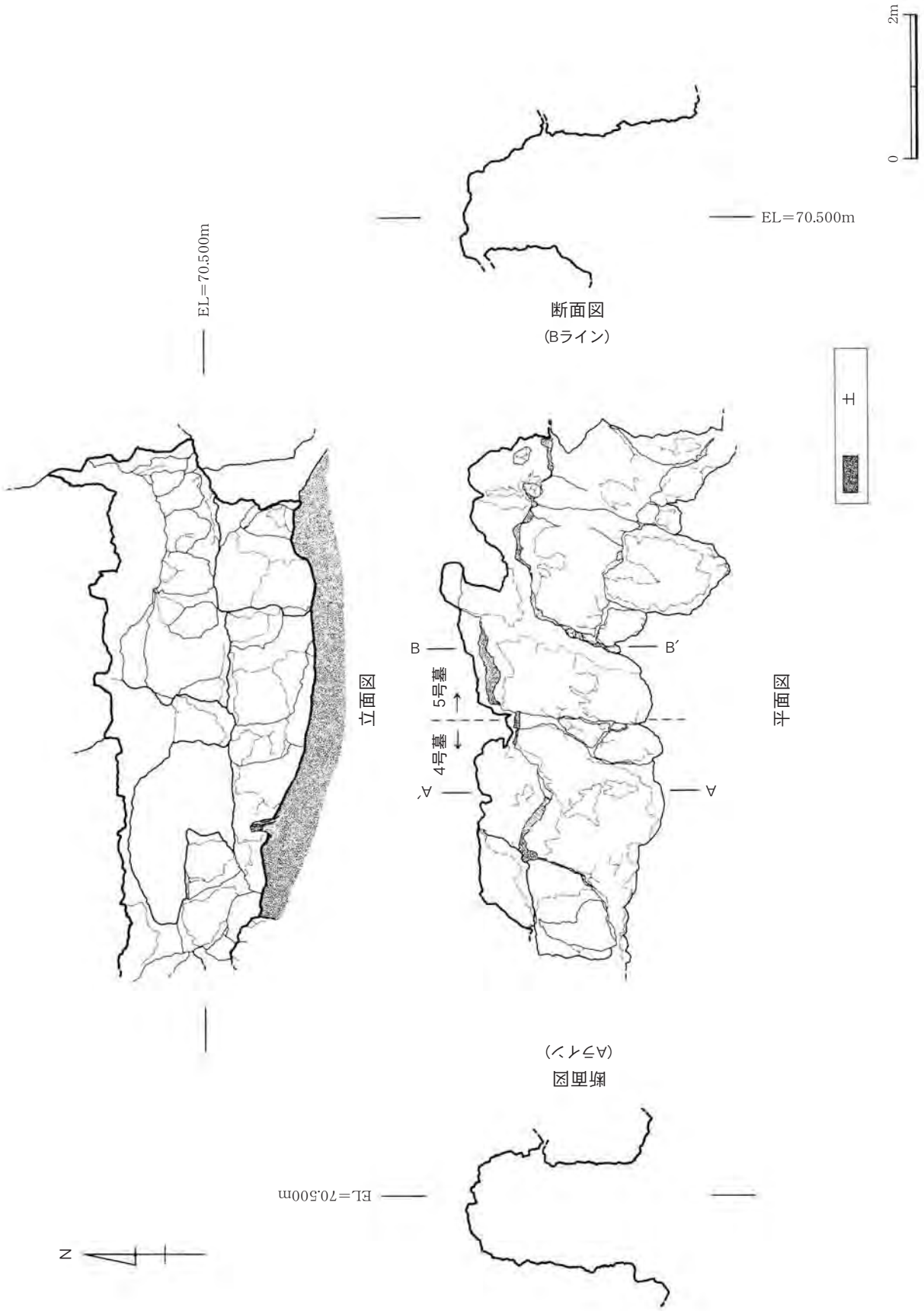
第17図　第３号墓出土遺物（５）



第18図　第３号墓出土遺物（６）



第19図　第３号墓出土遺物（７）



第20図　第４・５号墓実測図

第16表　第４号墓遺構表

挿図番号		第20図
図版番号		図版３
位　　置		X=23,429.000　Y=21,843.000　EL=70.400m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	東西3.2m、南北2.1～2.5m、墓室の平面形は略方形となる。床面から天井までの高さは1.5m。５号墓との間に40㎝の壁が僅かに見られる。
	工 法	天井、壁、床面は粗く加工されており、床面は土を入れて平坦に仕上げる。床土の厚さは５～10㎝と薄く、壁等に加工痕は確認されない。
	内部の状況など	床面はフィッシャーが東西に走り、５号墓へと続く。墓口付近は崩落が著しい。
	時 期	－
備　　考		墓前西側には３号墓から続く上面を平坦に仕上げた石灰岩が露頭している。崩落が著しい。 銭貨が出土しているが、すべて現代銭で、一銭が１点、銭種不明が１点ともに４号撹乱層より出土した。

第17表　第５号墓遺構表

挿図番号		第20図
図版番号		図版４
位　　置		X=23,426.000　Y=21,844.000　EL=70.400m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	東西3.9m、南北2.1～3.1m、墓室の平面形は崩落が著しいが略方形と想定される。床面から天井までの高さは1.1～1.8m。
	工 法	４号墓とほぼ同様であるが天井は平坦に加工している意識が乏しく、東側に向かって漸次低くなる。
	内部の状況など	天井、壁の崩落は著しく、フィッシャーも天井や壁の所々に見ることができる。墓口近くからブタの下顎骨が１点出土している。床面直上からは青磁の小片と染付胴下部片が各１点出土している。染付は略化された蓮弁文が見られることから、胴部に草花文を配した高台が高いタイプの碗と思われる。他に沖縄産無釉陶器が９点、同施釉陶器が５点確認されている。
	時 期	染付の年代から18世紀か。
備　　考		墓前の撹乱層からもブタの下顎骨が１点出土。

第18表　第５号墓出土状況一覧

遺物／出土地	染　付	本土産陶磁器		沖縄産陶器		土　器	銭　貨	金属製品	合　計
		陶　器	印判手	施　釉	無　釉				
墓　室	1	21	1	2	1	5	5	1	37
床　直	2	1	3	6	10		6		28
合　計	3	22	4	8	11	5	11	1	65

第５号墓出土遺物

染付

碗が１点出土している。生産年代は18世紀代に位置付けられる。

本土産陶磁器（第21図92･図版40－314､315）

薩摩産の壺１点と瀬戸･美濃産の銅版転写の皿６点が出土している。第21図92図版40－314は薩摩産褐釉陶器壺の底部である。薄手の平底で内面に積み痕と叩き痕を顕著に残す。墓室出土。図版40－315は銅版転写の直口皿で文様はＸⅡ類に該当する。

沖縄産施釉陶器（図版40－316～318）

総数８点が出土している。器種別にみると碗・鉢・急須などが出土した。図版40－316は碗の口縁部～底部である。白釉単掛けで口縁部は外反し、胴部は丸味を持つ器形である。内底は蛇の目釉剥ぎ、外底は畳付のみ釉剥ぎする。墓室より出土。図版40－317は鉢の口縁部～胴部である。外面は鉄釉、内面は白釉の掛け分けで、口縁部は逆「L」字状に外反する。胴部に丸味を持つ器形である。図版40－318は急須の口縁部である。大きさは小型で器形は丸型を呈する。白釉単掛けで文様は線彫りと呉須を組み合わせている。いずれも床直より出土。

沖縄産無釉陶器（図版40－319）

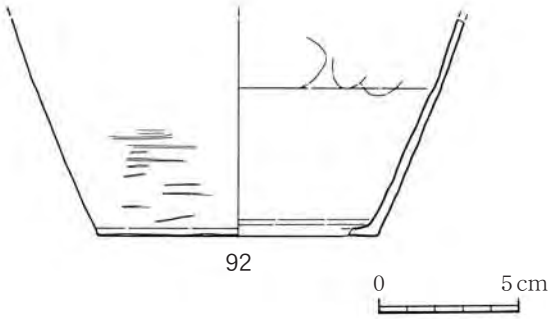
総数11点が出土している。図示したのは壺の底部である。器形は小型でベタ底。床直より出土。

銭貨

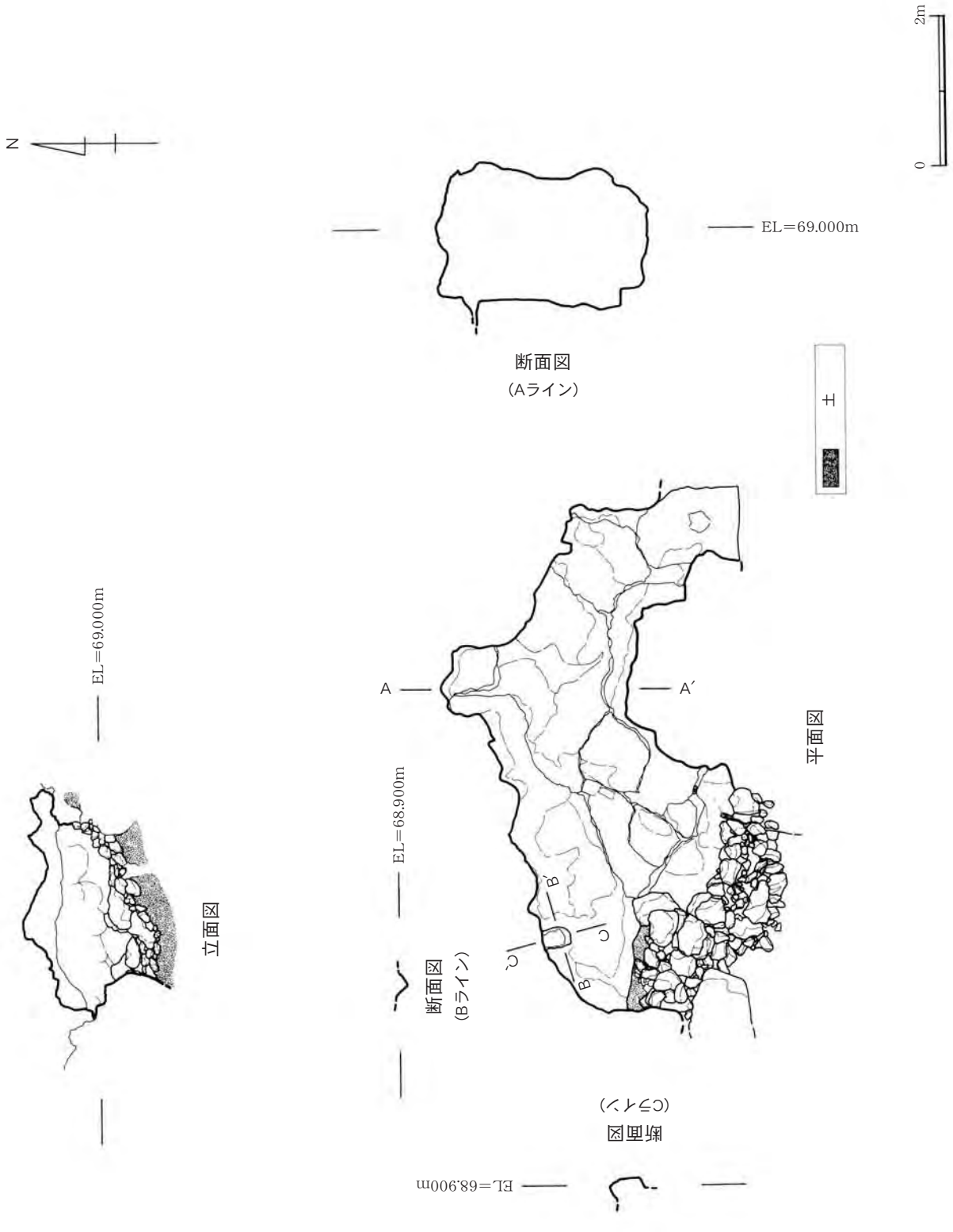
すべて現代銭である。一銭が墓室から５点、床直より４点、計９点が出土。また銭種不明が床直より２点出土。

金属製品（図版40－320）

頭部形が逆Ｌ字状になる鉄製角釘である。縦長(4.7)㎝、横長(0.7)㎝、厚さ(0.8)㎝、重量(9.7)g。墓室出土。



第21図　第５号墓出土遺物



第22図　第６号墓実測図

第19表　第６号墓遺構表

挿図番号		第22図
図版番号		図版４～５
位　　置		X=23,422.000　Y=21,845.000　EL=68.900m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	東西長径約6.8m、南北最大長径2.2m。墓室の形状はＵ字状となり７号墓奥壁まで貫通している。墓口には野面積みの石積みが見られる。幅約40㎝程で石積みは切れており、墓室へ至る通路と想定される。
	工 法	天井、壁は粗加工で墓口部分はやや丁寧に加工されている。床面は細砂土を10～20㎝程入れ、硬く叩き締めている。床面を走るフィッシャー内にも土を入れており、床はほぼ全体的に平坦となる。壁には沖縄戦時に掘り込んだと考えられる灯り取りの跡が確認される。
	内部の状況など	墓室清掃前には沖縄戦時に使用されたと思われる銃剣が東側壁に放置されていた。また、その近くには人骨がコーラ瓶と共にまとめ置かれているのも確認された。墓室西側の床面直上から土器、陶器が大量に出土。とくにタイ産褐釉陶器１個体が小片で散乱しているのが確認されたのは注目される。床岩盤を方形に削り込んだ窪みに焼骨の入った喜名焼壺が安置されていた。
	時 期	17～18世紀。沖縄戦時には壕として利用。
備　　考		墓室東側７号墓へ続く一帯から遺物はほとんど出土していないことと、床面や岩盤も丁寧に加工しているため戦時中に掘り込まれた可能性が高い。遺物の広がりから東西約３m、南北約2.5m平面形は半円形状の墓室であった可能性が高い。

第20表　第６号墓出土状況一覧

遺物／出土地	青磁	白磁	染付	褐釉		その他の輸入陶磁器（色絵）	本土産陶磁器			沖縄産陶器		陶質土器	土器	銭貨	金属製品	碁石	円盤状製品	戦争遺物	合計
				中国産	タイ産		磁器	陶器	印判手	施釉	無釉								
墓前		5	19		4	3	11	6	11	46	42	8	6	1	1		5		168
石積内				1	5			3	1	2	9		20	1	3				45
墓口付近	1		5				1	1	1	27	21	12	2						71
墓室		1	1		4				1	5	31	2	22	10	3	1			81
溝内								2		2	5		1	1					11
西壁側													1						1
墓室西側					2			2	1	2	23		171	3	33				237
床直		1						1			2		18	1				1	24
土抗内											1								1
合計	1	7	25	1	15	3	12	15	15	84	134	22	241	17	40	1	5	1	639

第６号墓出土遺物

蔵骨器（第23図93～99・図版41－321～327）

第23図95・図版41－322土器。外反し、若干膨らみを有する壺口縁部資料。口唇部は尖る。色調は内面が赤橙色、外面が暗赤褐色となる。器面調整は内外面共に横ナデが見られる。混和材は貝細片と白色砂粒が見られる。墓室西側出土。

第23図94・図版41－324土器。外反し、口唇部はやや平坦となる口縁部資料。色調は内外面共に橙色で、器表には石灰分が付着している。また内面器表はアバタ状となる。器面調整は外面に斜位の成形痕が明瞭に残る。混和

材は大粒の赤色粒、白色砂粒が見られる。口径21.7㎝。墓室西側出土。
第23図96・図版41－323土器。立ち上がりはラッパ状に大きく開く底部資料。器面調整は内面器壁がアバタ状となり不明瞭、外面は斜位の雑なナデが見られる。色調は内面が橙色、外面が灰褐色となる。混和材は大粒の赤色粒と白色粒が多く見られる。底径12.0㎝。墓前出土。
第23図93・図版41－321タイ産褐釉陶器。口縁部断面は玉縁状となる四耳壺。内面と胴上部には轆轤痕が、胴下部は斜位の箆削り痕が残る。胎土は密で白色砂粒が多く見られる。大粒の赤色粒が僅かに混入する。外面は黒褐色の釉が頸部から胴下部にかけて施され、内面は露胎となる。口径17.4㎝、器高42.6㎝、底径19.3㎝。石積内出土。
第23図97、98・図版41－325、327沖縄産施釉陶器の壺。いわゆる「アンダガーミ」とよばれる広口の四耳壺である。黒釉単掛けで外面は腰部まで施釉、畳付は無釉である。内底は蛇の目釉剥ぎし、口縁部は口唇上部のみ釉剥ぎする。胴部に孔が穿たれている。図97は墓前、図98は墓室より出土。
第23図99・図版41－326沖縄産無釉陶器で、喜名焼の壺の完形品である。焼骨が大量に入れられていた。器面は明茶褐色で、灰が掛かったために黄白色のアバタ状を呈する。口縁部は外反肥厚し、胴部の張りは弱い。胴中部に圏線を１条めぐらせる。内面には輪積み痕と叩き痕が残る。土坑内より出土。

青磁（第23図100・図版41－328）
１点が出土した。瓶の頸部分と推察できる。肩部に形象的な装飾を貼付するものである。釉色は灰緑色を呈する。墓口付近出土。

白磁（第23図101、102・図版41－329、330）
14点出土し、器種は碗、小碗、瓶がある。碗は１点出土している。第23図101・図版41－329は胴部が直に立ち上がり口縁は直口、口唇は断面形態が四角状になる。胎土は白色、釉色は灰白色を呈する。口径11.6㎝。墓前出土。小碗は６点、瓶は口縁が１点出土した。第23図102・図版41－330は口縁が頸部からラッパ状に開き口縁端部を直に引き上げる。口縁外体に陰圏線を施文している。口径8.6㎝。墓前出土。

染付（第24図103、104・図版41－331、332）
碗38点、小碗１点、皿４点、小杯１点、袋物２点、計46点が出土している。第24図103・図版41－331は胴から外に開くように立つ端反り口縁碗である。外体面に圏線と菊花文口縁内面に２条の圏線を施す。墓前出土。第24図104・図版41－332は内底が蓮子心形の底面を成す。高台は四角形を呈し、内と外から三角に削り出し畳付けの釉は掻き取っている。墓前出土。

褐釉陶器（第24図105・図版42－334）
中国産褐釉陶器。口縁部断面は「フ」の字状を呈し、口唇部は水平となる。頸部中央に陽圏線が２条見られる。胴下部には轆轤痕が見られ、胴上部には目跡が残る。外面には暗褐色の釉が全体的に施され、内面には暗褐色の釉が胴上部にのみ施される。胎土は密で白色粒子が多く、黒色粒子が僅かに見られる。口径17.2㎝、底径15㎝。石積内出土。

その他の輸入陶磁器（第24図106・図版41－333）
中国産色絵が３点出土している。器種は小碗と不明が出土した。図示するものは型押し成形の小碗である。胴部から直に立ち上がり口縁は端反る。口唇は口禿になる。外体面に草花文の上絵が認められる。胎土、釉色ともに白色を呈する。口径8.0㎝。墓前出土。

本土産陶磁器（第24図107、108、110、112・図版42－335～347）
薩摩産の染付、肥前系の染付、陶器や瀬戸・美濃産の印判手が出土した。肥前系の染付は総数10点が出土し器種別には碗、皿、蓋があり、生産年代は概ね17世紀～19世紀に位置付けられる。また肥前系の色絵の蓋物が１点出土しており生産年代は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられるものであった。第24図107・図版42－335は薩摩産の染付碗である。口縁部はほぼ筒状に立ち口縁内面の釉をふき取っている。蓋物が考えられ外体面に圏線と唐草を描く。生産年代は1820年～1860年に位置付けられる。口径10.4㎝。墓口付近出土。瀬戸・美濃産染付は総数３点が出土し器種別には碗、瓶がある。生産年代は明治以降に位置付けられるものである。陶器類は総数15点が出土し内野山窯の皿、関西系の鍋などが出土している。第24図108・図版42－336は内野山窯の皿である。高台は低く断面形が四角に削り出される。内底面の釉は蛇の目釉剥ぎされ、高台は露胎させている。生産年代は17世

紀第４四半期～18世紀前半に位置付けられる。底径4.6㎝。墓口付近出土。第24図110・図版42－337は関西系の鍋である。生産年代は19世紀に位置付けられる。撹乱層出土。第24図112・図版42－338は肥前系の蓋である。生産年代は19世紀に位置付けられる。甲縁径10.3㎝、器高2.6㎝、突起径7.6㎝。石積内出土。印判手は肥前系、型紙摺の碗、皿類10点と、瀬戸・美濃産、型紙摺の皿１点とゴム判の小碗が５点出土している。図版42－339～342は肥前系、型紙摺の口縁が外反する碗である。文様構成は339・Ⅱ類４ハ、341・Ⅲ類６ロ、340・Ⅱ類３ロ、342・Ⅱ類ｂＡロに該当する。図版42－343は肥前系の型紙摺の皿である。文様構成は不明。図版42－344は瀬戸・美濃産の口縁が直口する型紙摺の皿である。見込みに七宝文を施している。瀬戸・美濃産のゴム判の碗、小碗が出土している。図版42－345は胴部が外に開き、口縁で直に立ち上がる碗である。文様構成はⅣ類に該当する。図版42－346は胴下部に丸みを持ち口縁に向かい直に立ち上がる小碗である。文様構成はⅡ類ａに該当する。図版42－347はゴム判による色絵金彩の小杯である。端反り口縁をなし内底面はフラットな作りである。文様は内体面に施され、山や杉と思われる線文に雁が飛ぶ姿が描かれている。生産地は瀬戸・美濃が考えられる。口径4.9㎝。西側表土出土。

沖縄産施釉陶器（第24図109、111、113、114・図版42－348～351）

総数52点が出土。器種別にみると碗、小碗、鍋、壺、瓶、急須、火取などが出土している。第24図109・図版42－348は碗の口縁部である。外反口縁で白釉単掛け。内・外面に草花文を施す。墓前より出土。第24図111・図版42－349は小碗の底部である。灰釉単掛けのフィガキー、底部から胴部へ逆「ハ」の字状に立ち上がる器形である。墓前より出土。第24図113・図版42－350は急須の底部である。外面は無釉、内面は鉄釉を施釉する。外底には三角錐の脚を貼付する。墓口付近より出土。第24図114・図版42－351は火取の底部である。外面は鉄釉、内面は無釉である。底部は高台をもち、筒状の器形で胴部に沈線を施す。墓前より出土。

沖縄産無釉陶器（第24図115～118，第25図119、120・図版42－352～354，図版43－355～357）

総数52点が出土。器種別にみると壺、小壺、鉢などが出土している。第24図115・図版42－352は小壺の口縁部である。外反口縁で、口唇部がわずかに肥厚する。第24図116～118・図版42－353、354、図版43－355は鉢の口縁部である。図118・図版42－353はいわゆる「ミジクブサー」とよばれるもので、口縁部が内彎し、口唇部が舌状を呈する。胴部に圏線を１本めぐらせ、その下に波状文を施す。図116、117はいずれも口縁部が逆「L」字状を呈し、口唇部に圏線を２条めぐらせる。深鉢形の器形になると思われる。図116・図版43－355は内面にはロクロ痕が明瞭にみられる。図117・図版42－354は胴部に草花文の葉及び蔓、もしくは茎と思われる部分の貼り付け文様が施されている。いずれも墓前より出土。第25図119、120・図版43－356、357は底部から胴部にかけて直線的にたちあがる器形で内面にロクロ痕がみられる。いずれも墓前より出土。

陶質

総数で26点出土し器種は植木鉢、火炉、鍋、鍋の蓋などである。

銭貨（第25図121～127・図版43－358～364）

有文銭４点、無文銭３点、現代銭10点が出土している。第25図121～123、127・図版43－358～361は有文銭で、すべて完形品である。図121・図版43－358は永楽通寶で時代は明、初鋳年代は1408年である。字体は楷書。銭径26㎜、孔径５㎜、銭厚２㎜、重量4.7ｇ。床直より出土。図122・図版43－359は嘉祐通寶で時代は北宋、初鋳年代は1056年である。字体は真書。銭径26㎜、孔径８㎜、銭厚1.6㎜、重量2.9ｇ。墓室西側より出土。図123・図版43－360は寛永通寶で時代は江戸、初鋳年代は1668～1683年（Ⅱ期）である。銭径25㎜、孔径６㎜、銭厚１㎜、重量2.8ｇ。墓前より出土。図127・図版43－364は完形だが、銭文は判読不明。孔に鉄材が貫通しているが、用途不明。銭径25㎜、銭厚1.3㎜、重量6.2g。墓室より出土。現代銭は一銭が墓室より４点出土。墓室溝内より１点、計５点が出土している。また墓室より十円３点、一円１点、不明１点が出土、石積内より一円が１点出土した。

第25図124～126・図版43－361～363は無文銭である。すべて完形品。図126・図版43－363は銭径22㎜、孔径６㎜、銭厚1.8㎜、重量2.1ｇ。墓室西側より出土。図124・図版43－361は銭径20㎜、孔径６㎜、銭厚1.3㎜、重量1.5ｇ。墓室西側より出土。図125・図版43－362は銭径21㎜、孔径７㎜、銭厚0.7㎜、重量1.4ｇ。墓室より出土。

金属製品（第25図128・図版43－366～372）

第25図128・図版43－336は先端に耳掻き状の窪みを有する簪である。竿の先端は破損している。男性の副簪である。縦長(8.5)㎝、横長0.5㎝、厚さ0.2㎝、重量(3.4) g。石積内出土。図版43－367～372は鉄製角釘である。367

～371は頭部形が逆Ｌ字状を成し、372はＴ字状を成す。367・縦長(4.0)㎝、横長(0.7)㎝、重量(3.4)g。368・縦長(3.4)㎝、横長0.5㎝、厚さ0.5㎝、重量(2.8)g。墓室西側出土。369・縦長3.9㎝、横長(0.5)㎝、厚さ(0.5)㎝、重量1.4g。西側半裁。371・縦長(3.9)㎝、横長(0.5)㎝、厚さ(0.5)㎝、重量(2.9) g。墓室内出土。372・縦長6.5㎝、横長0.4㎝、厚さ0.4㎝、重量5.9g。墓室内出土。370・縦長4.5㎝、横長0.9㎝、厚さ0.6㎝、重量0.1g。墓室西側出土。

碁石（図版43－375）

黒の碁石が１点出土、プラスチック製である。現代遺物と考えられる。

石製品（第25図129・図版43－365）

硯の破片が１点出土している。硯の陸部と縁の一部を残す破損資料である。縦長(3.6)㎝、横長(3.0)㎝、厚さ0.5㎝、重量(7.5) g。撹乱層出土。

円盤状製品（図版43－373、374）

６号墓から出土した円盤状製品は４点で詳細は下表の通りである。

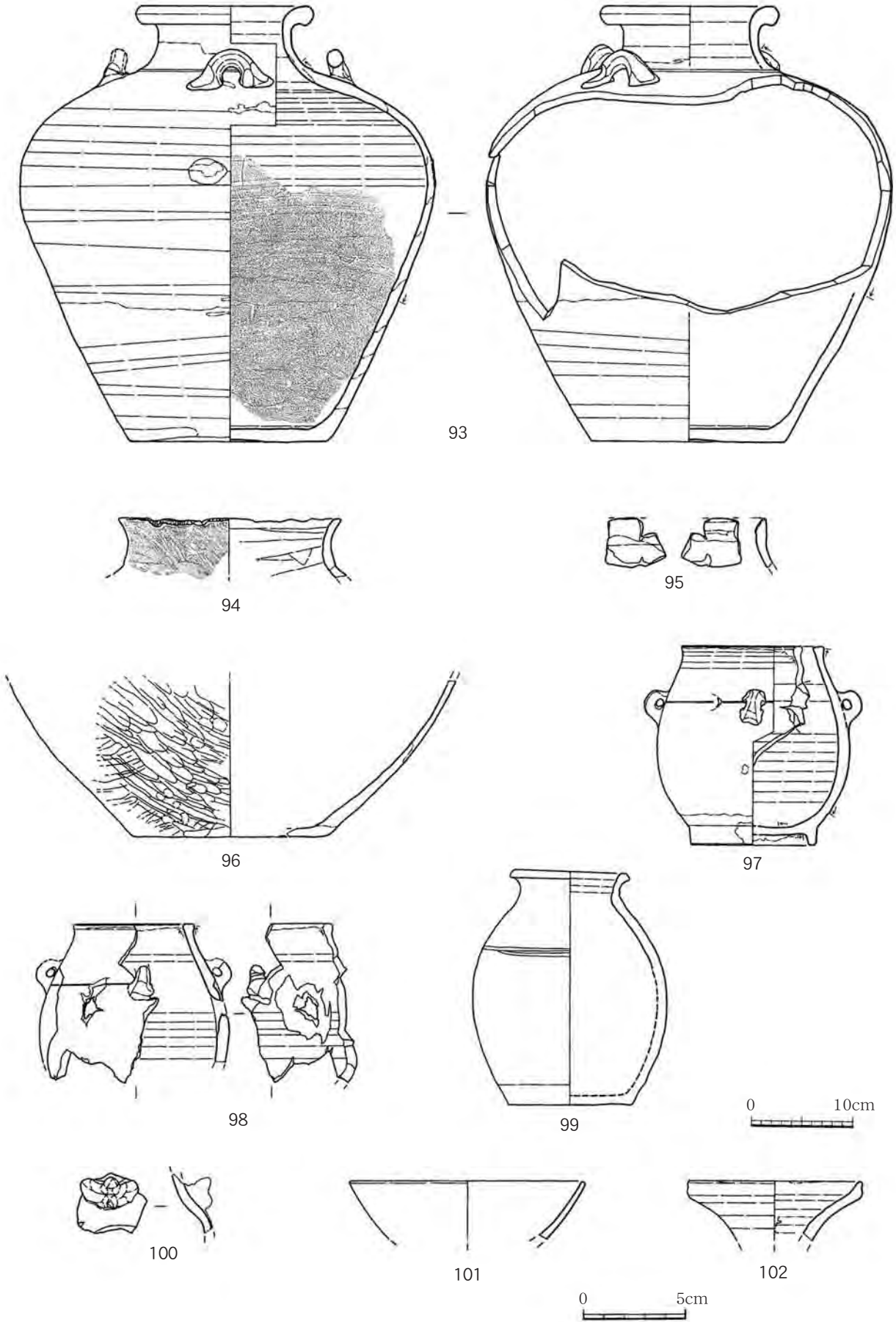
第21表　第６号墓円盤状製品観察表

単位：mm、g

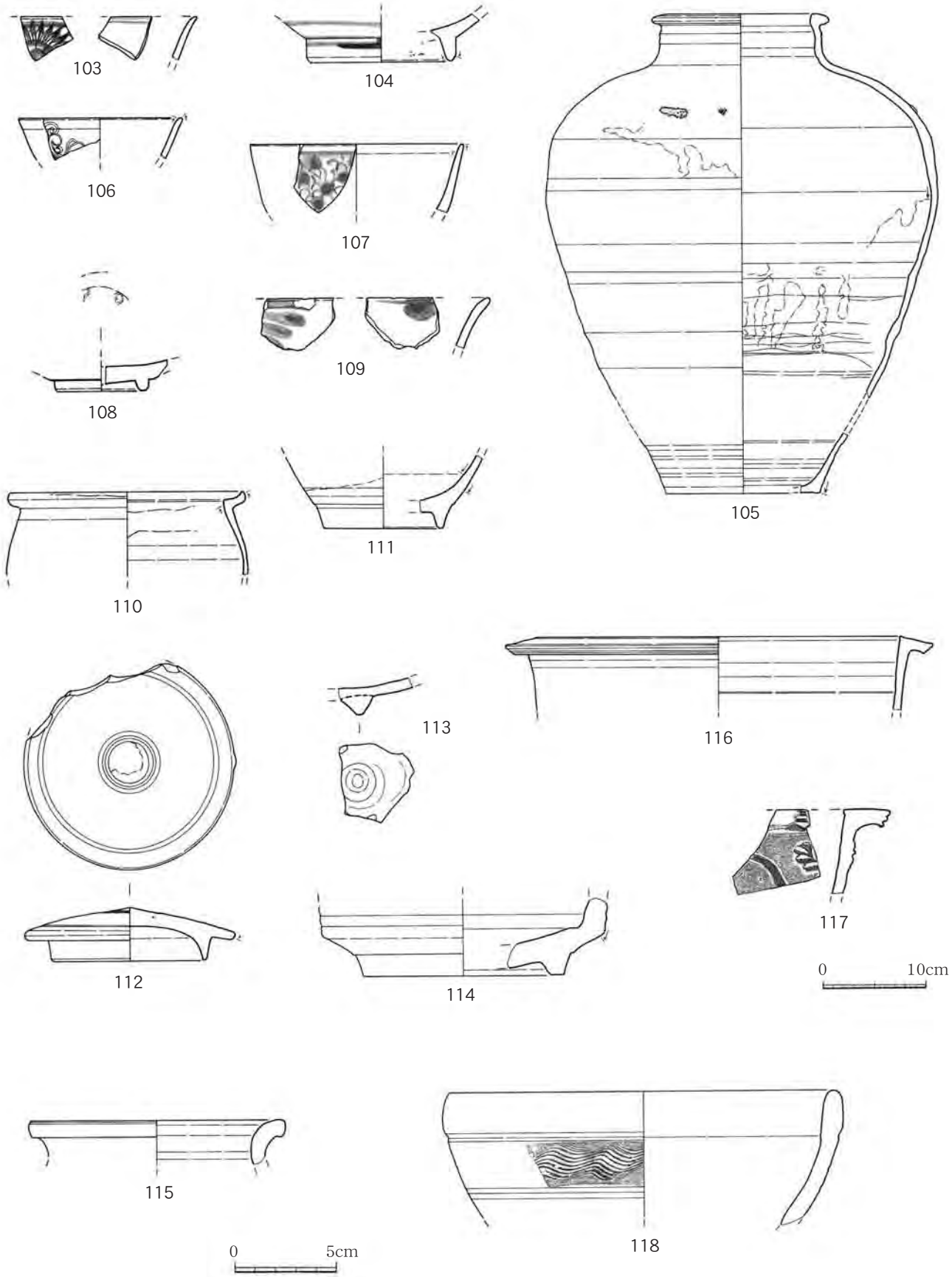
図版番号		状態	長径	短径	厚さ	重量	素材	使用部位	観　察　事　項	出土地
図版43	373	完形	41.2	36.9	10	18.7	沖縄産無釉陶器	胴部	ほぼ円形で剥離は粗い。器厚から壺又は甕を転用した物と思われる。	墓前
	374	完形	26.7	22.9	10	8.9	沖縄産無釉陶器	胴部	円形。剥離が粗い為、角が多く残り菱形に近い形を呈している。表裏両面からの打割調整が見られる。	墓前

戦争遺物（図版43－376）

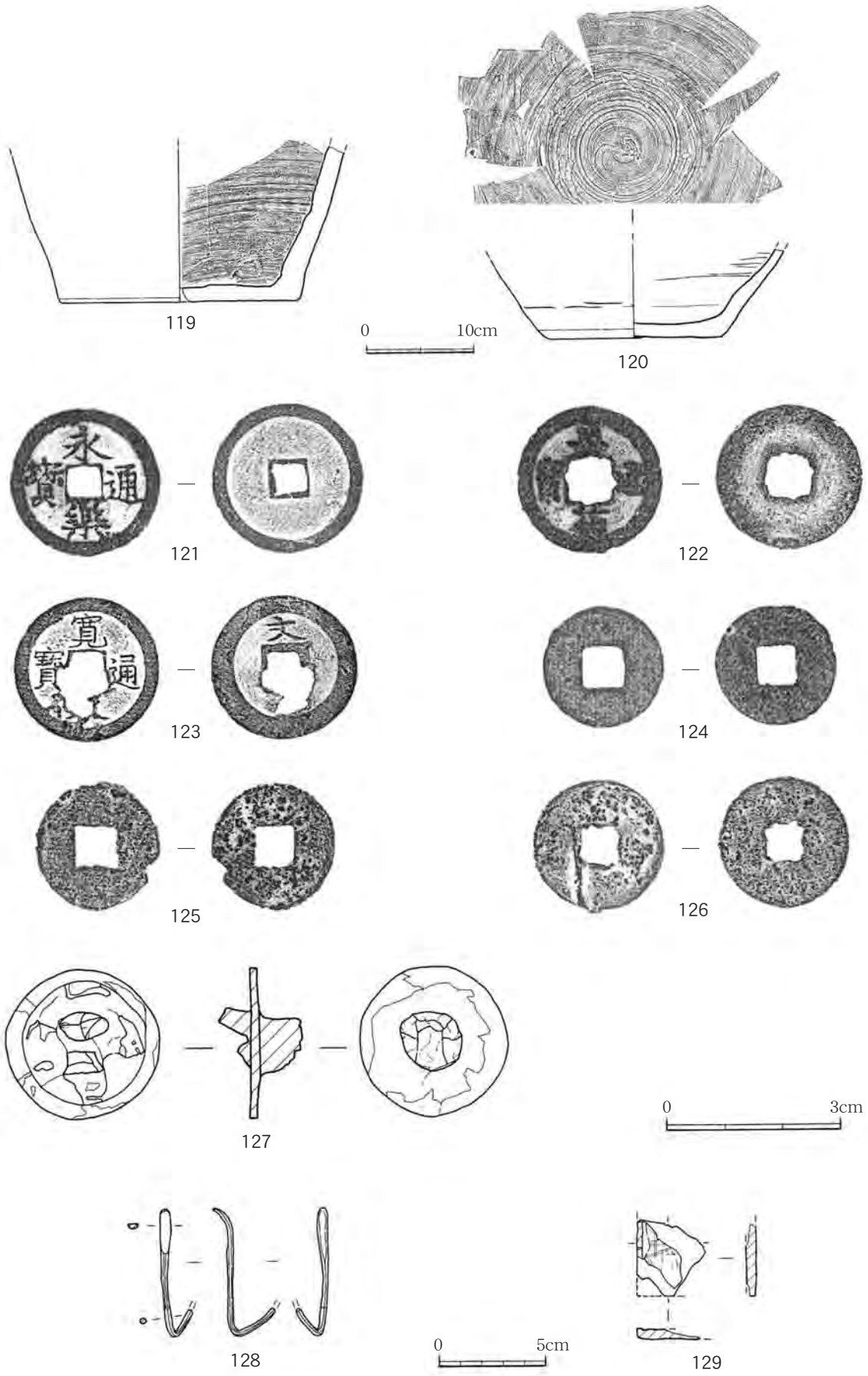
刀剣が出土しているが、鍔の形が細長く、左右非対称で装飾がない事と、左側に直径1.4㎝の穴がある事から軍刀としてではなく機関銃に装着する銃剣として使用していたと思われる。目釘に装飾が施されているが錆が著しく判別は不可能。刀身38㎝、柄11㎝、鍔8.8㎝。墓室床上出土。



第23図　第６号墓出土遺物（１）

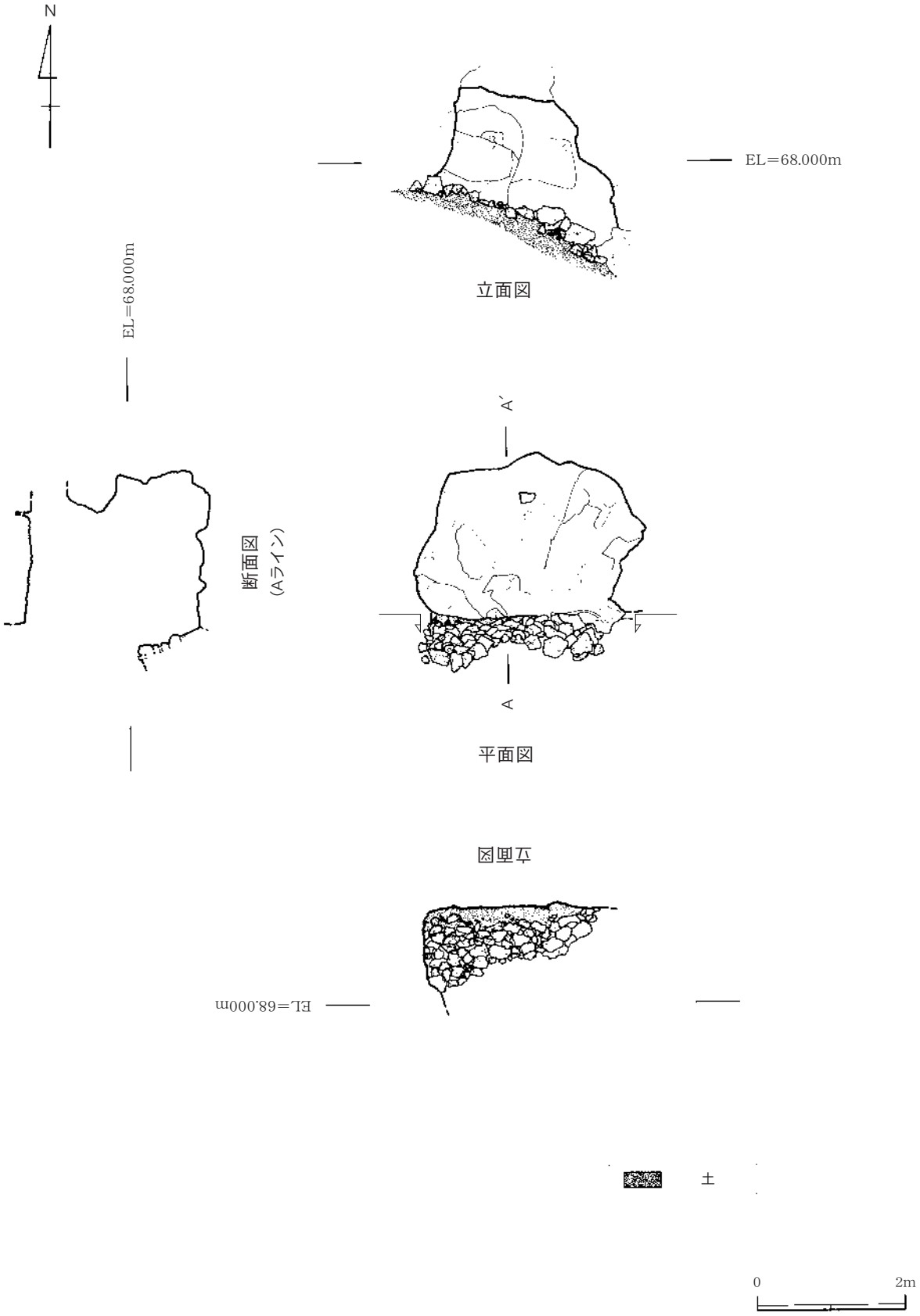


第24図　第６号墓出土遺物（２）

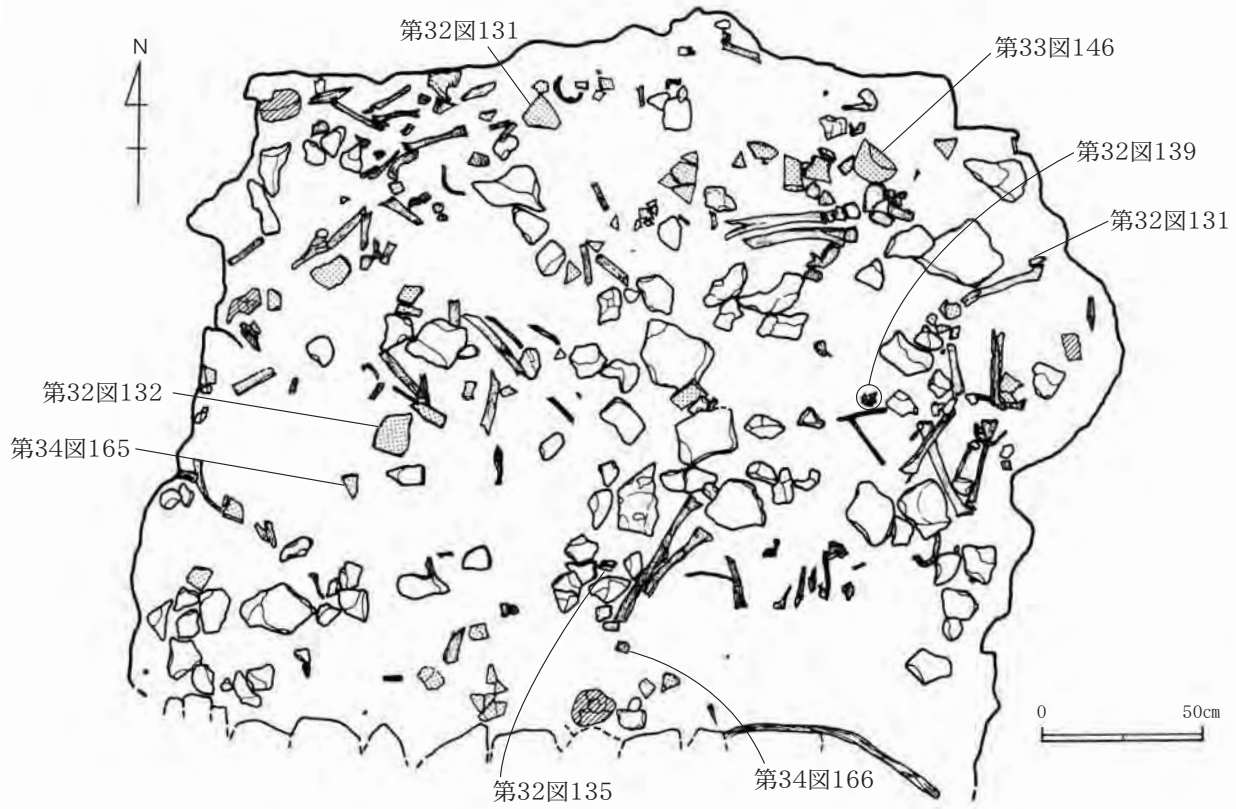


第25図　第６号墓出土遺物（３）

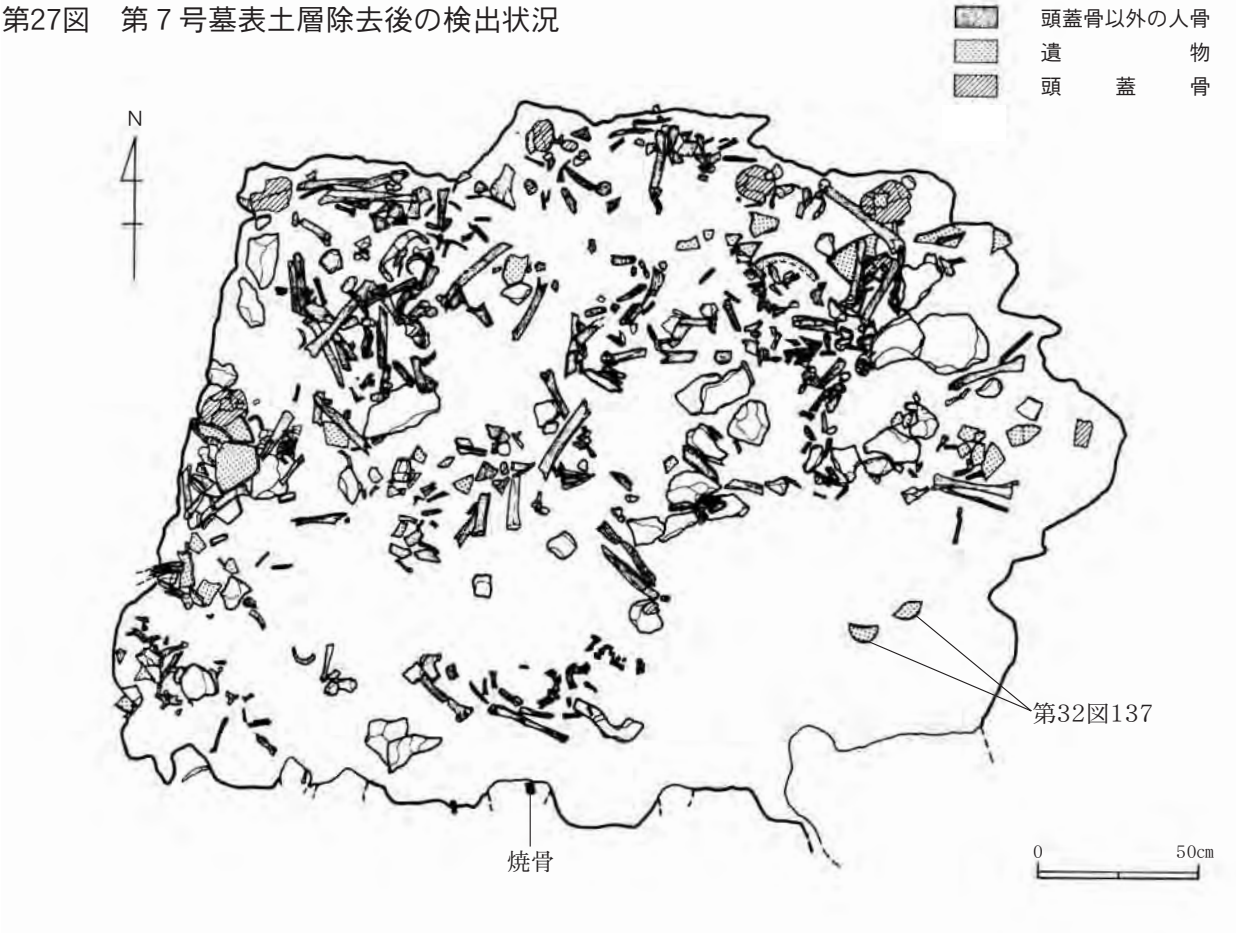
第７節　第７号墓



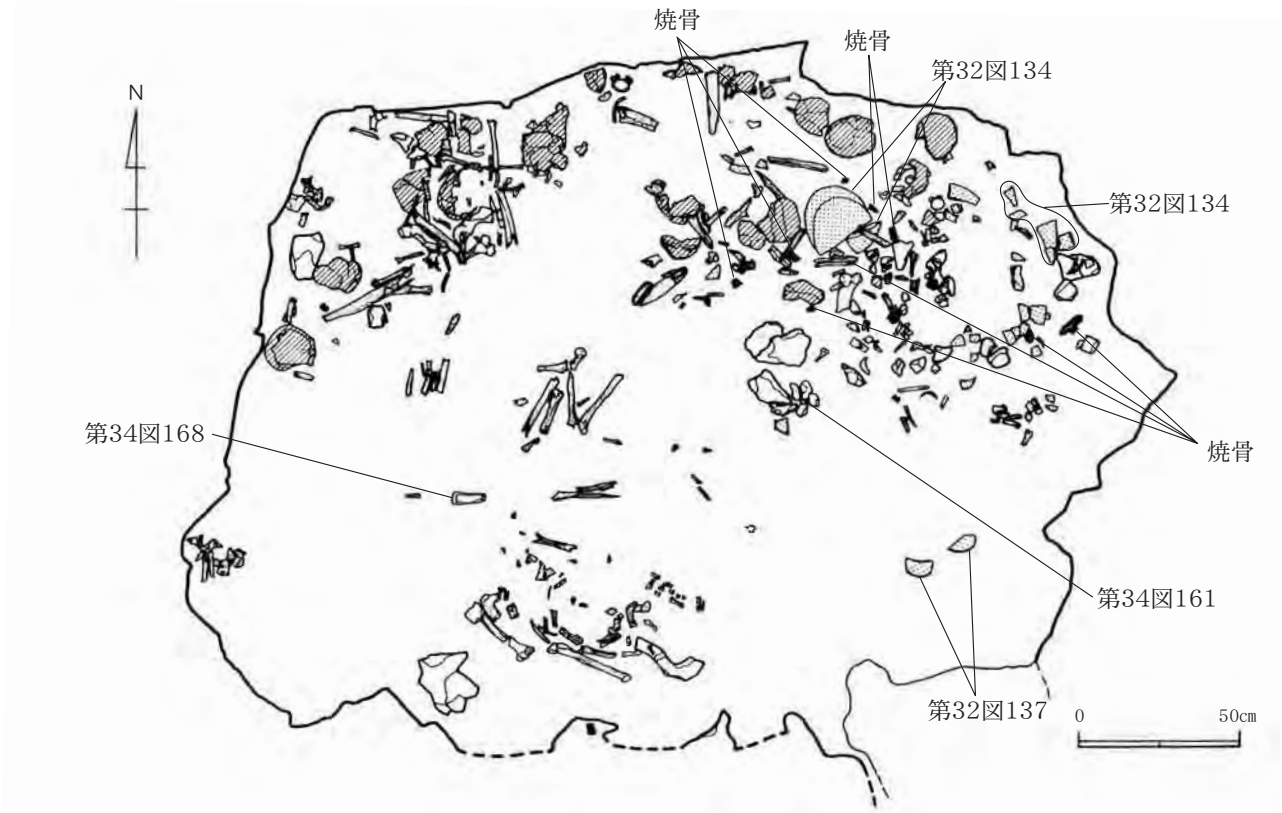
第26図　第７号墓実測図



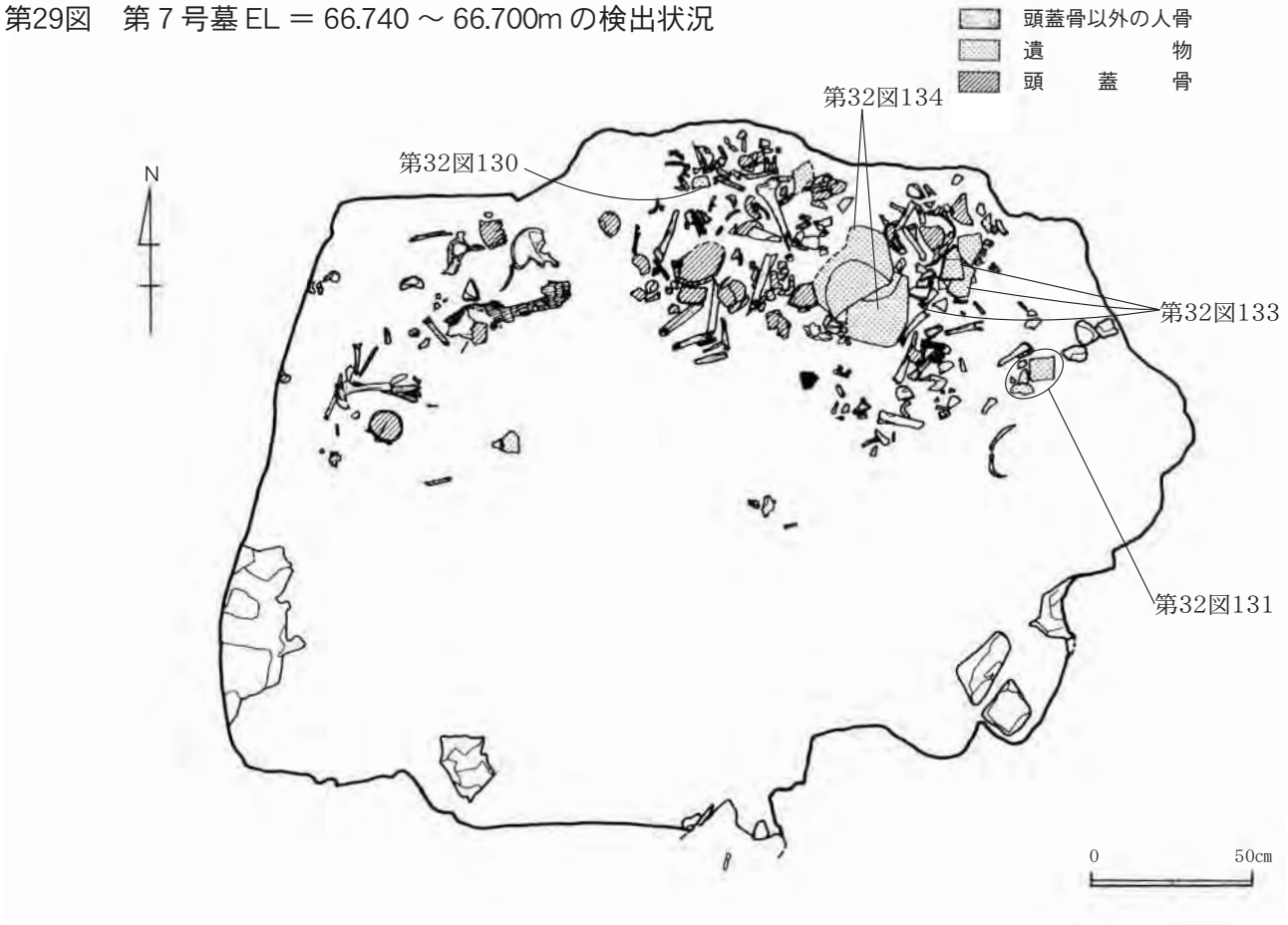
第27図　第７号墓表土層除去後の検出状況



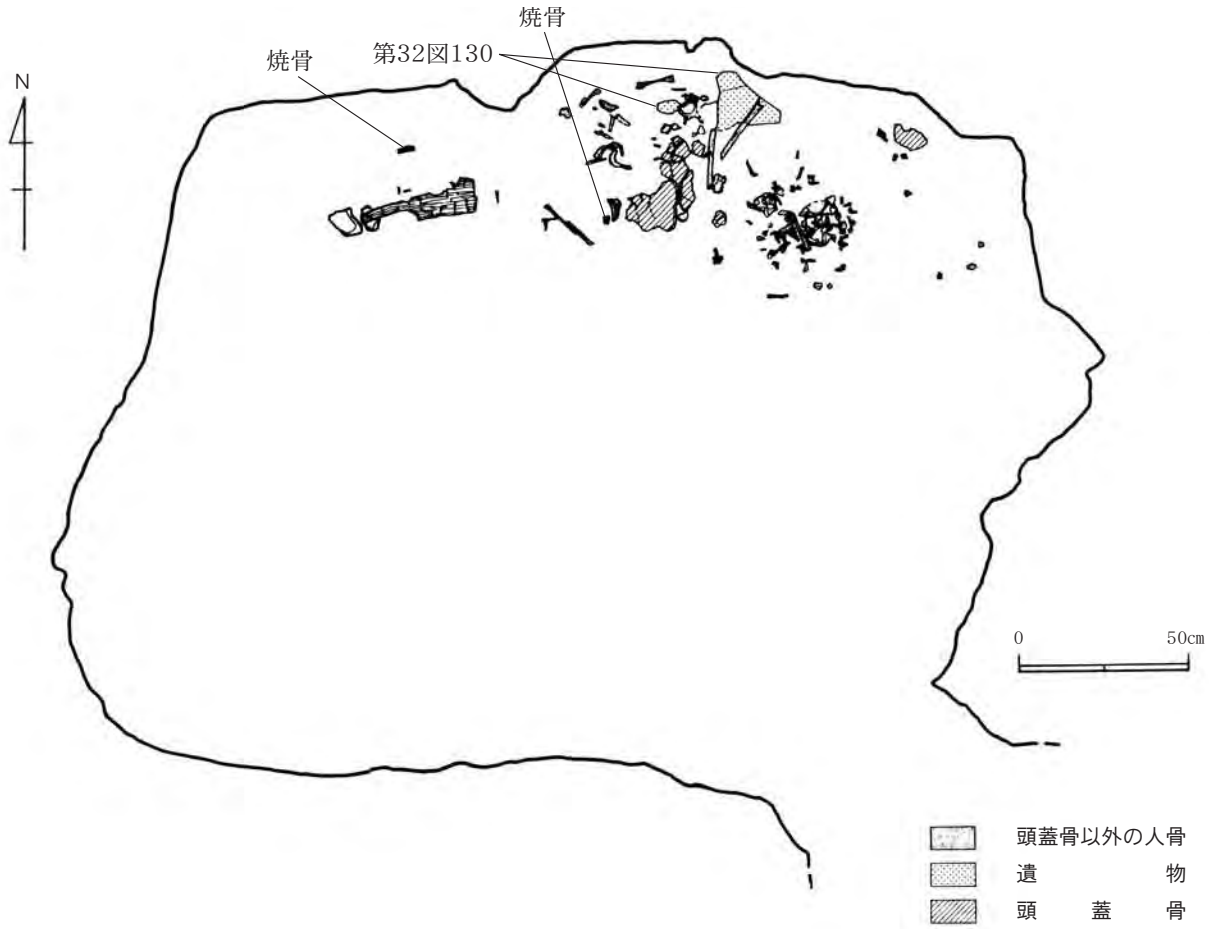
第28図　第７号墓 EL ＝ 66.780 ～ 66.740m の検出状況



第29図　第７号墓 EL ＝ 66.740 ～ 66.700m の検出状況



第30図　第７号墓 EL ＝ 66.700 ～ 66.600m の検出状況



第31図　第７号墓 EL ＝ 66.600 ～ 66.480m の検出状況

第22表　第７号墓遺構表

挿図番号		第26～31図
図版番号		図版５～７
位　　置		X=23,417.000　Y=21,845.000　EL=67.300m
構造	形　状	掘込墓
	規　模	東西2.5～2.9m、南北1.9～2.1m、高さ2.4mで墓室の平面形は略方形となる。墓口には拳大の石灰岩を高さ約0.4～１m積み上げた野面積みの石積みが見られる。墓室側（北側）のみ積み上げられており、南側は土盛りとなる。裏込石は見られない。墓口は南東部となり、幅50㎝と狭い。
	工　法	天井、壁は粗加工で、とくに平坦に仕上げるといった状況は見られない。また床面もかなり粗く平坦に岩盤を加工しているのが発掘の結果、判明した。奥壁の西側、墓室の南西部には６号墓への開口部が見られる。６号墓の出土遺物から戦時中に開けられたものと考えられる。
	内部の状況など	発掘調査前の墓室は暗褐色土が床面を平坦に覆っており、一瞥すると空墓である状況が見られた。また墓口から約南東外側に戦時中の人骨が薬莢と共に出土している。墓室の表土除去後、大量の人骨が EL=66.780～66.645mと約30㎝の厚さで密に出土した。以下、各エレベーション毎に取り上げた人骨の出土状況について触れていきたい。 EL=67.440～67.420m（表土除去後、第27図） 墓室全体から人骨、遺物、大小の石灰岩が大量に出土。人骨は南西部以外に散乱している状態で、遺物は土器（第32図131、132）、喜名焼と思われる沖縄産陶器壺片が主で白磁皿（第32図137）、中国産染付杯（第32図139）、青磁碗の底部片（第32図135）、沖縄産無釉陶器の底部片（第33図146）無文銭（第33図149,150,151）が出土。他に金属製品（第34図159）、骨製品（第34図162）、陶質人形（第34図164）、ヤコウガイ製匙状製品（第34図166）が各１点確認されている。石灰岩も全体に散乱しているがとくに規則性は見られないことから、転石である可能性が高い。加えて墓口の床面は石灰岩が露頭しており、上面は平坦に加工がなされている。このことから墓室への出入りを容易にするという意図が読み取れる。

構造	内部の状況など	EL=66.780～66.740m（第28図） 　主に人骨が大量に検出し、遺物は土器片、本土産褐釉陶器（薩摩焼、第32図133）、タイ産褐釉陶器片（第32図130）が出土、墓口近くから抉り高台の白磁皿（第32図137）、無文銭が各１点出土している。人骨は南東部すなわち墓口近くからは全く確認されず、また南側、石積み近くからは人骨がまとまって確認された。また頭蓋骨は墓室中央には見られず、壁際から出土するといった、やや偏った人骨の配置状況が見られた。土器片、喜名焼壺片も人骨が集中している墓室北半部にまとまって確認されていることから、これらの遺物が蔵骨器として使用されていたことが示唆される。火を受け炭化した人骨も僅かながら確認された。白磁皿が出土した一帯は人骨や遺物がほとんど見られない空白部であり、当該墓室に納められた遺骸を祀る空間であったことが想定される。また抉り高台の白磁皿は供献用としての皿とも考えることができる。無文銭の出土もそのことを明示しているものと思われる。 EL=66.740～66.700m（第29図） 　EL=66.780～66.740mの様相と大きく変わらないが、頭蓋骨が壁際から確認される状況が顕著に見られ、四肢骨が墓室中央からまとまって出土している。また火を受けた人骨も多く確認された。遺物は喜名焼壺（第32図134）の底部がまとまって墓室中央やや北東寄りから出土している。 EL=66.700～66.600m（第30図） 　人骨、遺物は墓室の北半部から出土、南半部からは全く出土しなかった。人骨は部位が偏って出土するといった状況は見られず、散乱しているのが確認された。火を受けた人骨は僅かながら出土している。遺物は北東部からは土器片、喜名焼壺片、北西部からは木片が出土している。土器片は少量となり、喜名焼壺（第32図134）は表土除去後から一定量で出土している。このエレベーションは墓室南側の石積み根石直下に相当し、根石下部にも人骨が確認されている。このことから当初は現在見られる石積みは構築されておらず、さらに埋納場所は南側に広がっていくことが確認された。 EL=66.600～66.480m（岩盤直上、第31図） 　人骨、遺物は木片、土器片、喜名焼壺片、鉄釘（第34図157）が出土。木片に鉄釘が付されていたことから木片は木棺片である可能性を掲げることができる。木片は長さ40㎝、幅５～10㎝で表面は既に炭化している。鉄釘は角釘で長さ３～４㎝で２点確認された。EL=67.420～67.405mで確認された喜名焼壺底部片を取り上げた後、その直下に人骨と喜名焼の水滴（第33図143）が１点確認された。一部岩盤が露頭しているが床面の凹部は砂質土と石灰岩礫を込めて平坦に床面を仕上げている。
時　期		出土遺物から16～17世紀。
備　考		墓の変遷について 　各エレベーションにおける遺物の時期差は看取することはできないが、遺構の在り方から当該墓において変遷があったことを窺うことができる。それを最も顕著に示すものとして墓口を閉塞する石積み根石が遺物包含層の上に載っていることである。床面から石積み根石まで堆積している包含層は約10㎝の厚みを有しており、石積み根石直下から頭蓋骨が検出されている（図版７）。このことから当初は墓口に石積みを有しない掘込墓で墓室の南限は石積み下まで伸びていたと考えられる。その後、墓口に石積みが構築されたことによって、EL=67.440～67.420m、66.780～66.740mで見られるような墓口周辺に白磁、染付、無文銭、ヤコウガイ製匙状製品等の祭祀的要素を有する遺物の出土、つまり墓室の一角が祭祀空間としての位置付けがなされてくるものと想定される。後章で詳しく触れているが墓室石積み近くで人骨一体分が確認されている点も石積み構築後の配置状況である可能性を石積みから一定距離をおいて安置していることから掲げられる。 沖縄戦時における墓の利用 　墓として廃棄されて以降から戦時中までの時期に暗褐色土により平坦に造成され、戦時中には壕として利用されていた。暗褐色土層からは土器、沖縄産施釉陶器（第33図142）、沖縄産無釉陶器（第３３図145）、無文銭（第33図147）、骨製品（第34図163）、漆喰（第33図167）が出土しており、墓口外側から薬莢や戦前のガラス瓶が多く出土している。また聞き取り調査では沖縄戦時には壕として利用されていたことから天井や壁面が改変されていることも考えられる。これらから墓外において激しい戦闘が行われていたことは想像に難くない。

第23表　第７号墓出土状況一覧

遺物／出土地	青磁	白磁	染付	褐釉		本土産陶磁器			沖縄産陶器		陶質土器	土器	銭貨	金属製品	煙管	碁石	人形（陶質）	石製品	貝製品	骨製品	その他の遺物	合計
				中国産	タイ産	磁器	陶器	印判手	施釉	無釉												
墓　前											1											1
墓室入口		1																				1
墓口付近		1	1																			2
墓　室	3	1	6	1	13	2	7	4	39	47	8	132	5	57	2	17	1	1	1	1	2	350
墓室溝内		1																				1
床　直												1		3								4
合　計	3	4	7	1	13	2	7	4	39	47	9	133	5	60	2	17	1	1	1	1	2	359

第７号墓出土遺物

蔵骨器（第32図130～134・図版44－377～381）

第32図131・図版44－377土器。頸部で緩やかに屈曲して外反する。壺口縁部資料。直口口縁でナデ肩となる。口唇部は丸く収める。器面調整は内面には指圧痕、粗いナデ痕が明瞭に見られる。外面にも指圧痕が見られるが全体的に研磨されている。色調は内面が橙色、外面は黒色となる。混和材は白色砂粒が僅かに、白色細砂粒が多く見られる。口径15.8㎝。墓室出土。

第32図132・図版44－378土器。立ち上がりはラッパ状に大きく開く壺底部資料。やや上げ底状で胴部は薄手となる。器面調整は外面が雑な横ナデが見られる。内面はアバタ状となる。色調は内面が橙色、外面が黒色となる。混和材は白色細砂粒、大粒の赤色粒が見られる。底径12.2㎝。墓室出土。

第32図130・図版44－379タイ産褐釉陶器。ナデ肩となる壺で胴上部に４条の陰圏線が見られる。頸部がくびれ、横位の把手が付く。また頸部と胴部との境に段が見られる。内面には輪積み痕が確認できる。外面には黒褐色の釉を胴下部まで施し、内面は露胎となる。胎土は密で白色砂粒、気泡が多く見られる。底径13.9㎝。墓室出土。

第32図133・図版44－380薩摩産褐釉陶器。壺の底部資料である。平底で外底面の中央に陽刻の文様を有し周縁部に貝目痕が残る。内体面は積み痕や叩き痕が顕著である。胴部の破損した断面に軽い研磨がみられることから壺の底部を二次加工し蔵骨器の蓋に転用した可能性がある。墓室出土。

第32図134・図版44－381沖縄産無釉陶器。喜名焼壺の底部である。底部から胴部にかけて直線的にたちあがる器形である。泥釉が掛けられて器面は茶褐色を呈し、両面に釉垂れがみられるが、内面の釉垂れは下から上にかけて流れている。外底には粘土目と貝目痕がそれぞれ２箇所に残り、内面には叩き目が明瞭に残る。墓室出土。

青磁（第32図135・図版44－382）

青磁は４点が出土し碗、皿、瓶等の器種がみられた。内訳は碗胴部が１点、皿底部が１点、瓶胴部が１点である。図示したのは腰折れ皿の底部である。比較的大きめの内底面は僅かに膨らむフラット状をなし片切彫りによる圏線を確認できる。高台は低く、高台畳付の側面を三角に削り出す。釉の広がりは全面に施釉後外底面の釉を輪状に削り取っている。釉色は薄灰青緑色を呈する。底径7.2㎝。墓室出土。

白磁（第132図136、137・図版44－383、384）

９点出土し碗、小碗、皿がある。碗は胴部１点、底部１点の２点が出土、小碗は口縁２点、胴部１点、計３点が出土している。第32図136・図版44－383は胴部から僅かに開きながら立ち端反り口縁をなす小碗である。口唇は尖り露胎させる。口径8.0㎝。石積出土。第32図137・図版44－384は底形が抉り高台を成す、直口の皿であり完品資料である。口唇は舌状を呈し、高台は４箇所に弧状の抉り込みを入れる。内面に重ね焼きの目跡を残す。釉は細い貫入を多く伴い高台際まで施釉、高台および高台内を露胎させている。生産年代は15世紀後半に位置付けられる。口径9.6㎝、器高2.3㎝、底径4.2㎝。墓室入口出土。

染付（第32図138、139・図版44－385、386）

21点出土し碗、小碗、皿、小杯があり年代は概ね17～19世紀に位置付けられる。碗は９点、小碗が３点出土した。第32図138・図版44－385は胴部にやや丸みを持ち、僅かに開きながら立ち上がり口縁は直口を示す。口縁上部体面に２条の圏線を廻らし外体面に丸文と草花文を交互に施す。口径15.2㎝。撹乱層出土。皿は８点であった。杯は第32図139・図版－386に示す１点が出土。完品の杯である。図139は腰部に丸みを持ち胴部はやや開き直に立ち上がる。口縁は直口、口唇は舌状を成す。口縁外体に１条の圏線と花唐草文を施文、口縁内に１条の圏線、見込みに圏線と花卉が施される。高台の内刳りは円筒状、畳付けの両側から僅かに削り出し角張る。釉は高台脇まで施釉している。産地は景徳鎮窯。生産年代は16世紀末から17世紀前半に位置付けられる。口径5.0㎝、器高3.0㎝、底径1.9㎝。墓室出土。

本土産陶磁器（図版45－387、388）

肥前系染付の碗、底部と胴部が２点のみ出土している。生産年代は17世紀後半に位置付けられるものと19世紀に位置付けられるものがある。印判手には瀬戸・美濃産の銅版転写の碗とゴム判の小碗が出土している。図版45－387は銅版転写による碗で高台から胴部が逆八の字状に開き口縁は直口を成す。外体面に扇子を複数組み合わせ描く。図版45－388はゴム判の小碗である。胴下部に丸味を持ち口縁に向かい真っ直ぐに立ち上がる。文様は

Ⅶ類ａ。陶器は内野山窯の銅緑釉碗と薩摩産の壺が出土している。

沖縄産施釉陶器（第33図140～142・図版45－389～392）

総数32点が出土している。器種別にみると碗、皿、壺、鉢などが出土した。第33図140・図版45－389は碗の底部である。外面は鉄釉、内面は白釉の掛け分けで内底を蛇の目釉剥ぎし、外底は畳付のみ釉剥ぎしている。墓室より出土。第33図141・図版45－390は皿の底部である。黒釉単掛けで外面は腰部まで施釉しているが、高台の一部に釉垂れがみられ、内底は蛇の目釉剥ぎする。墓室より出土。第33図142・図版45－391は壺の口縁部～胴部である。黒釉単掛けで内面は一部無釉、口縁部は逆「L」字状に外反し、口唇部を釉剥ぎする。頸部が長く胴部が緩やかな丸味をもつ。墓室より出土。図版45－392は鉢の口縁部である。外面鉄釉、内面白釉の掛け分けで口縁部は逆「L」字状を呈する。撹乱層より出土。

沖縄産無釉陶器（第33図143～146・図版45－393～397）

総数39点が出土している。器種別にみると水滴、甕、壺、擂鉢などが出土した。第33図143・図版45－393は喜名焼の水滴である。完形だが、注口の先端のみ欠けている。藁灰釉掛けで、胴下部まで施釉。肩部が強く張り出す器形。喜名焼壺直下（図134）より出土。第33図144・図版45－394は擂鉢の口縁部である。口縁部が逆「L」字状を呈し、口唇部の幅が広い。内面に櫛目を密に施し、口縁部上部から胴部の一部をナデ消す。撹乱層より出土。図版45－395は甕の口縁部である。口唇両端が張り出し、口縁部断面が逆三角形を呈する。口縁部に圏線を２条、胴部に凸帯を１条廻らせる。撹乱層より出土。第33図145、146・図版45－396、397は壺である。図145・図版45－396は底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる器形で、内面に多量の漆喰が付着している。内面にロクロ痕がみられる。墓室より出土。図146・図版45－397は小型で底部から胴部へ丸味を持ちながら立ち上がる器形で、内底の器壁が内側にもりあがり、歪な形になっている。胴部には圏線を２条廻らす。墓室より出土。

陶質（図版45－398～401）

13点出土し鉢、擂鉢、火炉、鍋などがある。図版45－398は口縁が玉縁状を成す内彎の火炉である。墓室表土出土。図版45－399は口縁が断面「く」の字状に屈曲する鍋である。紐状の把手を貼付している。口径18.9㎝。墓口付近出土。図版46－400は胴部の丸い火炉で底部は高台を削り出す。外体面に化粧土を横縞状に廻らす。底径7.3㎝。墓前出土。図版46－401は火炉の半円状の把手で中心に円孔を穿つ。墓室表土出土。

銭貨（第33図147～151・図版46－402～406）

模鋳銭が１点、無文銭が４点出土している。第33図150・図版46－402は模鋳銭である。年代は不明。銭径19㎜、孔径7.0㎜、銭厚1.3㎜、重量1.1g。墓室より出土。第33図147～149、151・図版46－403～406は無文銭である。図147・図版403は銭径19㎜、孔径7.0㎜、銭厚0.7㎜、重量1.1g。墓室より出土。図149・図版46－404は銭径11㎜、孔径7.0㎜、銭厚1.0㎜、重量1.3g。墓室より出土。図151・図版46－405は銭径22㎜、孔径6.0㎜、銭厚1.9㎜、重量2.7g。墓室より出土。図148・図版46－406は２分の１が破損。銭厚1.3㎜、重量(0.7)ｇ。墓室より出土。

金属製品（第34図152～159・図版46－407～414）

第34図155・図版46－407は鉄製板状製品であるが破損が著しいため詳細は不明。縦長(4.9)㎝、横長(1.95)㎝、厚さ0.15㎝、重量(2.6)ｇ。墓口付近出土。第34図153・図版46－408は円形の座である。中央に方形の孔を有する。縦径1.34㎝、横径1.36㎝、厚さ0.1㎝、重量(0.3)ｇ。墓室出土。第34図152・図版46－409は男性用の副簪。縦長(7.7)㎝、横長0.2㎝、厚さ0.15㎝、重量(1.1)ｇ。墓室出土。第34図154・図版46－410は鉄製の二股釘状の製品であるが詳細は不明である。縦長(2.6)㎝、横長0.5㎝、厚さ0.4㎝、重量(2.0)ｇ。墓室出土。第34図156・図版46－411は、はさみの刃先である。縦長(5.6)㎝、横長1.35㎝、厚さ0.55㎝、重量7.2g。墓室出土。第34図159・図版46－412は鋏である。縦長12.0㎝、横長3.0㎝、厚さ0.85㎝、重量33.1g。墓口付近出土。第34図157・図版46－413は鉄製角釘である。縦長(5.7)㎝、横長1.4㎝、厚さ1.1㎝、重量(21.4)ｇ。墓室出土。第34図158・図版46－414は頭部形が逆Ｌ字状になる鉄製角釘である。縦長3.7㎝、横長0.5㎝、厚さ0.5㎝、重量1.4g。墓室出土。

煙管（第34図160、161・図版46－415、416）

２点出土している。ともに部位は雁首、材質は沖縄産施釉陶器でいずれも８角形に成形される。第34図160・図版46－415は火皿径1.3㎝、長さ3.9㎝、重量8.2ｇ。墓室より出土。第34図161・図版46－416は火皿径1.4㎝、長さ4.2㎝、重量9.3ｇ。墓室より出土。

碁石（図版47－419）
　碁石が白６個、黒が11個の計17個が出土した。白が貝製、黒が石製である。現代遺物と考えられる。

形象物（第34図164・図版46－417、図版47－418）
　第34図164・図版46－417は陶質土器の型押しの人形で裃姿に頭巾をかぶる猿の座像と考えられる。高さ3.3㎝、幅2.0㎝、重量5.3ｇ。墓口撹乱層出土。図版47－418は帽子をかぶりスカートにスモック様の上着姿の人形で陶質土器の型作りによるものと考えられる。高さ16.0㎝、幅4.38㎝、重量(72.2)ｇ。墓室出土。

石製品（第34図165・図版47－420）
　石製品が１点出土した。全体に彫刻のような刃物痕を認めるが砥石の可能性もある。緑色項岩製で破損のため全体形不明。縦長(8.0)㎝、横長2.7㎝、厚さ1.3㎝、重量(44.5)ｇ。墓室内出土。

円盤状製品（図版47－421～423）
　７号墓から出土した円盤状製品は３点で詳細は下の表の通りである。

第24表　第７号墓円盤状製品観察表

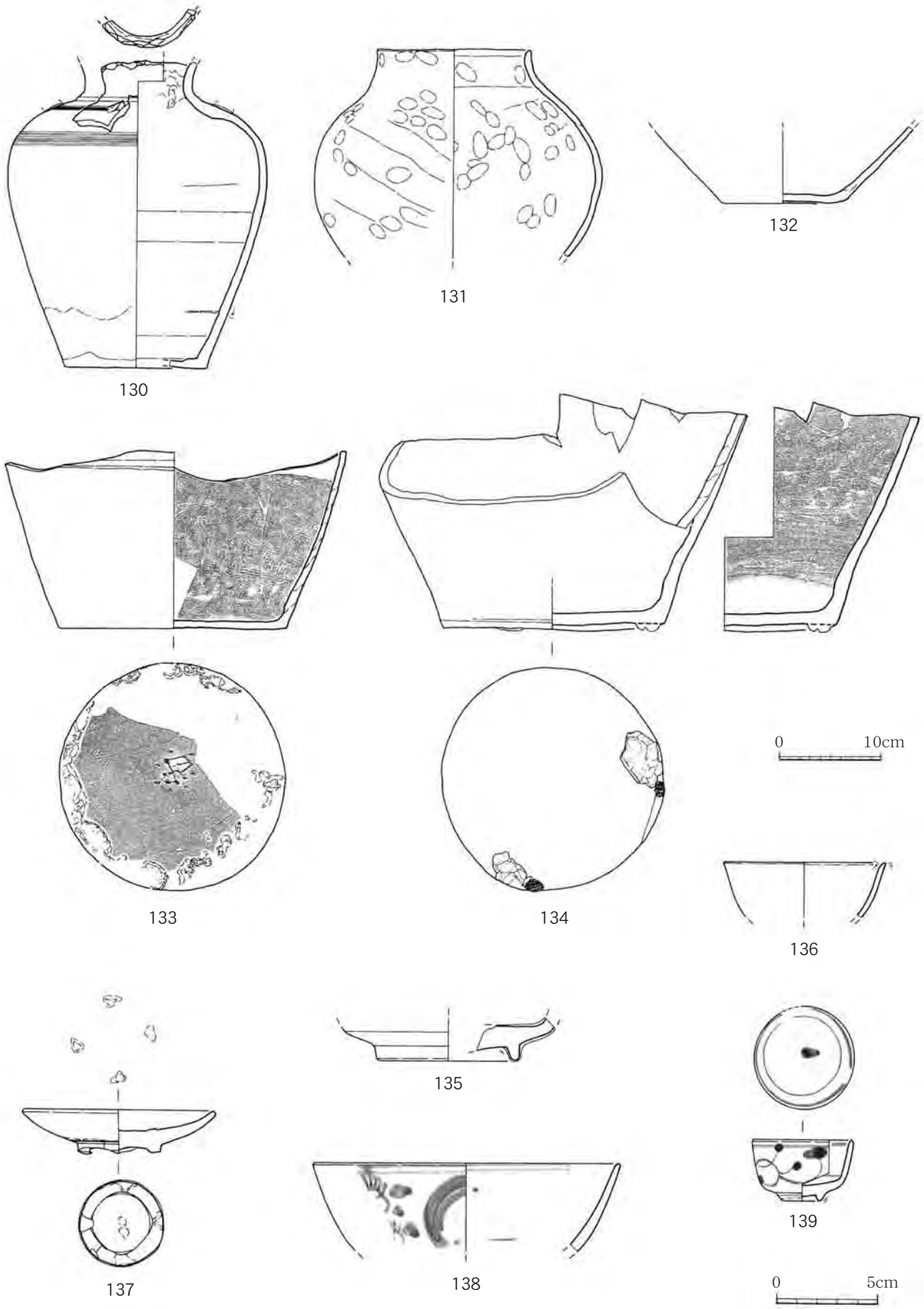
単位：mm、g

図版番号		状態	長径	短径	厚さ	重量	素材	使用部位	観　察　事　項	出土地
図版47	421	完形	32.2	30.6	11	15.9	沖縄産無釉陶器	胴部	円形に加工したようだが剥離が粗い為、方形を呈している。表面に２条の沈線が確認される。	撹乱
	422	完形	48.6	43.3	13	32.2	沖縄産無釉陶器	胴部	円形、剥離が粗い。表裏ほぼ同じ割合で打割調整されている。器厚から壺又は甕を転用した物と思われる。	撹乱
	423	完形	63.2	59.5	13.5	75	沖縄産無釉陶器	胴部	楕円形、剥離は粗い。断面はやや内湾している事と器厚から壺又は甕を転用した物と思わせる。	撹乱

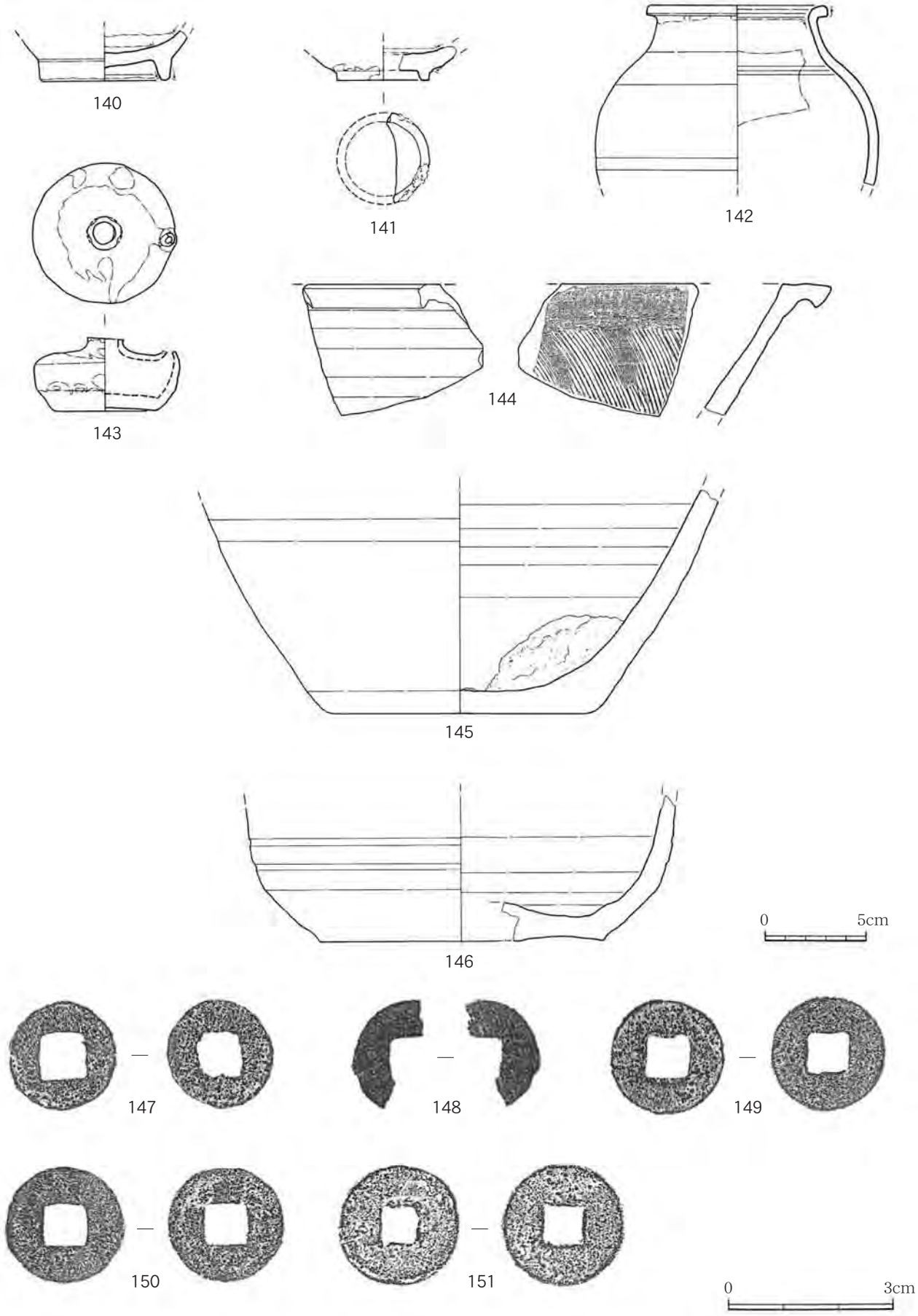
貝製品（第34図166・図版47－424）
　ヤコウガイ製匙状製品が１点出土している。身の部分のみの欠損品である。外面は丁寧に研磨され、内面は真珠層が露胎している。最大長(7.3)㎝、最大幅(3.8)㎝、重量(30.2)ｇ。墓室より出土。

骨製品（第34図162、163・図版47－425、426）
　ハブラシと箆状製品が出土している。第34図162・図版47－425はハブラシ部から頚部にかけて残す折損品である。ハブラシ頭部は先端がやや尖った楕円形を成し頚部に向かい徐々に細くなる。ハブラシ部の断面形は長方形で柄部は上部に丸みを持つ、かまぼこ状をなす。ハブラシ部上面は平坦を成し、頭部先端に植毛孔が４つ、上面に４列に穿たれる。縦長(7.2)㎝、横長1.4㎝、厚さ0.8㎝、重量(6.2)ｇ。墓口出土。第34図163・図版47－426方形箆状をなす扁平な板状製品である。縦長(2.5)㎝、横長0.6㎝、厚さ0.3㎝、重量(0.3)ｇ。墓室出土。

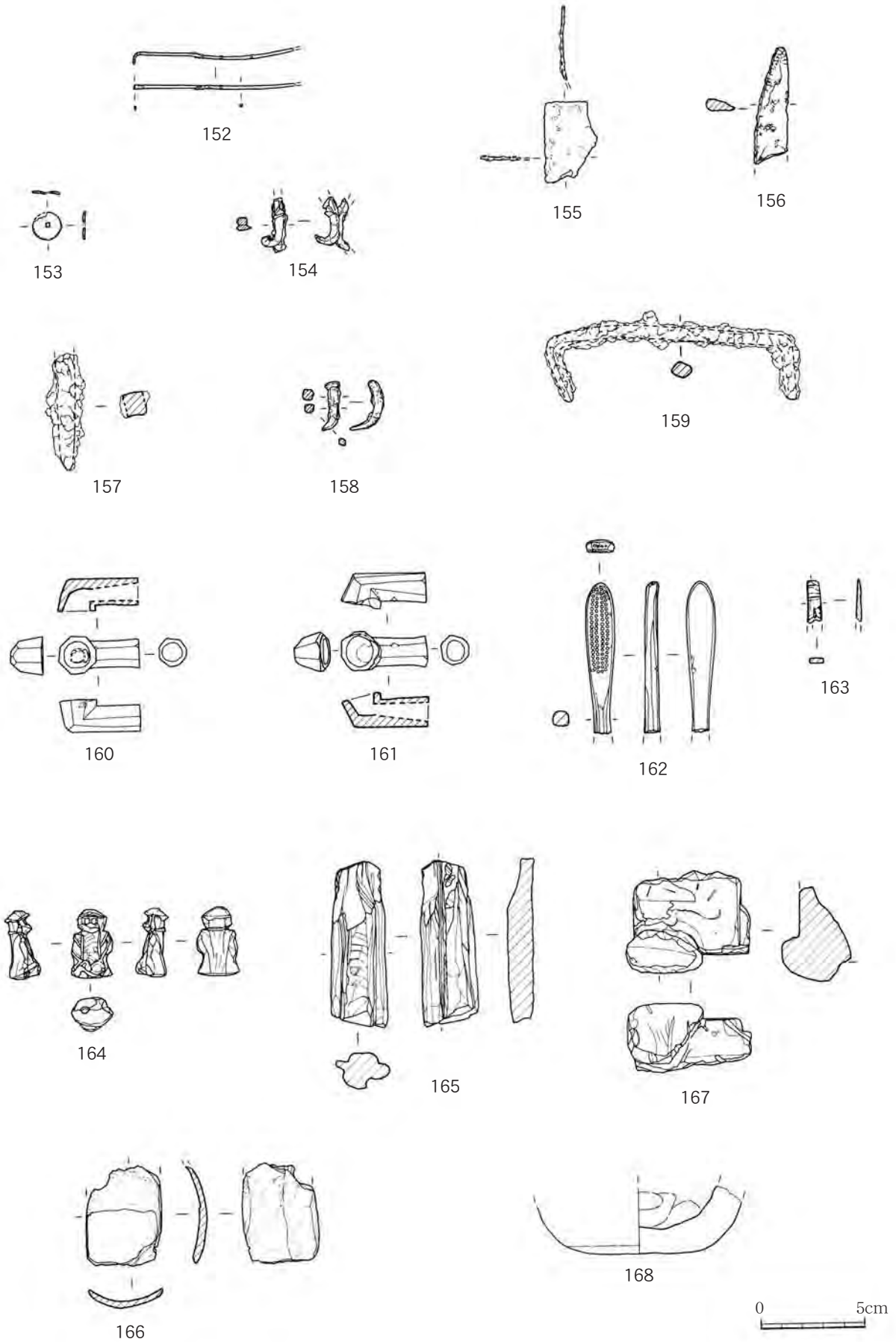
その他の製品（第34図167、168・図版47－427、428）
　第34図167・図版47－427は方形の面を持ち瘤状の突起を有する。方形の香炉か棺が考えられる。西側黄色土出土。第34図168・図版47－428は丸碗状の製品で平底を成す。型押しによる成形が考えられる。墓室出土。いずれも漆喰の製品である。用途は不明。



第32図　第７号墓出土遺物（１）

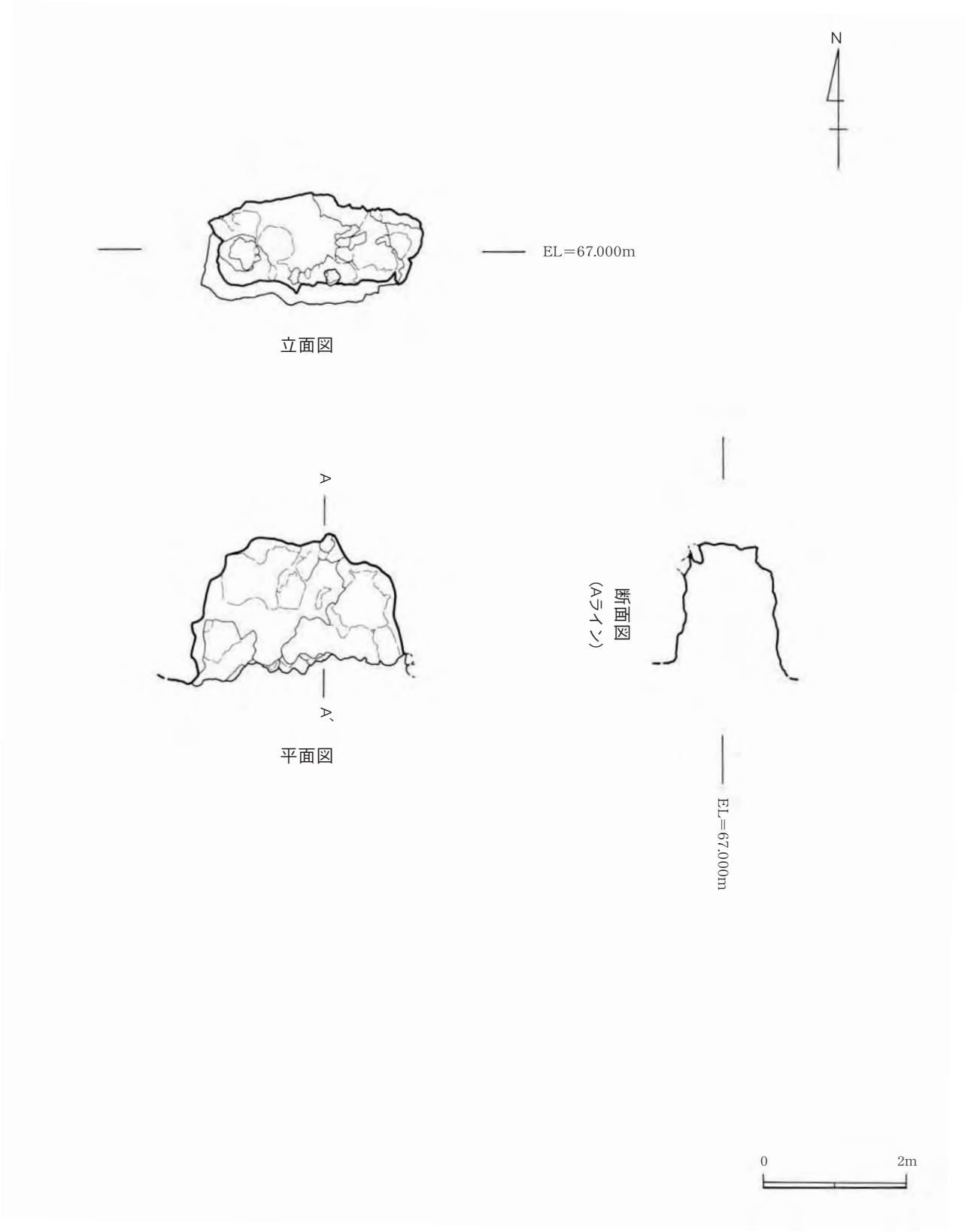


第33図　第７号墓出土遺物（２）



第34図　第７号墓出土遺物（３）

第８節　第８号墓



第35図　第８号墓実測図

第25表　第８号墓遺構表

挿図番号		第35図
図版番号		図版７～８
位　　置		X=23,411.000　Y=21,850.000　EL=66.800m
構造	形 状	掘込墓または沖縄戦時の地下壕か。
	規 模	岩盤の掘り込みは東西長径2.9m、南北長径1.6m、高さ１～1.2m。平面形は半円形となる。出入口の石積みは東西方向に伸び、東端で南へ折れるＬ字状となる。全長約5.8m 高さ1.5～1.9m で自然石を積み上げる。石材は大小、様々で積み方は非常に雑である。
	工 法	天井、壁は粗加工で床面は平坦に仕上げている。
	内部の状況など	墓室からは薬莢がまとまって出土。他に軍靴のゴム底が１点、人骨も少量ながら出土している。沖縄戦時、戦後の撹乱層のみ墓室に堆積しており、墓に関連した遺物を確認することはできなかった。
	時 期	沖縄戦時には壕として利用。
備　　考		岩盤掘り込みのすぐ南側、石積み下には竪穴が見られる。沖縄戦時、戦後の流土でほとんど埋没している。今回の調査では安全面の問題から全掘することはできなかった。周辺は沖縄戦時に使用された地下壕が配置されていたことから、この竪穴は旧日本軍が構築した地下壕の可能性が考えられる。当時この周辺の状況について詳しい内間伸氏による聞き取りでは入口に石積みで閉塞した壕をいくつか構築したとのことである。

第26表　第８号墓出土状況一覧

遺物／出土地	青磁	白磁	染付	中国産	その他の輸入陶磁器				本土産陶磁器					沖縄産陶器		陶質土器	瓦質土器	土器	銭貨	金属製品	煙管	碁石	円盤状製品	その他の遺物	合計
				褐釉	色絵	三彩	無釉陶器	瑠璃釉	磁器	陶器	印判手	クロム青磁	不明	施釉	無釉										
墓　　口	2	43	94	8	4	1	1	6	12	10	26	1	5	261	67	67		14		7	1	2	7		639
墓　　室		4	4	1	3						4			22	14	9	1	16	1	5	1	13		1	99
合　計	2	47	98	9	7	1	1	6	12	10	30	1	5	283	81	76	1	30	1	12	2	15	7	1	738

第８号墓出土遺物

蔵骨器（第36図169、170・図版48－429、430）

第36図169・図版48－429土器。頸部が屈曲し、外反する壺口縁部資料。器面調整は外面には指圧痕と雑な横ナデが見られる。内面はアバタ状となる。色調は内面が橙色、外面が黒色となる。混和材は白色細砂粒、大粒の赤色粒が見られる。墓口出土。

第36図170・図版48－430土器。立ち上がりはラッパ状に大きく開くやや厚手の壺底部資料。器面調整は内面には指圧痕と雑な横ナデが見られる。外面胴部及び外底面には多量の漆喰が付着している。色調は内面が橙色、外面は黒色となる。混和材は大粒の赤色粒が少量と白色細砂粒が多量に見られる。底径16.4㎝。石積内出土。

白磁（図版48－431～437）

54点が出土した。器種は碗、小碗、皿、杯がある。碗は７点の出土である。図版48－431は胴部が直に立つ直口の碗である。口唇は丸く胎土は白色、釉色は灰白色を呈する。口径12.0㎝。墓室出土。小碗は33点出土した。図版48－432は胴部に丸みを有し直に立つ端反り口縁の小碗である。口唇は尖り口唇内側に鉄釉の覆輪を施す。胎土は白色、釉色は灰白色を呈する。口径8.9㎝。石積内出土。図版48－433は胴部が直に立つ端反口縁の小碗。

口唇は尖り外体面に雲文の陽刻を型押し、胎土は白色、釉色は青白色を呈する。墓口出土。図版48－434は型押し成形の小碗底部である。胎土は白色を呈し釉色は薄青白色を呈する。底径3.4㎝。墓口出土。小杯は５点出土している。図版48－435は胴部が直に立ち上がる直口の杯である。口唇は丸く収める。胎土は白色、釉色は灰白色を呈する。口径4.1㎝。墓口出土。皿はほぼ全形を窺えるもの２点と破片が３点の計５点が出土した。図版48－436は高台脇から外側に向かい直線的に開き口縁は直口を成す。内底面は有段になり僅かに窪む。高台は畳付けを三角に削り出す。胎土は灰白色、釉色は青灰白色を呈する口縁に煤が付着、口径7.54㎝、器高1.8㎝、底径2.8㎝。墓口出土。図版48－437は腰部に丸みを有し緩やかに開く外反口縁の皿で型押し成形によるものである。胎土は灰白色、釉色は青灰白色を呈する。口径8.8㎝、器高2.1㎝、底径5.9㎝。墓口出土。

染付（図版48－438～445）

123点で出土、器種は碗、小碗、皿、大鉢、小杯、瓶、蓋物があり生産年代は18世紀代に位置付けられる。

碗は69点であった。図版48－438は内彎気味の直口口縁碗である。外体面に一条の圏線と雨龍を配する口径15.1㎝。墓口出土。図版48－439は胴部にやや丸みを持つ端反り口縁碗である。外体面に一条の圏線を廻らし更に唐草文を施す。口径12.3㎝。墓口出土。図版48－440は高台形が四角を呈する碗底部である。見込みに施文するが不明。釉は畳付けを除き全面に施釉後内底面の釉を蛇の目状に掻き取っている。高台内畳付け際に砂目が認められる。底径6.4㎝。墓口出土。小碗は22点出土している。図版48－441は胴部にやや丸み有し僅かに開き立つ端反口縁の小碗。口唇は角張る。外体面に二条の圏線と菊花文を施文。口径9.4㎝。撹乱層出土。図版48－442は胴下部に丸みを持つ小碗である。高台は畳付の外側を斜めに削り出し三角状を成す。外体面の文様は高台際に圏線と仙芝祝寿文を施文。見込みに花卉、外底面は二条の圏線内に簡約した銘款を配する。釉は畳付けの釉を掻き取っている。皿は計26点出土した。図版48－443は腰部の丸い直口の小皿である。見込みに施文するが文様は不明。墓口出土。図版48－444は腰部に丸みを有し開らくように立ち上がる。口縁は外反口唇が丸い。外体面に一条の圏線と草花文を配し内体面に一条の圏線と草花文、見込みに二条の圏線と草花文を施文する高台は畳付の外側を斜めに削り出し三角状を成す。撹乱層出土。瓶は胴部が２点出土している。図版48－445は外体面に花弁状の文様を施文するものである。墓口出土。

褐釉陶器（第36図171・図版48－446）

第36図171・図版48－446タイ産褐釉陶器。口縁部を外反させ玉縁状となる。口縁部上面に段をつくる。蓋受けか。口縁部から頸部にかけて横位の成形痕が見られる。内外面共にオリーブ黄色の釉を口縁部と頸下部に施す。胎土は密で赤・白・黒色粗粒子、気泡が多く見られる。口径18.5㎝。撹乱層出土。

その他の輸入陶磁器（図版48－447～450，図版49－451～453）

中国産色絵９点、瑠璃釉９点、三彩１点、無釉陶器１点、タイ産半練土器１点が出土している。器種別には色絵が碗、小碗、皿、瑠璃釉は小碗、小杯があり、三彩、無釉陶器に袋ものと思われる資料が出土している。タイ産半練土器は壺が出土している。図版48－447は色絵碗の胴部破片である。外体面に圏線を挟んで上に赤色の雲文、下に青の上薬で草花文の上絵を描く。胎土は白色を呈し釉色は青白色を呈する。生産年代は18世紀後半から19世紀初頭。墓口出土。図版48－448は色絵の皿である。胴部は外に開き口縁は端反る。低めの高台はやや三角に削り出している。内底面は蛇の目剥ぎし花文と丸窓に（笹）草文の文様を繰り返し上絵付している。文様は主に内体に施すが釉剥ぎした露胎面まで及ぶ。胎土は白色を呈し、釉色は緑灰白色を呈する。口径13.7㎝、器高2.0㎝、底径1.7㎝。墓口出土。図版48－449は胴部に丸味を有し開きながら立つ外反口縁の色絵皿である。高台は内刳りが外に向かい斜行、型押し成形によるものと考えられる。釉は高台内と口唇を除き施釉している。内体面に赤の上薬で梅文が絵付され、見込みに圏線を緑の上絵付で施している。胎土、釉色ともに灰白色を呈する。口径11㎝、器高２㎝、底径7.7㎝。石積内出土。図版48－450は瑠璃釉の小杯である。胴下部に丸みを有し直に立つ端反口縁を成す。高台の内刳りは外に向かい斜行、型押し成形によるものと考えられる。口禿で内面に透明釉、外面に瑠璃釉を施し胎土は白色を呈する。生産年代は18世紀から19世紀前半。口径3.7㎝、器高２㎝、底径1.7㎝。墓口出土。図版49－451は瑠璃釉の鉢である。胴部は丸く口縁で内彎、口縁は内側に肥厚させ納める。底は幾つかの脚が付くものと考えられる。内体面に透明釉、外体面に瑠璃釉を施し脚の内側の底面を露胎させる。胎土は白色を呈する。生産年代は15世紀から16世紀。口径21.8㎝、器高13.1㎝、底径8.8㎝。撹乱層出土。図版49－452は三彩の型押し成形によるものである。水鳥型の置物や水滴が考えられる。墓口出土。図版49－453は無釉陶器の型押しの袋ものか摘みが考えられる。産地は宜興窯。生産年代は清朝時代。墓口出土。

本土産陶磁器（第36図172～174･図版49－454～459, 図版50－460～473, 図版51－475）

肥前系の染付、色絵、内野山窯陶器、関西系陶器、薩摩産の染付、陶器、印判手や瀬戸・美濃産染付、クロム青磁などの近現代陶磁器も多く出土している。肥前系染付は総数13点が出土し器種としては碗、皿、蓋、植木鉢がある。生産年代は概ね17世紀～19世紀に位置付けられる。図版49－454は外体面に草文と虎の尾の様なものを描き動物の足型（ネコ）の脚をもつ植木鉢である。底面中央に孔を一つ穿ち、円形の焼け焦げような痕をのこす。生産年代は19世紀に位置付けられる。底径17.9㎝。撹乱層出土。図版48－455は肥前系の色絵の蓋である。甲部外面に呉須描きの圏線と環状の帯文を数回廻らし間に七宝文の上絵を絵付けしている。生産年代は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。甲縁径8.6㎝。墓口出土。図版49－456は関西系の彩色の皿である。上絵のみの絵付けを施している。生産年代は18世紀に位置付けられる。墓口出土。図版49－457は瀬戸・美濃産の色絵の小瓶である。口径1.89㎝。墓口出土。薩摩産褐釉陶器の壺は14点出土した。大型な壺であることなどから蔵骨器として使用した可能性もあるが殆どが破片での出土と言うこともあり判然としない。第36図173、174･図版49－458、459は底部から筒状に立ち上がり口縁は外に折り返すように肥厚させる。図459は平底の中央に凹状の窪みを有し穿孔しても使用可能な製品である。外内体面はいずれも横位の条痕がはしり器面調整を窺わせる。図458、459は接合ができなかったが一括出土であり一個体と考えられる。底径16.2㎝、孔径2.7㎝、石積内出土。第36図172･図版50－460はやや小さめの壺の口縁である。口縁は頸部が一旦内に窄まったあと外に折り返すように外反させる。口唇はやや扁平をなし貝目痕がのこる。口径11.5㎝。撹乱層出土。図版50－461は肩がはり頸部は一旦窄まり立つ。口縁は外に折り返すように肥厚させるもので口唇は扁平状を成す。大型な壺の口縁と考えられる。口径20㎝。墓口出土。図版50－462は平底の壺の底部である。底面に貝目痕をのこしている。底径19.6㎝。墓口出土。印判手は肥前系の型紙摺の碗11点と銅版転写の大皿１点、瀬戸・美濃産の銅版転写の小碗と皿17点、ゴム判の碗、小碗、皿が８点出土している。図版50－463、464は肥前系の型紙摺の碗である。463は外反の碗、文様はⅡ類３ロに属する。464は直口の碗である文様はⅡ類２に属する。図版51－475は肥前系の銅版転写の大皿である。広い底面を持ち外に開き立ち上がる。口縁はイゲ縁を呈し鉄釉を施す。内体面の文様は逆台形の窓内に松、竹、梅、菊を配し、地文は雲文を描いている。内底面は雷文を管状に廻らし中央に捻子状の草花文を配している。口径31.4㎝、器高4.5㎝、底径19.1㎝。墓口出土。図版50－465～469は瀬戸・美濃産の銅版転写である。465、466は端反の小碗で文様は465がⅠ類、466はⅡ類に該当する。467、468は直口の小皿で469は皿底部である。文様構成はH、468はⅤ類、469はEに該当する。図版50－470～473は瀬戸・美濃産のゴム判である。470は外反する口縁碗である。文様はⅤ類に属する。471は直口の小碗である文様はⅥ類である。472は口縁が直口する皿である見込みに仙芝祝寿文を施す。473は直口の大鉢である外体面に渦巻き、内面に桐と鳳凰をゴム判により施文、余白に筆のだみを入れる。

沖縄産施釉陶器（図版50－474, 図版51－476～480, 図版52－481）

総数95点が出土している。器種別にみると碗、小碗、皿、鉢、鍋、急須、火炉などが出土した。図版50－474は碗の口縁部～底部、図版51－476、477は口縁部～底部である。いずれも腰部に丸味をもつ器形。474は外面が鉄釉、内面は灰釉の上から胴部半ばまで鉄釉をかけ、その下に圏線を１条、内底に丸文を施す。腰部がやや丸味をもち、口縁部が外反する器形である。内底は蛇の目釉剥ぎで外底は露胎。一部に釉が掛かっている。石積内より出土。476は白釉単掛けで、外面に呉須で草花文を施す。腰部の張りが強い器形である。内底は蛇の目釉剥ぎで白土が附着、外底は畳付のみ釉剥ぎする。墓口より出土。477は小碗の口縁部～底部で、腰部が丸味をもつ器形。直口口縁で、両面に細かな貫入が入り、底部は畳付に白土の剥離痕がみられる。墓室より出土。図版51－478は皿の口縁部～底部である。外面は口縁部～腰部、内面は口縁部のみ鉄釉を施釉、畳付けには砂目がわずかに附着する。石積内より出土。図版51－479は鉢の底部～胴部である。外面は鉄釉、内面は白釉の掛け分けである。胴部が緩やかな丸味をもつ器形で、内底は蛇の目釉剥ぎ、外底は釉を指で雑に掻き取っており、高台脇には一部釉が掛かっている。両面に細かな貫入が入る。撹乱層より出土。図版51－480は鍋の口縁部～胴部である。外面は灰釉、内面は白釉の掛け分けである。口唇部が「く」の字状に外反し、胴部の張りは弱い。外底は露胎、内底は蛇の目釉剥ぎする。墓口より出土。図版52－481は急須の口縁部～胴部である。白釉単掛けで外底は足まで施釉し、口唇部は釉剥ぎする。器形は丸型で両面に細かな貫入が入る。墓口より出土。

沖縄産無釉陶器（図版52－483～488, 図版53）

総数309点が出土している。器種別にみると壺、甕、擂鉢、瓶、炉などが出土した。図版52－482～485は壺である。482は三耳壺である。外面には泥釉が掛けられて黒褐色を呈し、内面にもわずかに釉垂れがみられる。肥厚口縁で肩部から胴部が丸く膨らむような器形。圏線が２条施される。撹乱層出土。483は四耳壺である。肥厚

口縁で、肩部が強く張る器形である。石積内出土。 484は頚部～胴部である。器面に泥釉が掛けられ、外面は暗茶褐色、内面は灰黒色を呈す。胴部の張りが弱い器形で、頚部から胴上部にかけて圏線が６条めぐらされており、また胴部には「⋔」という記号が彫られている。内面には輪積み痕が明瞭に残る。石積内より出土。485は底部である。丸形の器形で、内面にロクロ痕が明瞭に残っている。撹乱層より出土。図版52－486～488は甕の口縁部である。486は口唇両端が張り出し、口縁部断面が逆三角形を呈する。口縁部に２条、口縁上部に１条圏線をめぐらせる。また胴部には丸文を貼り付け、その下に凸帯をめぐらせる。撹乱層より出土。487は口縁部が逆「L」字状を呈し、口唇部の幅が広い。口縁部に圏線を１条めぐらせる。墓口より出土。488は口縁部が逆「L」字状を呈し、口縁部断面が方形をなす。また口縁上部に圏線を２条めぐらせる。いずれも撹乱層からの出土。図版53－489、490は口縁部が逆「L」字状を呈し、口唇上面に圏線を１条めぐらせる。内面には櫛目を密に施す。489には注口が残存する。いずれも撹乱層より出土。図版53－491は底部で、底部から胴部へゆるやかにたちあがる器形である。内面に櫛目を密に施す。石積内より出土。図版53－493は炉の底部である。底部はベタ底で、器形は円筒形になると思われる。空気入れと思われる窓があり、内面には凹みのある凸帯がめぐらされている。また、細かな煤の粒子が付着している。撹乱層より出土。図版53－492は方形の貼り付け文様と思われる。器面にはナデ調整のあとが明瞭にみられ、ひらたく調整されている。石積内出土。

陶質（図版54－494～501）

115点出土し器種の殆どが日常雑器類である。図版54－494は口縁が鍔縁状の外に開く鉢である。口径17.8㎝。撹乱層出土。図版54－495は鍋口縁である。胴部は丸みを持ち内彎、口縁は断面形態が「く」の字状に外側に屈曲させる。墓口出土。図版54－496は甲部が笠状に広がる鍋の蓋である。甲縁径15.8㎝。墓口出土。図版54－497は筒形火炉である。口唇は平坦になり断面形がバチ状に肥厚している。内側面から容器を乗せるための突起（五徳）がみられる。口径14.3㎝。墓口出土。図版54－498は火炉の底部である。丸い胴に底部は高台を削り出す。外体面に化粧土を横縞状に廻らす。底径12㎝。墓室出土。図版54－499は断面形が凹形の蓋である。円孔を数個有し中央部には摘みを持つものである。火炉の落とし蓋が考えられる。甲縁径9.4㎝。撹乱層出土。図版54－501はサイズ的に土瓶の蓋が考えられる。墓口出土。図版54－500は甲部に深見がなくやや扁平、土瓶の蓋が考えられる。甲縁径10.8㎝。墓口出土。

瓦質（図版54－502）

火炉が２点出土している。図版54－502は腰部に丸味を持ち胴部はやや開きながら立ち上がり口縁に至る。口縁は内彎状を示し僅かに肥厚する。口唇は舌状を成す。底部は蛇の目高台を削りだしている。胴部外体面に櫛により横位に二条の水平の線と八条の波状文を櫛描きしている。器種は火炉であるが蔵骨器として使用した可能性が考えられる。口径17.3㎝、器高17.7㎝、底径15.5㎝。墓室出土。

銭貨（第36図175・図版55－503）

有文銭１点、無文銭１点、現代銭２点が出土した。第36図175・図版55－503は有文銭である。完形で、銭名は擁正通寶。裏面に満文を置く。時代は清で、初鋳年代は1736年である。銭径24㎜、孔径５㎜、銭厚1.5㎜、重量4.1g。撹乱層より出土。無文銭は墓室より出土。現代銭はともに５円で初鋳年代は昭和。撹乱層より出土。

金属製品（第36図176・図版55－504, 図版55－505～509）

第36図176・図版55－504は銅製の座と紐を通す為に輪状にした鋲である。鋲は先端が二股になっている。座：孔径2.8㎝、厚さ0.04㎝、鋲：縦長2.2㎝、重量(2.5)g。石積内出土。図版55－505は男性の副簪である銅製の簪である。縦長(9.18)㎝、横長0.27㎝、厚さ0.27㎝、重量(4.2)g。墓室出土。図版55－506は断面形が長方形になる箱状の製品で一方の端部が馬蹄形に抉れている。縦長(3.66)㎝、横長(1.87)㎝、厚さ0.05㎝、重量(7.2)g。図版55－507はL字状のフックの様な外観を持つもので一方の先端は錐状に尖がる。断面形は方形、鋲の一種と考えられる。縦長6.5㎝、横長0.49㎝、厚さ0.43㎝、重量9.7g。墓口出土。図版55－508、509は鉄製角釘である。508は縦長(5.5)㎝、横長(0.79)㎝、厚さ(0.84)㎝、重量12.4ｇ。墓口付近出土。509は縦長(4.2)㎝、横長0.57㎝、厚さ0.41㎝、重量4.1g。石積付近出土。

煙管（第36図177、178・図版55－510、511）

２点出土している。第36図178・図版55－511は沖縄産施釉陶器の雁首で、八角形に成形される。火皿径２㎝、長さ4.8㎝、重量14.8ｇ。墓室より出土。第36図177・図版55－510は沖縄産施釉陶器産の小口で、外面に呉須で施

釉しており、形は筒形である。最大長(1.2)㎝、重量(0.9)ｇ。墓口より出土。

碁石（図版55－512）
　黒の碁石が18個出土、石製である。現代遺物と考えられる。

円盤状製品（図版56－513～518）
　８号墓から出土した円盤状製品は12点で詳細は下の表の通りである。

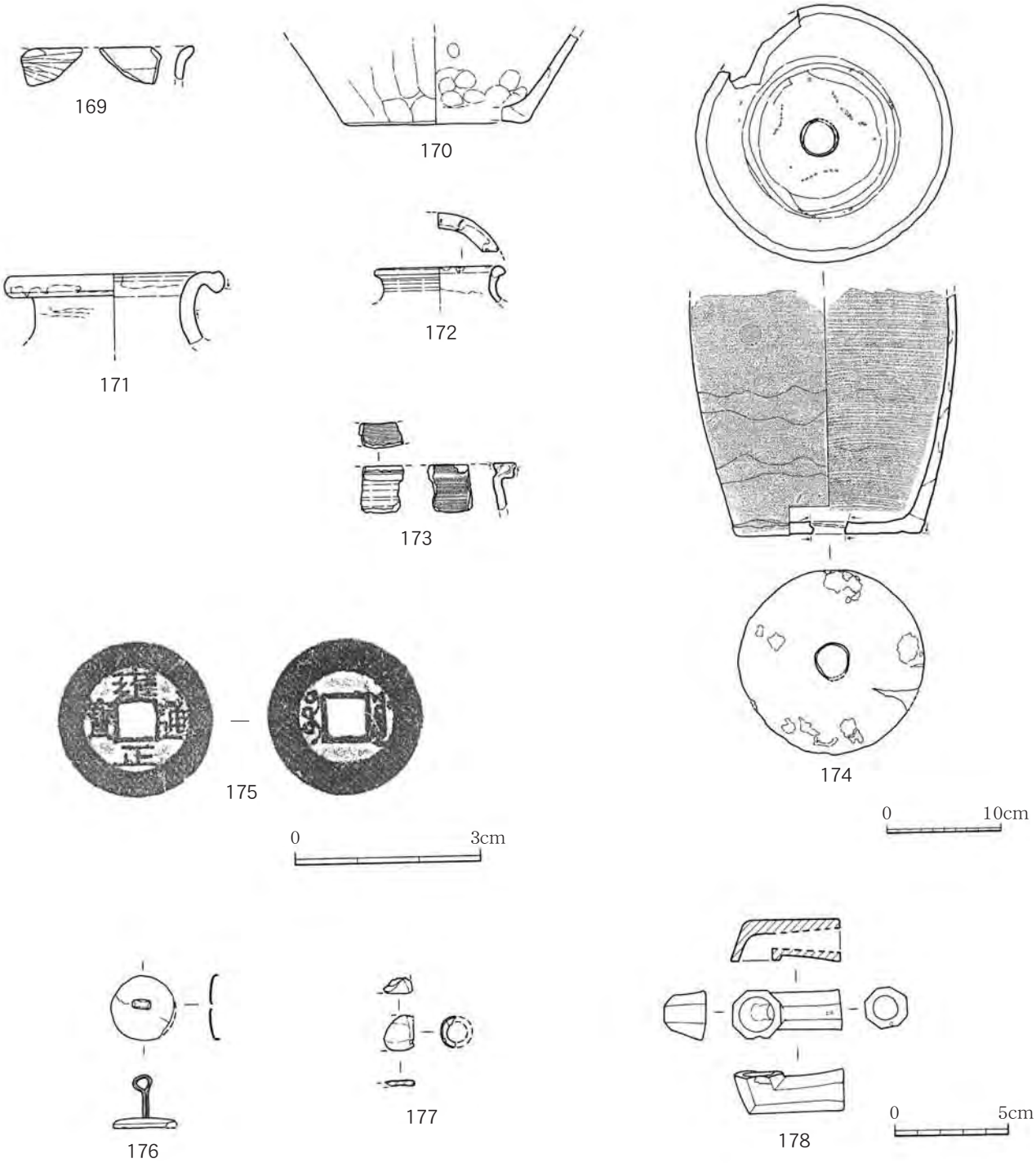
第27表　第８号墓円盤状製品観察表

単位：mm、g

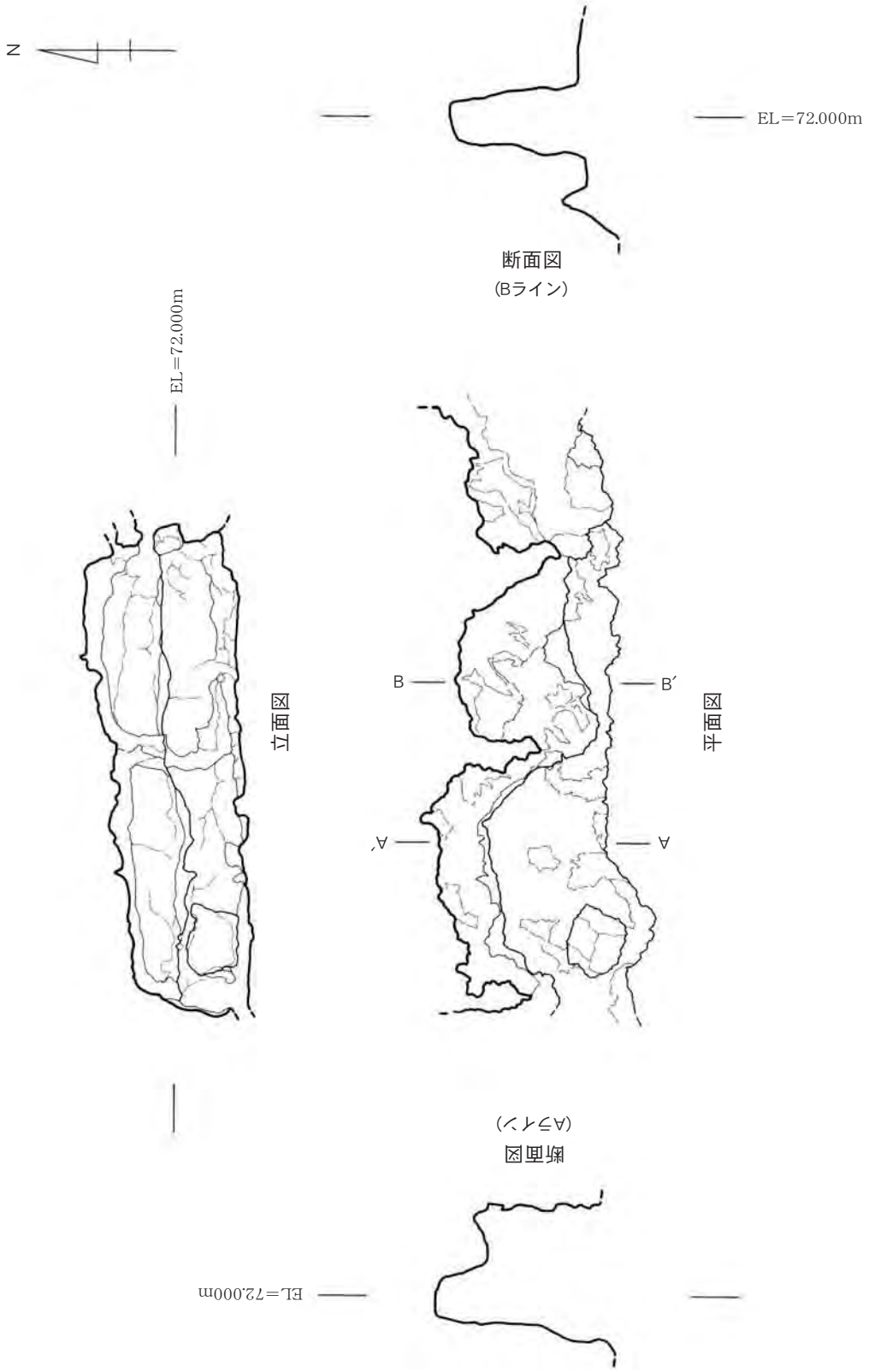
図版番号		状態	長径	短径	厚さ	重量	素材	使用部位	観　察　事　項	出土地
図版56	513	完形	22.4	22.1	11	3.1	染付	胴部	円形で剥離は丁寧。裏面からの打割調整が多い。表面に紋様が僅かに見られる。	入口
	514	完形	42	41.8	12.3	32.3	沖縄産無釉陶器	胴部	楕円形に近い円形で剥離は丁寧。裏面からの打割調整が目立つ。器厚から壺又は甕を転用した物と思われる。	前庭
	515	完形	36.9	34.5	11.4	21.0	沖縄産無釉陶器	胴部	円形、剥離は丁寧。裏面に漆喰が付着している。	入口
	516	完形	55.3	54.1	14.8	44.7	瓦	－	円形で剥離は粗く、全体的に磨耗している。灰瓦を転用。裏面に縄目の跡が僅かに見られる。	入口
	517	完形	42.2	39.7	16	29.6		－	円形で剥離は丁寧。裏面からの打割調整が多い。しまりが強い。	撹乱
	518	完形	29.1	27.1	13	13.1		－	円形で剥離は丁寧。裏面に縄目の跡が見られる。しまりが強い。	入口

骨製品（図版56－519）
　ハブラシの頸部から柄部まで残す資料が出土している。図版56－519は頚部が八の字状に削られ柄部に至る。柄部は柄尻に向かいほぼ平行な直線状に伸び、柄尻は舌状を呈する。柄は中央でやや厚みを持たせ先端に向かい漸次薄くなる。表裏面は平坦に仕上げている。断面形は隅丸方形状をなす。縦長7.8㎝、横長1.16㎝、重量5.6ｇ。撹乱層出土。

その他の製品（図版56－520）
　瓦片を二次転用した製品である。割れ口を磨き六角形に加工している。用途は不明である。墓室出土。



第36図　第８号墓出土遺物



第37図　第９号墓実測図

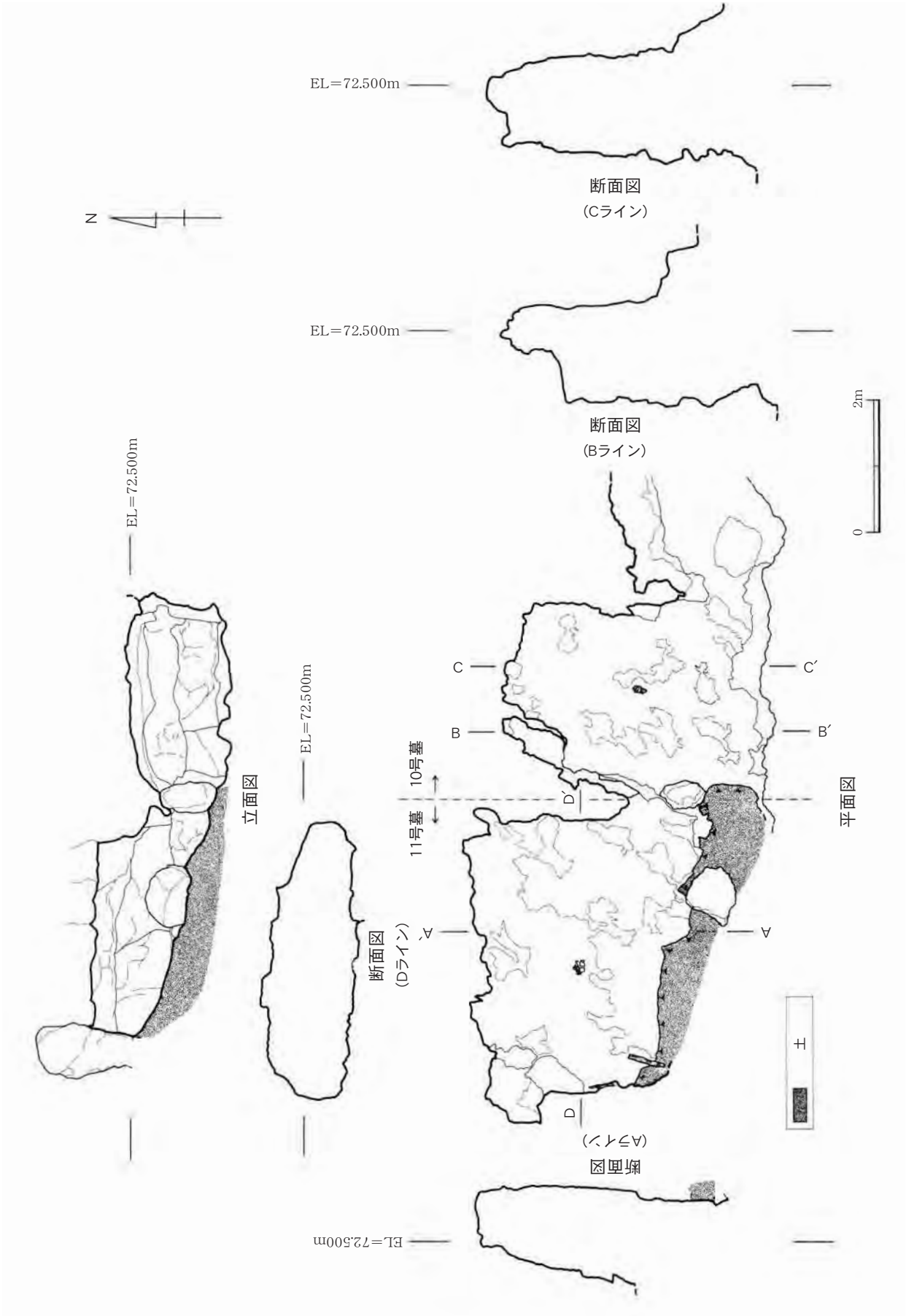
第28表　第９号墓遺構表

挿図番号		第37図
図版番号		図版８
位　　置		X=23,407.000　Y=21,852.000　EL=71.700m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	東西5.3m、南北1.7～2.5m、平面形は略方形状となる。床面から天井までは1.4～1.6m、奥壁に棚と思われる段を有しており、床面から高さ70㎝、奥行0.7～1.5m となる。
	工 法	天井、壁、床面は粗加工で床面は土を約10～20㎝ほど入れて平坦に仕上げている。中間に仕切の壁を入れる。
	内部の状況など	奥壁側の棚は、東側は広く、奥行きを有するのに対して西側は狭くなっている。入口近くの崩落は著しく、原形を全く止めていない。床面からは炭混じりの砂質土を埋土とする土坑を確認する。東西軸30㎝、南北軸20㎝の楕円形状となる。土坑内からは遺物は出土せず。
	時 期	－
備　　考		２基の掘込墓として見ることもできるが、規模並びに棚の高さと位置を同じくしていることから１基として把握した。

第９号墓出土遺物

金属製品（図版56－521、522）

図版56－521、522はいずれも頭部形が逆「L」字状をなす鉄製角釘である。522は縦長4.0㎝、横長0.9㎝、重量(3.1)g。床直出土。521は縦長(4.3)㎝、横長0.9㎝、厚さ0.9㎝、重量(4.5)g。床直出土。



第38図　第10・11号墓実測図

第29表　第10号墓遺構表

挿図番号		第38図
図版番号		図版８
位　　置		X=23,412.000　Y=21,850.000　EL=71.700m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	東西2.9m、南北4.0m、床面から天井までは1.2～1.4m、平面形状は略方形となる。奥壁には棚と思われる段を有しており、床面からの高さは80㎝となる。
	工 法	天井、壁、床面は粗加工で土を10～15㎝入れて平坦に仕上げる。床面の岩盤は凹凸が著しく、ほとんど加工がなされていない。
	内部の状況など	墓室中央からブタ又はイノシシの頭骨が出土。顔の方向は真南を向く。床面に土を入れて平坦に仕上げる際に安置したものと考えられる。床土は硬く締まる。
	時 期	－
備　　考		9，10号墓下部、EL=70.200m には自然の横穴が見られる。高さ40～50㎝、東西約20m、遺物は出土していないため墓としての可能性は低いと思われるが、規模、そして墓のすぐ下方と言うことから遺体の仮安置場所として想定することができる。

第30表　第11号墓遺構表

挿図番号		第38図
図版番号		図版８～９
位　　置		X=23,414.000　Y=21,849.000　EL=72.200m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	東西4.1m、南北2.5～3.5m、平面形は略方形状となる。床面から天井までは高さ0.9～1.3m、墓口が崩壊しているため本来はより規模の大きい墓であったことと想定される。
	工 法	天井、壁は粗加工で床面は土を10～15㎝ほど入れて平坦に仕上げている。床土は硬く締まっている部分と締まりが殆ど無い部分が見られた。隣の10号墓とは比高差を50㎝ほど有する。
	内部の状況など	墓室中央近くから土器片がまとまって出土した。接合を行った結果、一個体にはならなかった。
	時 期	－
備　　考		墓口には転石が散乱している。墓口が崩壊しているため、墓道を確認することはできなかった。

第31表　第10号墓出土状況一覧

遺物／出土地	沖縄産無釉陶器	土器	金属製品	合計
墓口付近	2			2
墓　　室		1	3	4
合　計	2	1	3	6

第32表　第11号墓出土状況一覧

遺物／出土地	沖縄産施釉陶器	土器	金属製品	合計
墓　　室			1	1
床　　直	1	4		5
岩盤直上				
合　計	1	4	1	6

第10号墓出土遺物

沖縄産施釉陶器（図版57－523）
　総数４点が出土している。図版57－523は鉢の口縁部である。外面は鉄釉、内面は白釉の掛け分けで口縁部は逆「L」字状に外反する。胴部から口縁部へストレートに立ち上がる器形である。表土出土。

沖縄産無釉陶器（図版57－524）
　総数４点出土している。図版57－524は甕の口縁部である。口縁部は逆「L」字状を呈し、口唇部の幅が広い。また口縁部には圏線を１本めぐらせる。内面にロクロ痕がみられる。表土出土。

陶質（図版57－525）
　火炉の底部と胴部が２点出土している。図版57－525は火炉の底部である。胴は丸く低く小さめの高台を削り出す。外体面に化粧土を横縞状に廻らす。底径8.6㎝。表土出土。

金属製品（図版57－526、527）
　図版57－526、527は鉄製角釘である。526は縦長(3.6)㎝、横長(0.3)㎝、厚さ0.4㎝、重量1.9g。墓室出土。527は縦長(4.22)㎝、横長(0.66)㎝、厚さ(0.52)㎝、重量4.4ｇ。墓室出土。

石製品（図版57－529）
　石臼が出土。全体形は環状をなす。径25㎝、孔径2.4㎝、厚さ2.6㎝、重量(410)ｇ。表土出土。

骨製品（図版57－528）
　半円形の扁平な板状製品が出土している。縦長1.2㎝、横長4.2㎝、厚さ1.6㎝、重量0.7ｇ。表土出土。

第11号墓出土遺物

蔵骨器（第39図179～181・図版57－530、531、532）
　第39図180・図版57－530土器。頸部が屈曲する直口口縁の壺。口縁部は玉縁状となり、口唇部は丸く収める。胴部はやや肩が張り、薄手となる。器面調整は、内面は横ナデが見られるが器壁の剥落が著しい。外面は横、斜位のナデ成形痕が見られる。焼成はかなり堅緻で陶質に近い。色調は内面が明赤褐色、外面が橙色であるが一部、黒色となる。混和材は大粒の赤色粒と白色細砂粒が見られる。口径19.4㎝。表土出土。
　第39図181・図版57－531土器。頸部が緩やかに屈曲する直口口縁の壺。口縁部は玉縁状となり、口縁部は丸く収める。胴部は薄手となる。器面調整は、内面は雑な横ナデ、内面は口縁部近くが斜位のナデ、胴部は横ナデが見られる。焼成は堅緻で陶質に近い。外面には漆喰が付着する。色調は内外面共に橙色。混和材は赤色粒、黒色細砂粒、白色細砂粒が見られる。口径18.9㎝。床直出土。
　第39図179・図版57－532土器。直口で玉縁状となる壺の口縁部資料。口唇部は僅かに膨らみを有する。色調は内外面共に橙色となる。器面調整はやや雑な横ナデが全体的に施される。混和材は大粒の赤色粒と白色細砂が見られる。床直出土。

沖縄産施釉陶器（図版57－533）
　総数２点が出土している。図版57－533は碗の底部である。外面は鉄釉、内面は白釉の掛け分けである。内底は蛇の目釉剥ぎ、外底は畳付のみ釉剥ぎする。床直出土。

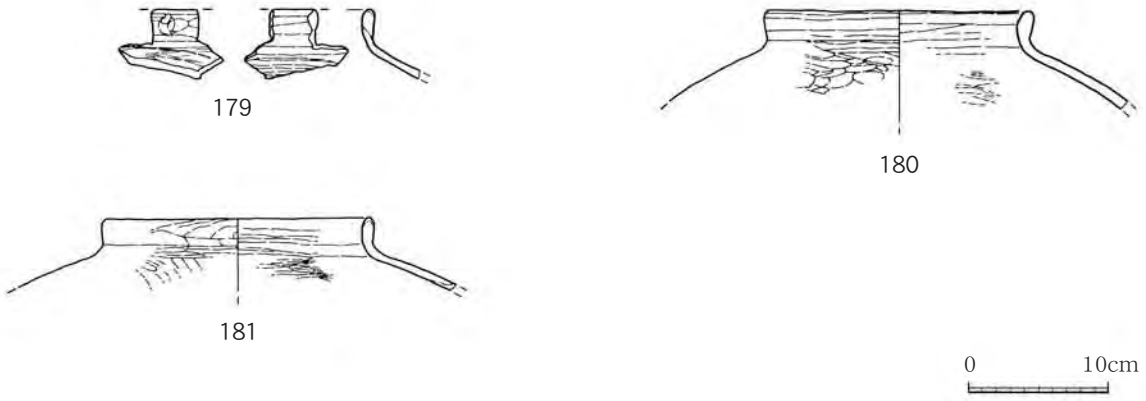
銭貨
　現代銭が１点出土した。銭種は不明。表土より出土。

金属製品（図版57－534）
　図版57－534は鉄製角釘である。縦長(2.9)㎝、横長(0.6)㎝、厚さ0.6㎝、重量2.1g。墓室出土。

戦争遺物

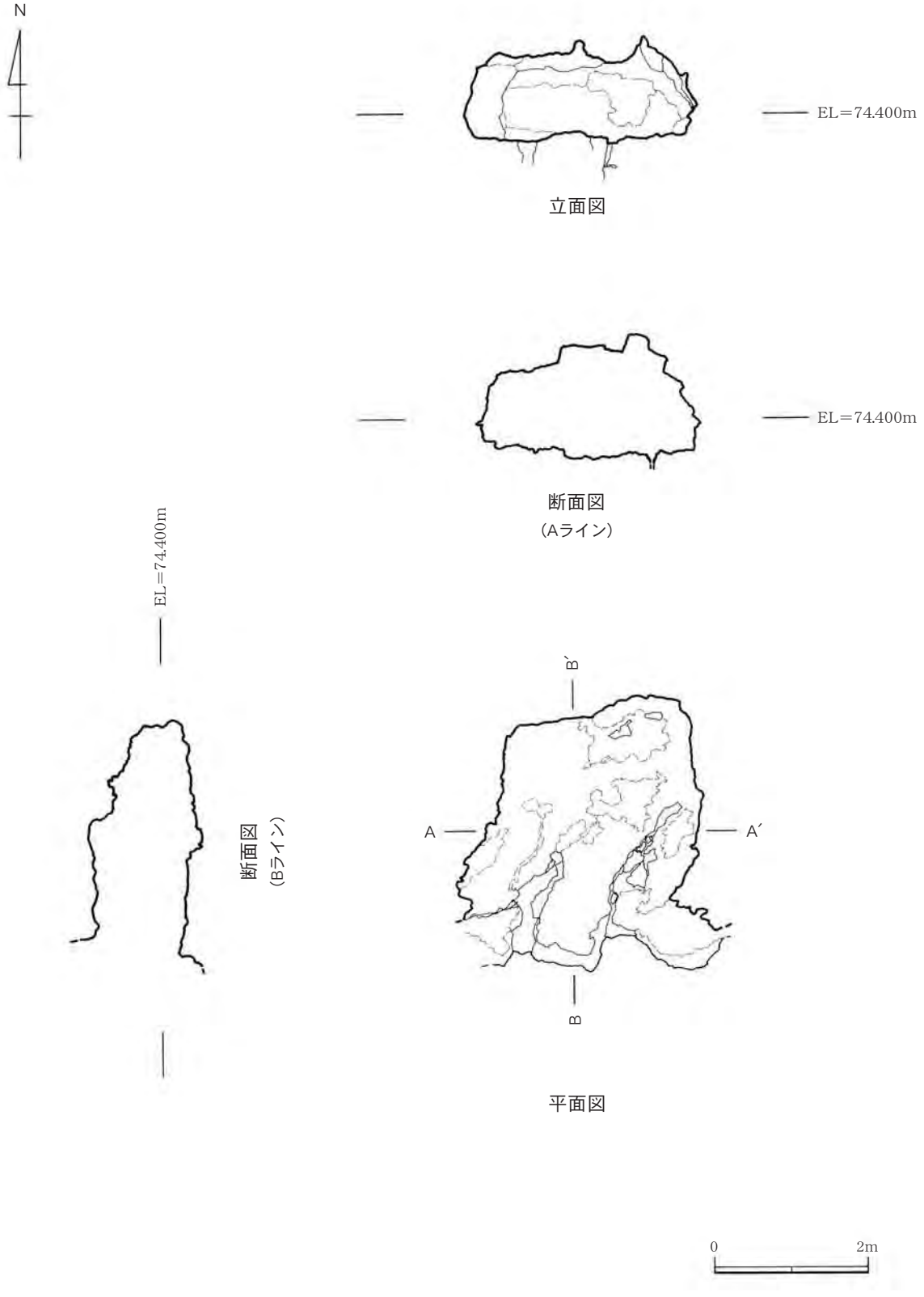
11号墓からはプラスチック状の製品が出土している。朱色を呈し表面に「除毒包使□」と書かれており、裏面には白い粉が付着している。この事からこの製品が医療、特に応急処置の為に用いられた物と思われる。

沖縄戦当時、第32軍指揮下・師範鉄血勤王隊の陣地壕として14号墓が使用されており、その西側に隣接して金城町の住民避難壕が構築されていたとの記録がある。また周辺には数多くの壕やトーチカといった旧日本軍の軍事施設が造営されていた。特に沖縄師範学校内（現県立芸術大学敷地）には第32軍司令部壕があり、「第５坑道」と呼ばれる入口を掘る際に出たクチャの土を南西側の古墓地帯つまりナカンダカリ山に捨てたとの記録も残されている。



第39図　第11号墓出土遺物

第11節　第12号墓



第40図　第12号墓実測図

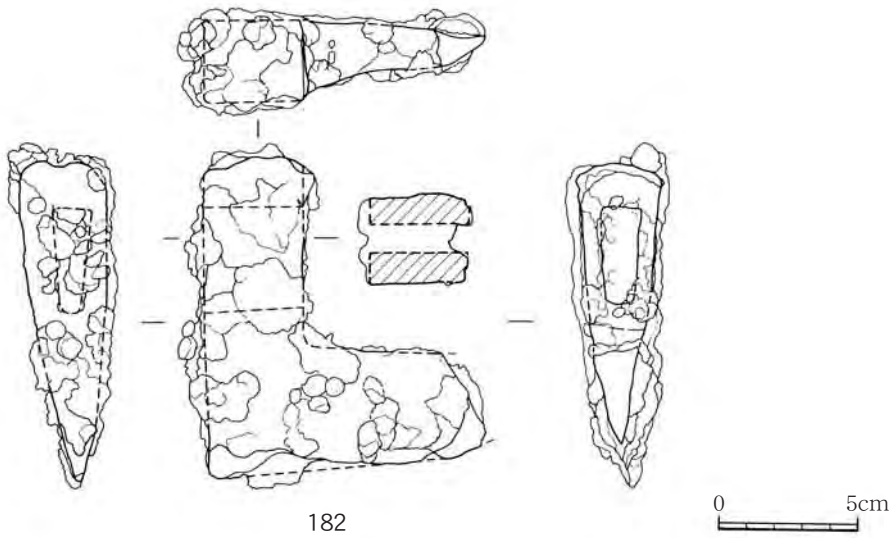
第33表　第12号墓遺構表

挿図番号		第40図
図版番号		図版９
位　　置		X=23,408.000　Y=21,852.000　EL=74.200m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	東西2.5～2.7m、南北3.2m で平面形は略方形状となる。床面から天井までは高さ0.7～1.2m、調査区内の古墓では最小規模となる。
	工 法	天井、壁は粗加工で床面は土を10～20㎝ほど入れて平坦に仕上げる。墓室への流土はほとんど見られない。床の岩盤はほとんど削平されておらず、凹凸が著しい。
	内部の状況など	墓室奥壁側の隅部はコーナーをつくりだしている。床土内から骨が少量出土。
	時 期	－
備　　考		墓室近くが崩落しているためか当該墓へ至る墓道を窺い知ることはできない。

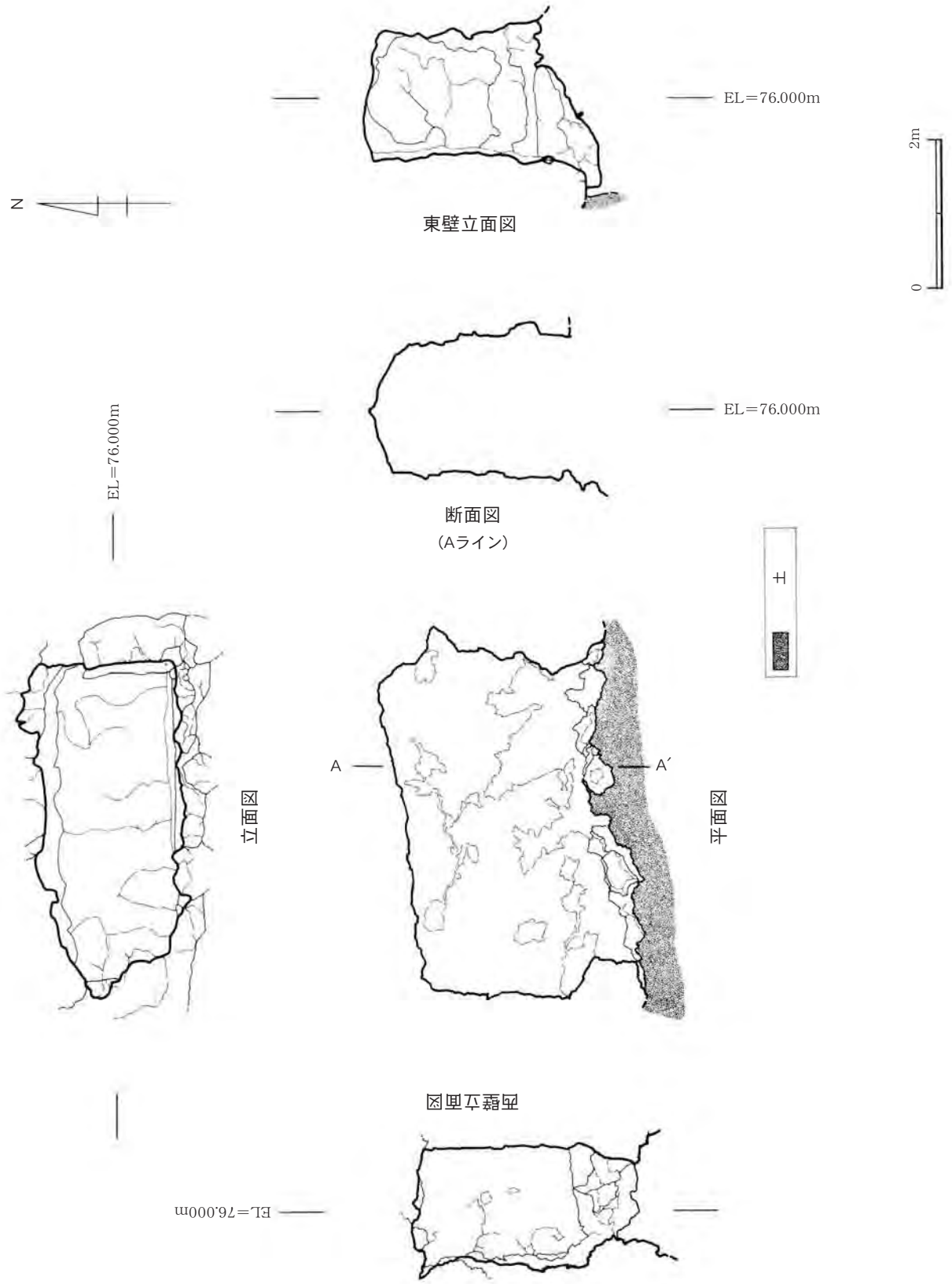
第12号墓出土遺物

金属製品（第41図182・図版58－535～538）

図版58－535～537は頭部形が逆Ｌ字状をなす鉄製角釘である。535は縦長(6.1)㎝、横長0.7㎝、厚さ(0.6)㎝、重量(7.3)g。表土層出土。536は縦長(2.8)㎝、横長(0.6)㎝、厚さ0.5㎝、重量(2.9)g。表土層出土。537は縦長(5.6)㎝、横長0.6㎝、厚さ0.7㎝、重量(7.5)g。西側堆積土出土。第41図182・図版58－538はＬ字形の鉄製手斧である。柄を入れる臍は長方形に近い台形を呈する。刃は断面は三角形をなし柄と平行に両面から付刃している。刃長12.4㎝、横長11.1㎝、厚さ3.1㎝、重量685g。西側堆積土出土。



第41図　第12号墓出土遺物



第42図　第13号墓実測図

第34表　第13号墓遺構表

挿図番号		第42図
図版番号		図版10
位　　置		X=23,408.000　Y=21,852.000　EL=75.600m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	東西3.9～4.4m、南北2.5～3.0m で平面形は長方形状となる。床面から天井までの高さは1.7～1.9mとなる。
	工 法	天井、壁、床面は丁寧に岩盤を削平しており、床面は３～５㎝程の床土が入れられる。床土は締まりがなくほぼ均等の厚みを有して墓室全体に堆積している。墓口東側脇には円柱を嵌めたと思われる浅い窪みが、壁には曲面を有する部材痕が見られる。反対側は崩れているため原状を把握することはできない。
	内部の状況など	隅部はコーナーが丁寧に削り出されている。床土上からは釘や金属片等、沖縄戦時の遺物、床土内からは宋銭、骨が出土した。これらは散乱した状態で確認されている。
	時 期	16世紀～18世紀か沖縄戦時には陣地壕として利用。
備　　考		調査区内で最も高所に位置している古墓。沖縄戦時には師範鉄血勤皇隊野戦築城隊第一中隊の安里常盛教官と指揮班がこの古墓を陣地壕として利用していた。金城ダムが一望の下に見渡すことが可能で、南側の繁多川丘陵にあった沖縄県庁の壕との間に連絡道が設置され、相互に戦時情報の交換をしていたとのことである。既に墓口へ至る墓道は無く、梯子をかけてよじ登ったとある（龍潭同窓会1998）。

第35表　第13号墓出土状況一覧

遺物／出土地	本土産陶磁器	銭　貨	金属製品	合　計
墓　　室			2	2
床　　直	1	6	9	16
合　計	1	6	11	18

第13号墓出土遺物

銭貨（第43図183～186・図版58－539～542）

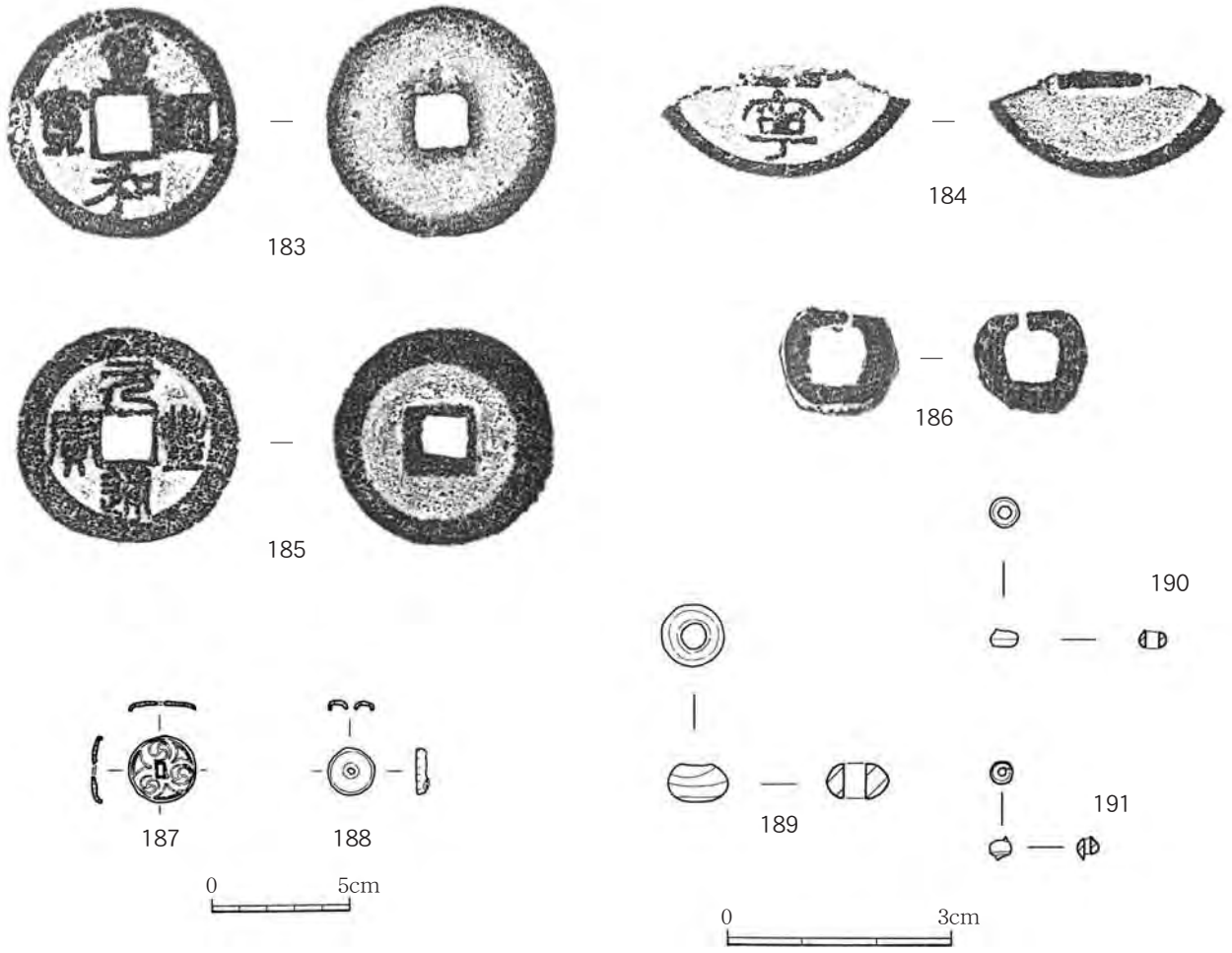
有文銭３点、輪銭１点、現代銭が２点出土した。すべて床直からの出土。第43図183～185・図版58－539～541は有文銭である。図183・図版58－540は完形で銭文は宣和通寶。時代は北宋で初鋳年代は1119年である。銭径31㎜、孔径７㎜、銭厚2.2㎜、重量6.0g。図184・図版58－541は２分の１が欠損しているが、残存する「寧」の字から崇寧重寶（当十銭）であると思われる。時代は北宋で初銭年代は1103年である。銭厚2.4㎜、重量（3.4）g。図185・図版58－539は完形で銭文は元豊通寶。時代は北宋で初鋳年代は1078年である。銭径29㎜、孔径６㎜、銭厚2.6㎜、重量8.3g。図186・図版58－542は輪銭である。ほぼ完形だが一部欠けている。銭径15㎜、孔径７㎜、銭厚1.0㎜、重量0.3g。現代銭はともに大正期の一銭である。

金属製品（第43図187、188・図版58－543～547）

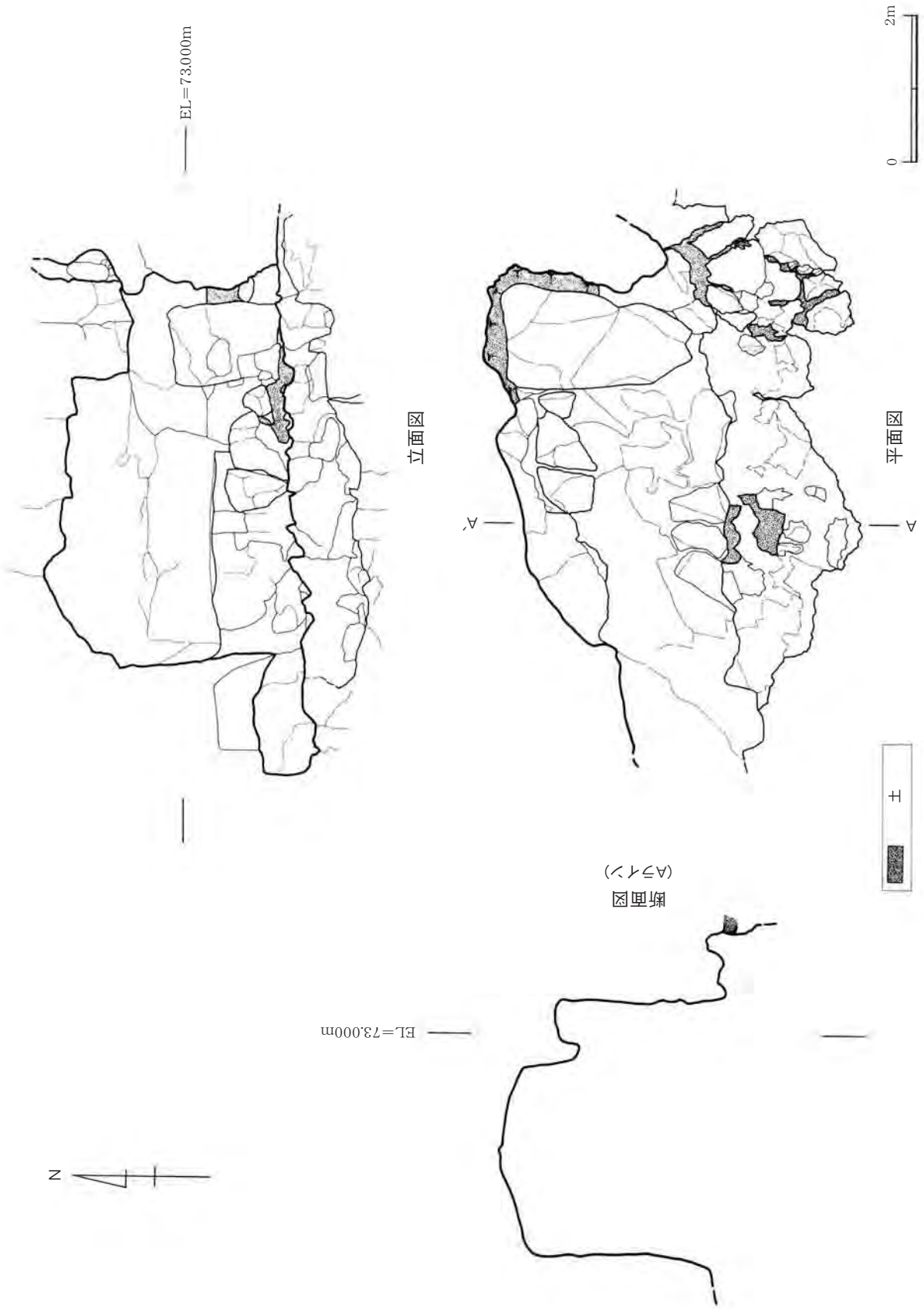
第43図187、188・図版58－543、544は銅製の座である。図187は上面に唐草の線刻彫りをほどこす。中央に長方形の孔を有する。縦径2.3㎝、横径2.3㎝、厚さ0.1㎝、孔径縦長0.5㎝、横長2.5㎝、重量2.7g。床直出土。図188は中央に円孔を有する。縦径1.7㎝、横径1.7㎝、厚さ0.1㎝、孔径0.2㎝、重量1.9g。床直出土。図版58－545～547は鉄製角釘である。546、547は頭部形が逆Ｌ字状をなす鉄製角釘である。545は縦長（3.49）㎝、横長0.5㎝、厚さ0.5㎝、重量（3.0）g。表土層出土。546は縦長4.3㎝、横長0.3㎝、厚さ2.4㎝、重量2.2g。表土層出土。547は縦長（4.4）㎝、横長0.3㎝、厚さ0.3㎝、重量2.7ｇ。床直出土。

玉（第43図189～191・図版58－548～550）

計３点が出土。第43図189・図版58－548は丸玉、第43図190、191・図版58－549、550は小玉である。いずれもガラス製で、巻きつけ技法により作られている。すべて表土層より出土。図189は扁平な形状で、色調は剥落のために青緑色と白色のまだらになっている。螺旋状の筋が明瞭に確認できる。高さ5.9㎜、外径8.5㎜、孔径3.0㎜、重量0.4ｇ。図190・図版58－549の色調は青緑色を呈する。高さ3.5㎜、外径4.0㎜、孔径2.0㎜。図191・図版58－550の色調は青色を呈する。高さ3.3㎜、外径3.0㎜、孔径1.0㎜。



第43図　第13号墓出土遺物



第44図　第14号墓実測図

第36表　第14号墓遺構表

挿図番号		第44図
図版番号		図版10
位　　置		X=23,405.000　Y=21,853.000　EL=72.900m
構造	形 状	掘込墓
	規 模	南北4.5m、東西５mで平面形は不整形状となる。墓室の崩壊が著しく、原状を想定するのは困難である。床面から天井までの高さは3.4m。
	工 法	天井、床は丁寧に岩盤を削平している。床面には近代以降の遺物を含む撹乱層が厚く堆積している。
	内部の状況など	高さ80㎝の棚と思われる段が奥壁側に見られる。平坦面は上下２段に分かれており、上方の１段目の床は丁寧に削平されており、下方の床面は粗く平坦に加工されている。墓の南側は崩壊が著しいため、下方の床面部分は墓室か墓庭かの判別は付き難い。床面直上からは沖縄産陶器（喜名焼壺）、本土産陶器（薩摩焼壺）、沖縄産陶器（擂鉢）が多数出土。壁や天井に無数のフィッシャーが走る。
	時 期	17～18世紀か。
備　　考		隣接する９号墓床面との比高差はほとんど見られない。墓前周辺も発掘調査を行ったが崩壊が著しかったため墓庭、墓道の有無について確認することはできなかった。

第37表　第14号墓出土状況一覧

遺物／出土地	青磁	染付	中国産褐釉陶器	本土産陶磁器	沖縄産陶器		陶質土器	銭貨	金属製品	円盤状製品	貝製品	合計
				陶器	施釉	無釉						
墓　　室	1	4	1	2	26	23	6		7	2	1	73
床　　直			1		8	2	2	1				14
合　計	1	4	2	2	34	25	8	1	7	2	1	87

第14号墓出土遺物

蔵骨器（第45図192・図版59－551）

沖縄産無釉陶器。喜名焼の甕の口縁部～底部で、口縁部は口唇を逆「L」字状に外反させたあと、さらに下方に押しまげたような形である。口唇上部には貝目痕が明瞭に残っている。肩部は張りを持ち、縄目文がめぐらされているが胴部は張りを持たない。内面には叩き痕が明瞭に残り、底部には粘土痕とサンゴ痕がみられる。また、底部中央に孔を穿っている。床直より出土。

青磁（第45図196・図版59－552）

酒会壺の底部が１点出土している。外体面に片切彫りによる幅広蓮弁文を高台脇まで施文する落とし底の底部である。釉の広がりは高台脇から畳付けまで施釉、釉色は灰緑色を呈する。底径17.7㎝。墓室出土。

染付（図版59－553～556）

10点出土し碗、小碗、皿、小杯などがみられる。生産年代は概ね18世紀代に位置付けられる。

碗は７点が出土している。図版59－553は外体面に七宝文、内底面に２条の圏線と宝文を配し、外底に２条の圏線と双魚文を配している。高台は比較的高めで断面形が四角状を成し畳付に丸味を持つ。釉は畳付けを除き全面に施す。底径6.0㎝。墓室出土。小碗は図版59－554に示す１点が出土した。口縁は直口を成し胴部から直に立ち上がる。高台は断面三角形に削り出している。文様は外体面に丸文に鳥文を配置するものである。釉の広がりは内体面と外体面高台際まで施している。福建・広東系に属する。口径7.6㎝、器高4.9㎝、底径4.5㎝。墓室出土。皿は図版59－555に示す１点が出土した。内底は僅かに盛り上がる。高台は破損のため不明であるが内底の刳りは丸く高台は外に向かい開く。外体面に横線に渦巻き状の文様が僅かに認められる。内底面に２条の圏線と草花文を配し、外底面に２条の圏線と永長□□の銘款が施されている。表土層出土。

小杯は図版59－556に示す底部が１点出土した。内底面はフラットを成し、高台は破損のため不明である。文

様は外体面、高台際に圏線を配し又、僅かに文様の痕跡を留めるが破損のため不明である。前庭表土出土。

本土産陶磁器（図版59－557）

肥前系染付が２点出土し、器種別には碗、皿がある。生産年代は概ね17世紀～19世紀に位置付けられる。図版59－557は直口口縁碗である。口縁内面に圏線、外体面に２条の圏線と雨龍を描く。生産年代は1660年～1670年代に位置付けられる。撹乱層出土。陶器は薩摩産褐釉陶器壺片が２点出土している。

沖縄産施釉陶器（図版59－558、559，図版60－560、561）

総数52点が出土している。器種別にみると碗、皿、鍋、蓋が出土した。図版59－558は碗の底部である。鉄釉単掛けで外面は胴部半ばまで施釉、内底は蛇の目釉剥ぎする。底部から胴部にかけて緩やかにたちあがる器形。表土層より出土。図版59－559は蓋、もしくは皿の底部である。鉄釉単掛けでフィガキー。高台は逆台形を呈する。床直より出土。図版60－560は鍋の口縁部～胴部である。鉄釉単掛けで外面は胴部半ばまで施釉、内面は無釉。胴部の膨らみは弱い。外面の胴部下部に煤が付着し、口縁外面には横耳を貼付した痕がみられる。撹乱層より出土。図版60－561は蓋の甲縁部～胴部である。急須の蓋だと思われる。白釉単掛けで甲縁は玉縁状を呈し、線彫りに呉須で車輪文を施す。表土層より出土。

沖縄産無釉陶器（図版60－562～564）

総数35点が出土している。器種別にみると壺、鉢、擂鉢などが出土した。図版60－562は鉢の口縁部～胴部である。口唇両端が張り出し、口縁部断面が逆三角形を呈する。また圏線を３本めぐらせ、胴部に丸文と凸帯を１本貼り付ける。口縁上部には圏線を１条めぐらせる。内面にロクロ痕がみられる。表土層より出土。図版60－563は鉢の口縁部、図版60－564は胴部である。563はいわゆる「ミジクブサー」と呼ばれるもので、口唇を玉縁状にする器形である。胴部に波状文を施す。撹乱層より出土。564は圏線を２本めぐらし、２㎝ほど下に縄目突帯を貼り付ける。両面にロクロ痕がみられる。墓室より出土。

陶質（図版60－565～569，図版61－570、571）

25点が出土し鍋、鍋の蓋、火炉、蓋などがある。図版60－565は胴部が真ん中でくびれ瓢箪形になる鍋である。口縁は断面形が「く」の字状に外側に屈曲させ、口唇は玉縁状に肥厚する。口径13.1㎝。撹乱層出土。図版60－567、566は鍋の蓋である。566は管状の摘みを持ち甲部は笠状に広がる。中央出土。567は甲縁部資料である。甲縁径13.9㎝。図版60－568、569は内彎形の火炉である。568は口縁部で口唇は舌状を成す。口径19㎝。表土層出土。569は台形状の把手部で中央に円孔を穿っている。表土層出土。図版61－570は胴部の丸い火炉である。高台を持ち外体面に化粧土を掛け横縞状に削りとる。底径9.5㎝。床直出土。図版61－571は壺の蓋である。甲部は扁平をなし、縁部は斜めに削りだす。内面に円筒状に伸びる突起を有する。甲縁径14.2㎝。表土層出土。

銭貨（第45図193、194・図版61－572、573）

有文銭１点、無文銭２点、現代銭が１点出土している。いずれも完形品で、第45図193・図版61－572は寛永通寶。時代は江戸で、初鋳年代は1636～1659年（Ⅰ期）もしくは1697～1747年（Ⅱ期）になると思われる。銭径23㎜、孔径6.0㎜、銭厚1.0㎜、重量2.6ｇ。撹乱層より出土。第45図194・図版61－573は無文銭で、銭径19㎜、孔径0.7㎜、銭厚0.7㎜、重量0.8ｇ。撹乱層より出土。無文銭は他に床直より出土が１点。現代銭は撹乱層より十円が出土。

金属製品（図版61－574～576）

総数23点が出土。図版61－574は先端が匙状の簪である。縦長(9.8)㎝、横長(1.0)㎝、厚さ0.3㎝、重量(5.0)ｇ。墓室出土。図版61－575、576は鉄製角釘である。575は縦長(4.93)㎝、横長(0.68)㎝、厚さ(0.62)㎝、重量(5.9)ｇ。墓室出土。576は縦長(5.4)㎝、横長(0.9)㎝、厚さ1.0㎝、重量(6.9)ｇ。墓室出土。

煙管（第45図195・図版61－577）

１点出土している。瓦質の雁首で火皿の縁と小口が残る。長さ(2.9)㎝、重量(9.6)ｇ。前庭表土より出土。

円盤状製品（図版61－578、579）

円盤状製品は３点出土し、詳細は次頁の通りである。

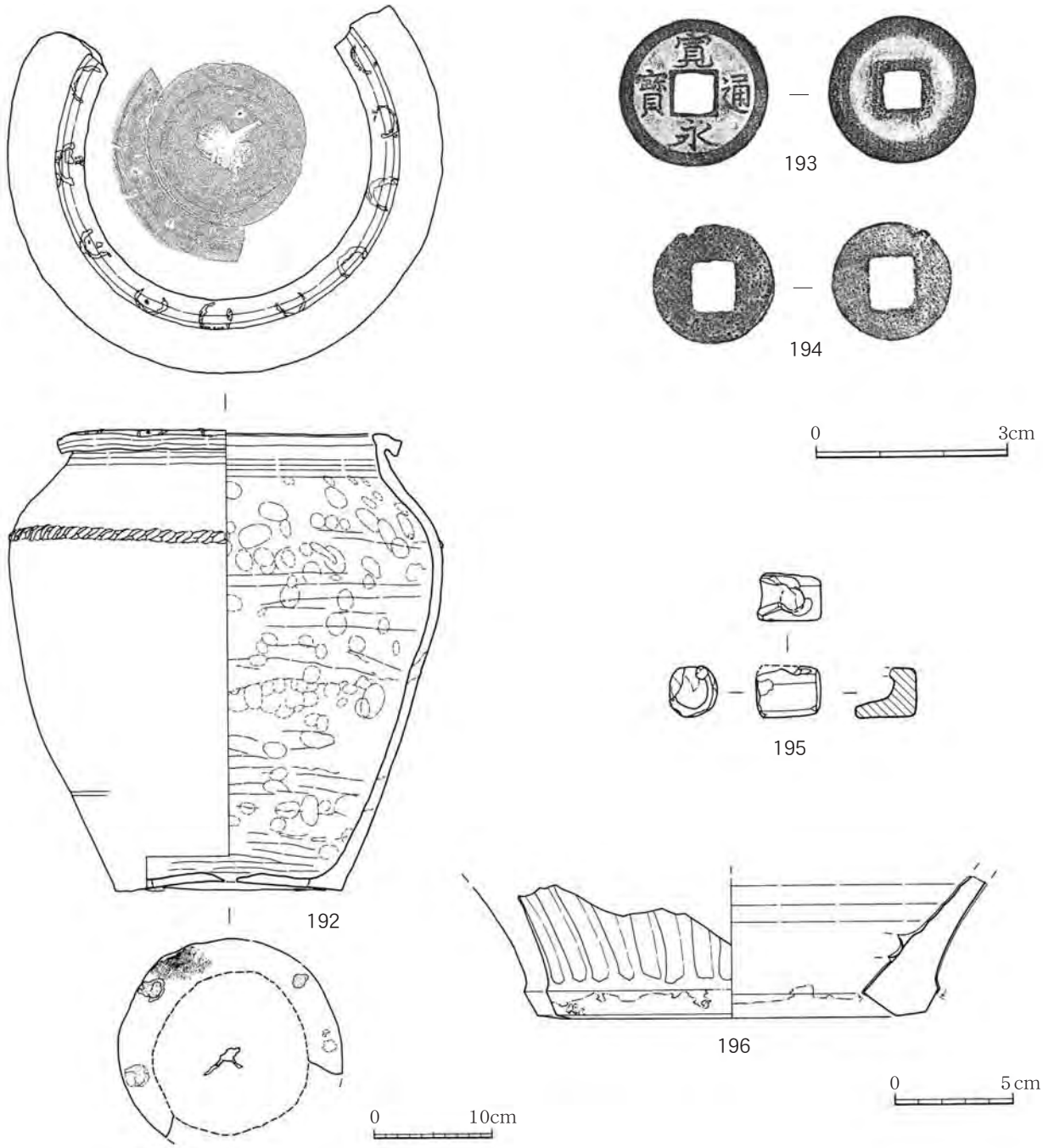
第38表　第14号墓円盤状製品観察表

単位：mm、g

図版番号		状態	長径	短径	厚さ	重量	素材	使用部位	観　察　事　項	出土地
図版61	578	破片	45.5	27.8	12.1	21.2	沖縄産無釉陶器	胴部	円形若しくは楕円形と推測される。断面がやや湾曲しており、器厚も一定ではない。裏面に漆喰が付着している。	表土層
	579	完形	43.3	41.5	14.4	27.5	瓦	－	楕円形で剥離はほぼ丁寧。全体的に磨耗している。裏面に縄目の跡が僅かに見られる。	墓室

貝製品（図版61－580）

ヤコウガイ製匙状製品が１点出土。身の部分のみの欠損品。長方形を呈し縁部と内面は研磨、外面は螺肋が削られ表面の剥離は不十分。未製品か粗製品だと思われる。最大長(7.1)㎝、最大幅(3.7)㎝、重量(30)g。墓室より出土。



第45図　第14号墓出土遺物

第14節　脊椎動物遺存体

今回の調査において撹乱層ではブタ、ウシ、ウマ、鳥類、ネコ、イヌ、ネズミ、ヤギ、魚類が出土した。

ブタはほぼ全身の骨が検出され、中には第一前臼歯（P_1）～第二後臼歯（M_2）が付属して残っており、その内第二後臼歯（M_2）が萌芽して間もない若い下顎骨と思われる資料が見られた。また切断痕が見られる上腕骨や脛骨も検出され、中には両側に切断痕を持ち３㎝の筒状に加工された脛骨も見られた。

ウシ、ウマに関しては出土数が少なく、解体痕等の加工痕は見られない。

イヌは橈骨が完全な形で検出された。異なった大きさの資料が混在している事から複数の個体が存在していたと思われる。

鳥類はニワトリが多くを占め、上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨、中足骨といった四肢骨が多い。これは食料獲得の主要部分が四肢骨周辺であった事を表している。

ネコでは四肢骨が多く検出され、ネズミはほぼ全身の骨が検出された。

ヤギは幼体の上腕骨が検出、成獣の下顎骨には第一後臼歯（M_1）～第二後臼歯（M_2）が付属した状態で残っていた。加工痕は見られない。

魚類はハリセンボンの棘が多数出土している。

遺構内においてはブタ、ウシ、ウマ、ヤギ、イヌ、ネコ、ネズミ、ハブ（ヘビ）、モグラ類、鳥類、魚類といった獣骨が検出された。

ブタは最も多く出土しており、幼体の骨も他の種類と比べると多い。特に下顎骨には歯も含めて完全に残っている資料も見られた。

ウシは近位部周辺に解体の際についたと思われる数本の線状の傷が見られる。脛骨と幼体の骨が１本確認された。

ウマは出土数が少なかった。

ヤギは歯が残っている下顎骨が多く、中には第一後臼歯（M_1）が未萌芽の若い個体と思われる資料も見られた。

イヌは歯が多数残されていた。出土遺構が14号墓に偏っているが、完形で残っているのは少ない。完形で残っている橈骨の長さから中型犬であると推測できる。

ネコ、ネズミは比較的出土量が多く、ネコは半分以上が14号墓から検出されており、殆どが完形で解体痕等も見られない。

鳥類はニワトリが多く、鳥口骨などの四肢骨以外の骨も完形で検出された。

ハブ（ヘビ）は８号墓の墓室からまとまって出土しているが頭骨が無いので一個体であるかどうかは断定できない。また同じ８号墓でモグラ類の下顎骨が検出された。

７号墓からはメジロザメの歯、ハリセンボンの棘、魚類の脊椎骨（種類不明）が検出された。

今回の調査ではブタ、ウシ、ウマの骨が検出されたが、当遺跡の立地を考えると供物として持ち込まれたのではないかと思われる。特にブタの場合、歯も含めて完形で残っている下顎骨が出土したという事例が浦添市の前田・経塚近世古墓群でも報告されている。この事は民俗学的な見地からの考察も必要となる。

とはいえ、ブタの骨が多数を占める事からブタが供物の中心で、葬制においても重要な役割を果たしていたのではないかと考えられる。

ニワトリの骨に解体痕等が見られず完形に近い状態で検出された資料が多い事も特筆すべき点でもある。ニワトリなどの鳥類は肉を摂る主要部分が四肢骨周辺とされ椎体や鳥口骨などは比較的残りにくく、四肢骨も関節部分が打ち割られたりする事例が多いが、今回の調査では前述した様に完形に近い資料が多い。解体せずに供物としたとも推測できる。またニワトリの骨が出土するという事は近世以降もこの墓が使われていた事がいえる。

14号墓から多く出土したイヌやネコは被葬者の愛玩動物であった可能性はあるが、ネコに関しては殆どの資料が完全な状態で出土している事から住み着いたネコがその場所で自然死した可能性が高いと思われる。

ネズミ、モグラ類に関してはその場所に生息していたと思われる。

他の墓から出土した動物遺存体とも比較を行いたい所であるが、類例資料が少ない為困難な状態にあるのが現状である。今後資料の増加に期待したい。

脊椎動物遺体種名表

脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA
- 軟骨漁綱　Class Chondrichthyes
  - メジロザメ目　Order Carcharhiniformes
    - メジロザメ科　Family Caecharhinidae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
- 硬骨魚綱　Class Osteichthyes
  - フグ目　Order Tetraodontiformes
    - ハリセンボン科　Family Diodontidae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
- 爬虫綱　Class Reptitia
  - 有鱗目（ヘビ亜目）Order Ophidia
    - クサリヘビ科　Family Viperidae
      - ハブ　*Trimeresurus flavovidis*
- 鳥綱　Class Aves
  - キジ目　Order Galliformes
    - キジ科　Family Phasianidae
      - ニワトリ　*Gallus gallus var. domesticus*
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet.
- 哺乳綱　Class　Mammalia
  - 食虫目　Order lnsectivora
    - モグラ科　Family Talpidae
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet
  - 齧歯目　Order Rodentia
    - ネズミ科　Family Murida
      - 属・種不明　Gen.et sp.indet
  - 食肉目 Order Carnivora
    - イヌ科　Family Canidae
      - イヌ　*Canis familiaris*
    - ネコ科　Family Felidae
      - ネコ　*Felis catus*
  - 奇蹄目　Order Perissodactyla
    - ウマ科　Family Equidae
      - ウマ　*Equus caballus*
  - 偶蹄目　Order Artiodactyla
    - イノシシ科　Family Suidae
      - ブタ　*Sus scrofa var. domesticus*
    - ウシ科　Family Bovidae
      - ウシ　*Bos taurus*
      - ヤギ　*Capura hirucus*

第39表　魚類出土状況一覧

種　目			部位	右 / 左	出土地区		個数
					号墓	出土地点	
メジロザメ目	メジロザメ科	メジロザメ科の一種	歯	－	7	墓室	1
フグ目	ハリセンボン科	ハリセンボン科の一種	棘	－	7	墓室	8
科・種不明			脊椎骨	－	7	墓室	1

第40表　ハブ出土状況一覧

部　位	右 / 左	出土地区		個数
		号墓	出土地層	
脊　椎　骨	－	3	墓室	2
		7	墓室	1
		8	墓室	5

第41表　ニワトリ出土状況一覧

部 位		右 / 左	出土地区		個数
			号墓	出土地層	
椎　体	胸椎	－	3	奥壁溝内	1
	頸椎	－	3	奥壁溝内	1
肋　骨	完存	右	3	奥壁溝内	1
		右	8	墓室	1
	破片	右	8	墓室	1
烏口骨	完存	右	3	奥壁溝内	1
肩甲骨	完存	右	3	奥壁溝内	1
		左	14	墓室	1
	遠位端	左	3	奥壁溝内	1
橈　骨	完存	左	3	奥壁溝内	1
		右	3	奥壁溝内	1
尺　骨	完存	右	3	奥壁溝内	1
		左	3	奥壁溝内	1
	近位部	右	5	墓室	1
中手骨		右	3	奥壁溝内	1
大腿骨	近位端	左	3	石積周辺	3
脛　骨	完存	左	3	奥壁溝内	1
	近位端～骨体	右	3	奥壁溝内	1
	骨体～遠位部	右	5	床直	1
腓　骨	完存	左	3	奥壁溝内	1
中足骨		左	3	奥壁溝内	1
趾　骨		不明	3	奥壁溝内	2

第42表　トリ出土状況一覧

部 位		右 / 左	出土地区		個数
			号墓	出土地層	
烏口骨	完存	右	6	墓室西側	1
			9	床直	1
		左	9	床直	1
上腕骨	完存	右	14	前庭表土	1
尺　骨	完存	左	6	墓室西側	1
大腿骨	完存	右	6	墓室西側	1
			9	床直	1
脛　骨	完存	右	6	墓室西側	1
	近位骨端外れ～遠位端	右	9	床直	1

第43表　モグラ類出土状況一覧

部 位	右 / 左	出土地区		個数
		号墓	出土地層	
下顎骨	右	8	墓口	1

第45表　イヌ出土状況一覧

部　位		右/左	出土地区		個数
			号墓	出土地層	
下顎骨	下顎骨	右	14	前庭表土	2
肋　骨		右	10	墓室	1
		右	8	石積内	1
		左	8	石積内	1
上腕骨	近位骨端外れ～遠位部	右	14	前庭表土	1
	近位部～骨体	左	14	前庭表土	1
	遠位端	左	14	前庭表土	1
橈　骨	完存	左	14	前庭表土	1
	骨体	左	14	墓室	1
尺　骨	近位部～骨体	左	14	前庭表土	1
			14	前庭表土	1
大腿骨	骨体	右	14	前庭表土	1
		左	7	墓室	1
踵　骨		右	14	前庭表土	1

第46表　イヌ歯出土状況一覧

部 位	右/左	残存部位	出土地区		個数
			号墓	出土地点	
下顎骨	右	C	10	墓室	1
		C P4 M1	14	前庭表土	1
		M2	14	前庭表土	1
		M3	14	前庭表土	2
	左	C	10	墓室	1
		C P3･4 M1	14	前庭表土	1
		P3･4 M1･2	14	前庭表土	1
		M2	14	前庭表土	1

第44表　ネズミ出土状況一覧

部 位		右 / 左	出土地区		個数
			号墓	出土地点	
上顎骨	上顎骨	左右	8	墓室	1
		左	7	墓室	1
下顎骨	下顎骨	左	8	墓室	1
			7	墓室	1
		右	8	墓室	1
肩甲骨	完存	右	8	墓室	1
上腕骨	近位骨端外れ～遠位端	右	8	墓室	1
			8	墓室	1
			8	墓室	1
		左	7	墓室	1
	近位部～遠位端	右	7	墓室	1
寛　骨	完存	右	7	墓室	3
		左	13	床直	1
	腸骨～臼部	右	8	墓室	1
	腸骨部～坐骨	右	7	墓室	1
			13	床直	1
大腿骨	完存	左	3	奥壁溝内	1
			8	墓室	1
		右	8	墓室	1
			13	床直	1
	近位端	左	7	墓室	1
	近位端～遠位骨端外れ	左	6	墓室	1
			7	墓室	1
			13	床直	1
			6	墓室	1
			8	墓室	1
			10	墓室	1
	近位部～骨体	右	7	墓室	1
	近位部～遠位骨端外れ	右	3	奥壁溝内	1
脛　骨	完存	左	8	墓室	2
	近位端～骨体	右	6	石積内	1
	近位骨端外れ～遠位端	右	8	墓室	1
			8	墓室	1
			13	床直	1
		左	13	床直	1
			13	墓室	1
			7	墓室	1
	近位骨端外れ～遠位部	右	7	墓室	1
	近位部～遠位端	左	6	墓室西側	1
		右	8	墓室	1
	両端外れ	右	7	墓室	1
		左	7	墓室	1
腓　骨	近位骨端外れ～遠位端	右	8	墓室	1
	骨体～遠位端		8	墓室	1

第47表　ネコ出土状況一覧

部　位			右／左	出土地区		個数
				号墓	出土地点	
椎　体	軸椎	完存	－	14	墓室	1
	胸椎	完存	－	14	墓室	2
				14	墓室	1
	腰椎	完存	－	14	墓室	3
肋　骨		完存	右	14	墓室	3
				8	墓室	1
肩甲骨	完存		左	14	墓室	1
			右	14	墓室	1
上腕骨	完存		左	14	墓室	1
	両端外れ		左	6	石積内	1
橈　骨	完存		左	14	墓室	1
			右	14	墓室	1
尺　骨	完存		右	14	墓室	1
			左	14	墓室	1
	近位端		右	8	墓室	1
中手骨	Ⅲ		左	8	墓室	1
	Ⅲ		右	10	墓室	1
	Ⅴ		左	8	墓室	1
寛　骨	完存		左	14	墓室	1
			右	14	墓室	1
大腿骨	完存		左	8	墓室	1
	完存		右	14	墓室	1
	近位端～遠位骨端外れ		左	14	墓室	1
	近位骨端外れ～遠位端		左	14	墓室	1
	近位部～遠位部		左	10	墓室	1
	近位部～骨体		右	14	墓室	1
脛　骨	完存		左	14	墓室	2
			右	8	石積内	1
			右	14	墓室	1
	近位部～遠位部		左	8	石積内	1
腓　骨	完存		右	14	墓室	1
			左	14	墓室	1
中足骨	Ⅱ		左	14	墓室	1
			左	8	墓室	1
			左	3	奥壁溝内	1
	Ⅲ		右	14	墓室	1
			左	8	石積内	1
			左	14	墓室	1
			右	14	墓室	1
	Ⅳ		右	14	墓室	1
			左	14	墓室	1
	Ⅴ		右	14	墓室	1
			右	14	墓室	1

第48表　ネコ歯出土状況一覧

部　位	右／左	残存部位	出土地区		個数
			号墓	出土地点	
下顎骨	右	C P3･4 M1	14	墓室	1

第49表　ウマ出土状況一覧

部　位	右／左	出土地区		個数
		号墓	出土地層	
基節骨	左	6	墓室	1
		8	墓口	1
中節骨	不明	7	墓室	2

第50表　ウマ歯出土状況一覧

部　位	右／左	残存部位	出土地区		個数
			号墓	出土地点	
上顎骨	左	M 1	7	墓室	1
下顎骨	右	I 3	7	墓室	1

第54表　ウシ・ウマ出土状況一覧

部 位	右／左	出土地区		個数
		号墓	出土地層	
肋骨	不明	14	床直	(2)
		11	墓室	(1)

注　（　）破片

第51表　ブタ出土状況一覧

部　位		右／左	出土地区		個数
			号墓	出土地点	
上顎骨	頭頂骨	－	1	墓室	1
	後頭骨頚静脈突起	－	5	床直	1
	側頭骨頬骨突起	－	8	墓室	1
	頬骨側頭突起	－	1	前庭	1
			8	墓室	1
	側頭骨鼓室部	右	1	前庭	1
		左	1	前庭	1
下顎骨	下顎角	左	1	墓室	1
		右	3	奥壁溝内	1
	下顎骨	右	1	前庭	1
椎　体	頸　椎	－	8	墓室	{1}
		－	14	墓室	1
	軸　椎	－	14	墓室	1
	胸　椎	－	14	墓室	1
	腰　椎	－	1	墓室	(2)
		－	14	墓室	1
	椎　体	－	8	墓室	{1}
	破　片		14	墓室	(1)
	棘突起	－	8	石積内	1
肋　骨		左	8	墓室	1
			8	墓口	1
		不明	14	墓室	1
肩甲骨	近位部	左	8	墓口	1
	近位部～遠位部	左	14	床直	{1}
	骨　体	左	5	墓室	1
	近位骨端外れ～遠位部	左	8	墓室	{1}
		右	8	墓室	{1}
	破　片	左	1	前庭	1
上腕骨	骨　体	右	8	墓室	1
	骨体～遠位骨端外れ	左	14	前庭表土	{1}
橈　骨	両端外れ	左	8	墓室	{1}
尺骨	近位骨端のみ	左	1	前庭	1
	近位骨端外れ	左	8	墓口	1
	両端外れ	右	8	墓室	{1}
	近位骨端外れ～骨体	右	14	墓室	1
	骨体	右	6	墓室	1
	骨体～遠位部	右	8	墓室	1
寛　骨	腸骨部	右	14	墓室	1
	臼　部	右	8	墓口	1
	臼部～坐骨	左	8	墓室	{1}
大腿骨	近位部	左	1	前庭	1
	近位部～遠位部	左	3	奥壁溝内	1
	両端外れ	右	8	墓室	{1}
		左	8	墓室	{1}
	骨体～遠位部	右	3	奥壁	1
脛　骨	両端外れ	左	14	前庭表土	1
腓　骨	骨　体	右	6	前庭	1
距　骨		右	8	墓口	1
踵　骨		右	7	墓室	1
中手・中足骨		不明	1	墓室	1
			14	墓室	1
		左	5	墓室	2
		右			1
中足骨		左	1	前庭	1

注　｛　｝幼・（　）破片

第53表　ウシ出土状況一覧

部　位		右／左	出土地区		個数
			号墓	出土地層	
下顎骨	切歯骨	不明	14	床直	2
椎　体	環椎	不明	7	墓室	1
上腕骨	近位骨端外れ	右	5	墓室	1
	遠位骨端のみ	右	14	墓室	1
橈　骨	遠位端	左	8	墓室	(1)
中手骨		不明	14	前庭表土	1
脛　骨	近位部～遠位部	左	14	墓室	1
			5	墓室	{1}
	遠位骨端のみ	右	7	墓室	1
中手・中足骨		不明	14	床直	1
脛　骨	近位骨端外れ	右	1	前庭	①
基節骨		左	7	墓室	1
末節骨		左	7	墓室	1

注　｛　｝幼・（　）破片・○キズ有り

第52表　ブタ歯出土状況一覧

部位	右/左	残存部位	出土地区		個数
			号墓	出土地点	
上顎骨	右	C P1･2･3･4　M1･2･3 ♀	10	地山直上	1
	左	C P1･2･3･4　M1･2･3			
	右	I 1	10	墓室	1
		I 2	10		1
		I 3	10		1
		I 3	5	床直	1
		dm2･3･4	1	墓室	1
	左	I 1	10	墓室	1
		I 2	10		1
		I 3	10		1
		dm3･4	1	墓室	1
		dm4〈M2〉	8	墓室	1
		P2	1	墓室	1
		P4 M1･2	5	墓室	1
下顎骨	右	I 1･2･3 CP1･2･3･4 M1･2･3 ♀	10	地山直上	1
	左	I 1･2･3 CP1･2･3･4 M1･2･3			
	右	I 2 C P〈2〉P 4 ♀	8	石積内	1
	左	I 1･2 C P〈2〉〈3〉〈4〉 M2			
	右	i 〈1〉･2･3 dm2･3･4 M1･2 ♂	5	床直	1
	左	i 〈1〉･2･3 C dm2･3･4 M1･2			
	右	I 1･2	1	前庭	1
		i 1	3	奥壁溝内	1
		i 〈1〉dm〈2〉･4	14	床直	1
		C ♂	14	墓室	1
			5	床直	1
		dm3･4	1	墓室	1
		P3	1	墓室	1
		P4 M1･2	14	前庭	1
	左	I 1	8	石積内	1
		I 2 C〈P2〉 ♂	14	墓室	1
		dm3	8	石積内	1
		dm4	1	前庭	1
			8	石積内	1
			10	墓室	1
		M1	8	石積内	1
		M1･2	6	石積内	1
		M2	3	奥壁溝内	1

第55表　ヤギ出土状況一覧

部　位		右／左	出土地区		個数
			号墓	出土地点	
下顎骨	関節突起	左	3	奥壁溝内	1
肋　骨		左	1	前庭	1
肩甲骨	近位端	右	3	石積周辺	1
		左	1	前庭	1
	近位端～遠位部	左	3	奥壁溝内	1
	破片	不明	1	前庭	1
上腕骨	近位端	左	1	前庭	1
	骨体	右	7	墓室	1
	遠位部	左	1	前庭	1
	遠位端	左	1	前庭	1
橈　骨	近位端	左	1	前庭	1
尺　骨	近位骨端外れ～骨体	左	1	前庭	1
中足骨		左	7	墓室	1
中節骨		左	8	墓口	1

第56表　ヤギ歯出土状況一覧

部 位	右／左	残存部位	出土地区		個数
			号墓	出土地点	
下顎骨	右	dm4〈M1〉	3	奥壁溝内	1
		M1･2	1	前庭	1
	左	dm2･3･4 M1	14	前庭表土	1
		dm3	8	墓室	1
		dm4 M1･2			1
		M1	8	石積内	1

第Ⅴ章　結語

前章まで調査の内容について述べてきたが、本章では調査によって明らかにされたことなどについて整理し、検討を加えて結語としたい。

遺構

まず遺構について述べると、全て首里台地南側に形成された石灰岩崖面に掘り込まれた掘込墓で、13号墓を除いては粗加工、あるいは一部は自然浸食された横穴をほぼそのまま利用したものも見られた。13号墓は天井、床、壁を精加工しており墓口には扉の臍と想定される円形の窪みを確認したことから、当該墓は他の墓とは形態をかなり異にしている。調査区内でも最上部に位置していることや中世相当期の遺物が多数確認されていることから、当該古墓群の中でも別格的な様相が濃い。

遺物が多く確認された３、６、７号墓のうち、３号墓は墓室に形成されたフィッシャー内に遺物が一括して廃棄されているのが見られた。また６号墓では床土内から土器、タイ産褐釉陶器。土坑からは喜名焼壺が多く確認され、これらもほぼ同時期に床土内に込められたと考えられる。７号墓では約30㎝の厚さで人骨が密に出土し、墓室における利用方法の変遷を知る上で興味深い事例を提供することができた。遺構の変遷も見られることが確認された。

遺物

出土遺物に関しては各古墓について共通して言えることであるが、近世以降によく見られるボージャー、マンガン、御殿タイプの蔵骨器の出土が皆無に近く、タイ産・中国産褐釉陶器や土器、喜名焼と思われる沖縄産陶器が墓室から主に出土している点を挙げることができる。これらは蔵骨器として利用された可能性が高く、とくに６号墓では沖縄産陶器壺の内部に火を受けた骨片が大量に入っているのが確認され、また３号墓からは底部を穿孔した土器も見られた。７号墓からは大量の人骨が足の踏み場が無い程、墓室床面から出土し、それに伴って土器や沖縄産陶器、タイ産褐釉陶器が出土している。

墓室から出土する沖縄産陶器は壺が主体で喜名焼に相当するものと考えられる。喜名焼窯は17世紀後半代に操業されていることが推測されており（池田2003）、当該古墓群の使用年代を考えていく上で鍵になってくるものと思われる。喜名焼窯は一部に15世紀代から操業しているとする説もあることから（読谷村教育委員会1993）、出土した喜名焼壺から年代を導き出すより、７号墓において中国産染付杯や抉り高台の白磁皿と供伴している点にこそ注目すべきである。また出土した喜名焼に相当する沖縄産陶器壺は読谷村で調査された窯跡出土資料と比較して肩の張るタイプが多く、加えて口唇部に貝目が付される資料が見られることから薩摩焼壺を意識した意匠となっていることも注目される。これらのことから今後、喜名焼の編年とそれを取り巻く周辺からの影響を考えていく上では格好の材料であると言える。

他に注目される遺物としては華南三彩陶器の水滴、県内でも確認例の少ない崇寧重宝が確認された。これらの遺物は県内のみならず全国的に見ても古墓からの出土例は僅少であることから、被葬者の性格を考えていく上で重要であると言える。

今後の課題

今回の調査では16世紀から18世紀まで、すなわち中世相当期から近世前半にかけて利用された古墓群である可能性を提示できたが、沖縄県内で同時期における古墓の調査事例は皆無に等しいため、比較検討することが困難であることを最後に述べておきたい。今回調査した古墓に最も近い形態としては那覇市銘苅地区の囲込岩陰墓があり、時期は14～15世紀とやや古くなる（那覇市教育委員会1994）。墓口近くに一次葬、奥に二次葬（集骨）が見られる状況は７号墓墓室の状況と類似する。事例としては上記のみであり、今後、当時の古墓のあり方についてはより検証を行っていく必要がある。また火を受けた人骨も多く見られることを併せて考えると、洗骨、火葬といった沖縄地域における葬法の起源を考えていく上で大きな示唆を与えるものと言える。加えて立地についても当該古墓群から南東方向へ続く崖面あるいは傾斜部においては現在、多くの古墓が分布している。その傾斜部に立地する那覇市教育委員会が発掘調査した「フチサ古墓群」は近世以降の古墓群（沖縄考古学会1990）で遺物の内容は全く異なる。より広域的に古墓群を見た場合、そして、それぞれの墓群の時期や形態の違いを見た場合、首里金城町における当該古墓群の相対的な位置付けが明確になってくる可能性が高い。本章では問題提起のみにとどめるが、今後においてより詳細な検証を行っていく必要がある。

参考文献

球陽研究会（編）　1974『沖縄文化史史料集成球陽（読み下し編）』角川書店
森田　勉　1982「14世紀～16世紀の白磁の型分類と編年」
加藤　嘉太郎著　1989『家畜比較解剖図鑑　上巻』養賢堂
内間　靖　1990「首里金城町フチサ古墓群発掘調査」『南島考古だより』第42号 沖縄考古学会
森村　健一　1991「畿内とその周辺出土の東南アジア陶磁器」『貿易陶磁研究』№11 日本貿易陶磁研究会
龍潭同窓会（編）　1998『留魂の碑』
久手堅　憲夫　2000『首里の地名』第一書房
島弘・城間千栄子　2001「首里崎山古墓群」『那覇市文化財調査報告書』第47集 那覇市教育委員会
島弘・玉城安明　2001「首里旧金城村跡」『那覇市文化財調査報告書』第48集 那覇市教育委員会
向井　亙　2002「タイ・ベトナム陶瓷器の産地と年代」
『専修大学考古学研究報告書１明代前半期の陶瓷器研究』専修大学文学部
十菱駿武・菊池実編　2002『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
高橋　誠一　2003「首里城下町の都市計画とその基本理念」『琉球の都市と村落』関西大学出版会
池田　榮史　2003「沖縄の窯業」『沖縄県史』各論編第２巻 沖縄県教育委員会
西本豊弘・松井章編　1999『考古学と動物学』同成社
大橋康二・西田宏子監修　1987「古伊万里」『別冊太陽』日本のこころ63 平凡社
内閣府賞勲局編　2001『日本の勲章・褒章』

参考報告書

西原町教育委員会　1983「我謝遺跡」『西原町文化財調査報告書』第５集
浦添市教育委員会　1985「浦添城跡発掘調査報告書」『浦添市文化財調査報告書』第９集
浦添市教育委員会　2004『前田・経塚近世古墓群』
勝連町教育委員会　1990「勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－（１）」『勝連町の文化財』
読谷村教育委員会　1993『第３回読谷村文化財展、喜名焼古窯跡展発掘調査のあらまし』
読谷村教育委員会　2003『掘り出された喜名焼古窯』
那覇市教育委員会　1991「御細工所跡」『那覇市文化財調査報告書』第18集
那覇市教育委員会　1992「壺屋古窯群　Ⅰ」『那覇市文化財調査報告書』第23集
那覇市教育委員会　1994「ヒヤジョー毛遺跡」『那覇市文化財調査報告書』第26集
那覇市教育委員会　2000「ナーチュー毛古墓群」『那覇市文化財調査報告書』第44集
那覇市教育委員会　2001「銘苅原古墓群　Ⅲ」『那覇市文化財調査報告書』第50集
沖縄県教育委員会　1995「湧田古窯跡　Ⅱ」『沖縄県文化財調査報告書』第121集
沖縄県教育委員会　1996「平敷屋トウバル遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第125集
関西大学出版部　1994『琉球国絵図資料集』第３集　沖縄県教育委員会
沖縄県立博物館　1994『特別展子どもの世界』
中城村教育委員会　2002「中城城跡」『中城村の文化財』第４集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群」
『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第６集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2002「天界寺跡　Ⅱ」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第８集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2002「円覚寺跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第10集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2003「尻並遺跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第15集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2004「首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－」
『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第19集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2004「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅳ）」
『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第25集

図　　版

8～14号墓
（南から）

0～5号墓　伐開前
（南から）

3～6号墓　伐開前
（南西から）

図版1　調査状況（1）

0 号墓
（南から）

1 号墓
（南東から）

1 号墓下の地下壕

図版２　調査状況（２）

2号墓
（南から）

2号墓　墓室発掘前
（東から）

3、4、5号墓
（南東から）

図版3　調査状況（3）

５号墓　墓室
（南西から）

５号墓　墓室出土の
ブタ（下顎骨）

６号墓
（南から）

図版４　調査状況（４）

6 号墓墓室　遺物出土状況
（南から）

7 号墓　表土除去後
（南東から）

7 号墓
EL ＝ 66.780 ～ 66.740m

図版５　調査状況（５）

7号墓　入口付近の人骨一括

7号墓　最下層出土遺物

木炭出土状況

図版6　調査状況（6）

7 号墓　石積下出土頭骨

7 号墓　床面検出状況

8 号墓
（西から）

図版７　調査状況（７）

８号墓　出土薬莢

９～10号墓
（南西から）

11号墓　墓室
ブタ（下顎骨）

図版８　調査状況（８）

11号墓　墓室
（南東から）

12号墓
（南東から）

12号墓　堆積状況
（南東から）

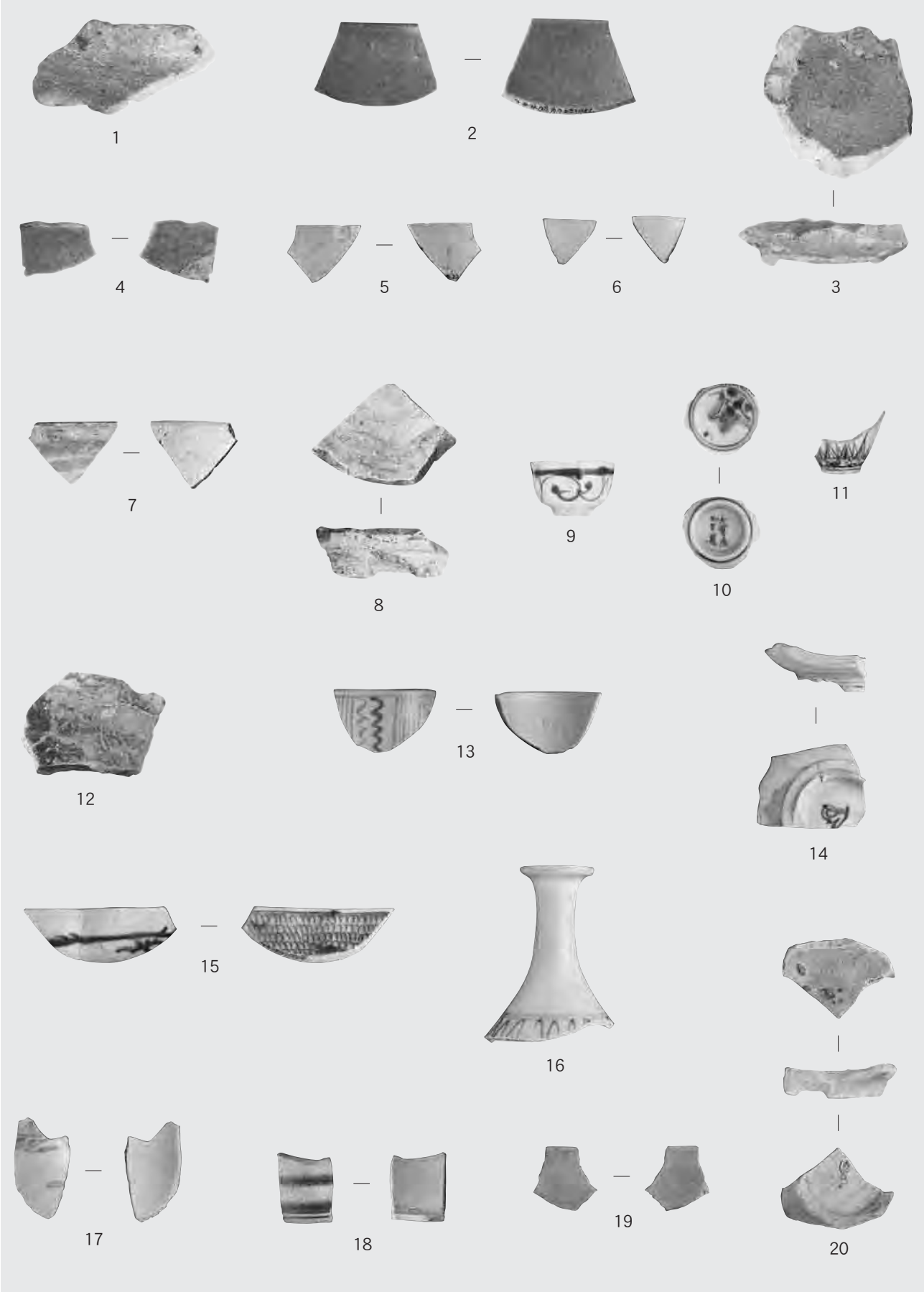
図版９　調査状況（９）

14号墓
（南から）

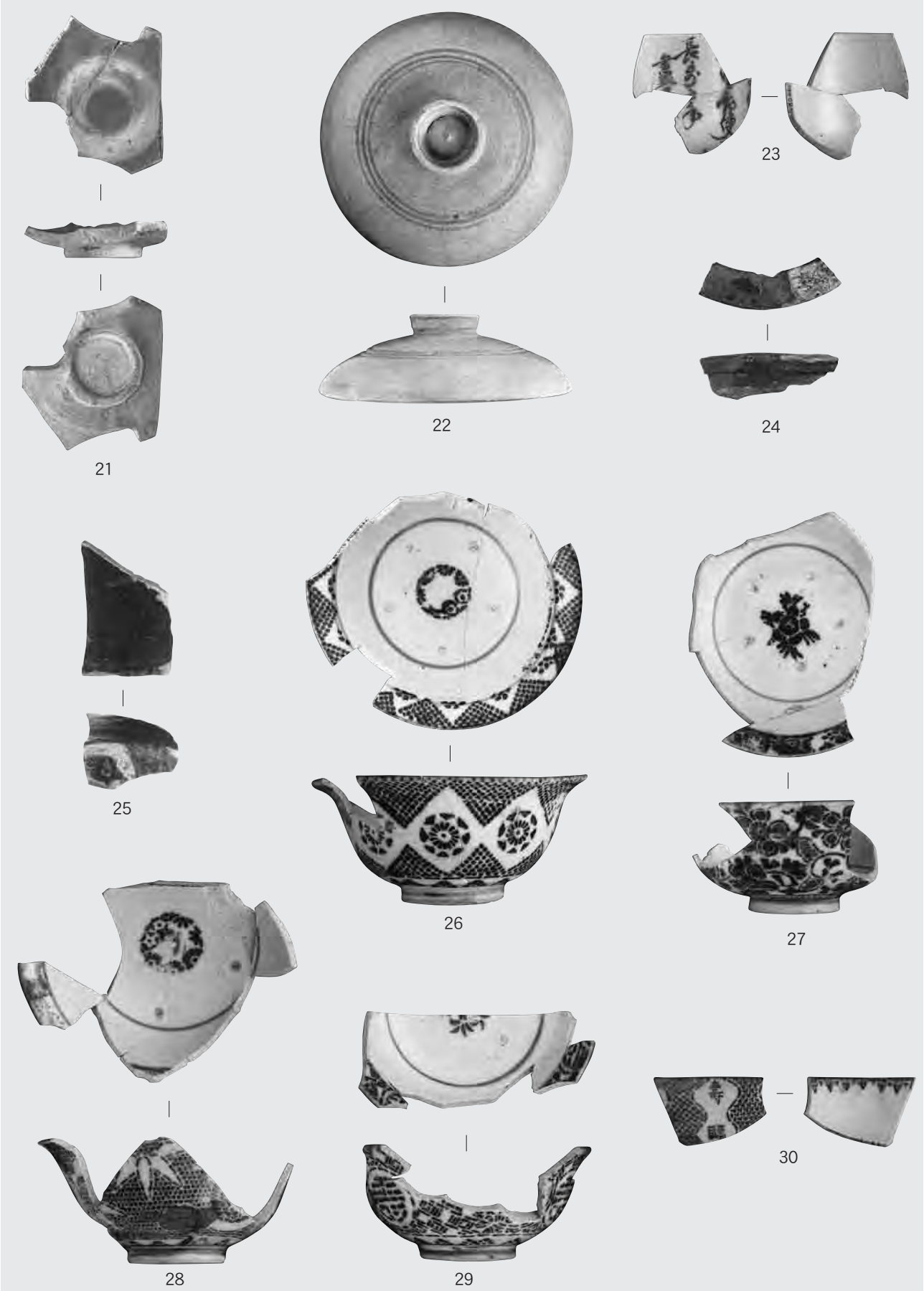
14号墓　遺物出土状況
（東から）

13号墓　墓室
（南東から）

図版10　調査状況（10）



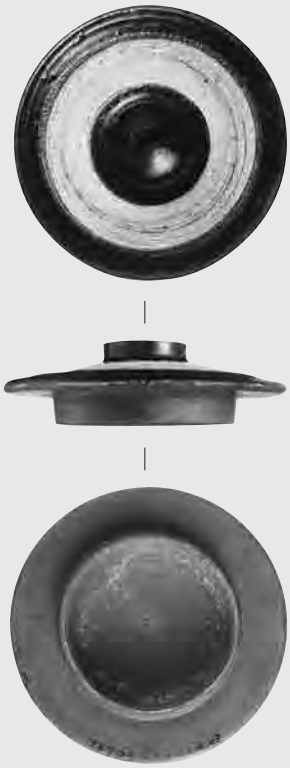
図版11　第０号墓出土遺物（１）



図版12　第０号墓出土遺物（２）

図版13　第０号墓出土遺物（３）

図版14　第０号墓出土遺物（４）



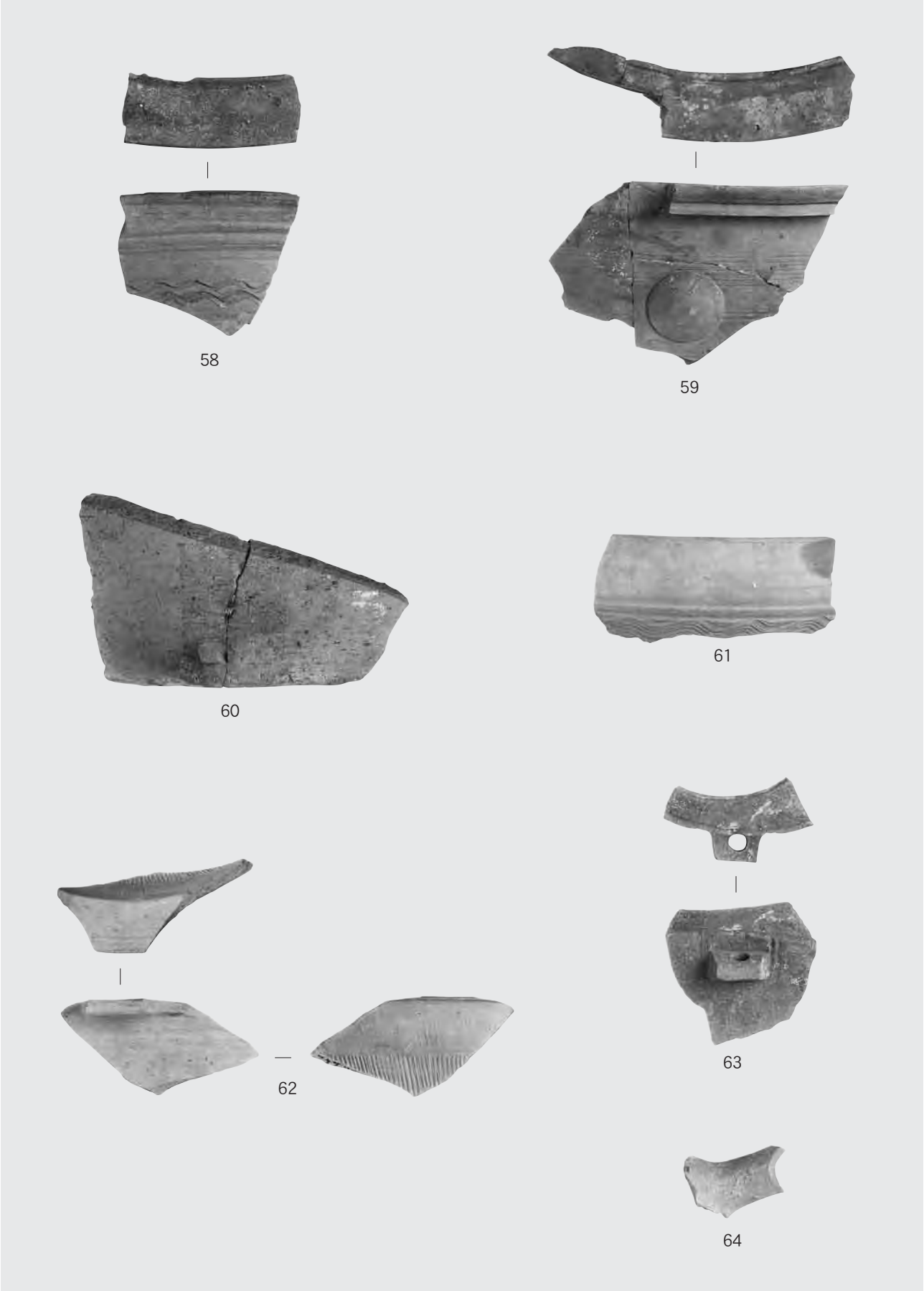
54

55

56

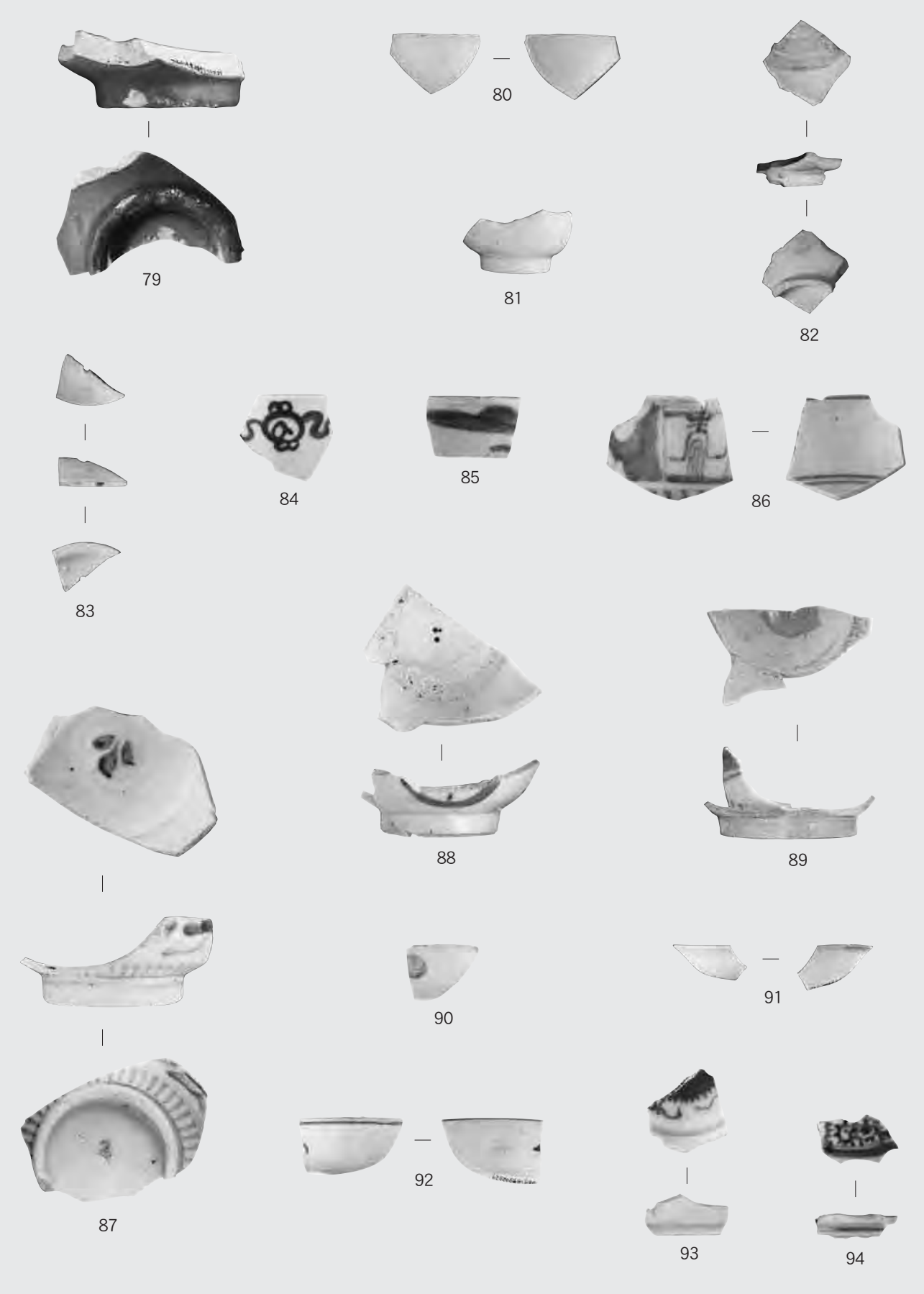
57

図版15　第０号墓出土遺物（５）

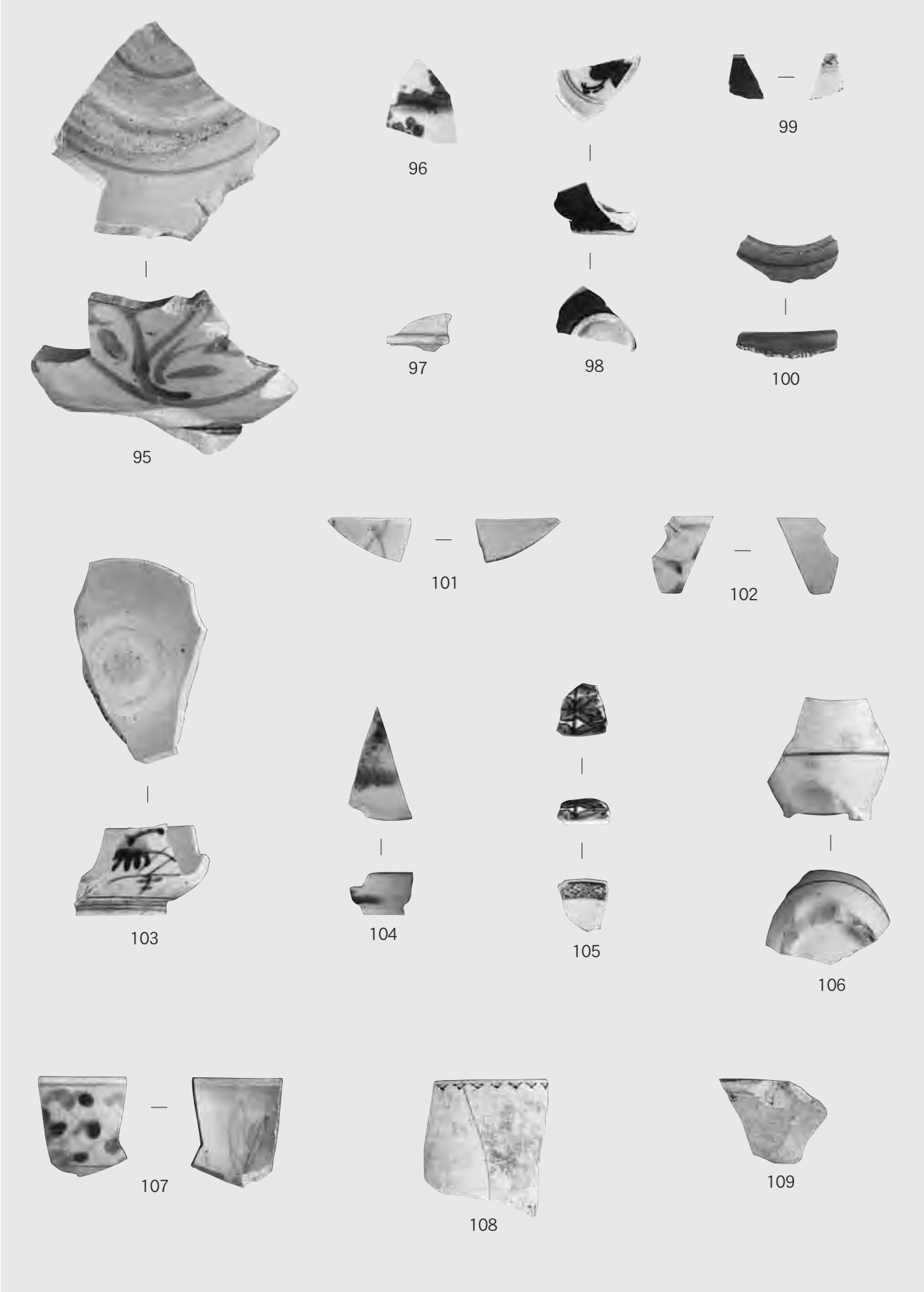


図版16　第０号墓出土遺物（６）

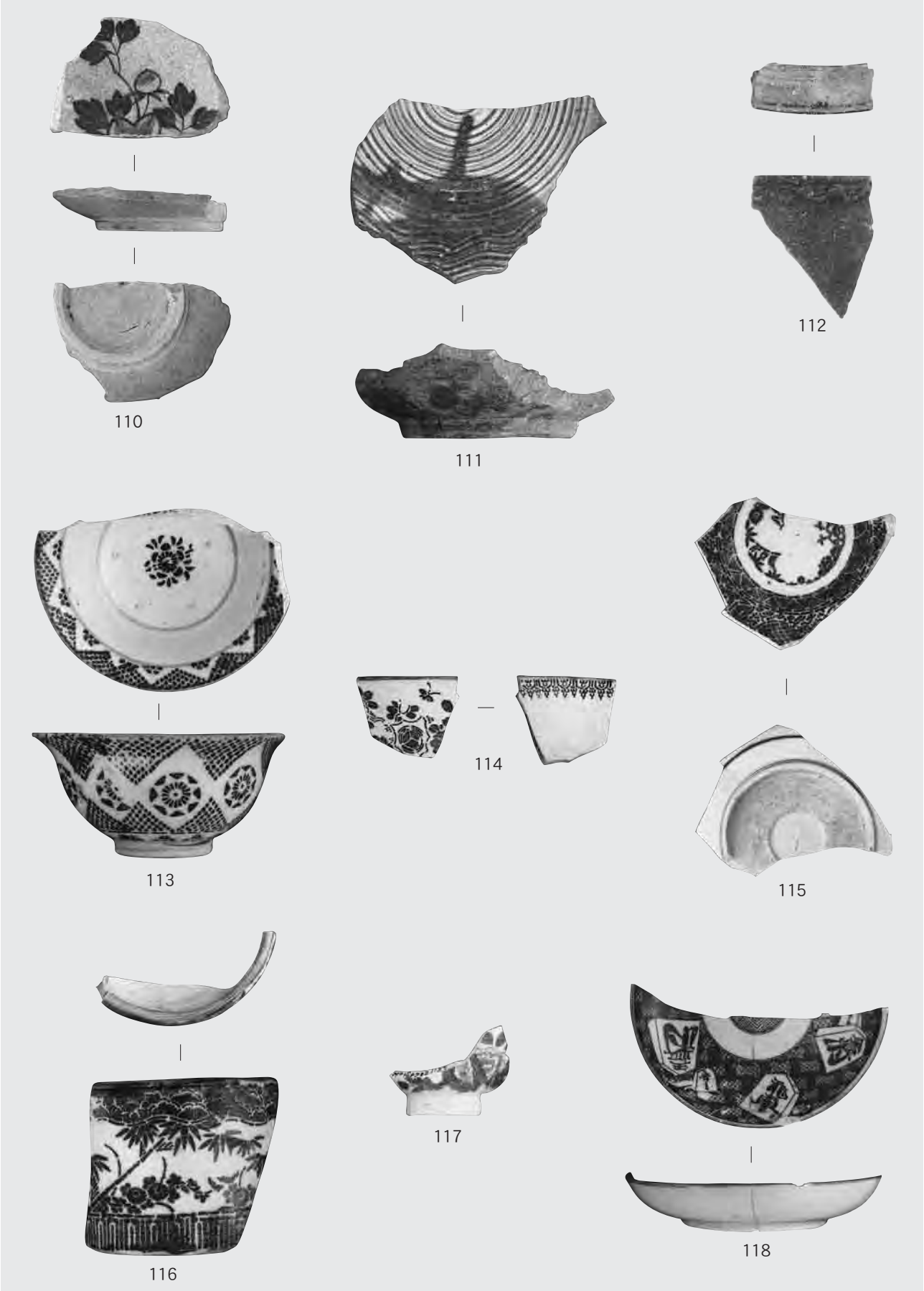
図版17　第０号墓出土遺物（７）



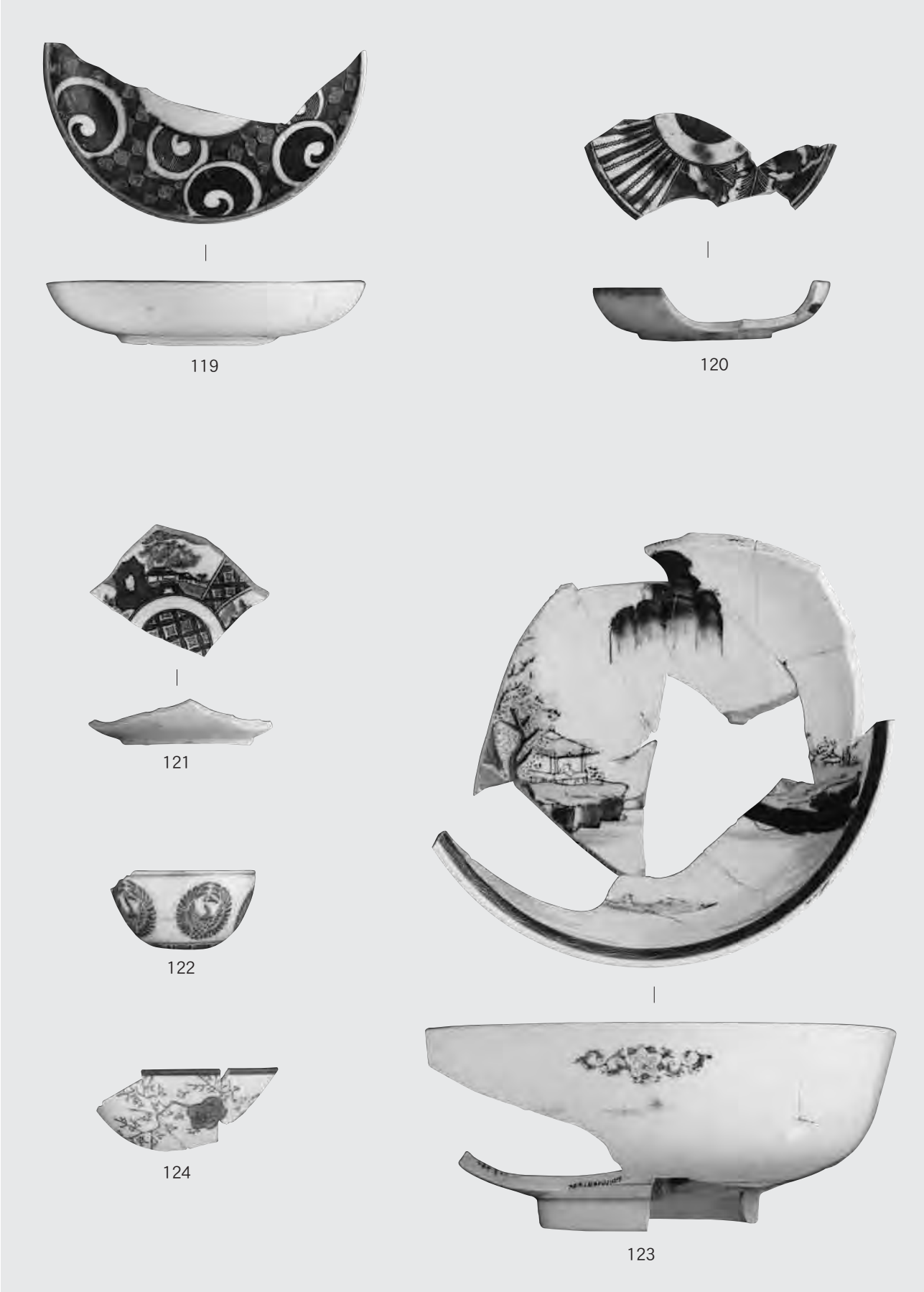
図版18　第１号墓出土遺物（１）



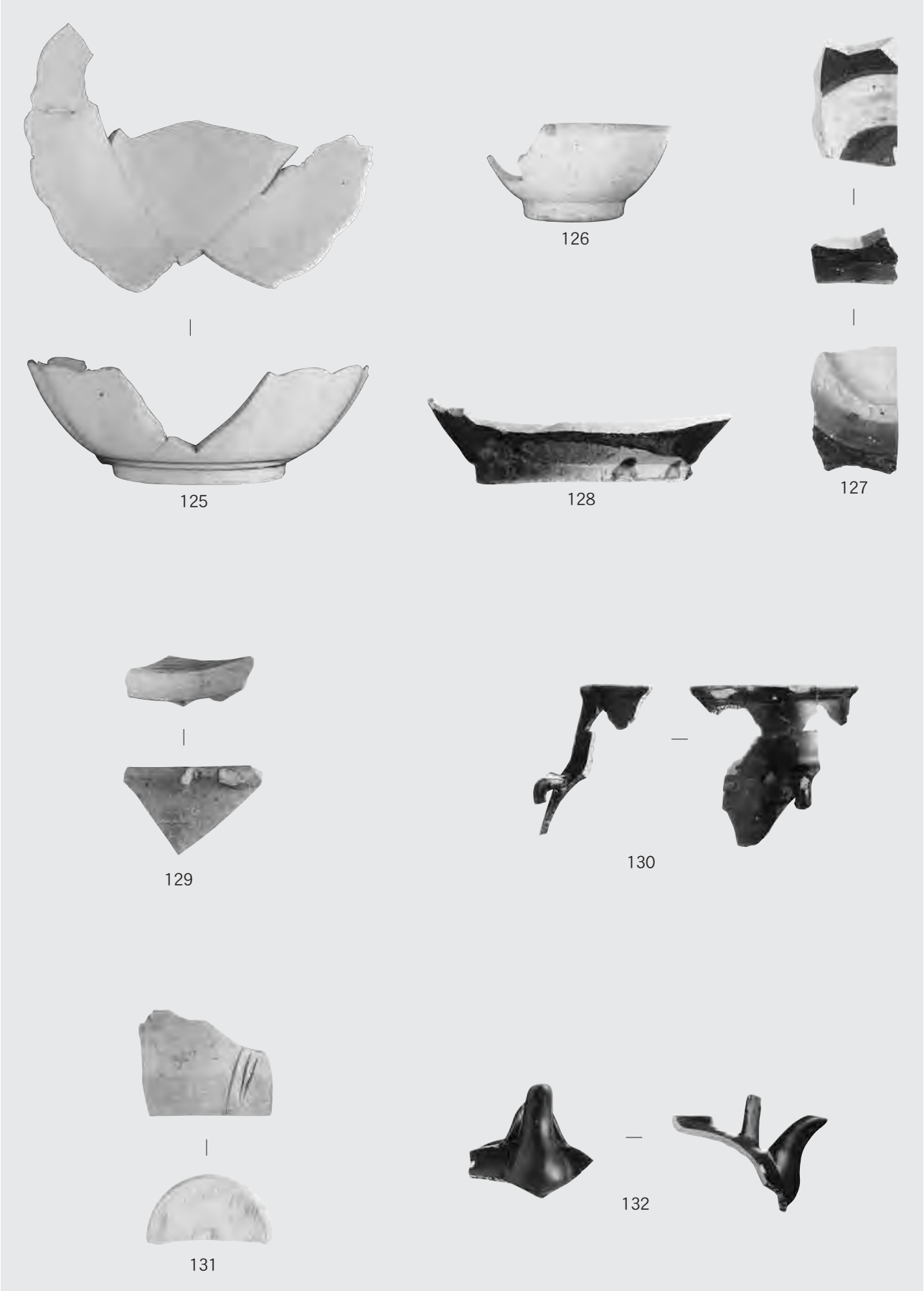
図版19　第１号墓出土遺物（２）



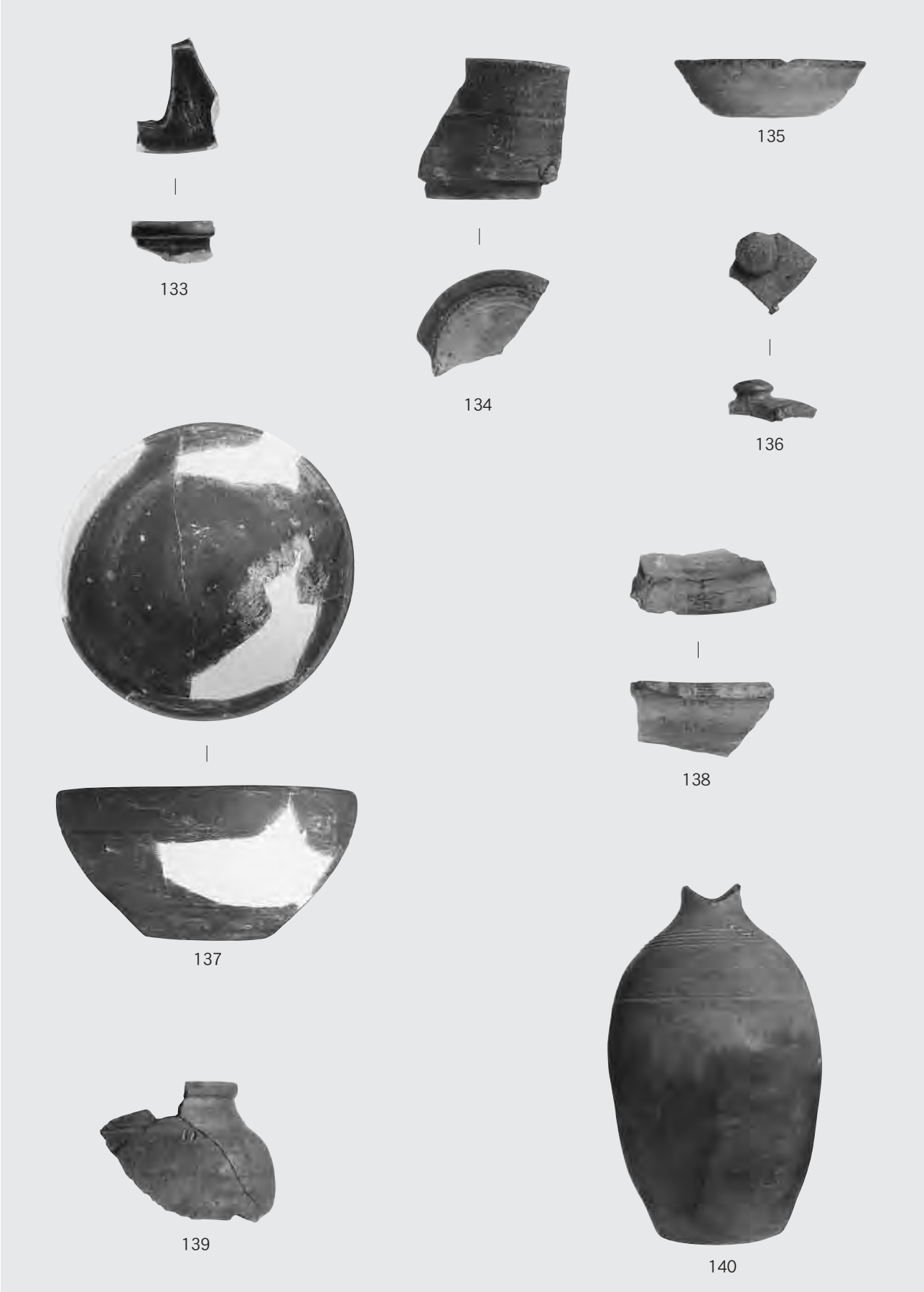
図版20　第１号墓出土遺物（３）



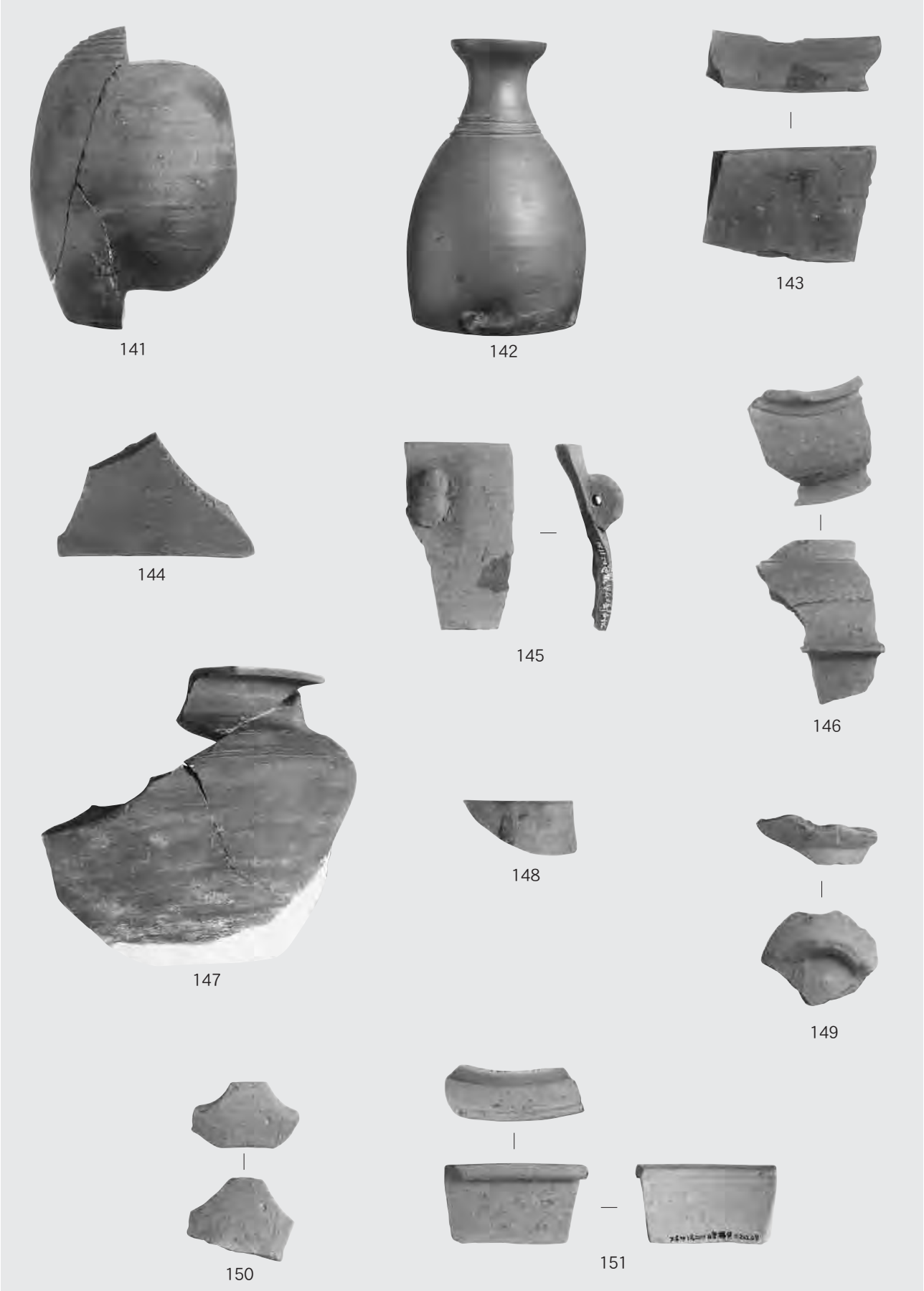
図版21　第１号墓出土遺物（４）



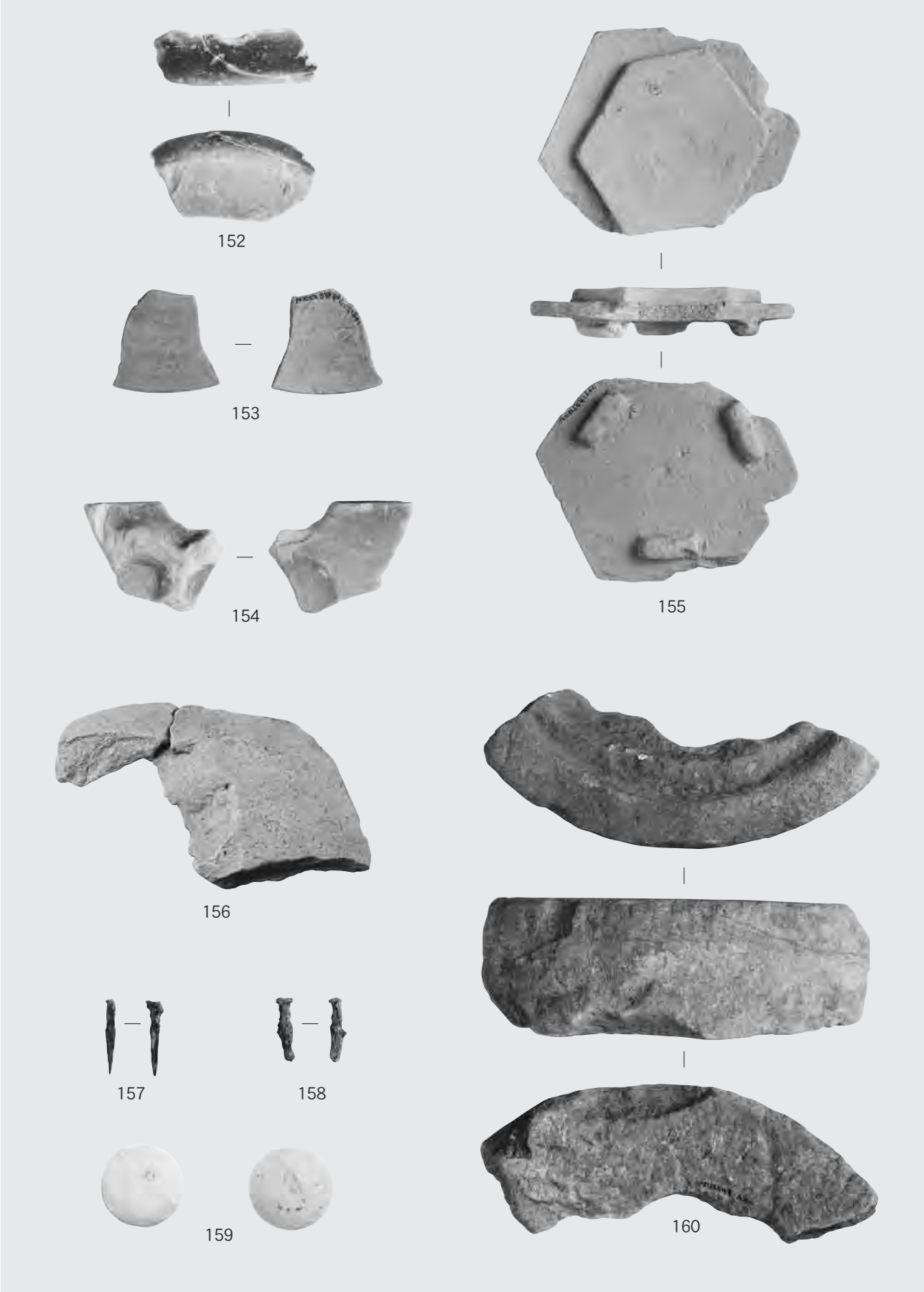
図版22　第１号墓出土遺物（５）



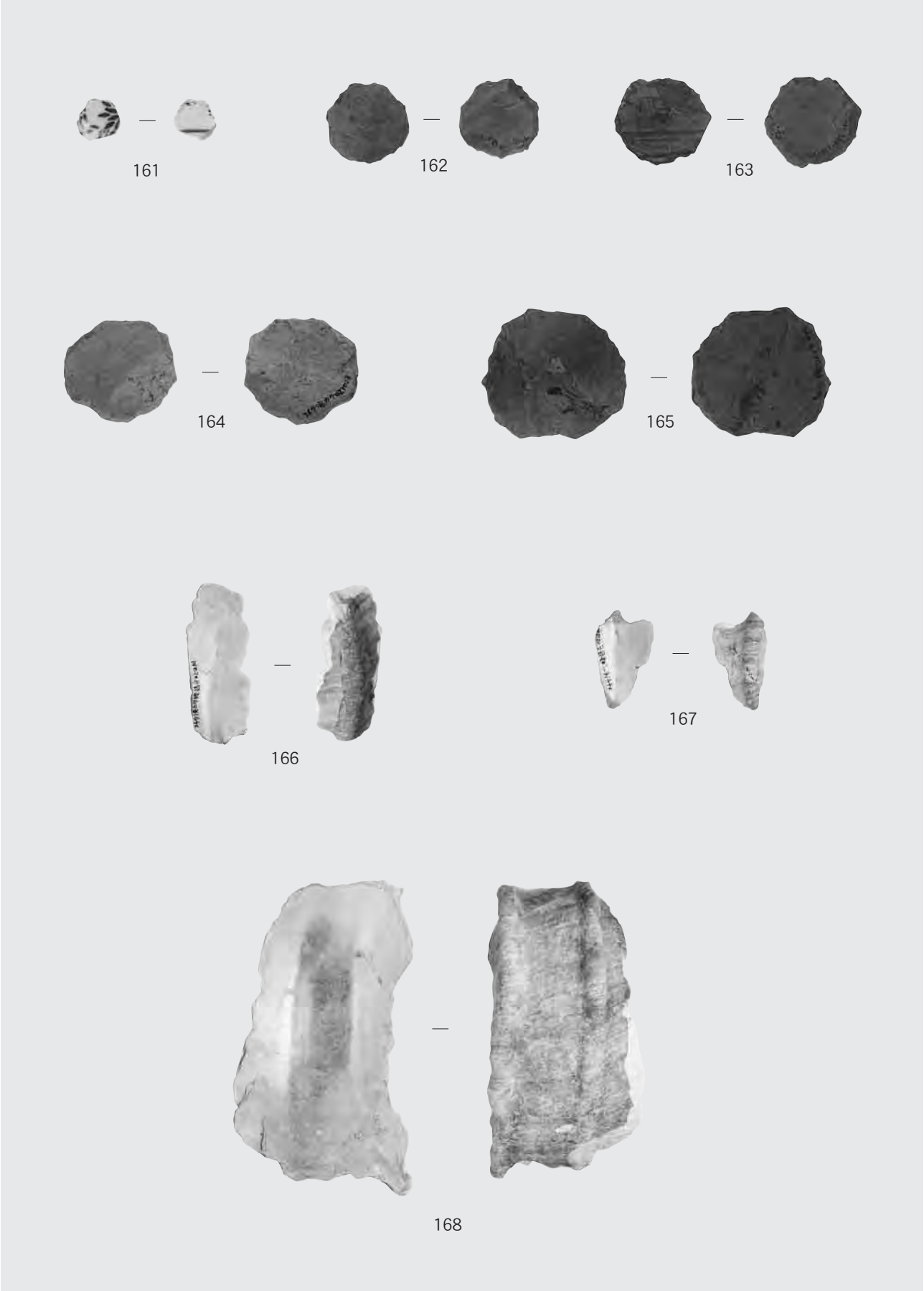
図版23　第１号墓出土遺物（６）



図版24　第１号墓出土遺物（７）

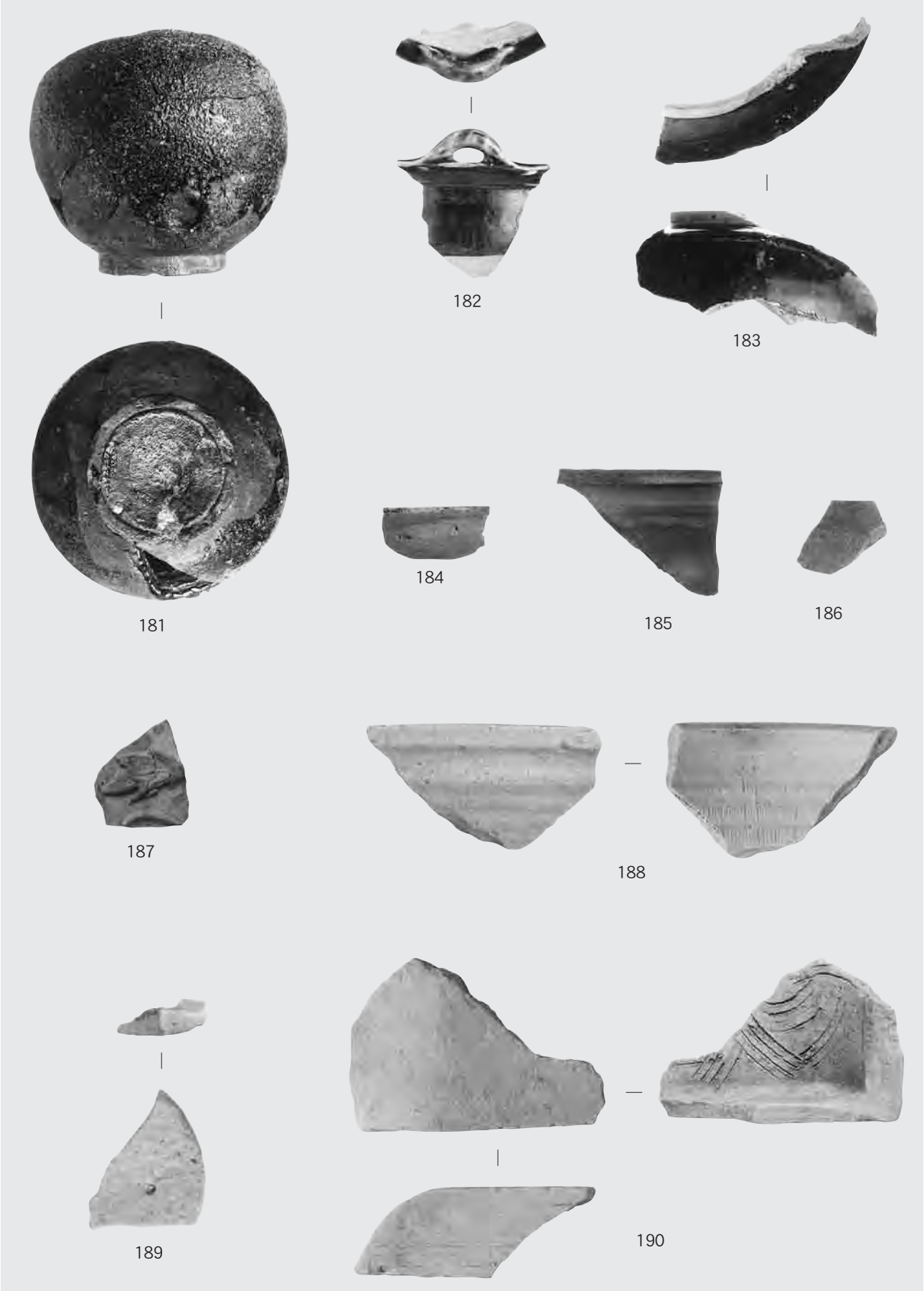


図版25　第１号墓出土遺物（８）

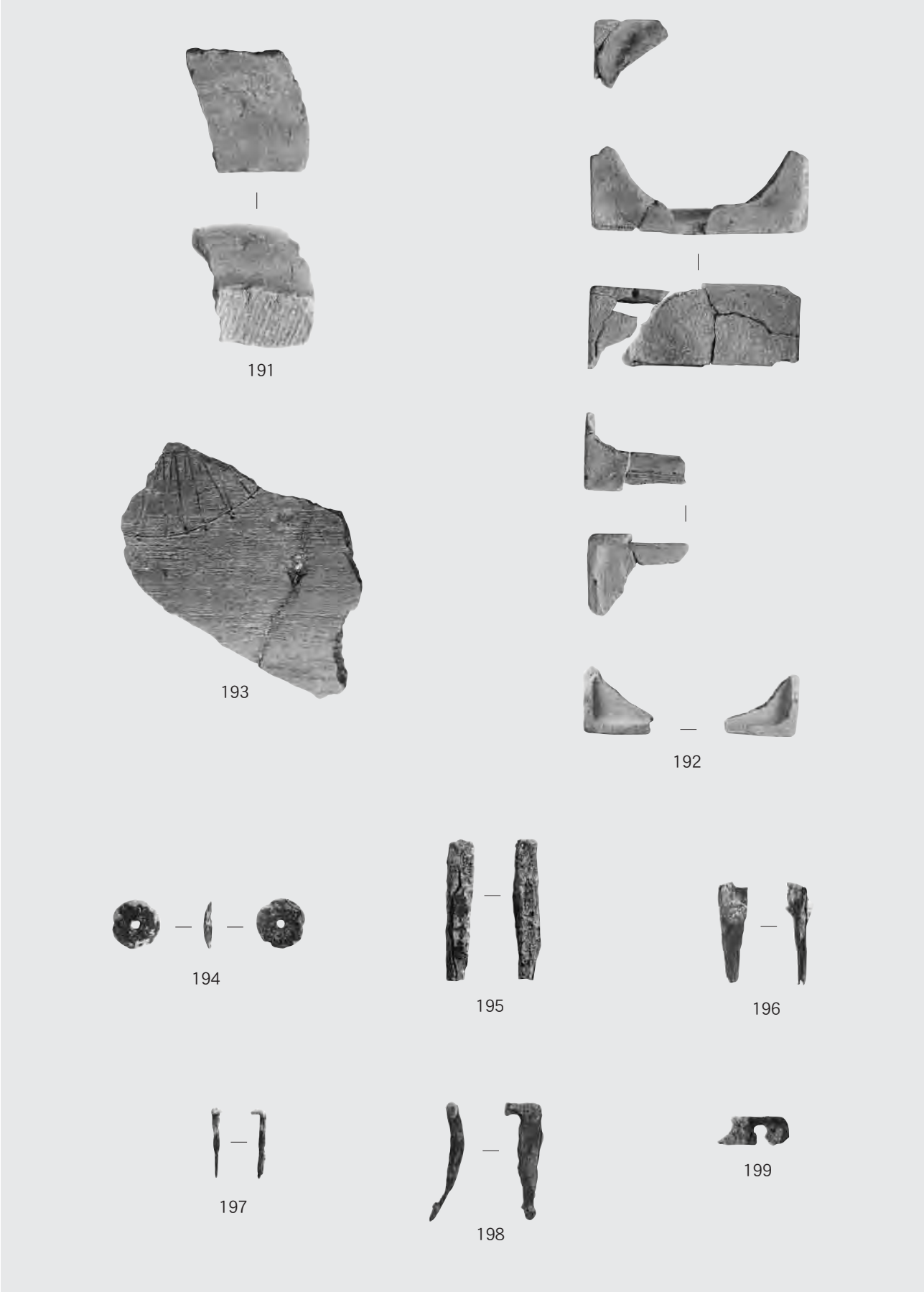


図版26　第１号墓出土遺物（９）

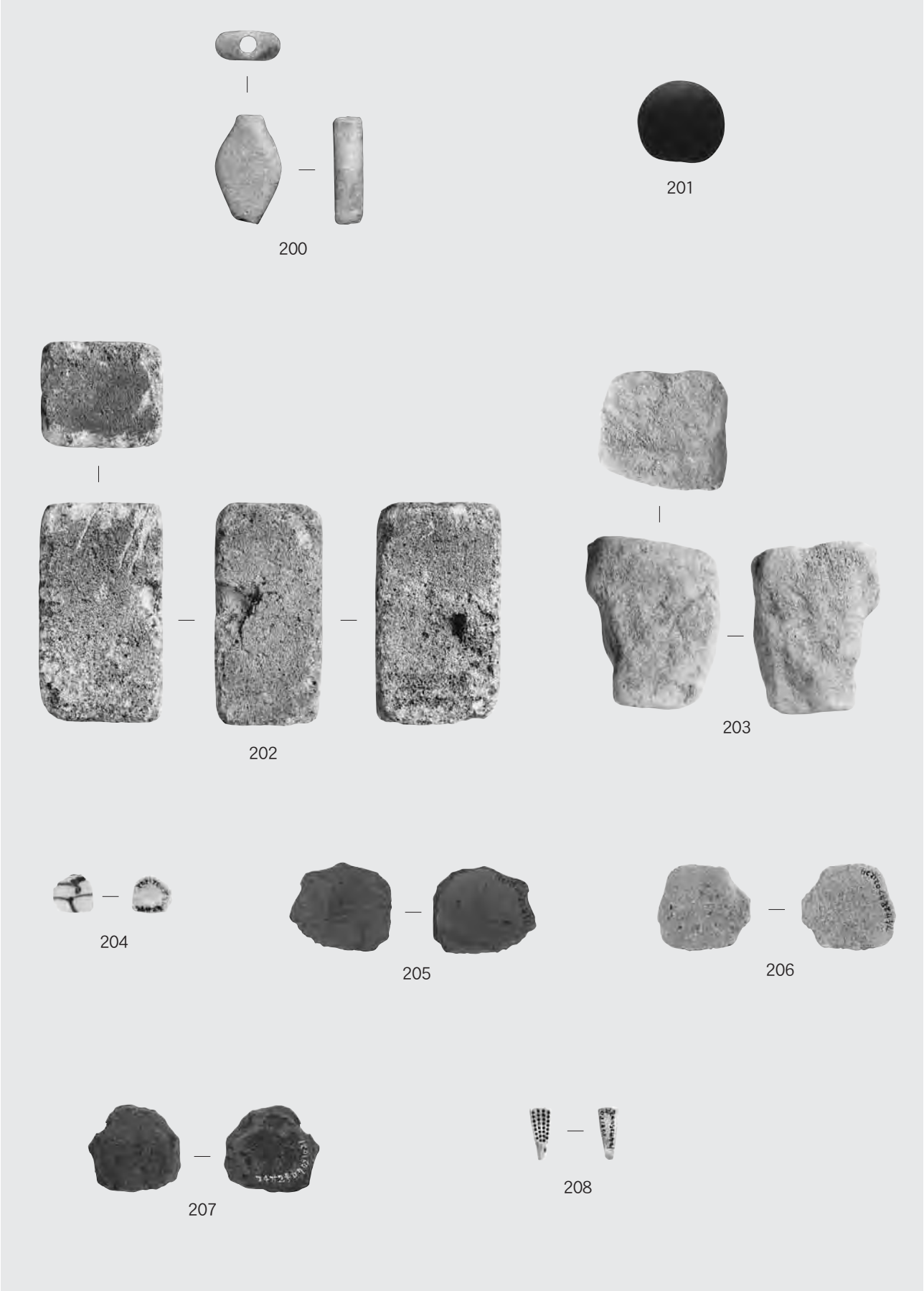
図版27　第２号墓出土遺物（１）



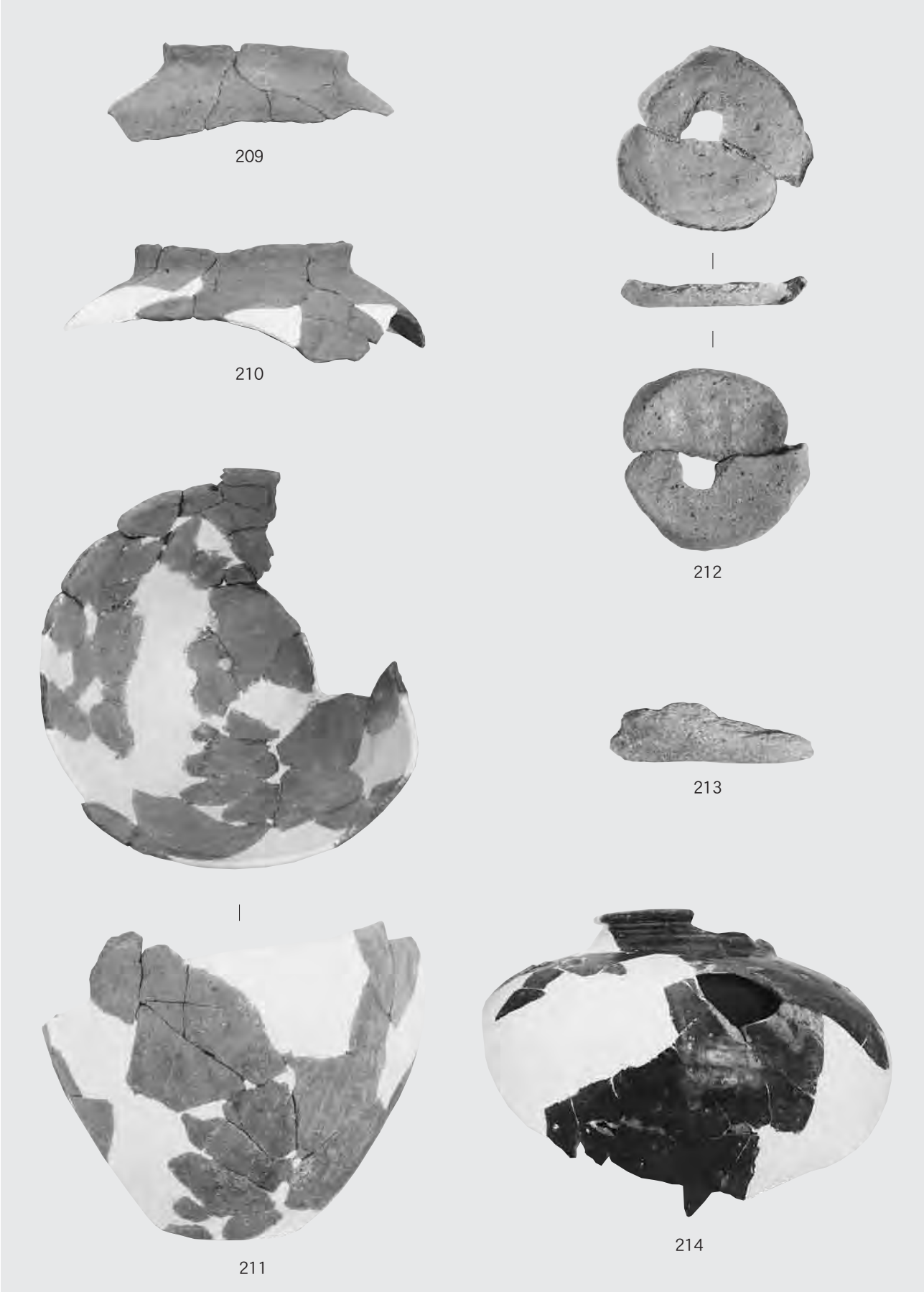
図版28　第２号墓出土遺物（２）



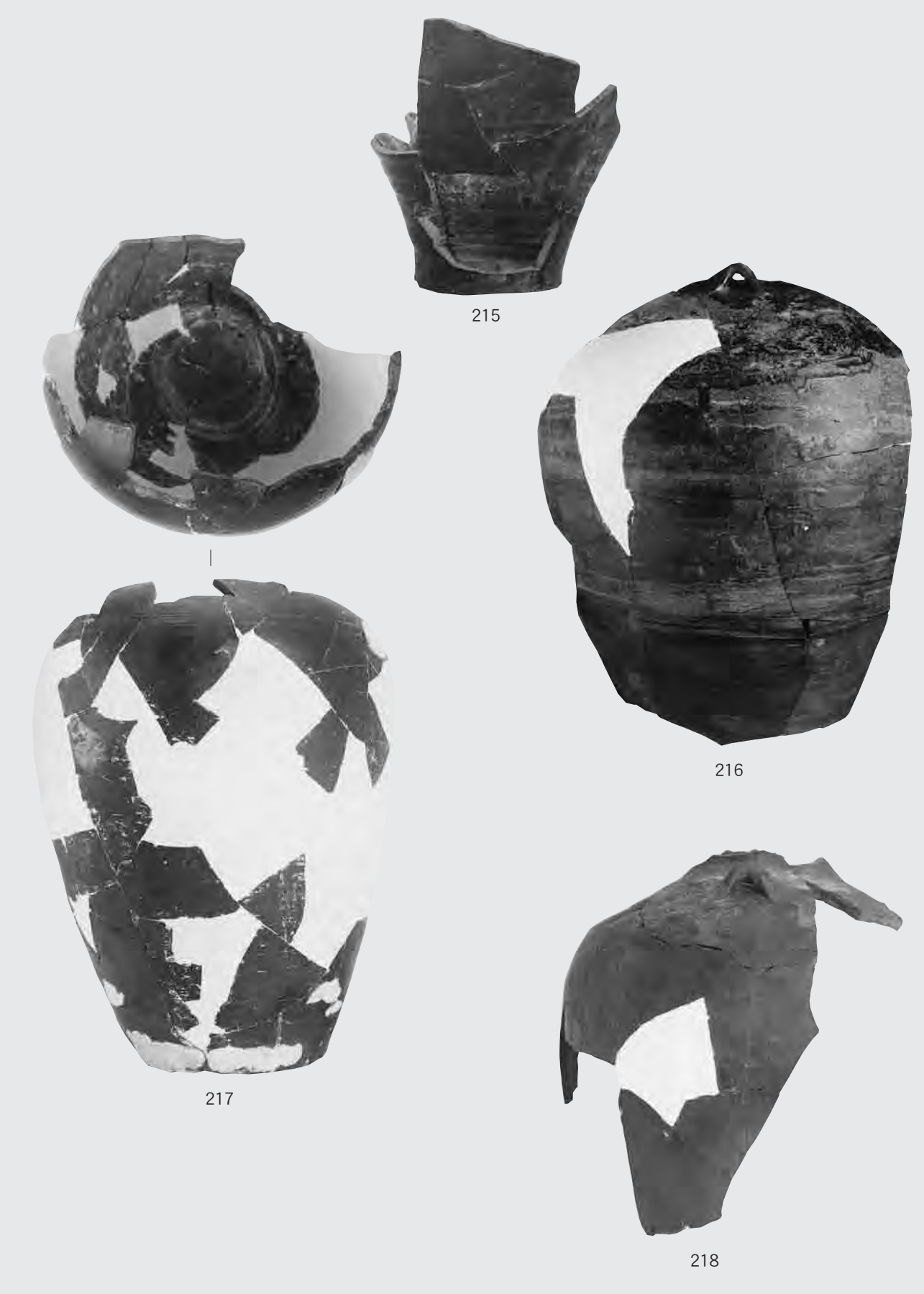
図版29　第２号墓出土遺物（３）



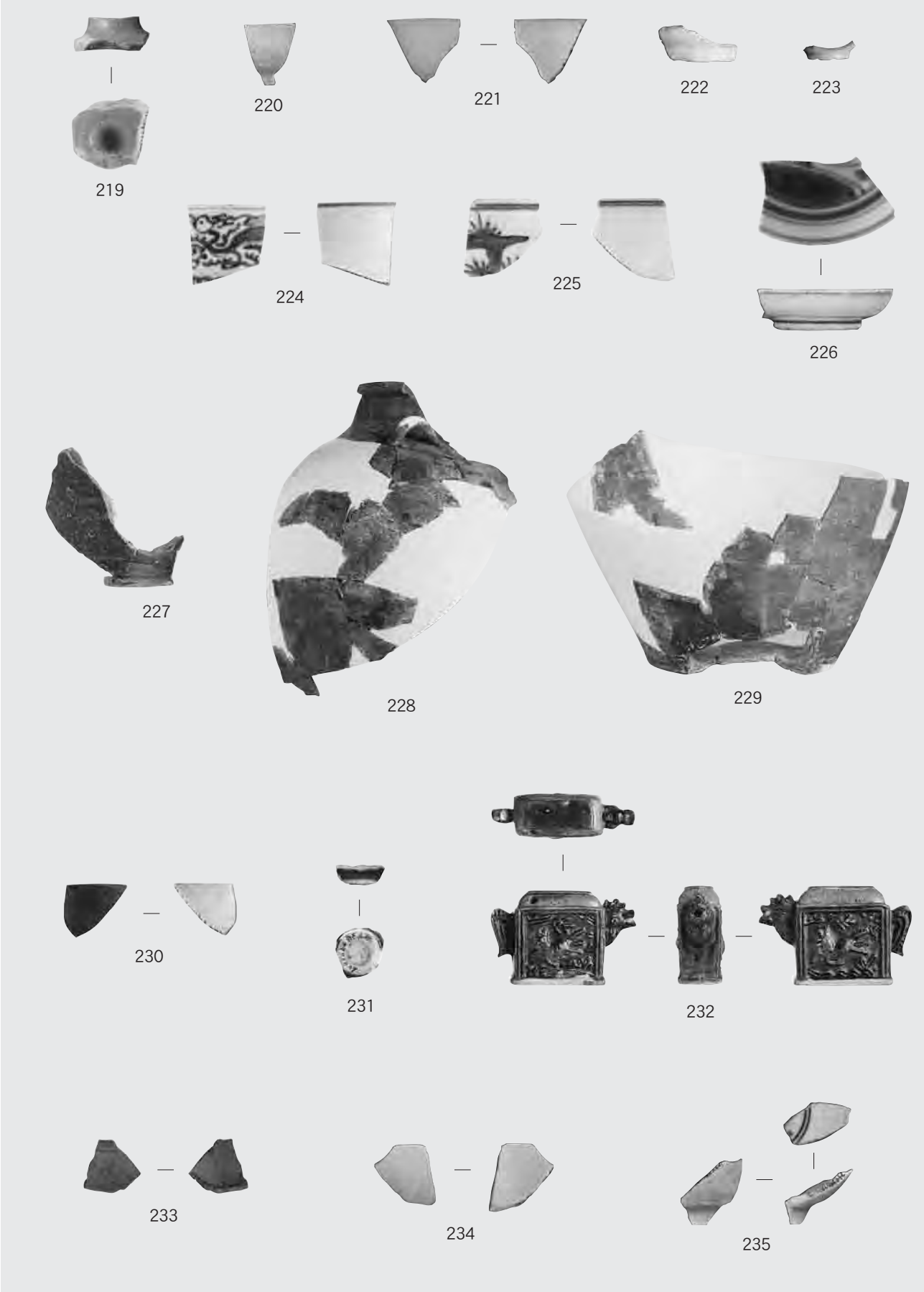
図版30　第２号墓出土遺物（４）



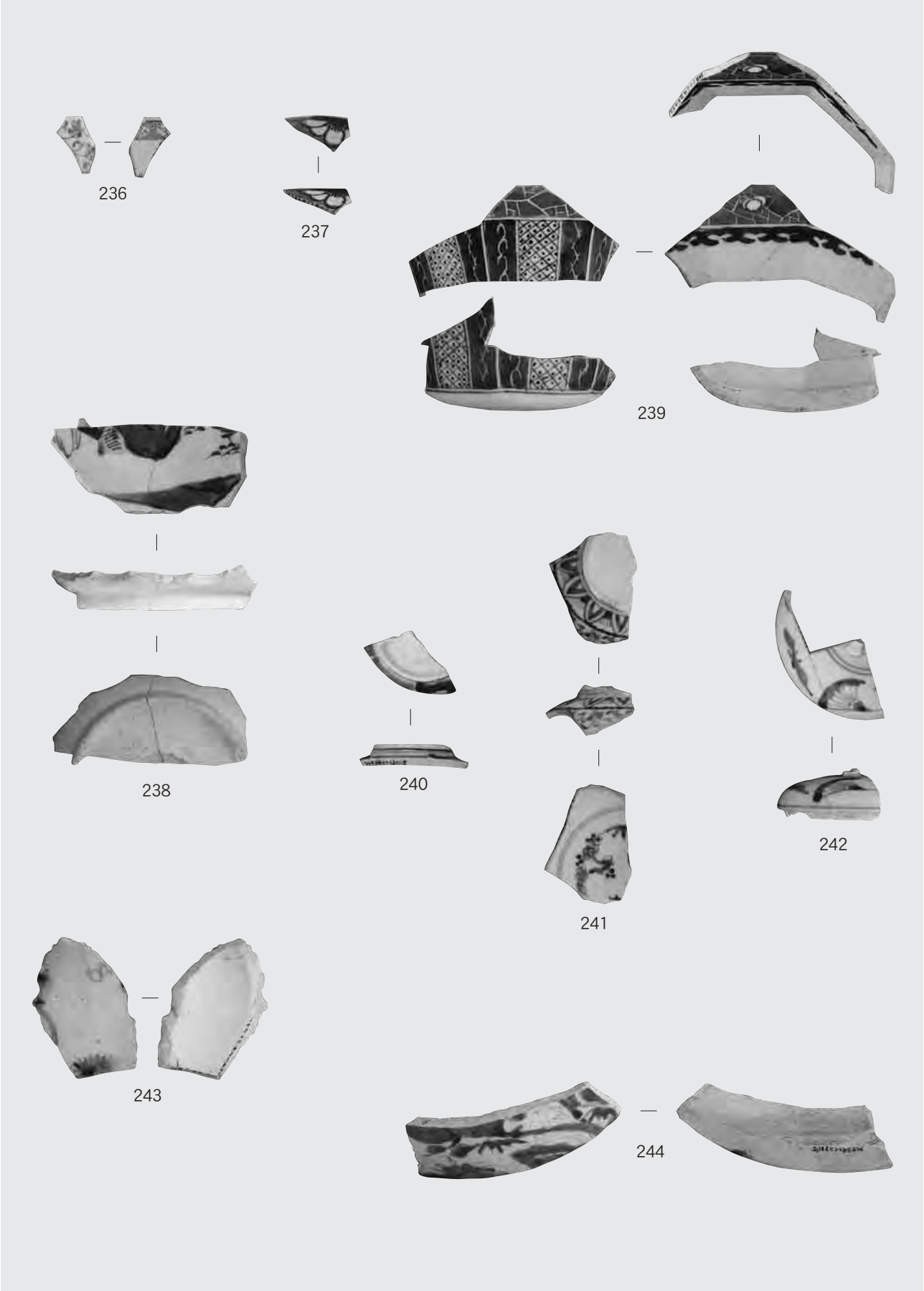
図版31　第３号墓出土遺物（１）



図版32　第３号墓出土遺物（２）

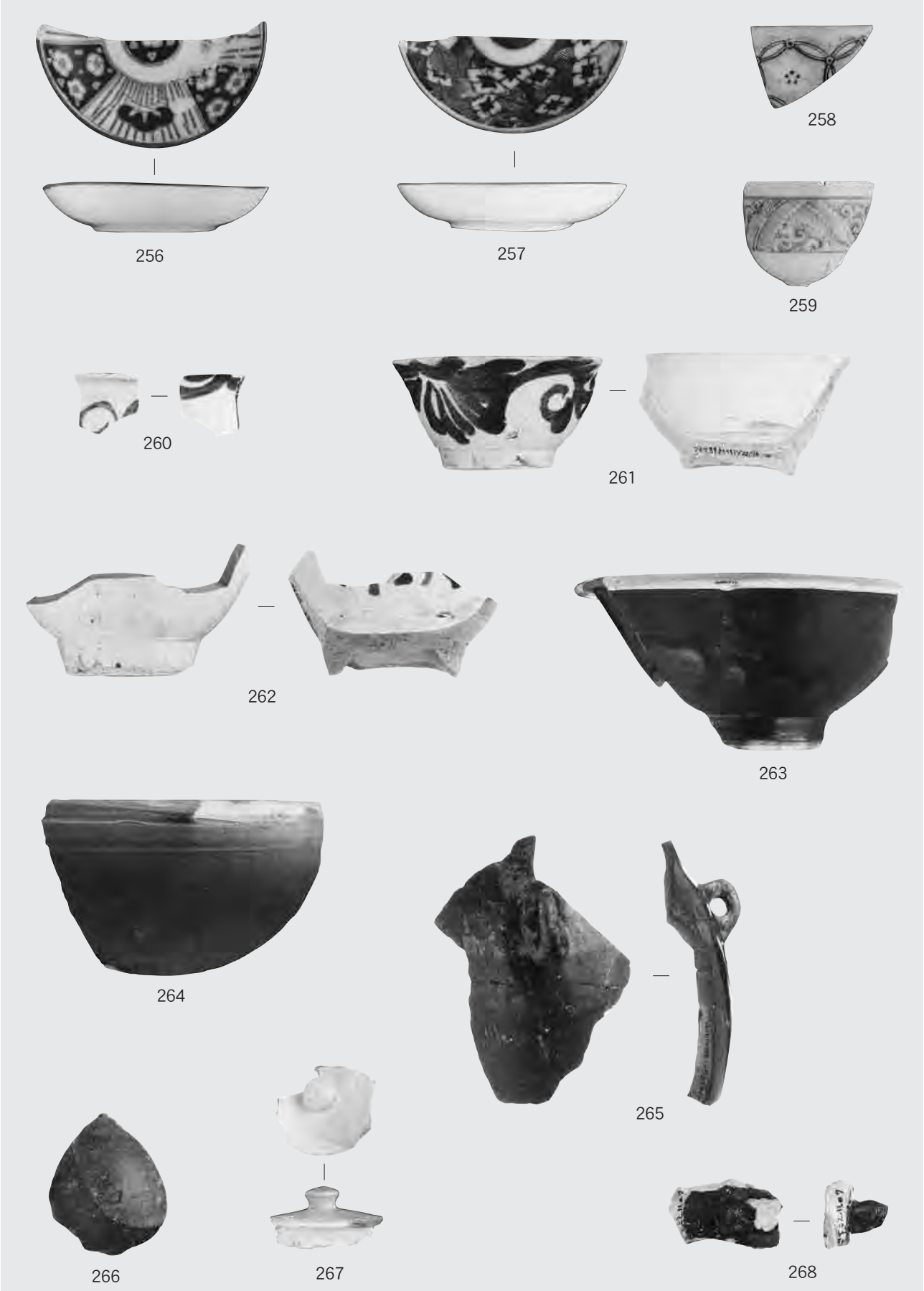


図版33　第３号墓出土遺物（３）



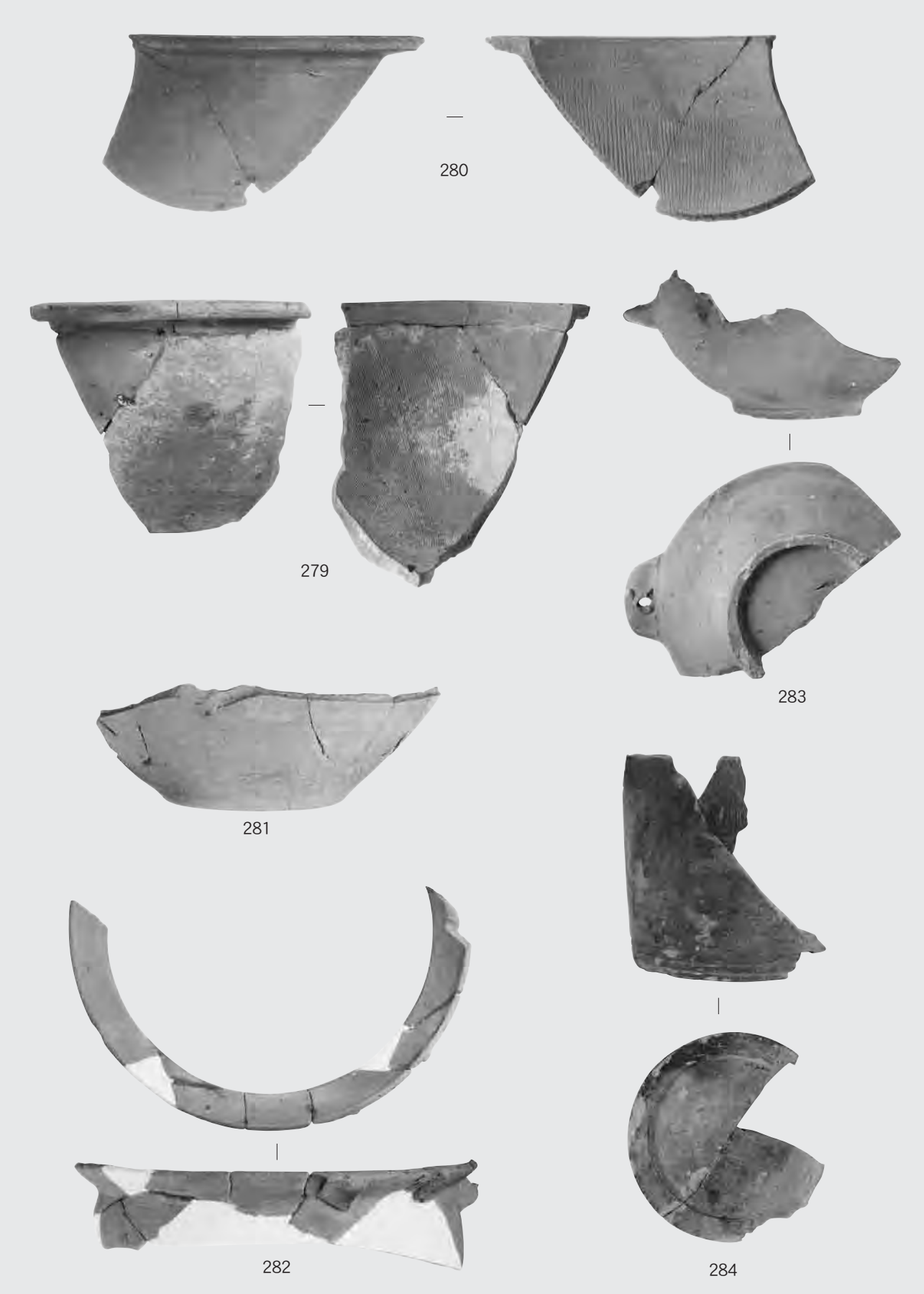
図版34　第３号墓出土遺物（４）

図版35　第３号墓出土遺物（５）

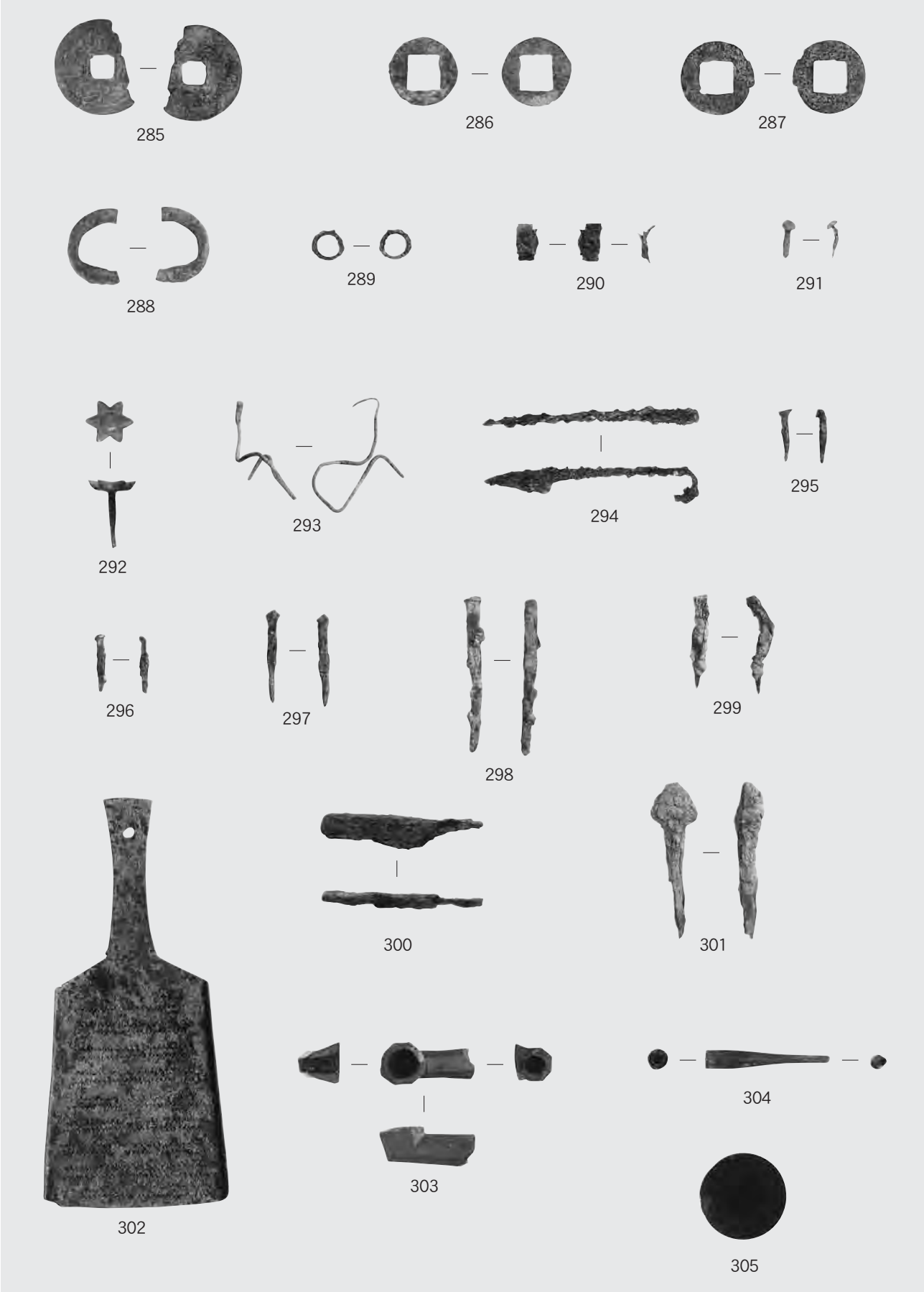


図版36　第３号墓出土遺物（６）

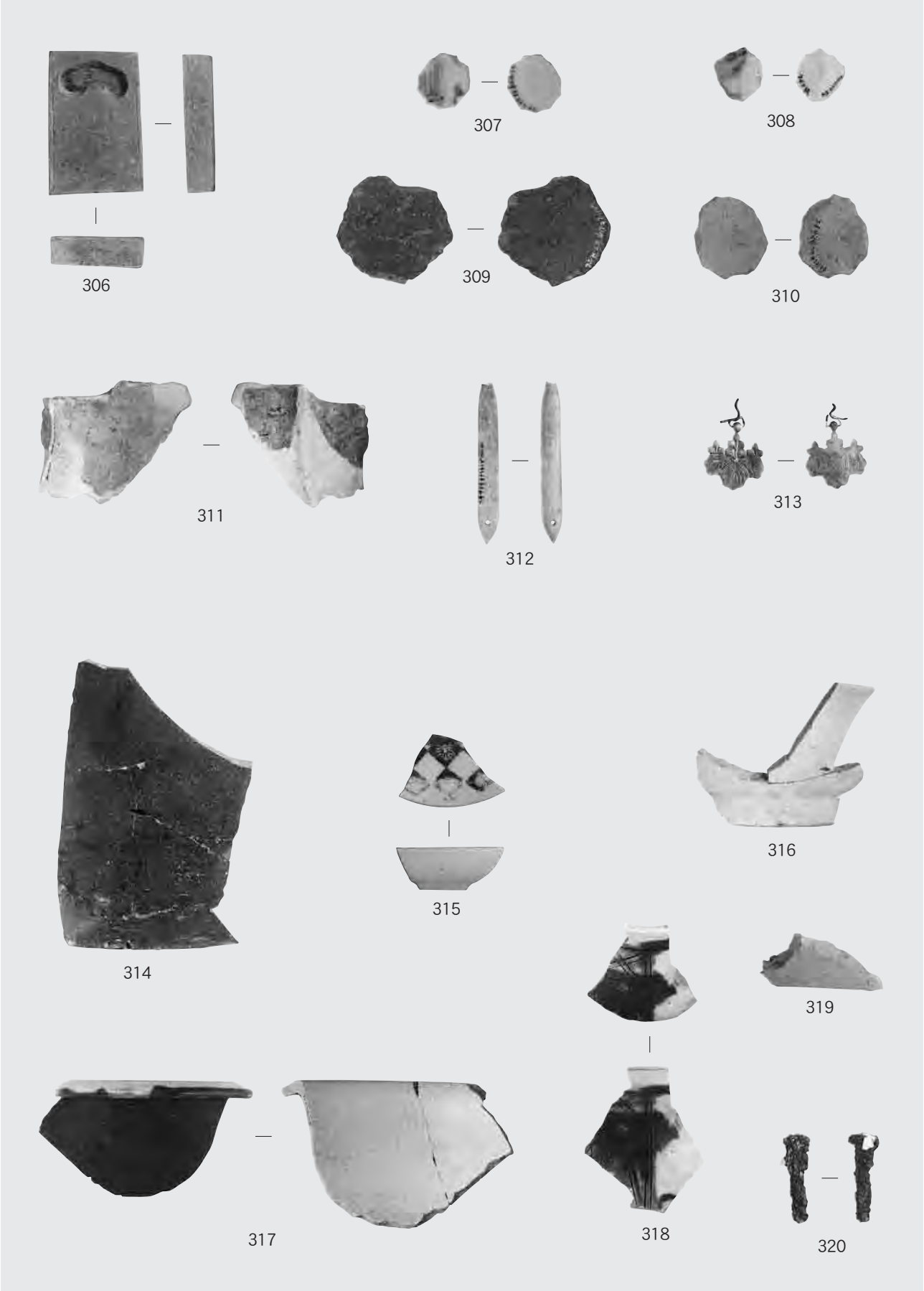
図版37　第３号墓出土遺物（７）



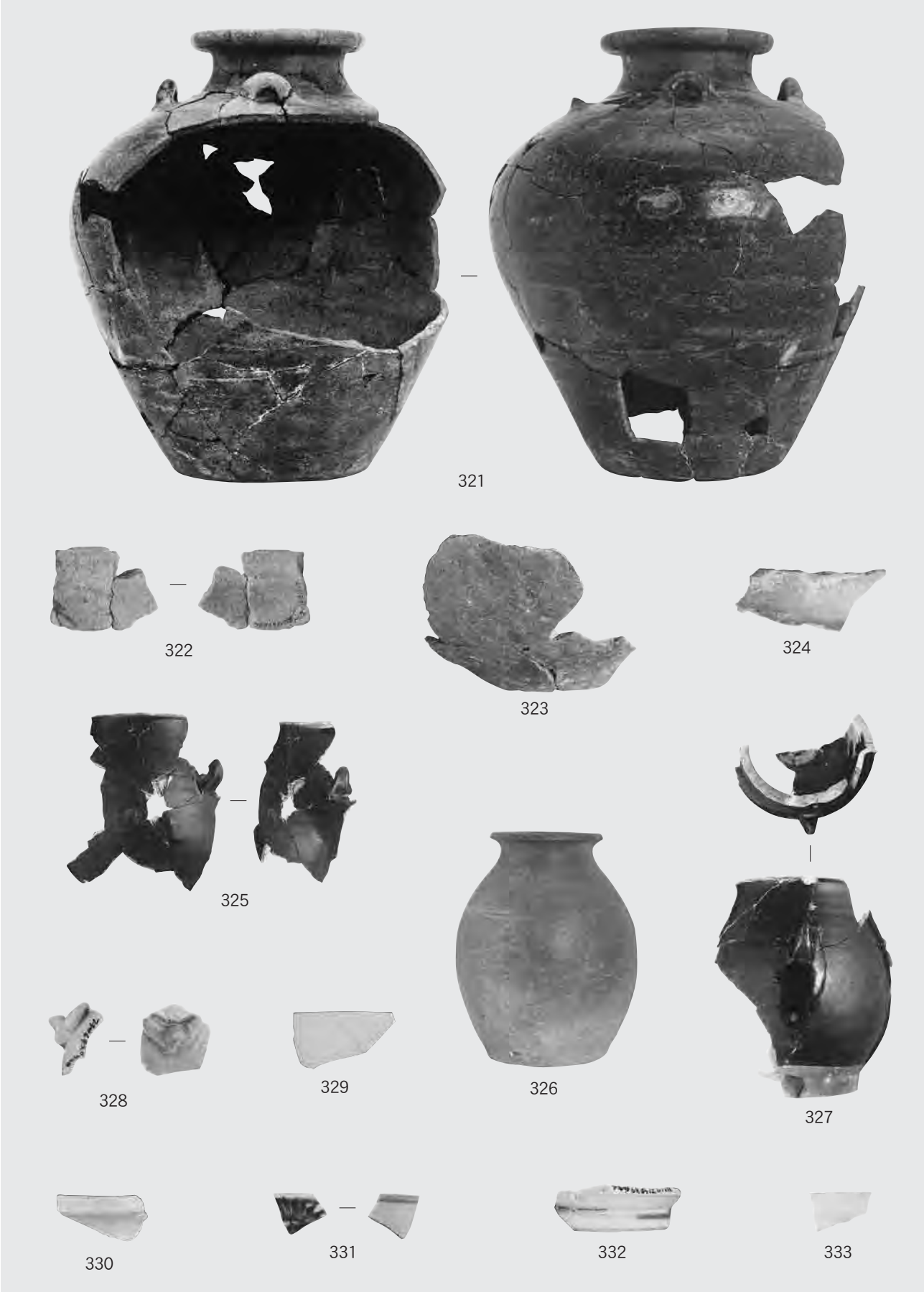
図版38　第３号墓出土遺物（８）



図版39　第３号墓出土遺物（９）

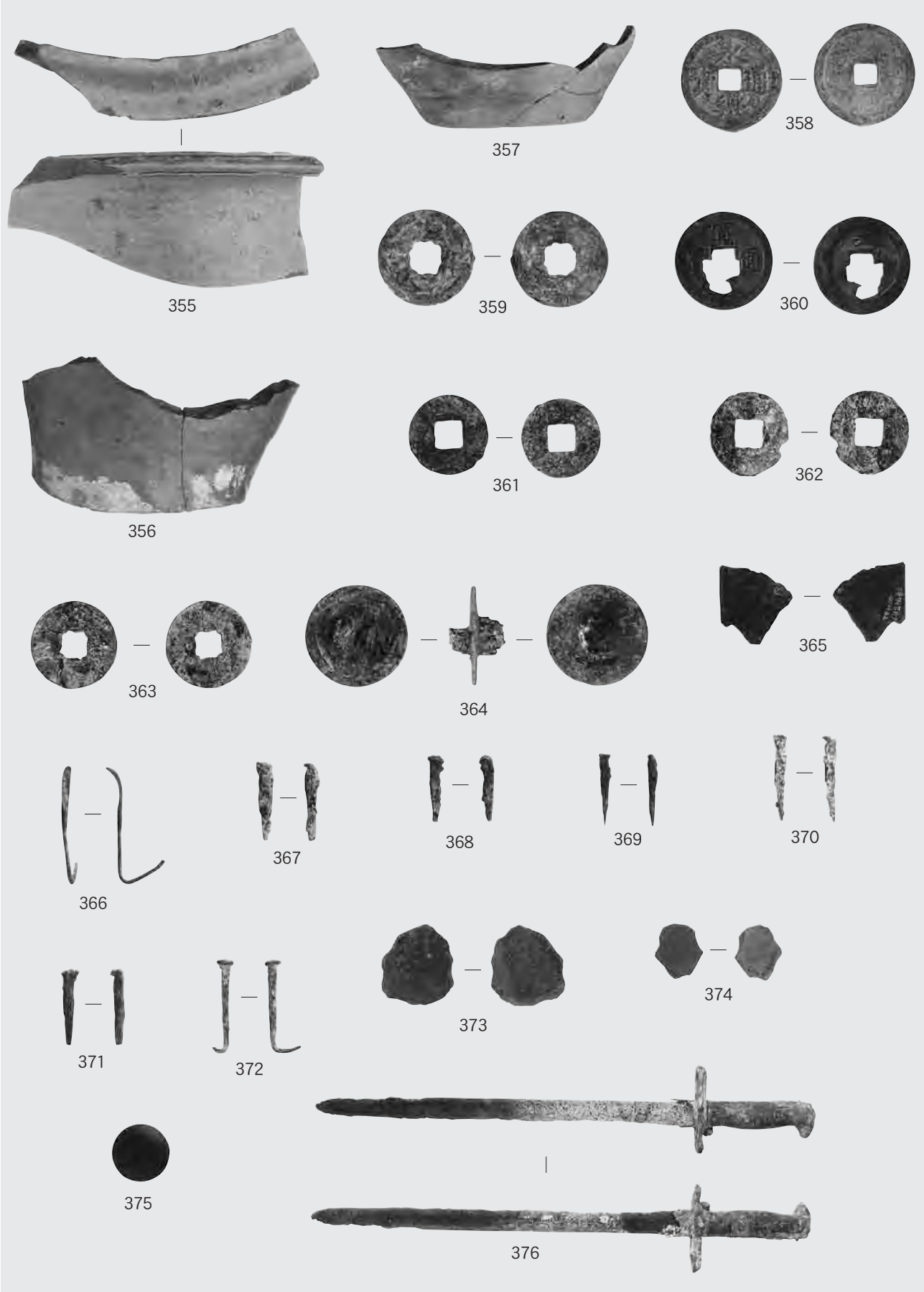


図版40　第３号（10）・５号墓出土遺物

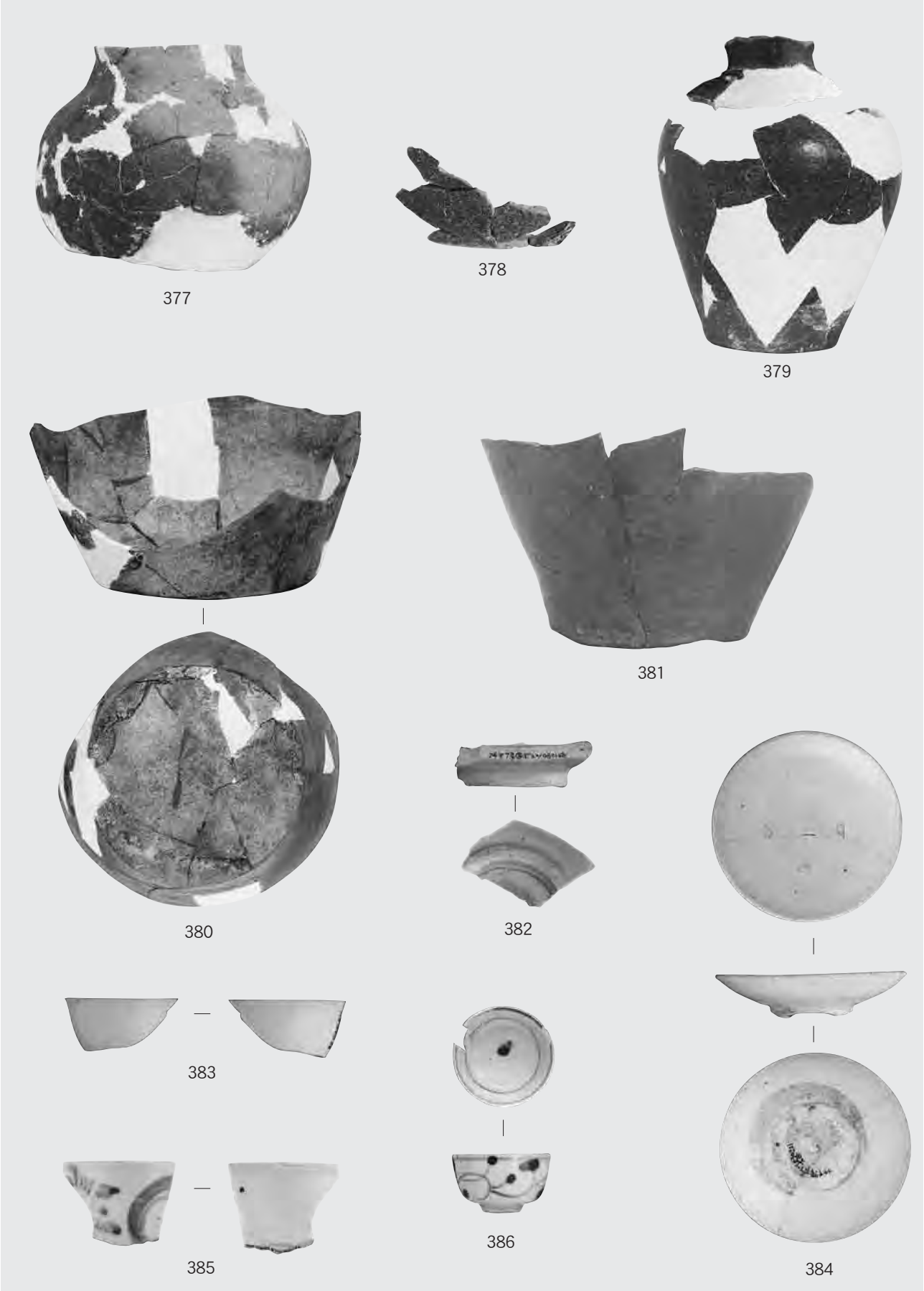


図版41　第６号墓出土遺物（１）

図版42　第６号墓出土遺物（２）

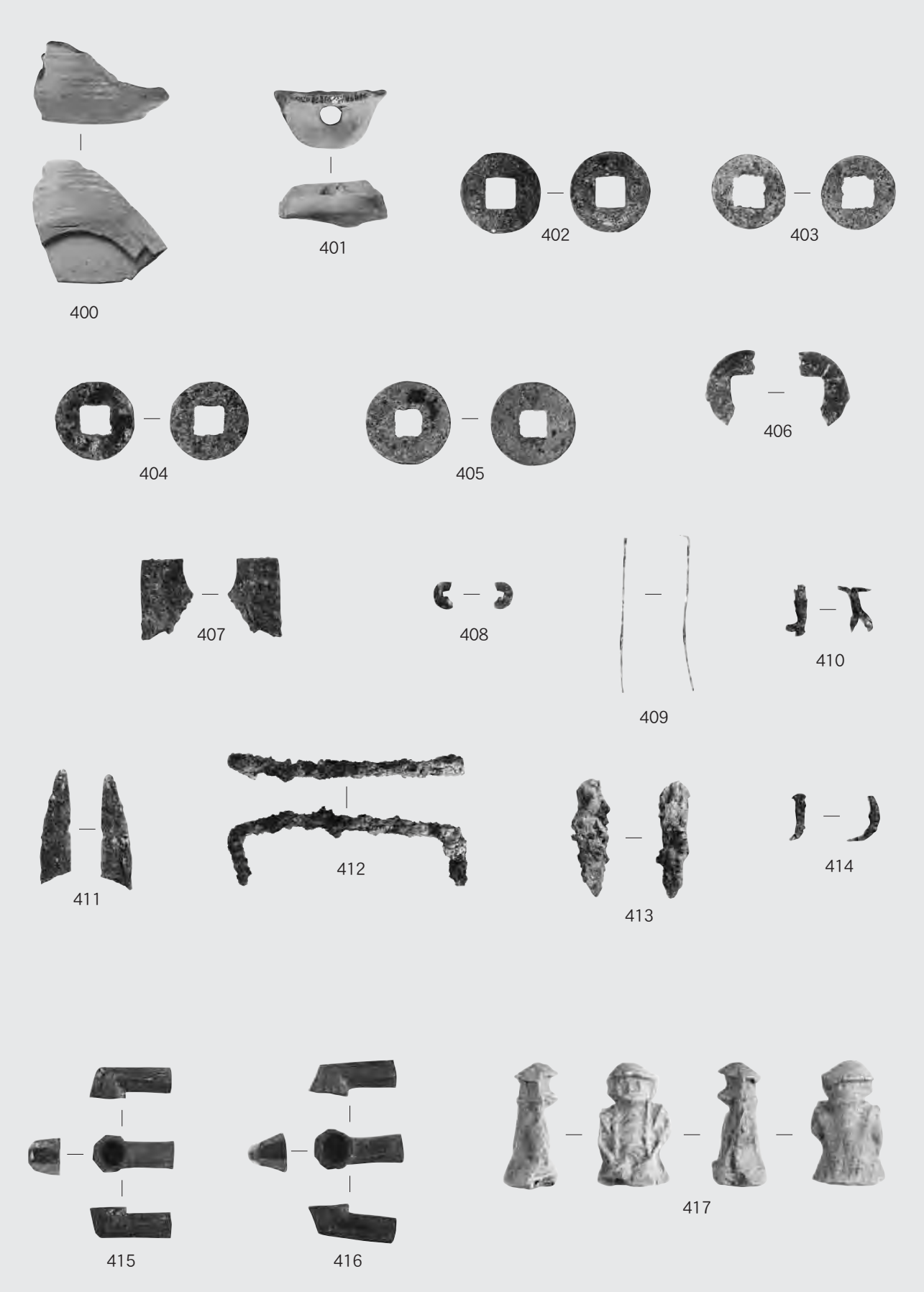


図版43　第６号墓出土遺物（３）

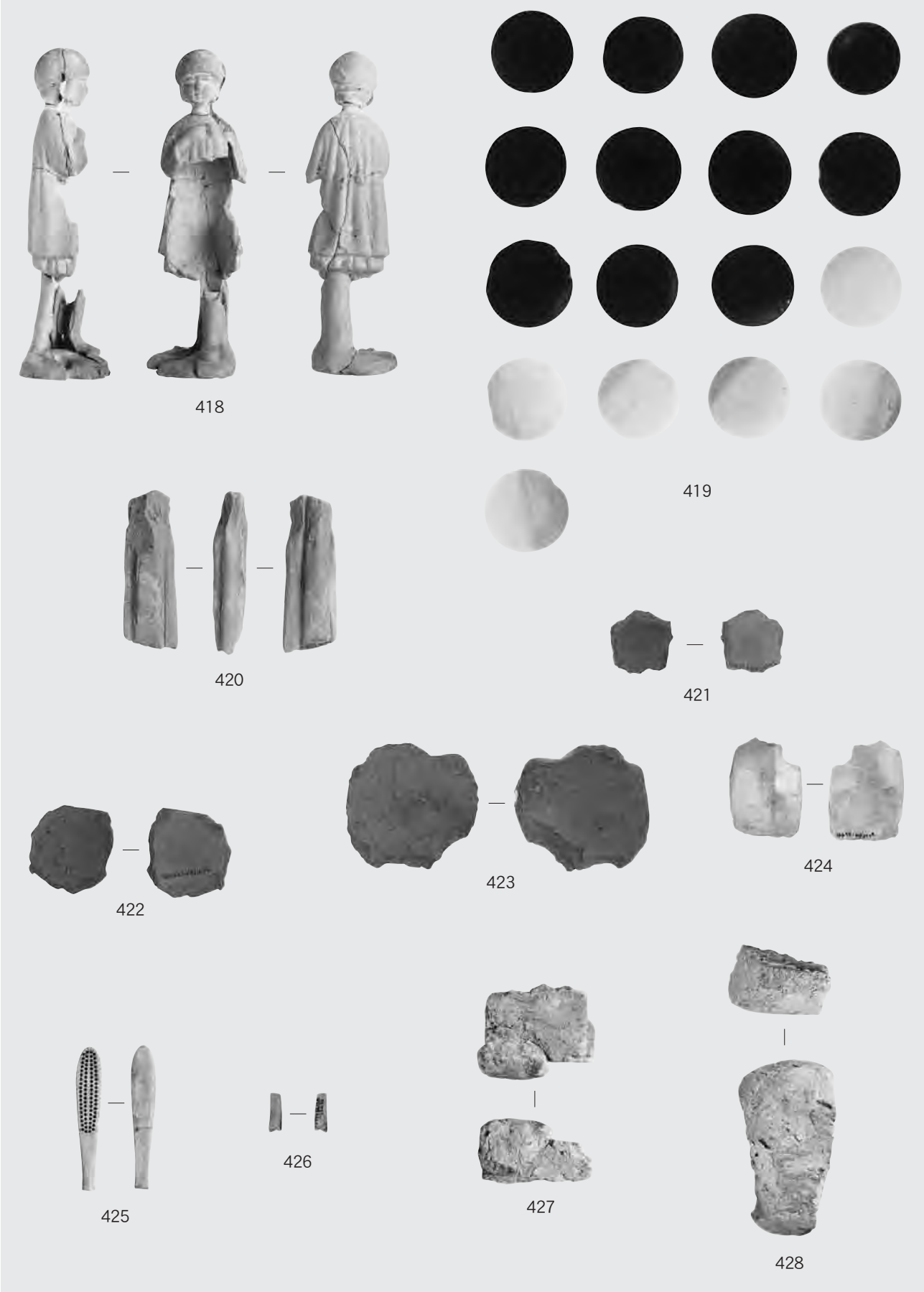


図版44　第７号墓出土遺物（１）

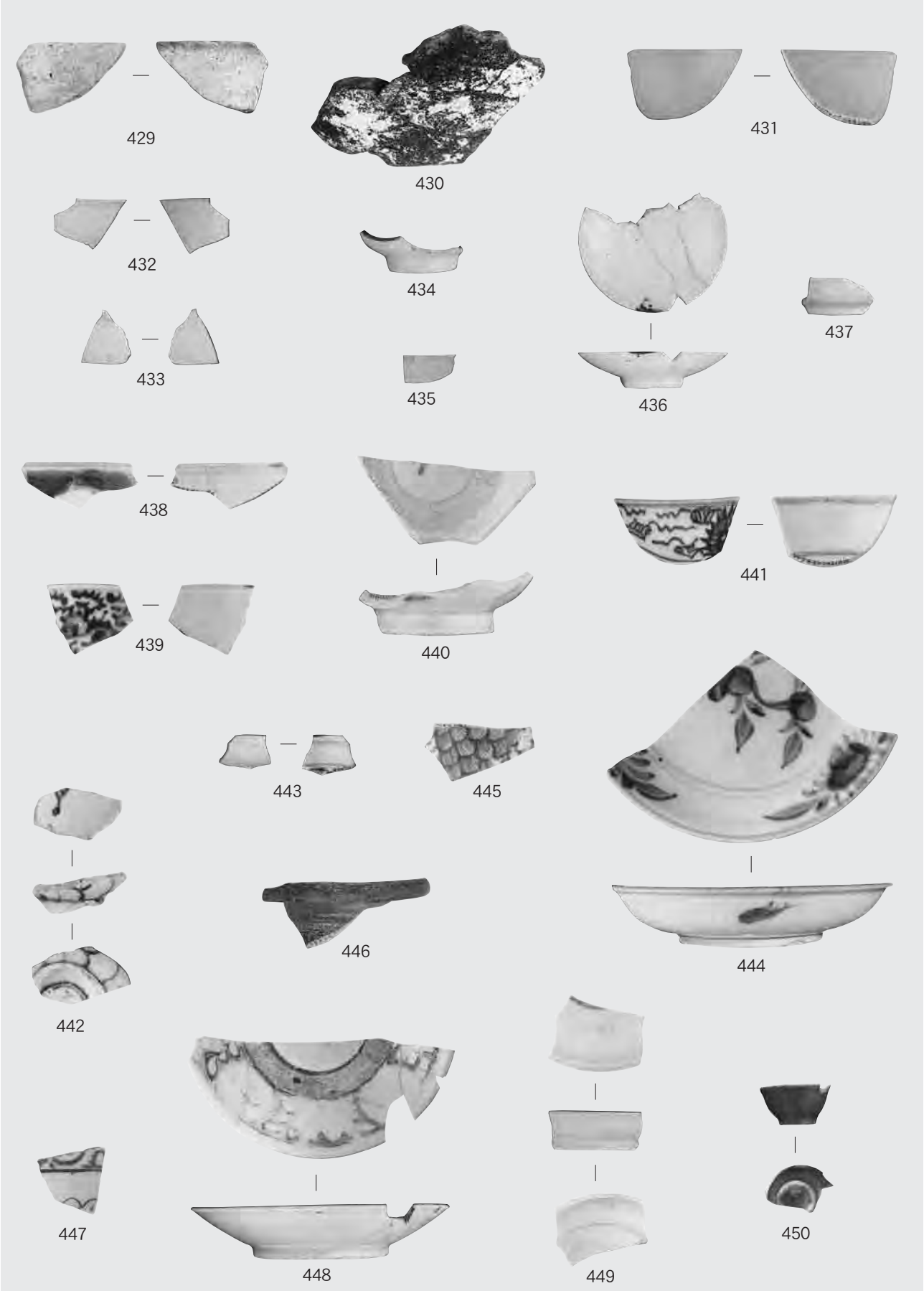
図版45　第７号墓出土遺物（２）



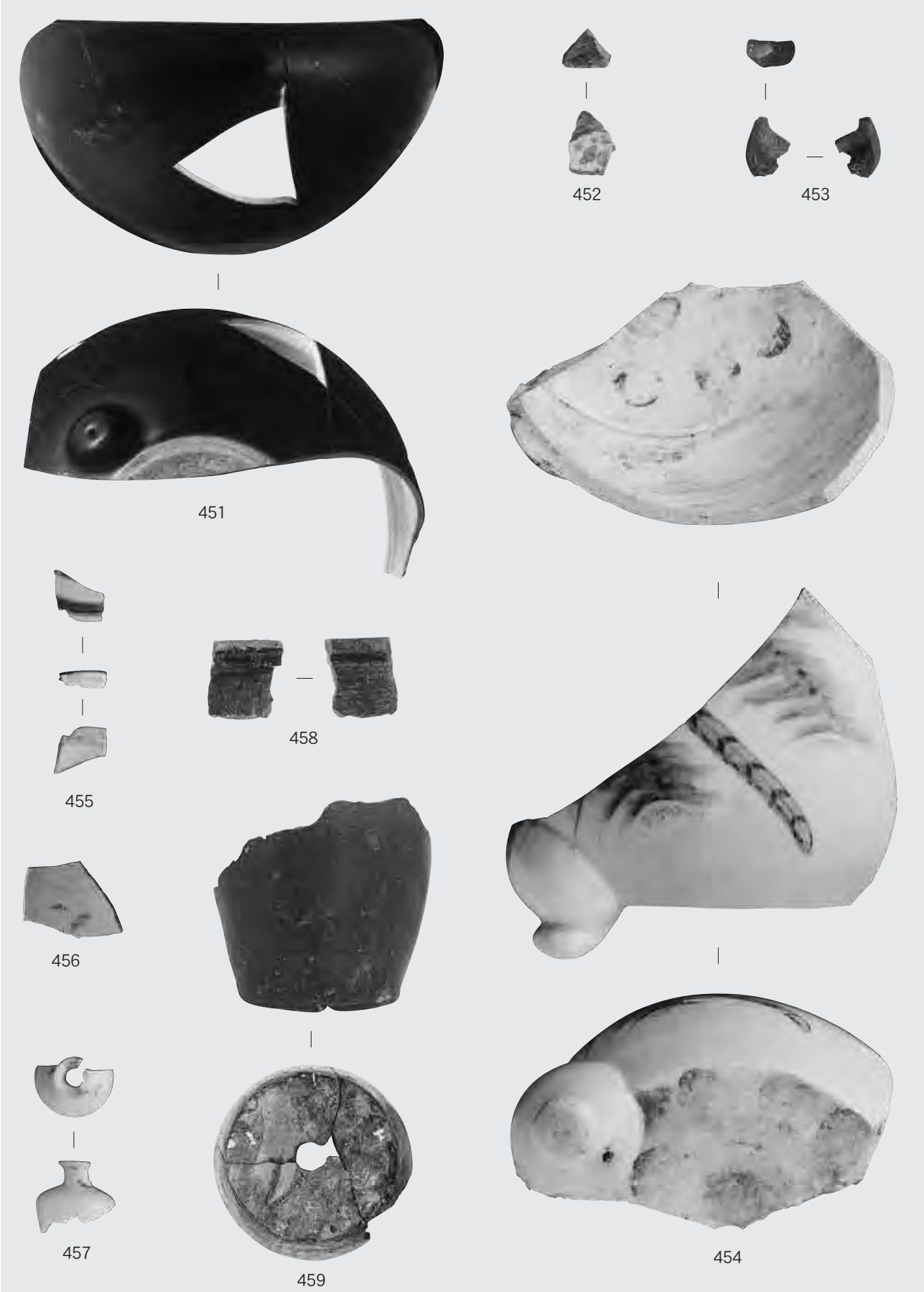
図版46　第７号墓出土遺物（３）



図版47　第７号墓出土遺物（４）

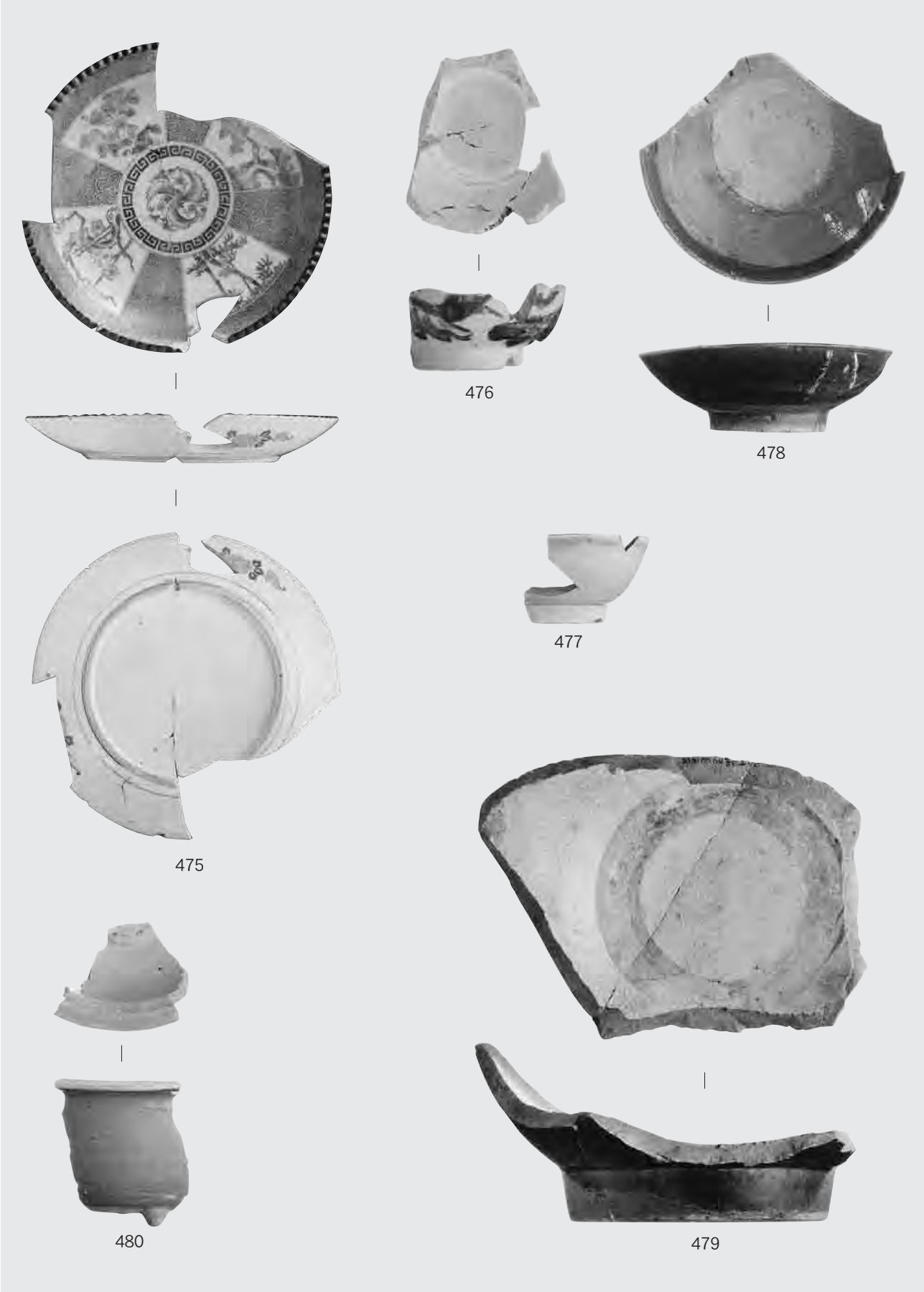


図版48　第８号墓出土遺物（１）



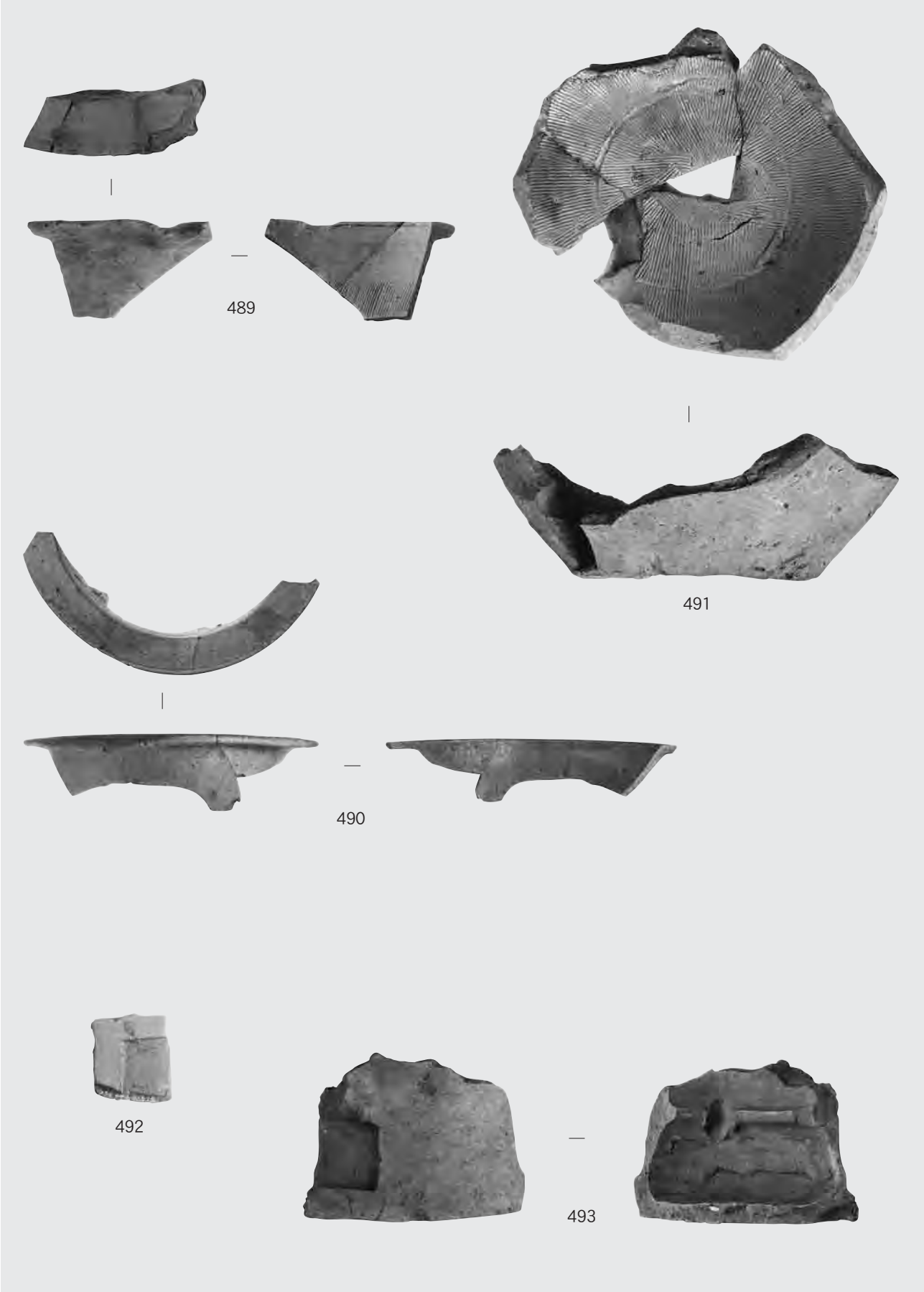
図版49　第８号墓出土遺物（２）

図版50　第８号墓出土遺物（３）

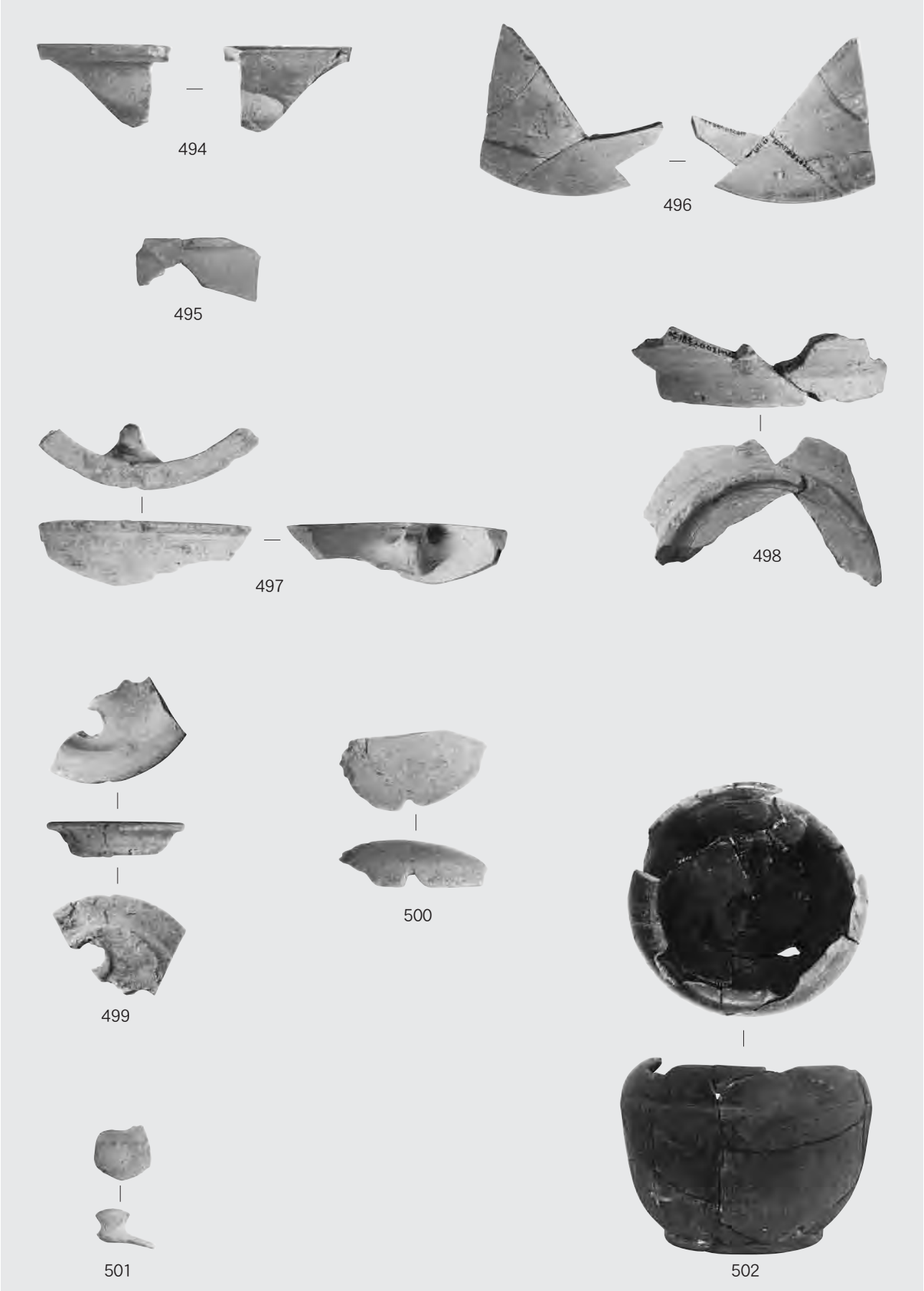


図版51　第８号墓出土遺物（４）

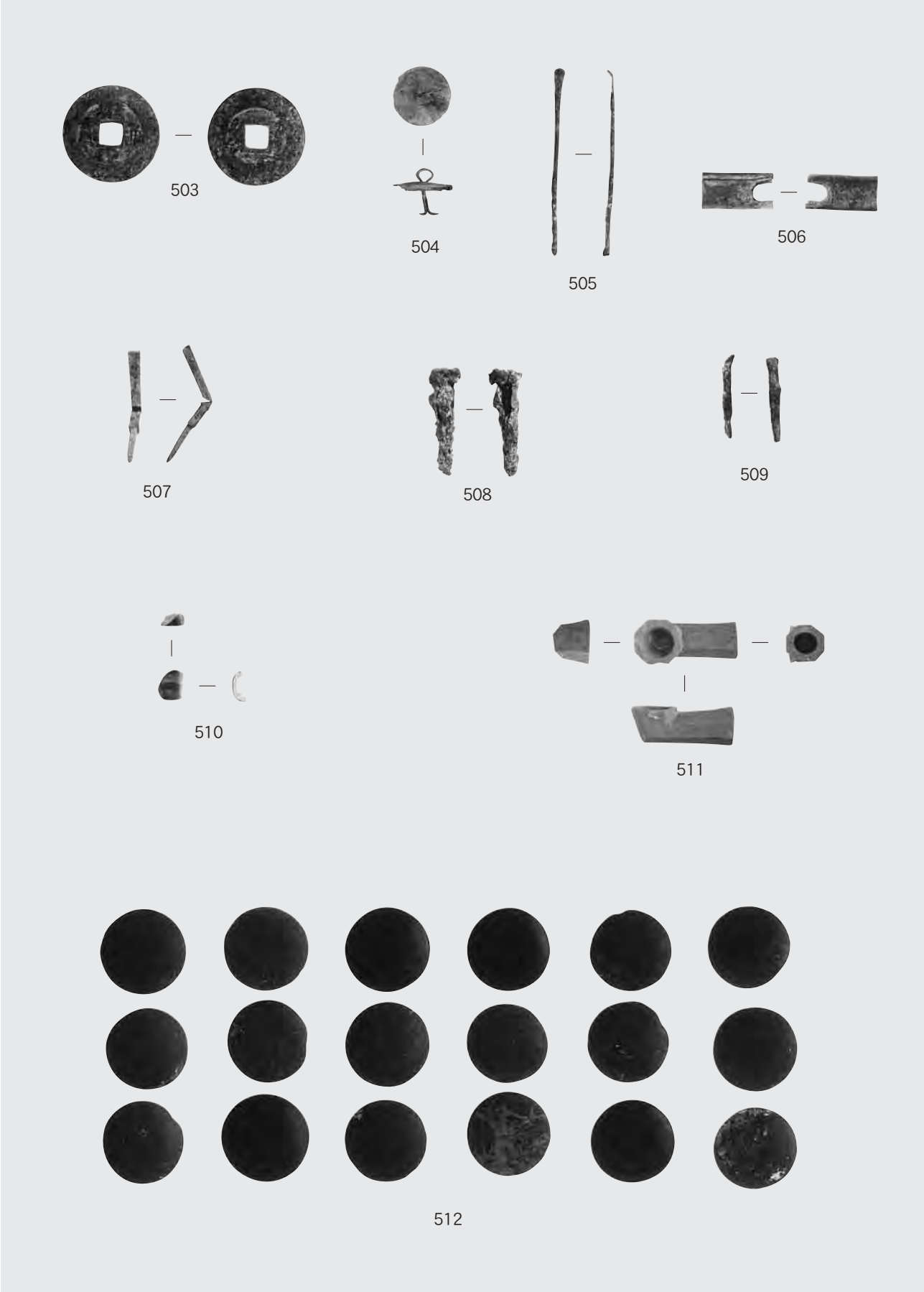
図版52　第８号墓出土遺物（５）



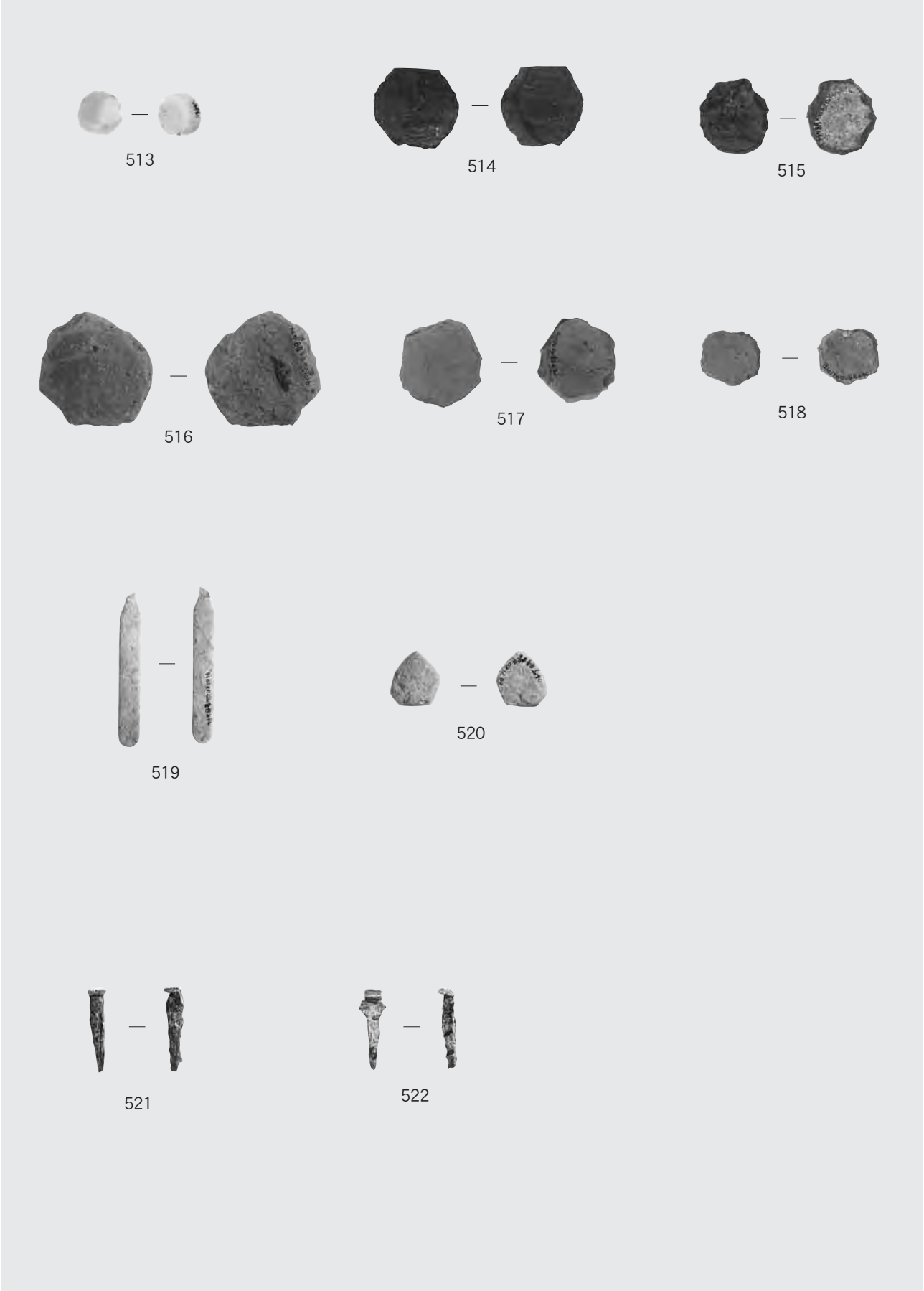
図版53　第８号墓出土遺物（６）



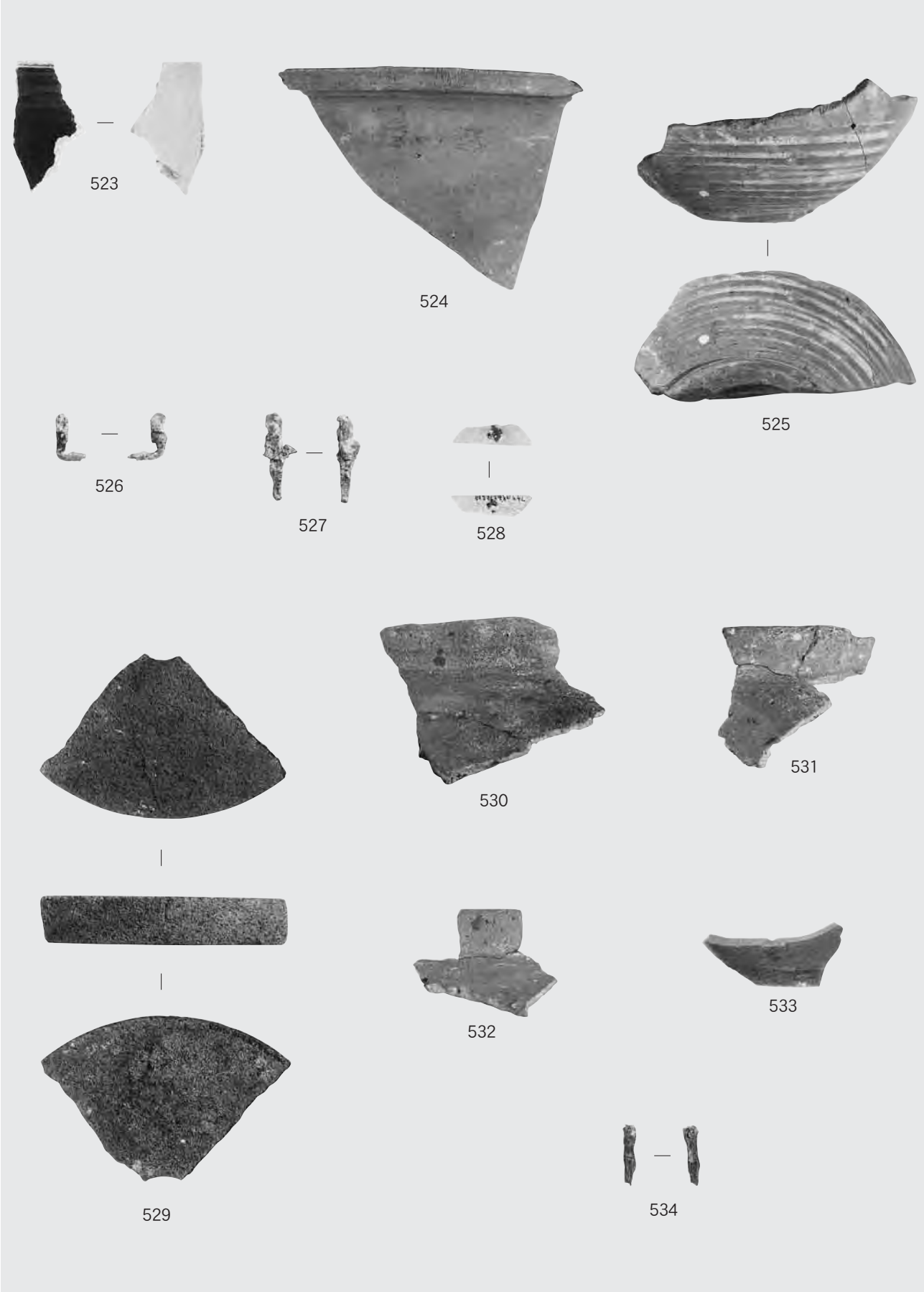
図版54　第８号墓出土遺物（７）



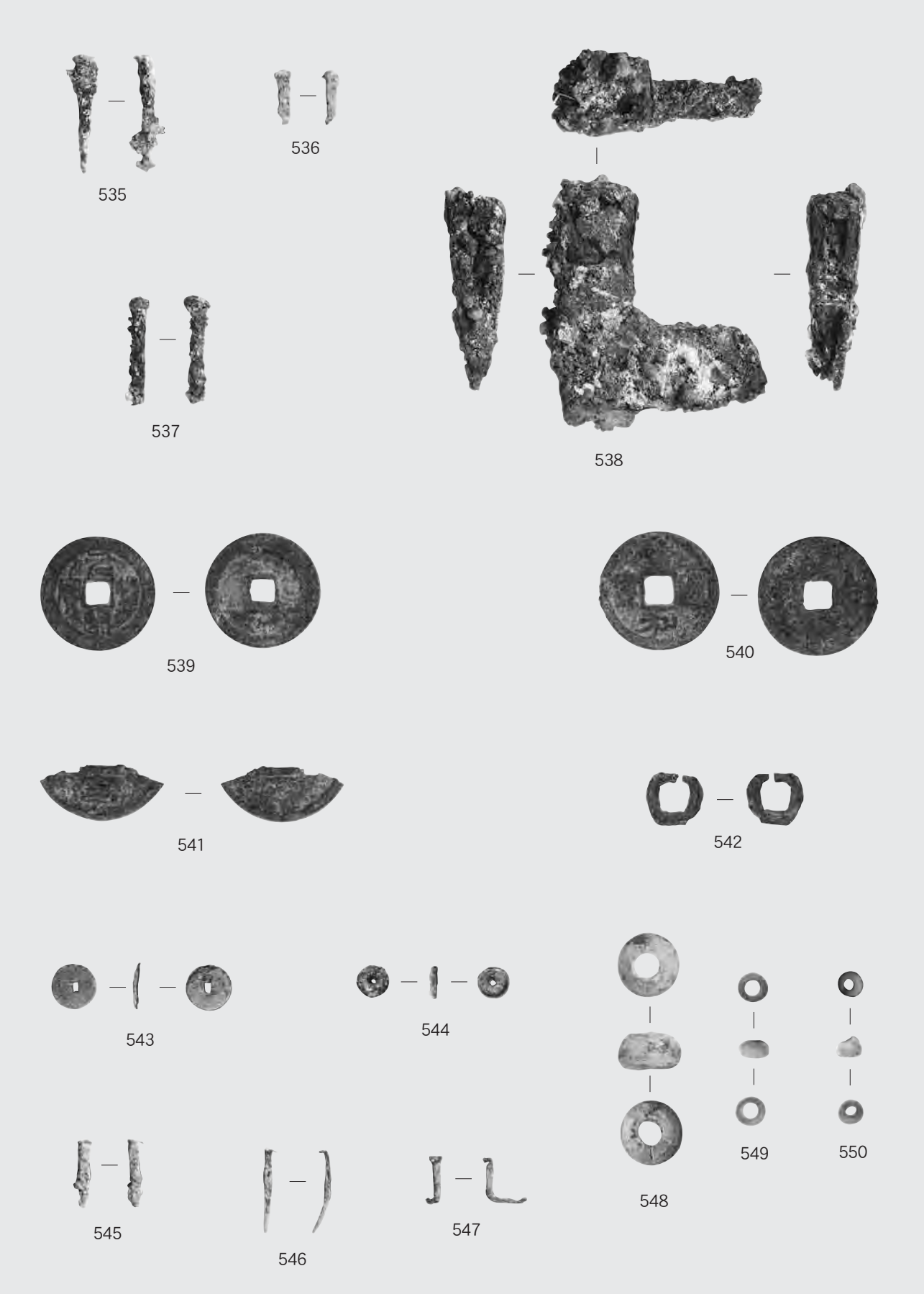
図版55　第８号墓出土遺物（８）



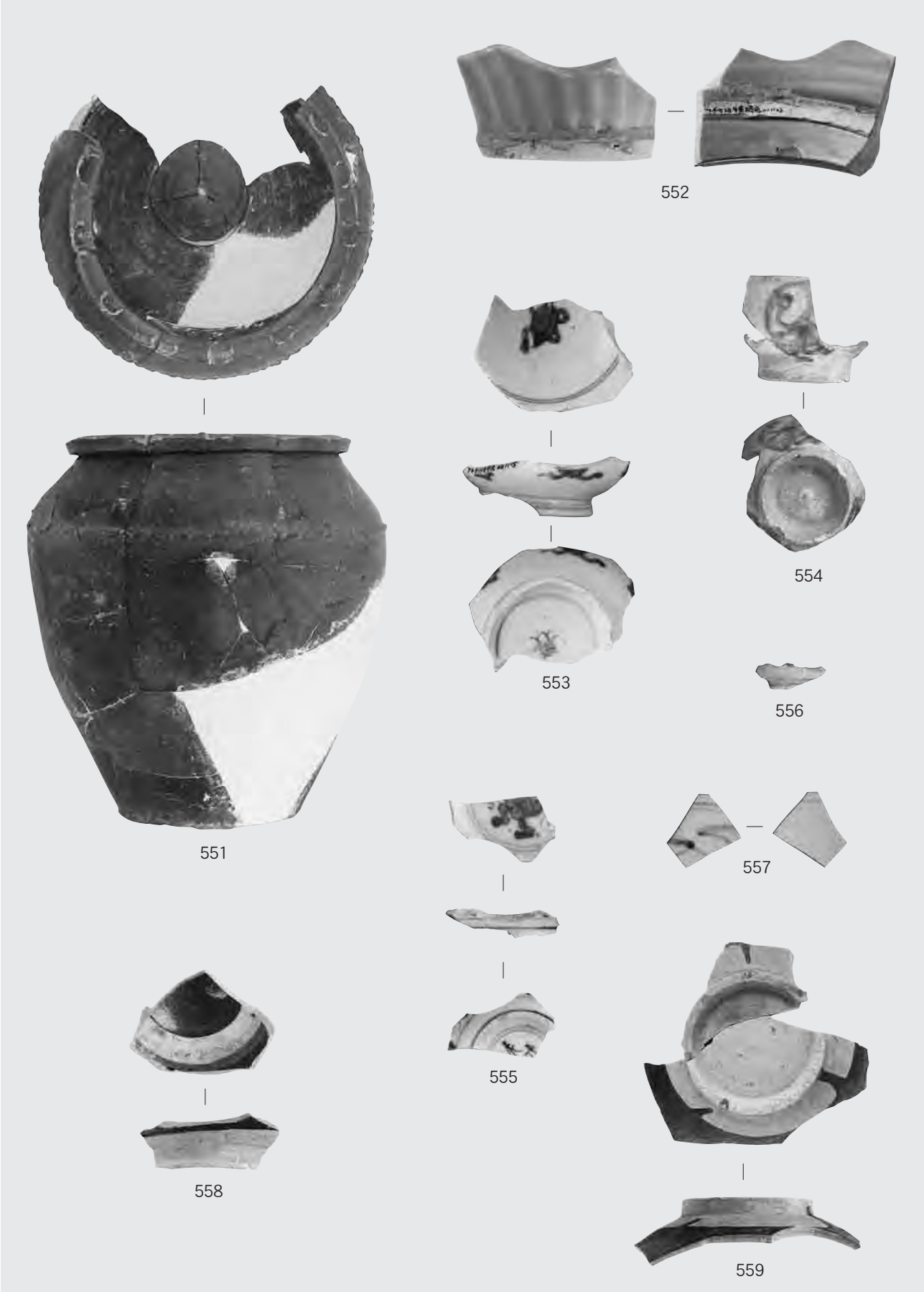
図版56　第８号（９）・９号墓出土遺物



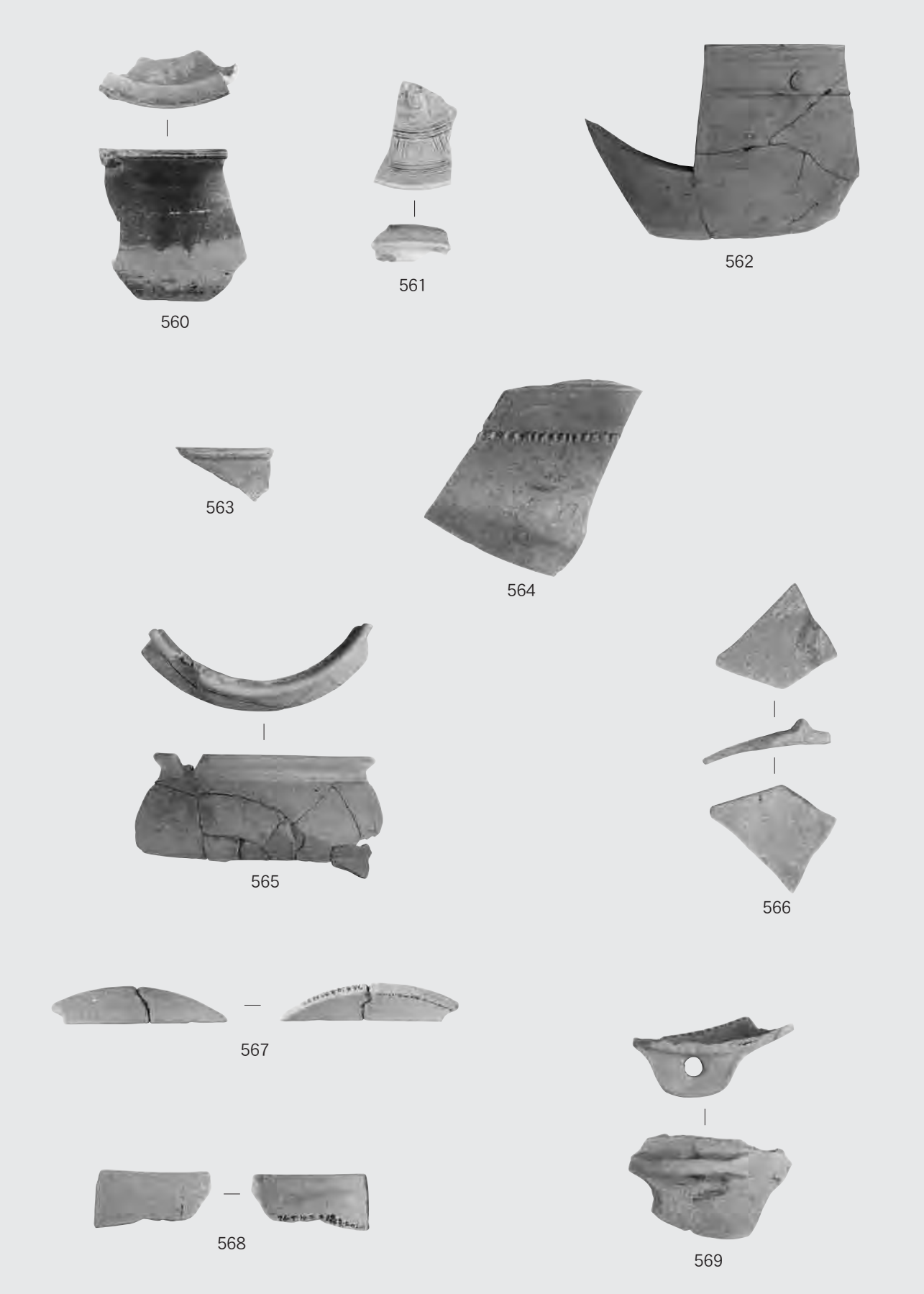
図版57　第10号・11号墓出土遺物



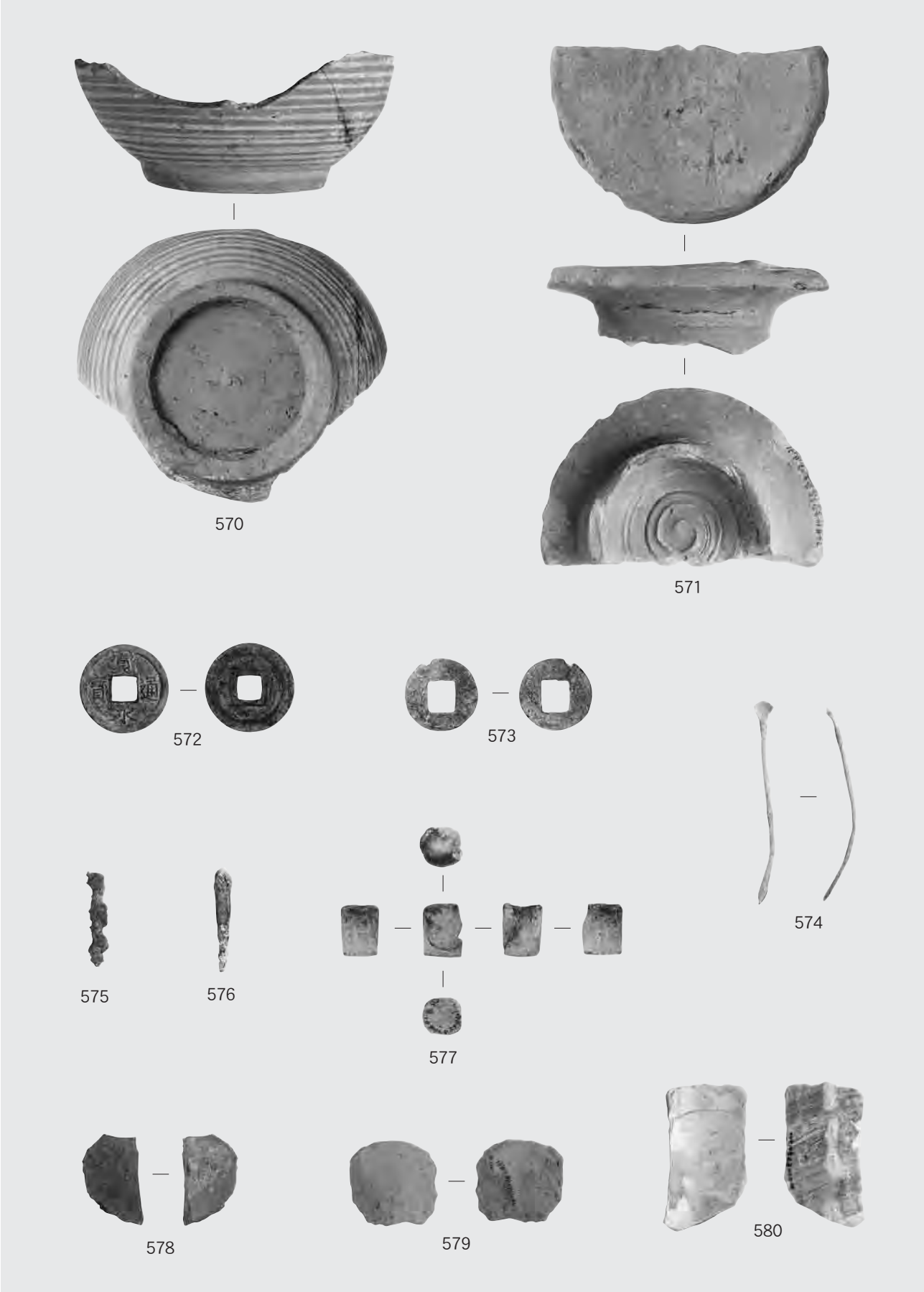
図版58　第12号・13号墓出土遺物



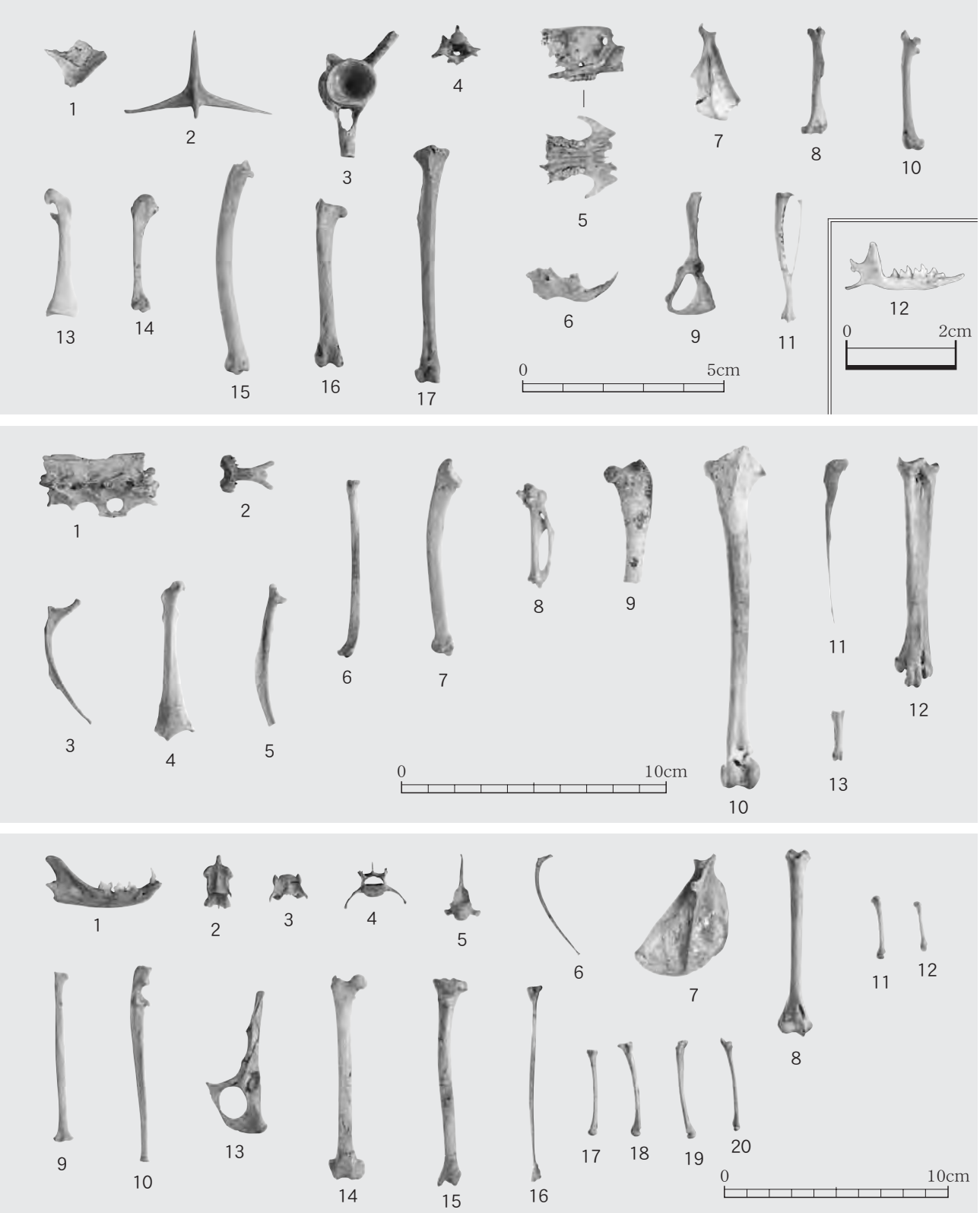
図版59　第14号墓出土遺物（1）



図版60　第14号墓出土遺物（２）

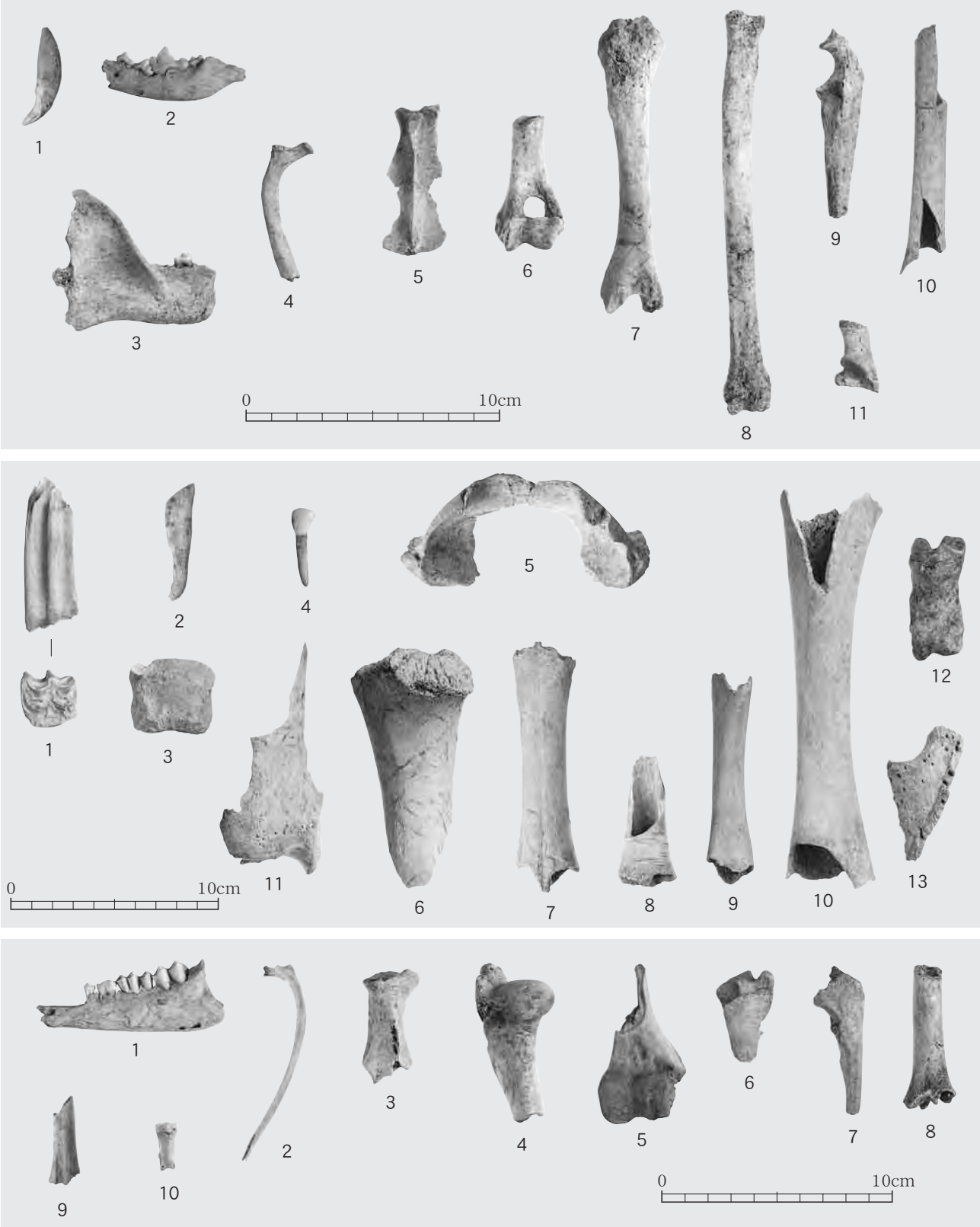


図版61　第14号墓出土遺物（３）



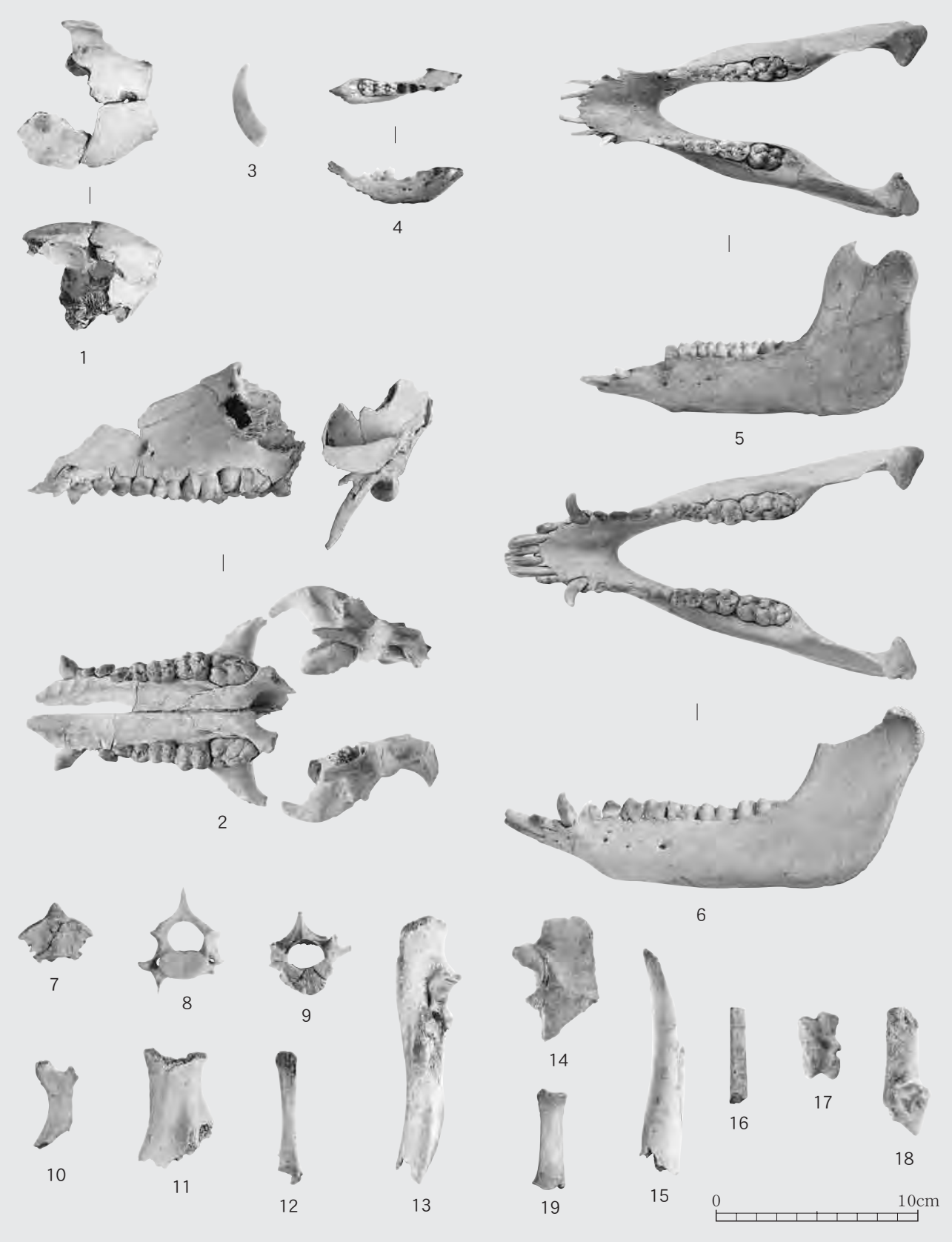
図版62　骨（1）

[上]メジロザメ：1.歯　2.ハリセンボン科:棘　3.魚:脊椎骨　4.ハブ:脊椎骨
ネ　ズ　ミ：5.左右 上顎骨　6.右 下顎骨　7.右 肩甲骨　8.右 上腕骨　9.右 寛骨　10.右 大腿骨　11.右 脛骨～腓骨
モ　グ　ラ：12.右 下顎骨　　トリ：13.右 烏口骨　14.右 上腕骨　15.左 尺骨　16.右 大腿骨　17.右 脛骨
[中]ニ ワ ト リ：1.胸椎　2.頸椎　3.右 肋骨　4.右 烏口骨　5.左 肩甲骨
6.左 橈骨　7.左 尺骨　8.右 中手骨　9.左 大腿骨　10.左 脛骨　11.左 腓骨　12.左 中足骨♀　13.左右不明 趾骨
[下]ネ　　コ：1.右 下顎骨 $CP_{3\cdot4}M_1$　2.軸椎　3.頸椎　4.胸椎　5.腰椎　6.右 肋骨　7.左 肩甲骨　8.右 上腕骨　9.右 橈骨
10.右 尺骨　11.左 中手骨(Ⅲ)　12.左 中手骨(Ⅴ)　13.左 寛骨　14.右 大腿骨　15.左 脛骨　16.左 腓骨
17.左 中足骨(Ⅱ)　18.左 中足骨(Ⅲ)　19.左 中足骨(Ⅳ)　20.右 中足骨(Ⅴ)



図版63　骨（2）

[上]イヌ：1.右 下顎骨 犬歯　2.左 下顎骨 $P_{3\cdot4}M_{1\cdot2}$　3.右 下顎骨 M_2　4.右 肋骨　5.左 肩甲骨　6.左 上腕骨　7.右 上腕骨　8.左 橈骨
9.左 尺骨　10.右 大腿骨　11.右 踵骨
[中]ウマ：1.左 上顎骨 M_1　2.右 下顎骨 I_3　3.左右不明 中節骨
ウシ：4.左右不明 切歯骨　5.環椎　6.右 上腕骨　7.左右不明 中手骨　8.右 脛骨(キズあり)　9.左 脛骨(幼)　10.左 脛骨
11.左 橈骨　12.左 基節骨　13.左 末節骨
[下]ヤギ：1.左 下顎骨 $dm_{2\cdot3\cdot4}M_1$　2.左 肋骨　3.左 肩甲骨　4.左 上腕骨　5.左 上腕骨　6.左 橈骨　7.左 尺骨　8.左 脛骨
9.左 中足骨　10.左 中節骨



図版64　骨（3）

ブタ：1. 頭頂骨　2. 左右 頭蓋骨 上顎骨 右 $CP^{1\cdot2\cdot3\cdot4}M^{1\cdot2\cdot3}$ 左 $CP^{1\cdot2\cdot3\cdot4}M^{1\cdot2\cdot3}$♀　3. 下顎骨 右 犬歯♂
4. 下顎骨　右 $i_{(1)}dm_{(2)4}$　5. 下顎骨 右 $i_{(1)\cdot2\cdot3}dm_{2\cdot3\cdot4}M_{1\cdot2}$　左 $i_{(1)\cdot2\cdot3}Cdm_{2\cdot3\cdot4}M_{1\cdot2}$♂
6. 下顎骨 右 $I_{1\cdot2\cdot3}CP_{1\cdot2\cdot3\cdot4}M_{1\cdot2\cdot3}$ 左 $I_{1\cdot2\cdot3\cdot4}CP_{1\cdot2\cdot3\cdot4}M_{1\cdot2\cdot3}$♀　7. 軸椎　8. 頸椎　9. 腰椎　10. 左 肋骨　11. 左 肩甲骨
12. 右 上腕骨(幼)　13. 右 尺骨　14. 右 寛骨　15. 右 大腿骨　16. 右 腓骨　17. 右 距骨　18. 右 踵骨　19. 左 中足骨(Ⅲ)

第Ⅵ章　人骨

第１節　はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターによる、平成15年度ナカンダカリヤマの古墓群調査において出土した人骨について報告する。ナカンダカリヤマの古墓群は那覇市北東部の首里台地南側に位置しており、台地端部の石灰岩崖面を掘り込んで造成された掘り込み墓群である。15基の墓のほとんどは近世に使用されたと考えられているが、７号墓については出土遺物から中世相当期（16～17世紀）の風葬墓と推定されている。当該期の風葬墓としては銘苅古墓群[1]、首里城右掖門西方岩陰[2]の報告があるが、本例には洗骨を示す所見や火葬の可能性を示す所見が見られるなど、中世琉球の葬制・墓制を知る上で貴重な追加例と思われる。以下に人骨調査の概略を報告する。

第２節　調査の方法

沖縄戦時に陣地壕や避難壕として利用されたことなどから、墓室内の人骨の多くは破損を受けており、検出された人骨のほとんどは破片状で、収集できる情報量は少なかった。そこで、本調査では検出された人骨片から被葬者数を推定すること、さらに性別・年齢などから被葬者の構成を推定する作業を中心に行った。７号墓については、人骨の保存状態は良好とは言えなかったが、墓の原状が比較的良く保たれていたことから、沖縄の中世相当期における葬墓制に関する情報収集に努めた。

尚、人骨鑑定の際に用いた年齢区分はKnussman（1988）[3]を参考に、乳児（出生～１歳）、幼児（１～約６歳）、小児（約６～約14歳）、若年（約14～約20歳）、成年（約20～約40歳）、熟年（約40～約60歳）、老年（約60歳以上）、成人（約20歳以上であるが詳細は不明）とした。

第３節　人骨の所見

０号墓出土の人骨：

頭骨片、肋骨片などの骨小片が数片検出された。

１号墓出土の人骨：

頭骨片、四肢骨片などを含む多数の骨片が検出された。骨片には焼けた骨も認められた。

２号墓出土の人骨：

四肢骨片が少量と成人の歯５本が検出された。

３号墓出土の人骨：

同定不能の多量の骨片が検出された。ほとんどは焼けた骨である。

４号墓出土の人骨：

歯片３本が検出されただけで詳細は不明。

５号墓出土の人骨：

手指骨が１個検出されただけで詳細は不明。

６号墓出土の人骨（少なくとも男性３体、女性３体、性別不明未成人１体）：

ほぼ全身骨を含む骨片が多数検出された。骨片の中には焼けた骨も含まれている。最も情報量の多かった大腿骨片（右大腿骨片（男性３、女性１）、左大腿骨片（男性３、女性３））から、被葬者には少なくとも成人男性３体、成人女性３体が含まれており、また、骨端のはずれた脛骨と大腿骨が認められたことから、さらに１体の未成人が含まれると推定された。このほか、焼骨片のみが集骨された小壺が検出されている。

７号墓出土の人骨：

第４節に記載。

８号墓出土の人骨（少なくとも男性１体、女性１体、幼児２体）：

焼けた骨を含むほぼ全身の骨片が検出された。女性と推定される尺骨片、橈骨片、男性と推定される脛骨片が認められ、また、幼児と思われる左側頭骨片が２体分認められたことから、被葬者には少なくとも成人男性１体、成人女性１体、幼児２体が含まれると推定された。

９号墓出土の人骨（少なくとも男性１体、女性１体、乳児１体）：

少量の骨片が検出された。これらの中に男女２体分の膝蓋骨が認められ、また乳児のものと思われる鎖骨片が認められたことから、被葬者には少なくとも成人男性１体、成人女性１体、乳児１体が含まれると考えられる。

10号墓出土の人骨：

椎骨片、肋骨片、手や足の骨など、少量の骨片が検出されたのみである。

11号墓出土の人骨：

少量の骨片と歯が検出されている。

12号墓出土の人骨（少なくとも男性１体、女性１体、幼児１体、乳児２体）：

ほぼ全身骨を含む骨片と歯片が検出された。橈骨２体分（男性、女性）、膝蓋骨２体分（男性、女性）、幼児１体分および乳児２体分のほぼ全身骨片が認められたことから、被葬者には少なくとも成人男性１体、成人女性１体、幼児１体、乳児２体が含まれていたと推定される。

13号墓出土の人骨（少なくとも男性２体、幼児１体）：

ほぼ全身骨を含む骨片と歯片が検出された。骨片には焼けた骨も含まれている。男性２体分の上腕骨と大腿骨が確認されたこと、また、幼児と思われる橈骨片、腓骨片が認められたことから、被葬者には少なくとも成人男性２体と幼児１体が含まれていたと推定される。

14号墓出土の人骨（少なくとも男性２体、女性１体、性別不明若年１体、幼児１体）：

沖縄戦時に陣地壕として利用されており、人骨の多くは失われたものと思われる。検出された人骨は少量ではあるが、上腕骨が３体分（男性２体分、女性１体分）認められ、若年の右鎖骨片、小児の坐骨片、幼児の上腕骨、脛骨、椎骨、肋骨片が認められたことから、被葬者には少なくとも成人男性２体、成人女性１体、若年１体、小児１体、幼児１体が含まれていたと推定される。

14号墓墓下横穴出土の人骨：

頭骨片、若年の下顎骨片１、成年から熟年の下顎骨片１、右上腕骨片、肋骨片、鎖骨片など、少量の人骨片が検出されている。

第４節　７号墓出土の人骨

出土状態：

墓室内からは多数の風葬人骨が検出された（第46図）。人骨はほとんどバラバラの状態で奥壁側に集中していたが、現場の所見で同一個体のものがまとまっている可能性が見て取れたため、取り上げた骨の位置が後で照合できるように図面上に注記しながら取り上げ作業を行った。その結果、第46図に示すように入り口近くの３体は多少の乱れはあるものの、およそ解剖学的な位置関係を保った状態（一次葬）であることが確認された。奥壁に最も近い男性人骨（ブルー）の乱れ方が大きいこと、また、人骨が奥壁側に集中していることから、遺体は入り口近くで風葬され、骨になった後に、次の遺体が葬られる際に奥壁側へ次々と片づけられていった状況が読みとれる。最後の被葬者は成人男性（ピンク）か性別不明若年（黄色）のどちらかである。骨の保存状態は成人男性の方が明らかに良好で、関節の位置なども良く保存されているが、若年被葬者が男性の下肢を軽く寄せて葬られているように見えることから、入り口に近い若年被葬者が最後に葬られた可能性が高い。骨の位置関係から、いずれも葬られた姿勢は屈葬で男性２体の頭位は西、若年は東である。

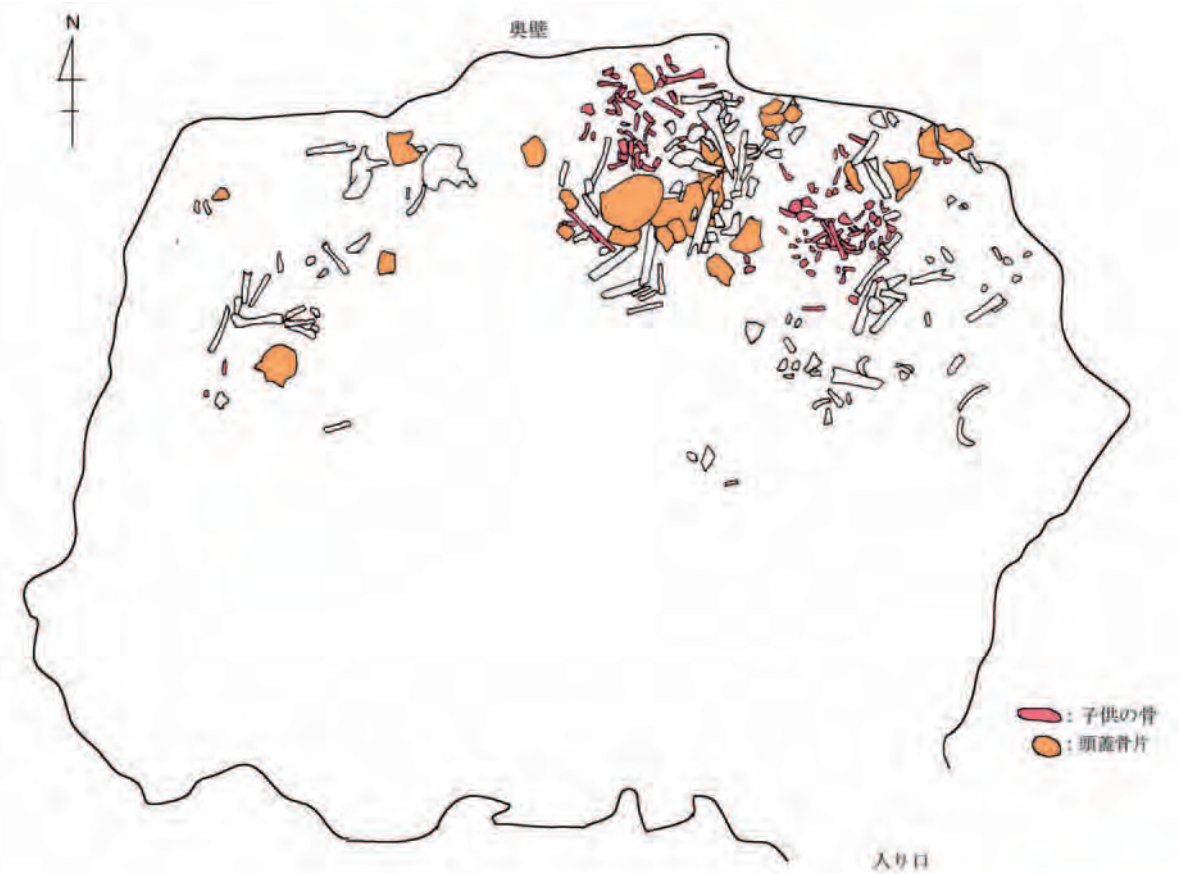
また、本墓には後述するように少なくとも12体の子供が葬られていたが、それらの骨は奥壁側最下層部から集中して検出されている（第47図）。いずれも集骨されており、一次葬の所見は認められなかった。奥壁に向かって右側の集中部は喜名焼壺片の直下であることから、この壺が蔵骨器として使用されていた可能性もある。尚、この集中部からは小児１体、幼児２体、乳児２体分が検出され、左側の集中部からは小児１体、幼児１体、乳児１体分の骨が検出されている。当該期の子供の葬制を知る上で興味深い所見である。

最小個体数の推定：

次に、本墓に葬られた被葬者の最小個体数の推定を試みた。推定には、出来るだけ情報量の多い骨を選び、部位を決めて（例えば大腿骨の骨体中央部を含む骨）その数量をカウントする方法を用いた。また、骨の観察所見から性別や年齢の推定も試みた。いくつかの部位で試みたが、最も有効と思われたのは大腿骨骨体部の情報だった。結果は第57表に示すように、男性15体、女性10体、性別不明成人７体、若年３体、小児３体、幼児４体、乳児５体、計47体の被葬者が葬られていると推定された。

これらの被葬者がどのような関係にあるのかは分からないが、墓が100年間使用されたと仮定すると、

第46図　７号墓人骨の出土状況（１）



第47図　７号墓人骨の出土状況（２）

およそ４世代が葬られている可能性がある。この墓に４世代の成人が葬られたとして、少々乱暴であることを承知で単純計算すると１世代当たりは８名となり、４組の夫婦が含まれることになる。これらがいわゆる大家族あるいは一族を反映するのか、４組の地域共同体を反映するのかは分からないが、いずれにしてもそれ程大きな集団ではないと思われる。また、200年くらい使用されたとすると集団の規模は小さくなるが、それにしても核家族にはならないように思われる。

第57表　最小個体数の推定

大腿骨骨体部	男性	女性	性別不明成人	若年	小児	幼児	乳児
右	14	10	5	3	3	4	5
左	15	8	7	2	0	4	5
推定個体数	15	10	7	3	3	4	5

焼けた骨：

本墓からは少量の焼けた骨が検出されている。骨が火を受ける場合、およそ二つの原因が考えられる。一つは遺体が火葬された場合、他は一旦骨になった後で、何らかの理由で骨が焼かれる場合である。どちらも骨に含まれるコラーゲンなどの蛋白質が失われているので、骨は硬くなり灰白色を呈している。検出された骨には、火葬骨の特徴である著しい変形や収縮を示すもの（図版65－２）と、すでに骨になった状態で焼かれた場合に見られるような、ほとんど原形を保っているものとが含まれていた。骨はほとんど小片であるため詳しい鑑定は出来なかったが、ほぼ全身の骨片が認められた。

沖縄における火葬の開始期は良く分かっていないが、中世相当期に火葬骨の特徴を示す人骨が確認されたことは貴重な所見であると思われる。

洗骨の可能性：

鋭い刃物によると思われる傷痕のある人骨片が奥壁西側の集骨中から５片確認された（図版65－１）。これらには受傷後の骨増殖など、生体反応が認められないことから死後の受傷と思われる。洗骨時に受けた傷の可能性があるが、傷痕の精査などの課題が残るため、ここでは可能性だけを指摘しておきたい。

形質的特徴：

人骨のほとんどが破片状でまとまった計測は出来なかったため、ここでは観察所見のみ報告する。

まず、顔面部は復元できるものはなかったが、図版65－３に示すように、中世人の特徴である突顎傾向を示す上顎骨片が数点認められた。また、四肢骨の観察からはかなり大柄な人物が含まれていたと推定され、小柄で短頭の沖縄先史時代人とはかなり違っているように思われた。

また、下肢骨の骨膜炎や前腕のコーレス骨折痕、鉄欠乏性貧血が原因と考えられている眼窩上壁のクリブラ・オルビタリアなど、生活環境や衛生環境の厳しさを示す痕跡も認められた。

第５節　まとめ

沖縄県立埋蔵文化財センターによる平成15年度ナカンダカリヤマの古墓群の調査において、中世相当期から近世の人骨が多数出土した。近世墓は撹乱を受けており保存不良の人骨片が認められたのみであるが、中世相当期の７号墓は比較的良く保存されており、特に葬制・墓制に関する興味深い知見を得ることができた。７号墓人骨の調査結果を要約すると以下のようになる。

１．被葬者の推定最小個体数は47体であり、その構成は、男性15体、女性10体、性別不明の成人７体、若年３体、小児３体、幼児４体、乳児５体分だった。

２．人骨は風葬された後に集骨されたものであるが、３体についてはほぼ一次葬に近い状態であることが確認された。人骨が奥壁側に集中していることから、追葬の際に次々と奥壁側へ片付けられていったと考えられる。ほぼ同時期の風葬墓とされる那覇市銘刈南Ｂ地区４号墓でも被葬者数38体（男性15体、女性12体、性別不明成人１体、小児２体、幼児８体）中５体が一次葬で残りは集骨だったとされており、葬制・墓制において本例と共通する特徴をもつように思われる。

３．少量ではあるが、火を受けた骨が検出された。火葬骨の特徴である変形や収縮が認められる骨も含まれていることから、火葬が行われた可能性を指摘しておきたい。

４．洗骨が行われた可能性を示す傷痕のある骨が数点確認された。

５．中世人の特徴である突顎傾向を示す上顎骨片が検出された。また、かなり大柄な人も含まれていたようであり、形質的にはすでに先史時代人とは異なる特徴をもっていたと思われる。

６．前腕の骨折痕、下肢の感染症痕など、生活環境の厳しさを示す所見も認められた。

謝辞

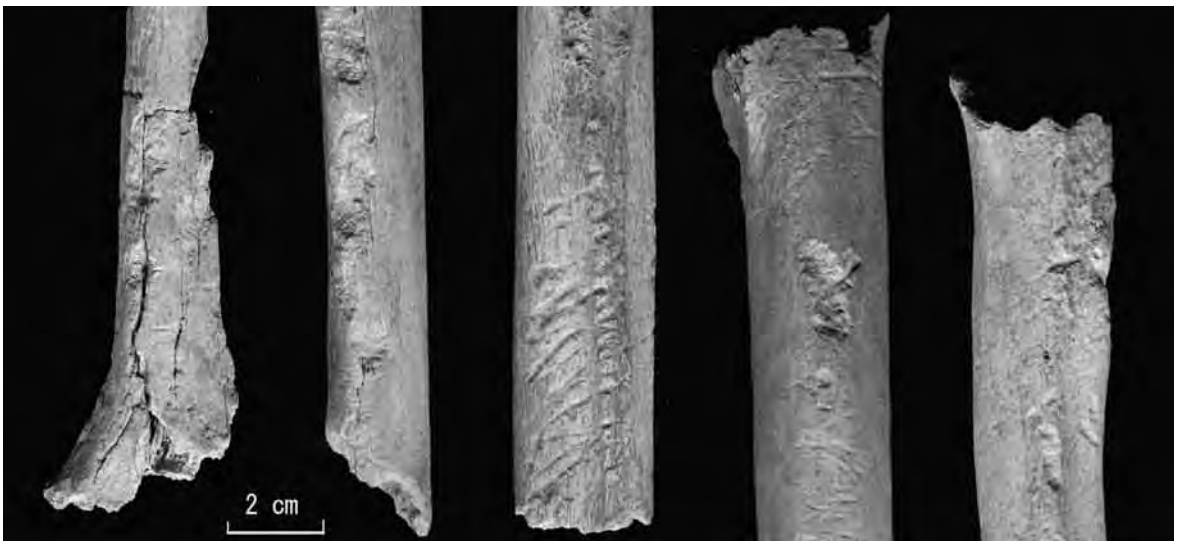
人骨調査の機会を与えていただいた沖縄県立埋蔵文化財センターの皆さまに心からの謝意を表します。

参考文献

1）那覇市教育委員会（1994）：那覇市文化財調査報告書第26集，「ヒヤジョー毛遺跡」－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ.
那覇市教育委員会（1999）：那覇市文化財調査報告書第40集，「銘苅古墓群Ⅱ」－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅵ.

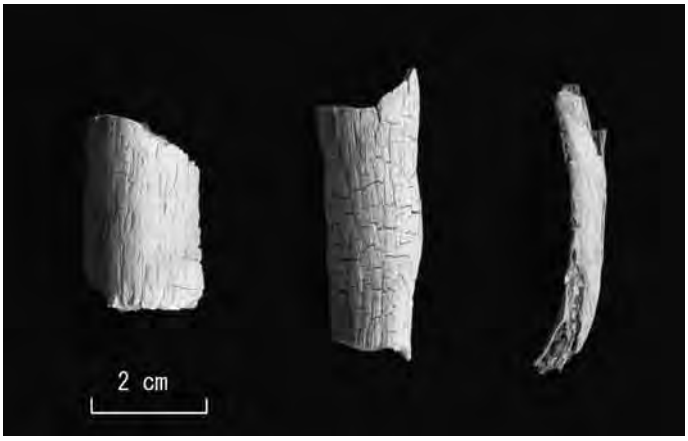
2）土肥直美・譜久嶺忠彦（2003）：人骨，沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集，「首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書」，沖縄県立埋蔵文化財センター，151－157.

3）Knussman R.（1988）：Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.



左上腕骨全面　　右脛骨前面　　左大腿骨後面　　左大腿骨前面　　右大腿骨後面

（1）四肢骨に見られた傷痕



（2）火を受けた骨

（3）突顎の特徴を示す上顎骨（左側面観）

図版65　人骨（1）（2）（3）

附　　編

大日寺跡の調査

沖 縄 県 教 育 庁 文 化 課　中山　晋
沖縄県立埋蔵文化財センター　知念隆博

1. はじめに

本編は、ナカンダカリヤマ古墓群発掘調査の後、急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事中に石製品及び獣骨の集中部分が不時発見されたため、現地にて調査を行った概要を報告するものである。

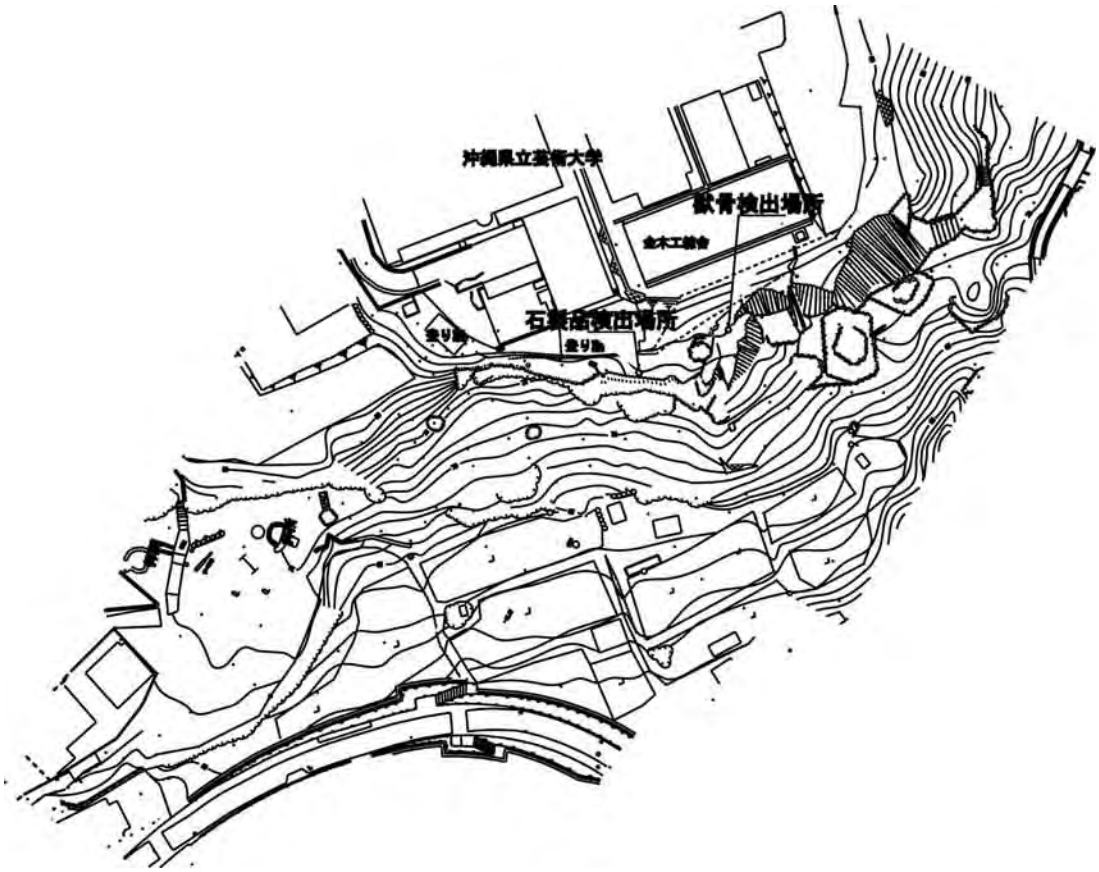
平成16年10月８日、那覇市教育委員会より、沖縄県南部土木事務所の担当者から工事現場において石製品が検出されたと報告があった旨連絡を受けた。10月15日には那覇市教育委員会とともに現地を確認し、取り扱いについて調整を行った。その後、11月４日･５日に石製品の確認及び遺構の有無、露出していた層序の記録を行った。

調査終了後間もない11月10日、南部土木事務所の担当より工事現場から獣骨が検出された旨報告を受けた。工期との絡みで早急に対応して欲しいとのことであったため、11月19日に獣骨の確認及び記録を行った。

2. 概要

（1）調査区域

今回の調査を行った区域は、南側に金城川が流れ、琉球石灰岩の岩盤が浸食により標高約90mの崖を形成している。崖の標高差は約20mであり、崖を掘込むようにして古墓群が形成されている。現在は沖縄県立芸術大学第３キャンパスの陶芸棟、染織棟、金工・木工棟などが配置されており、石製品が検出された場所は、陶芸棟の登り窯の南側である。獣骨が検出された場所は金工・木工棟の南側である。石製品・獣骨ともに南側に面している崖の縁付近からの検出である。

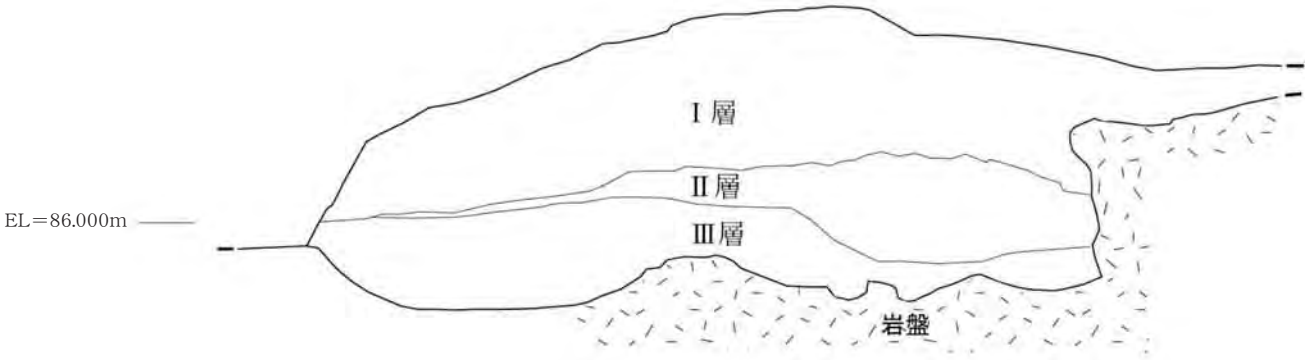


第１図　調査区域周辺図

写真１　調査区遠景（南より撮影）

なお、大日寺は尚質王代(1648～68)に頼慶により創建された真言宗の寺であり、明治期には廃寺となり、去る沖縄戦後には琉球大学女子寮、沖縄県立芸術大学の一部となっている。

（２）層序



第２図　層序（北壁）

層序は、琉球石灰岩の岩盤を除き３層確認できた。Ⅰ層は、琉球石灰岩の礫が詰まった層であり、沖縄産陶器などの遺物を含む。Ⅱ層は、暗褐色混礫土層で、沖縄産陶器を多量に含み、染付なども僅かに確認できた。Ⅲ層は明褐色混礫土層で、遺物を僅かに含む。

写真２　層序１（南東より撮影）

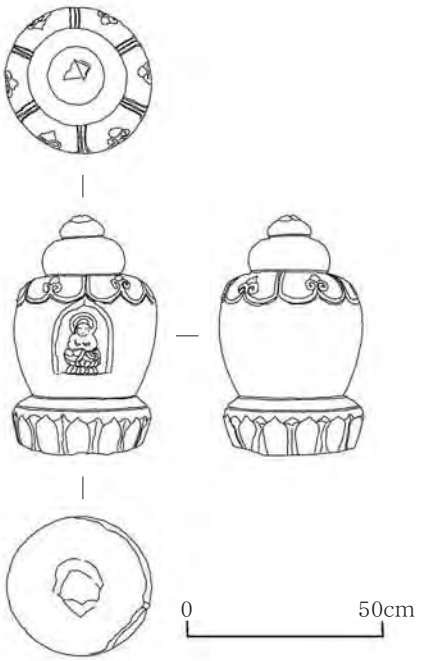
（３）骨検出状況

写真３　獣骨検出状況（東より撮影）

獣骨は、琉球石灰岩の裂け目（フィッシャー）に溜まるようにして検出された。横位からの検出であったことと実見した際には既に動いていたため、本来の集積の様子は窺い知ることはできなかった。獣骨はブタと考えられる。

3. 遺物

今回の調査で遺物は沖縄産陶器（施釉･無釉）が多量に採集できたが、特徴的な遺物としては、石製品がある。文様として蓮弁文、胴部に仏、アラベスク文を施す。底面に窪み跡があることから単体で使用されたものではなく、他の上に乗せて使用されたことがわかる。重量55kg。



第３図　石製品

写真４　石製品

4. おわりに

今回の調査では大日寺跡の遺構は確認できなかった。しかし、遺物包含層及び沖縄産陶器を主とする陶磁器、石製品が検出されたことから、何らかの施設が崖に接する部分まで延びていたことが窺える。

今回は急傾斜地崩壊危険区域内の擁壁工事中の不時発見であるため、検出に至る過程を追うことができないのが残念であった。

参考文献

島尻勝太郎　1983　「大日寺」『沖縄大百科事典』中巻　沖縄タイムス社

1987　「大日寺」『角川日本地名大辞典　47　沖縄』　㈱角川書店

2002　「内金城村」『日本歴史地名大系　第48巻　沖縄の地名』　㈱平凡社

沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書第26集

ナカンダカリヤマの古墓群

－急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告書－

発行年　2005（平成17）年３月31日
発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒901-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL　098（835）8751
印　刷　糸満印刷
〒901-0361
沖縄県糸満市糸満2082番地
TEL　098（992）2950

Ⓒ沖縄県立埋蔵文化財センター　2004 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転写、複写を禁ずる。